

一般国道170号西石切立体交差事業に伴う

# 鬼虎川遺跡第52次発掘調査報告

2002. 3

東大阪市教育委員会

## はしがき

国道308号線の拡幅、近鉄東大阪線・阪神高速道路東大阪線・第二阪奈有料道路の開通など東西交通網の整備は、それと直交して南北方向に貫く国道170号線の渋滞現象をよびおこし、立体交差事業を含む道路整備をもたらしました。また、周辺地域の開発はそれまでの田園風景を一変させ、住宅・工場・会社などが建ち並ぶ都市化へと変容させました。

鬼虎川遺跡はこれまでの発掘調査によって、弥生時代中期の代表的な拠点集落としてよく知られています。しかし本遺跡は、後期旧石器時代以降現在に至るまで、断続する時期はあるものの、集落や食物の獲得・生産域などとして、ほとんど人跡の途絶えたことはありません。今回の調査においては、弥生時代の集落の縁辺部状況だけでなく、とくに中世から近代にわたる耕作状況をより明確に窺うことができました。本書の内容は地域史および生産史の解明の一助になるものと思っています。

現地調査および遺物整理・報告書作成にあたってご協力・ご教示を賜った関係諸機関・諸氏に感謝するとともに、今後一層のご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。

平成14年3月

東大阪市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、一般国道170号西石切立体交差事業に伴う鬼虎川遺跡第52次発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、大阪府八尾土木事務所の依頼を受けて、東大阪市教育委員会文化財課が実施した。
3. 調査にかかる費用は、全額大阪府八尾土木事務所が負担・用意した。
4. 発掘調査は平成12年5月10日から平成13年5月23日まで断続的に行ない、工事工程の関係から3～5工区の3つの調査区に分かれ、3工区はさらに2調査区－3A工区・3B工区－に分けられた。遺物整理および報告書作成作業は平成14年3月31日まで実施した。
5. 現地調査は、平成12年度は菅原章太・坂田典彦・鶴山まり、平成13年度は若松博恵・松田留美・瀬戸哲也・島田拓が担当し、遺物整理については3・4工区を鶴山、5工区を松田・瀬戸・島田が担当して行なった。
6. 動物遺体の同定については、大阪市立大学大学院医学研究科分子生体医学大講座器完構築形態学の安部みき子氏に依頼し、報文を賜った。
7. 基本杭・調査杭の打設は異亞測量株式会社、写真測量は株式会社アコード、木製品の樹種同定および保存処理は株式会社吉田生物研究所、遺物写真は株式会社コミュニケーションに委託して実施した。
8. 本書は、Iを菅原、IIとIII-1・2およびVIを若松、III-3・4・5を鶴山、6を松田・瀬戸・島田、IV-1を安部、2を吉田生物研究所、Vは1を松田、2を島田、3を瀬戸が執筆し、若松が編集した。記述にあたっては、当初から3・4工区と5工区で編集方針が異なり、各執筆者の意向を尊重し、事実事項・基本用語等以外はあえて統一していない。御寛恕を乞う。
9. 現地の土色及び土器等の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人色彩研究所色彩監修『新版 標準土色帖』(2000年版)に準拠し、記号表記もこれに従った。
10. 調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々のご協力・ご教示を賜った。記して謝意を表します（敬称略・順不同）。  
大阪府八尾土木事務所、大善建設株式会社、古川建設株式会社、アーバンテック株式会社、安西工業株式会社、奈良文化財研究所、渡辺晃宏・市大樹・水野正好・木下密運・大脇潔・飛田太一郎・秋山浩三
11. 現地調査及び遺物整理・報告書作成には下記の方々の参加を得た。  
西野剛・西木美也子・堀口悟史・大木祥太郎・小山善弘・高畠慎太郎・吉岡彰典・辰巳友邦・中谷圭伸・松井章子・泊清治郎・松本真由子・利田恵美・八田美代子・西村慶子・西川美奈子・大畑洋恵・水沼優・藤本留美・佐藤由美・堂坂加奈・杉本淳子・川田純子・荻野結実・西村優・北野行信

## 本文目次

I. 調査に至る経過 .....	1
II. 位置と環境 .....	2
III. 調査の概要 .....	8
1. 調査の方法と経過 .....	8
2. 基本層位 .....	12
3. 3A工区 .....	14
a. 層位 .....	14
b. 造構 .....	19
c. 遺物 .....	20
d. 小結 .....	22
4. 3B工区 .....	23
a. 層位 .....	23
b. 造構 .....	24
c. 遺物 .....	28
d. 小結 .....	31
5. 4工区 .....	35
a. 層位 .....	35
b. 造構 .....	36
c. 遺物 .....	40
d. 小結 .....	44
6. 5工区 .....	47
a. 層位 .....	47
b. 造構と遺物 .....	51
c. 小結 .....	75
IV. 自然科学 .....	76
1. 動物遺体の同定 .....	76
2. 樹種および植物遺体の同定 .....	80
V. 調査の成果—各論— .....	84
1. 鬼虎川遺跡周辺の自然流路について .....	84
2. 弥生時代中期前葉における鬼虎川遺跡について .....	88
3. 鬼虎川遺跡北部域における中世以降の耕作地の様相 .....	98
VI.まとめ .....	114

## 挿 図 目 次

第1図 第44次調査、土坑墓1・2検出状況	1
第2図 遺跡周辺図	3
第3図 各次数調査地位置図	4
第4図 調査トレーン位置および地区割図	9・10
第5図 基本層位模式図	13
第6図 3工区北・東壁断面図	17・18
第7図 3A工区検出遺構実測図	19
第8図 3A工区出土遺物実測図	21
第9図 3B工区検出遺構実測図(1)	24
第10図 3B工区検出遺構実測図(2)	26
第11図 3B工区遺構出土遺物実測図	28
第12図 3B工区各層出土遺物実測図	30
第13図 3工区出土木製品実測図	31
第14図 4工区北・西・南壁断面図	33・34
第15図 4工区検出遺構実測図(1)	37
第16図 4工区検出遺構実測図(2)	39
第17図 4工区遺構出土遺物実測図(1)	40
第18図 4工区遺構出土遺物実測図(2)	41
第19図 4工区各層出土遺物実測図	42
第20図 4工区出土木製品実測図	44
第21図 3・4工区検出遺構位置模式図	46
第22図 5B工区西壁断面図	48
第23図 5A工区西壁断面図	49・50
第24図 第14a層上面検出遺構実測図	51
第25図 第13層上面検出遺構実測図	52
第26図 溝3出土遺物実測図	54
第27図 杭3実測図	54
第28図 第12層弥生土器出土状況実測図	55
第29図 第12層出土遺物実測図	56
第30図 西壁断面自然流路1	56
第31図 第52次調査周辺調査地自然流路図	57
第32図 第9~10・11~12・12~13層出土遺物実測図	58
第33図 第4~8層出土遺物実測図	61
第34図 中世検出遺構図	62
第35図 第4層上面検出足跡実測図	63
第36図 第2~3層出土遺物実測図	64
第37図 溝2実測図	65

第38図	第2～3層上面検出杭列実測図	65
第39図	近世・近代検出遺構実測図	66
第40図	溝1実測図	67
第41図	溝1出土遺物実測図(1)	68
第42図	溝1出土遺物実測図(2)	69
第43図	溝3～5実測図	70
第44図	溝5出土遺物実測図	71
第45図	溝6・7、土坑1実測図	72
第46図	溝6断面実測図	72
第47図	5B-9付近出土遺物実測図	73
第48図	溝6出土遺物実測図	73
第49図	側溝等出土遺物実測図	74
第50図	鬼虎川遺跡周辺の自然流路	85
第51図	紋様の受容形態変遷図	89
第52図	II様式細頸壺変遷図	91
第53図	鬼虎川遺跡II様式出土遺物グラフ	92
第54図	他地域産変模式図	93
第55図	各基準層の出土遺物	99
第56図	5工区上部基本層	100
第57図	鬼虎川遺跡北部堆積状況模式図	101
第58図	鬼虎川遺跡北部城の中世以降の変遷	104
第59図	明治三十年調整大戸村大字植附付近図	106
第60図	鬼虎川遺跡北部城条里閑連遺構位置図	109
第61図	河内郡北部条里復元図	110
第62図	被服団地前交差点付近振り上げ田	111

## 表 目 次

第1表	鬼虎川遺跡調査一覧	5～7
第2表	層および井路等対応関係表	13
第3表	3・4工区検出遺構一覧表	45
第4表	鬼虎川遺跡出土の哺乳類の同定表	77
第5表	哺乳類の出現頻度表	78
第6表	下頸骨の計測表	78
第7表	椎骨の計測表	79
第8表	四肢骨の計測表	79
第9表	東大阪市鬼虎川遺跡出土木製品等樹種同定表	82
第10表	遺跡別他地域産変組成表	95

## 図版目次

- 図版1 調査地全景 1. 調査地航空写真(1984年撮影) 2. 第52次調査区全景(北から)
- 図版2 3A工区 遺構 1. 調査区全景(北から) 2. 溝1・3東壁断面
- 図版3 3A工区 遺構 1. 溝2東壁断面 2. 溝4東壁断面
- 図版4 3A工区 遺構 1. 溝7東壁断面 2. 第1層以下東壁断面
- 図版5 3A工区 遺構 1. 第5層以下東壁断面 2. 第6層以下東・北壁断面
- 図版6 3A工区 遺構 1. 溝6内漆器碗出土状況(西から) 2. 第9層自然木出土状況(北から)
- 図版7 3B工区 遺構 1. 調査区全景(北から) 2. 溝9完掘状況(北から)
- 図版8 3B工区 遺構 1. 溝10完掘状況(北から) 2. 溝14完掘状況(北から)
- 図版9 3B工区 遺構 1. 溝12完掘状況(北から) 2. 溝13完掘状況(北から)
- 図版10 3B工区 遺構 1. 溝16完掘状況(北から) 2. 第7層羽釜出土状況(西から)
- 図版11 3B工区 遺構 1. 第9層自然木出土状況(南から) 2. 溝17内柱材出土状況(南から)
- 図版12 3B工区 遺構 1. 溝8上部東壁断面 2. 溝8下部東壁断面
- 図版13 3B工区 遺構 1. 溝10・13東壁断面 2. 溝14・17東壁断面
- 図版14 3B工区 遺構 1. 溝16東壁断面 2. 溝18東壁断面
- 図版15 3B工区 遺構 1. 南側調査区第1層以下東壁断面 2. 南側調査区第3層以下東壁断面
- 図版16 3B工区 遺構 1. 南側調査区第6層以下東壁断面 2. 現道部調査区第1層以下東壁断面
- 図版17 3B工区 遺構 1. 現道部調査区第6層以下東壁断面 2. 作業風景
- 図版18 4工区 遺構 1. 溝1検出状況(南から) 2. 溝1完掘状況(南から)
- 図版19 4工区 遺構 1. 溝2検出状況(北から) 2. 溝2完掘状況(南から)
- 図版20 4工区 遺構 1. 溝3完掘状況(東から) 2. 溝3完掘状況(南から)
- 図版21 4工区 遺構 1. 溝4完掘状況(東から) 2. 溝4西壁断面
- 図版22 4工区 遺構 1. 溝5完掘状況(東から) 2. 溝5完掘状況(南から)
- 図版23 4工区 遺構 1. 溝6完掘状況(北から) 2. 溝6西壁断面
- 図版24 4工区 遺構 1. 溝9完掘状況(東から) 2. 溝9西壁断面
- 図版25 4工区 遺構 1. 溝10完掘状況(東から) 2. 溝10西壁断面
- 図版26 4工区 遺構 1. 溝8内漆器碗出土状況(西から) 2. 漆器部分拡大
- 図版27 4工区 遺構 1. 第2層以下西壁断面 2. 溝2・7西壁断面
- 図版28 4工区 遺構 1. 第5層以下西壁断面 2. 第7層以下西壁断面
- 図版29 5工区 遺構 1. 調査前全景(北から) 2. 調査終了後全景(南から)
- 図版30 5工区 遺構 1. 5A-5・6西壁断面(第0~2層) 2. 5A-5・6西壁断面(第2~8層)
- 図版31 5工区 遺構 1. 5A-16西壁断面(第2~10層) 2. 5A-20西壁断面(第11~14層)
- 図版32 5工区 遺構 1. 5B-7・8西壁断面(第2~10層) 2. 5B-7西壁断面(第11~14層)
- 図版33 5工区 遺構 1. 溝9完掘状況(東から) 2. 溝9断面(東から)
- 図版34 5工区 遺構 1. 溝10完掘状況(西から) 2. 溝10断面(東から)
- 図版35 5工区 遺構 1. 溝11完掘状況(西から) 2. 溝11断面(東から)
- 図版36 5工区 遺構 1. ピット2・3検出状況(東から) 2. ピット3完掘状況(北から)  
3. ピット2完掘状況(西から)

- 図版37 5工区 遺構 1. 第13層上面遺構完掘状況 2. ピット1断面(東から)
- 図版38 5工区 遺構 1. 溝8内遺物出土状況(南から) 2. 溝8断面(東から)
- 図版39 5工区 遺構 1. 杭1・2検出状況(東から) 2. 杭1断面(東から) 3. 杭2断面(東から)
- 図版40 5工区 遺構 1. 杭3検出状況(東から) 2. 杭3断面(東から)  
3. ピット4断面(東から)
- 図版41 5工区 遺構 1. 第12層弥生土器出土状況(南から) 2. 第11~12層加工板出土状況(南から)
- 図版42 5工区 遺構 1. 第4層上面足跡検出状況(西から) 2. 第4層上面噴砂検出状況(東から)
- 図版43 5工区 遺構 1. 溝2断面(東から) 2. 第2~3層杭列検出状況(東から)
- 図版44 5工区 遺構 1. 溝1完掘状況(北から) 2. 溝1断面(南から)
- 図版45 5工区 遺構 1. 溝1内杭列検出状況(北から) 2. 5A~14杭列検出状況(東から)
- 図版46 5工区 遺構 1. 溝3断面(東から) 2. 溝4断面(東から)
- 図版47 5工区 遺構 1. 溝5断面(東から) 2. 溝6完掘状況(北東から)
- 図版48 5工区 遺構 1. 溝6断面(東から) 2. 溝6内卒塔婆検出状況(北から)
- 図版49 5工区 遺構 1. 溝7完掘状況(東から) 2. 溝7断面(東から)
- 図版50 5工区 遺構 1. 土坑1完掘状況(北から) 2. 土坑1断面(東から)
- 図版51 3・4工区 遺物 3工区-溝5、溝14、溝9、溝10、4工区-溝3、溝4、溝12出土土  
師器・磁器・瓦器・渡来鏡・鐵鎌
- 図版52 3・4工区 遺物 3工区-溝13、溝1、溝6、溝16、溝2、4工区-溝3、第5層出土漆  
器碗
- 図版53 3・4工区 遺物 3工区-溝1、溝17、4工区-溝8、溝12、溝6出土棒状・板状木製品
- 図版54 3・4工区 遺物 3工区-溝3、溝1、4工区-溝8、溝7出土下駄・草履状・板状木製  
品
- 図版55 3A工区 遺物 1. 溝3、溝4、溝5、溝6出土土師器・須恵器・瓦器・磁器 2. 第5層、  
第6層出土土師器・瓦器
- 図版56 3A工区 遺物 1. 第7層、第8層、第11層出土土師器・須恵器 2. 溝A・B出土埴輪・  
須恵器・瓦器・瓦質土器・磁器
- 図版57 3B工区 遺物 1. 溝8出土近世磁器・円板形瓦製品 2. 溝9・10出土近世磁器
- 図版58 3B工区 遺物 1. 溝9出土埴輪・須恵器・瓦 2. 溝10出土土師器・須恵器
- 図版59 3B工区 遺物 1. 溝10出土弥生土器 2. 溝16、溝17、溝18出土土師器・須恵器・瓦器・  
罐
- 図版60 3B工区 遺物 1. 第2層、第5層、第7層、第8層出土土師器・瓦器 2. 第6層出土土師  
器・須恵器・砥石
- 図版61 3B・4工区 遺物 1. 第10・11層出土弥生土器 2. 溝1、溝2出土近世・近代磁器
- 図版62 4工区 遺物 1. 溝1、溝2出土瓦質土器・瓦 2. 溝3、溝4出土近世・近代磁器
- 図版63 4工区 遺物 1. 溝3、溝4出土瓦・陶器 2. 溝5、溝6、溝7出土土師器・瓦器・瓦質  
土器・土鍤
- 図版64 4工区 遺物 1. 溝8、溝9出土韓式系土器・土師器・瓦器・磁器・瓦質土器 2. 溝11出  
土須恵器・瓦器・瓦質土器・磁器・瓦
- 図版65 4工区 遺物 1. 溝12、溝13出土土師器・瓦器・瓦質土器・陶器 2. 第2層、第3層出土  
土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器

- 図版66 4工区 遺物 1. 第6層、第7層、第8層、第11層出土弥生土器・土師器・須恵器 2. 第11層出土石器
- 図版67 5工区 遺物 1. 第12層出土弥生土器 2. 第11・12層、溝3出土弥生土器
- 図版68 5工区 遺物 1. 溝3、第12層出土弥生土器 2. 第12・13層、第9・10層出土弥生土器
- 図版69 5工区 遺物 1. 第11・12層出土弥生土器壺 2. 第11・12層出土弥生土器壺・甕・円板形土製品
- 図版70 5工区 遺物 1. 第11・12層出土弥生土器底部 2. 第11・12層出土弥生土器擷描文
- 図版71 5工区 遺物 1. 第5層出土須恵器、第7・8層出土土師器 2. 第3層、第4層出土弥生土器
- 図版72 5工区 遺物 1. 第3層出土土師器・埴輪・轡 2. 第3層、第2・3層出土須恵器
- 図版73 5工区 遺物 1. 第2・3層出土土師器・陶器・瓦器 2. 第3層出土須恵器、溝1出土磁器
- 図版74 5工区 遺物 溝6出土軒丸瓦、溝1出土磁器・土人形・土師質土器
- 図版75 5工区 遺物 1. 溝1、第0・1層出土磁器内面 2. 同上外面
- 図版76 5工区 遺物 1. 溝1出土陶磁器・土師質土器 2. 溝1出土陶器
- 図版77 5工区 遺物 1. 溝1出土近世・近代瓦 2. 溝1出土近代磁器・ガラス
- 図版78 5工区 遺物 1. 溝1、溝5、溝6出土須恵器・土師器・黒色土器・弥生土器 2. 5B-9地区付近出土近世・近代土師質土器・瓦・磁器
- 図版79 5工区 遺物 1. 側溝等出土須恵器・弥生土器・土師器・陶遊器・瓦 2. 第11・12層、第3層出土石器
- 図版80 5工区 遺物 1. 第8層、溝1出土砥石 2. 杖3、第5・7層出土棒状木製品
- 図版81 5工区 遺物 溝8、溝6、第11・12層、第8層出土板状木製品
- 図版82 5工区 遺物 溝6出土卒塔婆
- 図版83 3～5工区 遺物 動物遺体（イヌ・スッポン・ネズミ・ウシ・ウマ）
- 図版84 3・4工区 遺物 動物遺体（ウマ）
- 図版85 3・4工区 遺物 動物遺体（ウマ）
- 図版86 3～5工区 遺物 樹種（顕微鏡写真）
- 図版87 3～5工区 遺物 樹種（顕微鏡写真）
- 図版88 3～5工区 遺物 樹種（顕微鏡写真）
- 図版89 3～5工区 遺物 樹種・植物遺体（顕微鏡写真）

## I. 調査に至る経過

一般国道170号線と国道308号線とが交差する「被服団地前」は、府下でも慢性的な交通渋滞をきたす箇所として、その早期の解消が長く求められてきた。さらに、平成9年4月に第二阪奈有料道路の供用が開始されると、その混雑に拍車がかかった。そのため、平成10年、西石切立体交差事業が国庫補助事業として採択された。立体交差事業にあたっては、国道308号線の上部に阪神高速道路東大阪線と第二阪奈有料道路との連絡道及び近畿日本鉄道東大阪市線の二つの橋脚が存立することから、オーバーパスではなくアンダーパスによる工法が選択された。

いっぽう、「被服団地前」交差点付近には、弥生時代中期の拠点集落として著名な鬼虎川遺跡が広がるため、埋蔵文化財の取り扱いが焦眉の課題となった。事業者である大阪府（大阪府八尾上木事務所）と調査主体者である東大阪市（東大阪市教育委員会文化財課）とは直ちに協議に入った。工事としてはまず現道下の埋設管の移設が急務となり、移設先である側道箇所から発掘調査を実施することで双方合意した。以下、調査原因となる事業を「西石切アンダーパス事業」と仮称して記述を進める。

今回報告する鬼虎川遺跡第52次調査は、西石切アンダーパス事業関連としては第3年度目（平成12年度）にあたる。1年度目（平成10年度）の鬼虎川第44次調査は、国道308号線以南で国道170号線の西側、新川の南側にあたり（第3図）、延長約100m、幅6mの長大なトレンチ設定となった。鋼矢板の根入れの関係で弥生時代相当層は完掘できなかった。調査の結果、トレンチの北端から南端まで中期の遺物包含層から弥生土器が大量に出土した。北側において弥生Ⅲ～Ⅴ期の大溝が検出され、大溝内からは該期の土器のほか、石器・木器が多く出土した。大溝の西側で土坑墓が現状で2基確認された。土坑墓1には成人男性が1体、仰臥仰展位で埋葬されていた。上坑墓2は鋼矢板で西半分が切断されて詳細は不明であるが、3体の成人人骨が埋葬されていた。南端部の遺物包含層からは大型の獸形勾玉が出土した。この勾玉は新潟県糸魚川産のヒスイ製で、在地首長の権威保持の象徴として貴重な遺物である。ヒスイ製勾玉は小型品が前述の大溝からも出土した。2年度目（平成11年度）の鬼虎川遺跡第49次調査は、国道308号線以北で国道170号線の西側にあたり、延長90m、幅4.4mのトレンチであった（第3図）。調査成果としては本遺跡の弥生期集落の北縁を限る自然流路を検出したことが挙げられる。集落の環濠の外側に自然流路があったことは從前の調査でも指摘されており、それを追認する形となった。弥生時代の遺物は第44次調査に比べて僅少であったが、上層からは散漫ながら各時期の遺物が出土した。とくに近世期の堆積層から「主税」銘の墨書き土器が発見されたことは特筆される。概ね墨書き土器が盛行する奈良～平安期の所産とみられる。本遺跡の東側に所在する高所の遺跡（集落）からの流れ込みであろう。通常、集落出土の墨書き銘は1～2文字程度で文字の意義が掴み難いものが多いが、本例は都単位の田租出納に関わる言辭と考えられ貴重な発見であった。



第1図 第44次調査、土坑墓1・2検出状況

## II. 位置と環境

鬼虎川遺跡は、生駒山地の西麓、標高8m～4mの扇状地末端部から沖積平野部にかけて広がり、現在の東大阪市弥生町・宝町・西石切町・新町一帯に位置する旧石器時代から江戸時代にわたる複合遺跡である。北端中央部から南東部にかけてほぼ南北に国道170号線（外環状線）が走り、北部にはこれに交わるように国道308号線が東西方向に延びている。これには近鉄東大阪線と阪神高速東大阪線および第二阪奈有料道路が内包されている。西部には南から北へ流れる恩智川があるが、住宅・工場・会社・病院などが建ち並び水田・畑地などはほとんど見ることはできない。しかし、4・50年前までは小集落が点在するものの掘り上げ田などの田畠が一帯に広がるのどかな地域であった。

本遺跡はつとに弥生時代中期の大集落跡として周知されているが、人跡は後期旧石器時代まで遡る。この時期の遺跡としては東接する西ノ辻遺跡をはじめ、千手寺山遺跡・正興寺山遺跡・山畠遺跡などからナイフ型石器・翼状剥片が出土している。

縄文時代になるとまず有舌尖頭器が出土した草香山遺跡や貝花遺跡がある。この時代の遺跡は段丘・扇状地上に位置し、神並遺跡からは早期の押型文土器や石器・土偶と炉跡・集石遺構が検出され、押型文土器は西ノ辻・日下・山畠遺跡からも出土している。前期は温暖化がピークに達し、本遺跡東部などからこの時期の海蝕崖が検出され、前期土器や魚類などの動物遺体が出土している。中期の遺跡としては善根寺・繩手・馬場川遺跡があるが、それほど顯著ではない。しかし後期には、繩手遺跡で多くの土器・石器などとともに住居跡・配石遺構などがみられ、日下・芝ヶ丘・神並・鬼塚・馬場川遺跡とともに本遺跡からもこの時期の土器が出土している。そして晩期になると貝塚・墓地や多量の土器・石器が確認されている日下遺跡をはじめ、鬼塚・馬場川・宮ノ下などの遺跡で集落が営まれていた。

弥生時代になると集落形成は平野部に移り、本遺跡西端に長原式土器と前期土器を包含した貝塚があり、本遺跡中央部や植附・中垣内、本市中南部の山賀遺跡などから前期土器が出土している。中期には本遺跡において数条の大溝を伴う大集落が営まれ、土器・石器・木製品などの大量の遺物と方形周溝墓や貝塚などが検出されており、これに近い状況は本市中央部の瓜生堂遺跡でもみられる。やや遅れて中期後半から後期前半には西ノ辻遺跡でも大集落が形成された。後期になると集落はやや小規模化するものの、段上・上六万寺・北島池などの平野部の遺跡とともに山畠・岩滝山遺跡などで高地性集落が営まれた。

古墳時代前期には本遺跡南部および五合田・西岩田遺跡などから多くの土師器が出土し、集落が点在して形成されていた。中・後期になると植附・芝ヶ丘・神並・西ノ辻・山畠・市尻などとともに本遺跡でも集落が営まれた。本市には前期の大型古墳はみられないが、塙山・えの木塙・客坊山1号墳など中期以降古墳は築かれるようになり、山畠古墳群・花草山古墳群・客坊山古墳群・神並古墳群・出雲井古墳群などの群集墳・植附・段上・巨摩庵寺などに小型低丘墳と、小規模ではあるが後期古墳が山麓部を中心に數多く築造された。

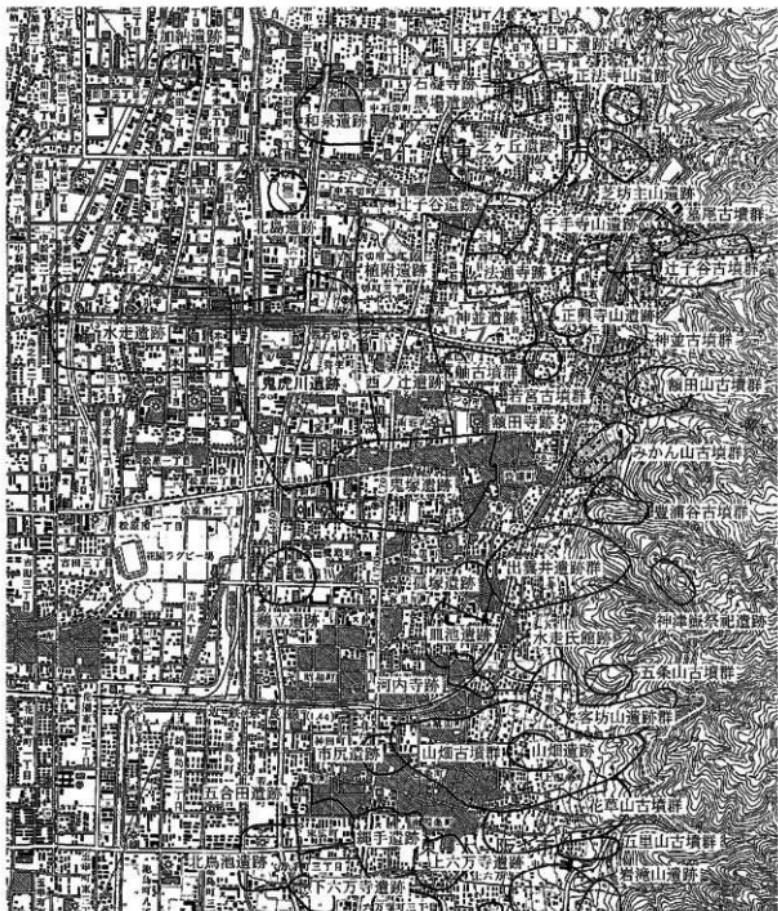
飛鳥から平安時代前半には、仏教の受容を反映するかのように若江寺・河内寺・法通寺・石凝寺、やや後出する客坊庵寺などの寺院が建立された。本遺跡や西ノ辻・神並・鬼塚などからは、掘立柱建物・戸戸・溝・須恵器・土師器や墨書き器など、この時期の集落・耕作関連の遺構や遺物が検出されている。

平安時代後期から鎌倉時代にかけては広い範囲にわたり整地活動がみられ、西ノ辻・神並などの遺跡から掘立柱建物跡などの集落遺構とともに客土層や耕作跡が検出されている。また、西接する水走

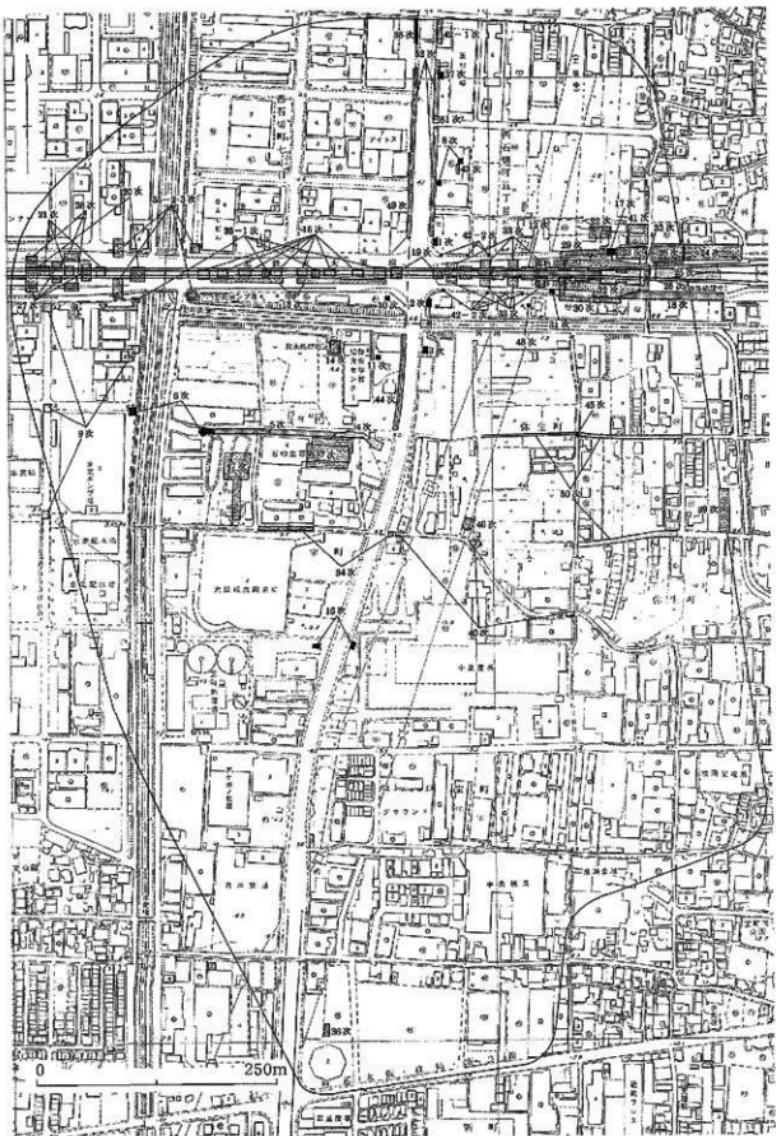
遺跡ではこの時期に堰・堤防を設けるなど大掛かりな開発を行なうとともに、大溝を伴う集落も形成された。

室町時代には西ノ辻遺跡をはじめ、のちの暗峠越奈良街道・東高野街道などの道路沿いに数多く村落が営まれ、その状況はほとんど江戸時代以降まで存続していた。またこの時期、平野部の若江城を中心として客坊城・往生院城などの城が戦乱期に数多く築造されたが、安土・桃山時代まではほとんど廢絶してしまった。

江戸時代になると大和川の付け替え工事が行なわれ、平野部における生産地の状態を一変させた。旧の河川・池は埋め立てられてその周辺を含め田畠が整備され、本遺跡西部域などではいわゆる掘り上げ田が形成された。



第2図 遺跡周辺図 (1/25000)



第3図 各次數調査地位置図

第1表 宝虎川流域監査一覧

次数	事 題 名	調査地	調査日 (日)	調査範囲	調査主体	調査文獻	調査成績
1	高松ガス管渠工事に伴う調査 （モイソン管）	高松市御幸町 5丁目	16. 10/16. (日)～10/16. (日)	東大阪市御幸町 5丁目	日本ガス管渠工事に伴う調査の実施範囲の調査実績、結果の概要 (No.101)	「高松会ニース」 財團法人	未実施
2	高松ガス管渠工事に伴う調査 （モイソン管）	内山町 5丁目	26. 10/26. (日)～10/26. (日)	東大阪市御幸町 5丁目	日本ガス管渠工事に伴う調査の実施範囲 (No.102)	「高松会ニース」 財團法人	未実施
3	高松ガス管渠工事に伴う調査 （モイソン管）	芦生町	32. 10/32. (日)～10/32. (日)	東大阪市御幸町 5丁目	「高松会ニース」 財團法人	未実施	
4	水道管渠工事に伴う調査 （モイソン管）	芦生町 1丁目	27. 10/27. (日)～10/27. (日)	東大阪市御幸町 5丁目	「高松会ニース」 財團法人	未実施	
5	水道管渠工事に伴う調査 （モイソン管）	芦生町	52. 10/52. (日)～10/52. (日)	東大阪市御幸町 5丁目	「高松会ニース」 財團法人	未実施	
6	水道管渠工事に伴う調査 （モイソン管）	芦生町 1丁目	68. 10/68. (日)～10/68. (日)	東大阪市御幸町 5丁目	「高松会ニース」 財團法人	未実施	
7	高松ガス管渠工事に伴う調査 （モイソン管）	芦生町 1丁目	1,095. 10/10/10～10/10/10	東大阪市御幸町 5丁目	「高松会ニース」 財團法人	未実施	
8	高松ガス管渠工事に伴う調査 （モイソン管）	高松町 5丁目	50. 10/50. (日)～10/50. (日)	東大阪市御幸町 5丁目	「高松会ニース」 財團法人	未実施	
9	高松ガス管渠工事に伴う調査 （モイソン管）	水木 1丁目	54. 10/54. (日)～10/54. (日)	東大阪市御幸町 5丁目	「高松会ニース」 財團法人	未実施	
10	高松ガス管渠工事に伴う調査 （モイソン管）	西石神井 7丁目	9. 10/9. (日)～10/9. (日)	東大阪市御幸町 5丁目	「高松会ニース」 財團法人	未実施	
11	高松ガス管渠工事に伴う調査 （モイソン管）	宇治野町 1丁目	25. 10/25. (日)～10/25. (日)	東大阪市御幸町 5丁目	「高松会ニース」 財團法人	未実施	



次数	年 度	題 名	著 者	著 述 地	開 設 年	著 述 所	著 述 者	著 述 地	開 設 年	著 述 所	著 述 者	著 述 地	開 設 年	著 述 所	
31	上水道設備工事に伴う調査	西行調査5丁目195	31.9	1960.04.27~1960.06.07	東大阪市文部省教育委員会	「施設設備計画に係る調査報告書」(1959) 周辺地区人・大正地区文化振興会	先生がお手写の小字の万葉集								
32	第一高架橋料金収受場所の作成	内丸町5丁目	975	1960.11.01~1961.11.06	東大阪市文部省教育委員会	「施設設備計画に係る調査報告書」(1959) 周辺地区人・大正地区文化振興会	城文部省教育委員会一中島地区に於ける施設設備計画の実現、中島の開拓、江戸時代の歴史、								
33	地・渠化等の施設整備工事	鶴石町5丁目	1-240	1960.05.07~1961.11.10	東大阪市文部省教育委員会	「施設設備計画に係る調査報告書」(1959) 周辺地区人・大正地区文化振興会	施設設備の整備、排水路の整備、水路の開削、上川、小堀川の改修、上川、小堀川の改修、								
34	雨水・下水道管渠整備工事	北町15丁目8番	150	1960.08.21~1961.05.11	東大阪市文部省教育委員会	「施設設備計画に係る調査報告書」(1959) 周辺地区人・大正地区文化振興会	雨水・下水道管渠整備工事、土木施設整備工事、ビート、上川、小堀川の改修、								
35.1	下水道管渠整備工事	西石町7丁目~水走	535	1960.05.07~1961.05.18	東大阪市文部省教育委員会	「施設設備計画に係る調査報告書」(1959) 周辺地区人・大正地区文化振興会	雨水・下水道管渠整備工事、雨水・下水道管渠整備工事、中島の開拓の歴史、								
35.2	雨水・下水道管渠整備工事	北町15丁目7丁目~北走	634.5	1961.03.30~1961.05.30	東大阪市文部省教育委員会	「施設設備計画に係る調査報告書」(1959) 周辺地区人・大正地区文化振興会	雨水・下水道管渠整備工事、土木施設整備工事、ビート、上川、小堀川の改修、								
36	雨水・下水道管渠整備工事	皆町1~1	83	1962.07.08~1962.08.01	東大阪市文部省教育委員会	「施設設備計画に係る調査報告書」(1959) 周辺地区人・大正地区文化振興会	雨水・下水道管渠整備工事、土木施設整備工事、ビート、上川、小堀川の改修、								
37	会社本店等に係る施設整備工事	鶴石町4丁目地内	30	1961.02.22~1961.05.31	東大阪市文部省教育委員会	「施設設備計画に係る調査報告書」(1959) 周辺地区人・大正地区文化振興会	会社本店等に係る施設整備工事、土木施設整備工事、								
38	新立交渉事に係る施設整備工事	西行調査10丁目8番~24	150	1961.02.19~1961.05.05	東大阪市文部省教育委員会	「施設設備計画に係る調査報告書」(1959) 周辺地区人・大正地区文化振興会	新立交渉事、足は一度他の通りで下りの街へ、								
39	化粧池等に係る施設	谷町14丁目1~1	14.3	1965.10.01~1966.05.06	東大阪市文部省教育委員会	「施設設備計画に係る調査報告書」(1959) 周辺地区人・大正地区文化振興会	化粧池等に係る施設、足は一度他の通りで下りの街へ、								
40	下水道施設工事に係る施設	谷町14丁目2番	49.5	1965.04.30~1966.01.11	東大阪市文部省教育委員会	「施設設備計画に係る調査報告書」(1959) 周辺地区人・大正地区文化振興会	下水道施設工事に係る施設、足は一度他の通りで下りの街へ、								
41	糞便処理工事に係る施設	西行調査5丁目181~1~2	325	1965.07.22~1966.01.05	東大阪市文部省教育委員会	「施設設備計画に係る調査報告書」(1959) 周辺地区人・大正地区文化振興会	糞便処理工事に係る施設、足は一度他の通りで下りの街へ、								
42	水道開闢工事に係る施設	西行調査5丁目182番地	13.31	1965.09.20~1966.01.16	東大阪市文部省教育委員会	「施設設備計画に係る調査報告書」(1959) 周辺地区人・大正地区文化振興会	水道開闢工事に係る施設、足は一度他の通りで下りの街へ、								
43	化粧池等に係る施設	西行調査5丁目7~35	44	1965.01.15~1966.01.03	東大阪市文部省教育委員会	「施設設備計画に係る調査報告書」(1959) 周辺地区人・大正地区文化振興会	化粧池等に係る施設、足は一度他の通りで下りの街へ、								
44	事務所等に係る施設	外寺町32番~13番	82.9	1966.01.26~1966.03.03	東大阪市文部省教育委員会	「施設設備計画に係る調査報告書」(1959) 周辺地区人・大正地区文化振興会	事務所等に係る施設、足は一度他の通りで下りの街へ、								
45	公用水道工事に係る施設	佐久町319	35	1966.03.06~1966.03.21	東大阪市文部省教育委員会	「施設設備計画に係る調査報告書」(1959) 周辺地区人・大正地区文化振興会	公用水道工事に係る施設、足は一度他の通りで下りの街へ、								
46	西行調査に係る施設	向井町1655~2	103.32	1966.01.21~1966.02.17	東大阪市文部省教育委員会	「施設設備計画に係る調査報告書」(1959) 周辺地区人・大正地区文化振興会	西行調査に係る施設、足は一度他の通りで下りの街へ、								
47	排水管敷設工事に係る施設	芳多屋町156~4~1390~	10.073	1966.04.26~1966.05.11	東大阪市文部省教育委員会	「施設設備計画に係る調査報告書」(1959) 周辺地区人・大正地区文化振興会	排水管敷設工事に係る施設、足は一度他の通りで下りの街へ、								
48	糞便処理施設に係る施設	西行調査5丁目186~1	6	1966.02.15	東大阪市文部省教育委員会	「施設設備計画に係る調査報告書」(1959) 周辺地区人・大正地区文化振興会	糞便処理施設に係る施設、足は一度他の通りで下りの街へ、								
49	雨水・下水道工事に係る施設	西行調査7丁目101~	356	1966.07.26~1966.08.26	東大阪市文部省教育委員会	「施設設備計画に係る調査報告書」(1959) 周辺地区人・大正地区文化振興会	雨水・下水道工事に係る施設、足は一度他の通りで下りの街へ、								
50	下水道施設工事に係る施設	谷町15丁目1~1	207	1966.08.03~1966.12.30	東大阪市文部省教育委員会	「施設設備計画に係る調査報告書」(1959) 周辺地区人・大正地区文化振興会	下水道施設工事に係る施設、足は一度他の通りで下りの街へ、								
51	糞便処理施設に係る施設	谷町15丁目1~1	39	1966.09.16~1966.09.30	東大阪市文部省教育委員会	「施設設備計画に係る調査報告書」(1959) 周辺地区人・大正地区文化振興会	糞便処理施設に係る施設、足は一度他の通りで下りの街へ、								
52	一般施設に係る施設	西行調査5丁目195	1,120	1966.05.15~1966.06.23	東大阪市文部省教育委員会	「施設設備計画に係る調査報告書」(1959) 周辺地区人・大正地区文化振興会	一般施設に係る施設、足は一度他の通りで下りの街へ、								

### III. 調査の概要

#### 1. 調査の方法と経過

今回の調査地は、国道170号線内で、国道308号線の北側の西・東歩道部と一部現道部にあたり、工事工程により3つの工区—3工区・4工区・5工区—に分けて調査を実施した（工区名は、平成10年度—1工区、平成11年度—2工区に順じた）。3工区は工事過程の関係からさらに2地区—3A工区・3B工区—に分かれ、3A工区の調査の後に4工区の調査を行ない、その後に3B工区の調査にかかって、その後半からは併行して5工区の調査を実施した。すなわち、各工区の調査期間は、3A工区は平成12年5月10日から7月5日、4工区は8月17日から11月29日、3B工区は12月10日から3月26日、5工区は2月15日から5月23日までであった。各調査工区はいずれも幅約4mで南北方向に細長く3工区は440m、4工区は280m、5工区は430m、計1150mであった。調査工区によっては車輛の通行、会社等の営業、掘削残土の搬出箇所の確保などから覆工板を布設した場所もあった。とくに3・5工区は全面にわたって敷設された。

各工区の調査は基本的に、現地表(GL)下約1.5~2mの道路舗装・盛土などを機械掘削し、以下一部機械・人力併用掘削部を設けながらGL-約5mまで人力掘削による調査を実施した。

調査にあたっては道路敷きであり掘削深度が5mをこえることなどから、調査区域は土留め鋼矢板を打設するとともに2段の支保工が架設された。南北方向の腹起に対する東西方向の切梁によって生じた小区画（基本的に南北3×東西4m）を利用して地区割を行ない、それに基づいて遺物の取り上げなどを行なった。また造構・断面図の作成にあたっても国家座標値と併行して用いた（第2図参照）。

調査の経過については、3A工区・4工区・3B工区・5工区の調査工区ごとに調査日誌抄の形で記す。

#### 3 A工区

- 5月10日 調査区北端側から機械掘削による盛土の除去を開始した。  
5月15日 調査区北端側から機械・人力併用掘削を行ない、小地区名を付けた。  
5月19日 掘り上げ田の井路である溝1内から近世の漆器椀や板材などが出土した。  
5月23日 中世の土師器・瓦器椀の小片を多く含む砂礫層（第5層）によって埋没した溝が多く存在することが判明した。  
5月24日 溝6内から漆器椀が出土した。  
6月5日 水平堆積層である第7・8層から、古墳時代～古代の須恵器が出土した。  
6月8日 側溝掘削時に第11層から弥生第II様式の甕が出土し、この層が弥生時代中期の堆積層であると認識した。  
6月14日 第11層の掘削をほぼ完了、弥生時代中期の遺物・造構は確認できなかった。  
6月23日 第12層の掘削を開始した。  
7月5日 掘削最終面を写真撮影して、調査を終了した。

#### 4工区

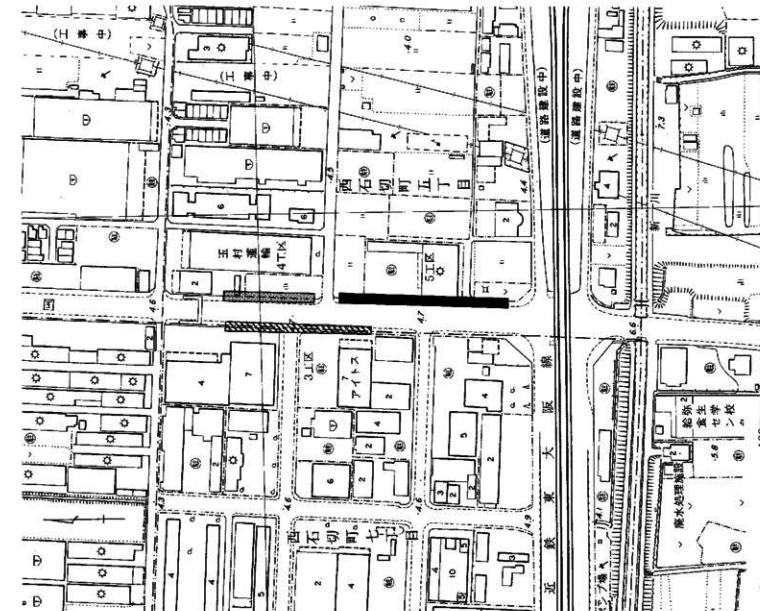
- 8月17日 調査区南端から機械掘削による表土の除去を開始した。  
8月25日 覆工板を架設した北側を4B工区、架設していない南側を4A工区と仮称した。  
8月28日 4A工区から機械・人力併用掘削を行なった。  
9月5日 4A工区から人力掘削を開始した。

Y=33090 Y=33095 Y=33080 Y=33075 Y=33070 Y=33065 Y=33060 Y=33055 Y=33050 Y=33045

The figure shows an architectural floor plan of a building. The plan includes several rooms and areas labeled with Chinese characters and numbers. A legend on the right side identifies the symbols for different room types:

- X-146558 工作室 (Workshop)
- X-146559 仓库 (Warehouse)
- X-146560 厨房 (Kitchen)
- X-146561 卫生间 (Bathroom)
- X-146562 休息室 (Rest Room)
- X-146563 门厅 (Entrance Hall)
- X-146564 会客室 (Guest Room)
- X-146565 陈列室 (Exhibition Room)
- X-146566 办公室 (Office)
- X-146567 会议厅 (Meeting Hall)
- X-146568 传达室 (Reception Room)
- X-146569 门卫室 (Guard Room)
- X-146570 传达室 (Reception Room)
- X-146571 传达室 (Reception Room)
- X-146572 传达室 (Reception Room)
- X-146573 传达室 (Reception Room)
- X-146574 传达室 (Reception Room)
- X-146575 传达室 (Reception Room)
- X-146576 传达室 (Reception Room)
- X-146577 传达室 (Reception Room)
- X-146578 传达室 (Reception Room)
- X-146579 传达室 (Reception Room)
- X-146580 传达室 (Reception Room)
- X-146581 传达室 (Reception Room)
- X-146582 传达室 (Reception Room)
- X-146583 传达室 (Reception Room)
- X-146584 传达室 (Reception Room)
- X-146585 传达室 (Reception Room)
- X-146586 传达室 (Reception Room)
- X-146587 传达室 (Reception Room)
- X-146588 传达室 (Reception Room)
- X-146589 传达室 (Reception Room)
- X-146590 传达室 (Reception Room)
- X-146591 传达室 (Reception Room)
- X-146592 传达室 (Reception Room)
- X-146593 传达室 (Reception Room)
- X-146594 传达室 (Reception Room)
- X-146595 传达室 (Reception Room)
- X-146596 传达室 (Reception Room)
- X-146597 传达室 (Reception Room)
- X-146598 传达室 (Reception Room)
- X-146599 传达室 (Reception Room)
- X-146600 传达室 (Reception Room)

国道170号線 大阪外環状線



(中) A1

卷之三

- 9月22日 4B工区溝1～3（掘り上げ田井路）を完掘し、写真撮影、実測図の作成。
- 9月28日 4B工区溝6南肩で、北宋錢「天聖元寶」が出土した。
- 10月4日 4A工区溝4・5（掘り上げ田井路）を完掘し、写真撮影・実測図の作成。
- 10月6日 4B工区溝8底面付近で轟朽の部材が出土した。
- 10月13日 1回目の断面実測図の作成を完了した。
- 10月27日 4A工区で溝13を完掘し、写真撮影、実測図の作成。
- 11月9日 2回目の断面実測図の作成を完了した。
- 11月20日 弥生時代中期相当層の第11層の掘削終了、弥生土器片・石礫1点が出土した。
- 11月29日 堀削最終面を写真撮影して、調査を終了した。
- 3B工区
- 12月10日 調査区北端（現道部調査区）から機械堀削で道路舗装・盛土等の除去を開始した。
- 12月15日 調査区南半（南側調査区）から人力堀削を開始した。
- 12月25日 溝8～11内からは近世陶器・土師器などが出土し、掘り上げ田の井路と確認した。以後、溝の堀削が調査の主体となった。
- 1月11日 溝10・11を完掘して、写真撮影（翌日、実測図の作成）。
- 1月30日 溝12・13の写真撮影、実測図の作成終了。
- 2月7日 溝14を完掘して、写真撮影、実測図の作成。
- 2月9日 溝16・17の調査を行なった。
- 3月5日 第7層から土師器羽釜、第8層から庄内式甕、第11層から弥生第II様式土器が出土し、各層の時期が認識できた。
- 3月9日 弥生時代中期相当層の第11層の堀削を終了、遺構・遺物は検出されなかった。
- 3月26日 堀削最終面を写真撮影して、調査を終了した。
- 5工区
- 2月15日 調査区を北から5A工区、5C工区、5B工区とし、5A地区から機械堀削を開始した。
- 2月23日 5A工区から人力堀削を開始した。
- 3月1日 5A工区で検出した溝1は、今までの掘り上げ田の井路と異なり南北方向のものと確認した。溝内からは多くの近世陶器が出土した。
- 3月14日 第3層上面で検出した溝2から獸骨が出土し、層位の関係などから中世に遡ると考えた。
- 4月5日 溝6の底面から墨書きが見られる木製卒塔婆が出土した。
- 4月9日 5B工区の第4層上面で足跡を検出した。
- 4月13日 5A工区南半の弥生時代中期相当層（第10層）上面で自然流路と思われる砂礫層を検出し、第49次調査の自然流路の続きである可能性が考えられた。
- 4月18日 5B工区の第13層上面で弥生第II様式の壺が出土した溝3、ピット、杭などを検出した。この周囲からは同時期の土器が多く出土し、第11・12層は第II様式相当層であることを確認した。
- 4月24日 5A工区の第14層上面において3条の溝を検出した。
- 5月11日 最終深度までの堀削を終了した（14日以降断面実測を行なった）。
- 5月23日 堀削最終面を写真撮影して、調査を終了した。

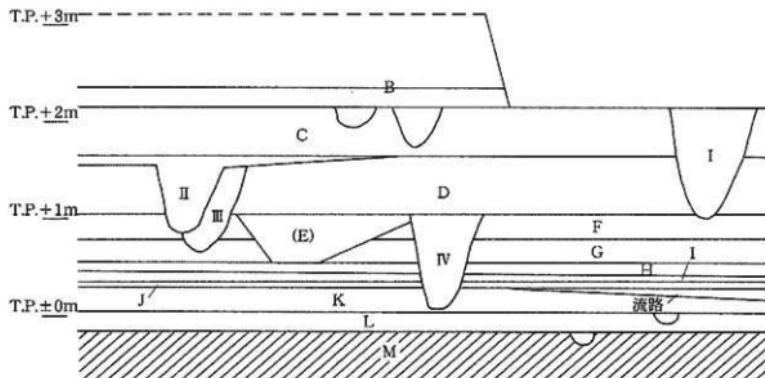
## 2. 基本層位

3・4・5工区は、調査場所が隣接するとともに調査時期もあい前後していた。しかし、後述するように3B工区の北と南で中世期の層位状況が大きく相違していたこと、5工区の調査担当が途中で交替したこと、調査時点で各層の番号を統一しなかったことなどから、各工区の調査者および報告者の意向を尊重し、Ⅲ以降における各工区の層位および遺構・遺物での層番号・名（記号）・表記法などの統一はあえて行なわなかった。そのため、先に各工区の層関係を確認しておきたい。詳細については各工区の層序説明・土層断面図を見ていただくとともに、本調査地およびその周辺の土層柱状模式図である第57図の参照を願う。以下、第5図・第2表をもとに各層の状況を概観しておこう。

- A. 道路舗装および道路建設に伴う盛土・擾乱土。
- B. 近代後半から現代までの耕作土と底土。3A工区で一部耕土と底土があり水田が行なわれていたと思われるが、4工区は耕作土のみで畑地であったと考えられる。しかし他の工区では道路建設の擾乱などで未確認。
- C. 江戸時代から近代前半の堆積土および耕作土。この上面で数多くの井路（溝）を検出した。これらの井路は掘り上げ田に伴うもので、江戸時代後半に掘削されB層による埋没時までひきつづき使用されていたものもあった。
- D. 室町時代相当層。この上面で2時期の異なる溝を検出した。とくに下部期は北部域で密な東西溝がみられたが南部域（第49次含む）は南端部のみで、北と南では耕作状況を異にしていたものと思われる。
- E. 3B工区南にはF層堆積期後半に流れ込んだ砂層（6層）と、そのうえに堆積・整地された5A・B層があった。
- F. 鎌倉時代相当期の砂礫・シルト・粘土の自然堆積層であるが、弥生土器・須恵器など古代の遺物を多く包含していた。上面で東西方向の溝を検出した。
- G. 平安時代から奈良時代相当の自然堆積粘土・シルト層。5工区南ではこの上面で人などの足跡を検出した。
- H. 古墳時代相当層。3A・B工区および5工区の下層はI層を攪拌した前期層（庄内～布留相当期）があり、上部は後期の自然堆積層。ただ、5工区ではその上にこの下・上層を攪拌した後期後半以降の層もみられた。
- I. 黒色の植物遺体（腐植）層で鬼虎川遺跡西部から水走遺跡一帯に見られ、弥生時代後期の基本層位といわれてきた。しかし、5工区において庄内式と思われる壺片を確認。
- J. 弥生時代中期後半の自然堆積層。今回の調査区では検出されなかったが、木遺跡や水走・瓜生堂など多くの遺跡で確認されている大洪水の砂礫堆積層はこの上面からのものである。
- K. 弥生時代中期前半から半ばの遺物包含層。下部はI・M層を攪拌しⅡ～Ⅲ様式の土器などが出土した。上部はシルト・粘土の自然堆積層であり遺物を含まず、5工区ではこの上面で自然流路を検出した。
- L. 遺物の出土例は極めて少ないが、部分的にM層を攪拌した弥生時代前期～中期前半相当層である。上面で弥生時代中期前半ごろの遺構一溝・ピットなどを検出した。
- M. 本遺跡西部から西一帯に広がる繩文時代以前の自然堆積層で、この上面が遺構の最終検出面である。5工区で溝・杭などを検出した。

T.P.+4m

A



第5図 基本層位模式図

第2表 層および井路等対応関係表

時代	基本層	工区					
		3A	3B北	4	3B南	5A	5B
現代	A 盛土	—	—	—	—	—	—
近代後半～	B 耕土 床土	1A+B 2	—	1A+B	—	—	—
近代前半～ 江戸	I C 錆り上り田 井路など	(浦7・1・2)	浦14・19	浦1～5・10	浦1～4	浦1	浦6・7
室町	II III 井路	浦3・5・6上	浦16～18上	浦6～9上	2	—	—
	D 井路	6A	4A+B	3A+B	2	—	—
	E 井路	4	5A	4	3A+B	2	2
鎌倉	F 井路	浦3・5・6下	浦16～18	浦12・13 (5A+B)	浦2	—	—
平安	G	6B+C	5	6	3	3	4
奈良(古墳)	H	6D+7	6	6・7	4	4	4
弥生後期	I	8	7・8	8	7・8	6・7	5・6・7
弥生中期後半	J	9	9	9	9	8	8
弥生中期前半	K 流路	10	10A	10A	9	9	9
弥生前期	L	10B+C	10B	10B+C	10・11・12	10・11・12	10・11・12
绳文以前	M	12A+B+C	12	12A+B	12	14	14
各工区相当層名と道構名							

### 3. 3A工区

#### a. 層序

今回の調査で確認した土層は以下のとおりである。調査地の現地表面のレベルはT.P.+約4.5mである。なお、第0層は機械掘削で除去した。

第0層 道路舗装および盛土等。

第1層 暗オリーブ灰色細礫混じり粘土。近・現代の旧耕土層。層厚約0.7m。上面のレベルはT.P.+約3.0m前後である。

第2層 黄褐色粘土。マンガン・植物遺体を含む。床土層。層厚0.2m。

第3層 暗青灰色粘土。5mm以下の中粒砂を少量含む。3A-1で確認した。層厚0.1~0.2m。

第4層 4A層 灰色粘土。層厚0.1~0.2m。

4B層 緑灰色細礫混じり粘土。層厚0.1m。A・B層は3A-1で確認した。

4C層 灰色粘土。層厚0.2~0.5m。溝1・2の構築面にあたる。上面のレベルはT.P.+約2.3m前後である。溝からは土師器・瓦器、漆器碗等が少量出土した。

4D層 暗オリーブ灰色粘土。上位にマンガンを含む。層厚0.2~0.5m。下位に第5層から巻き上げた砂が見られる。

第5層 緑灰色シルトと灰白色中粒砂の互層。層厚0.5~0.7m。河川の氾濫に起因する砂層で、中世期の溝の凹みに流入し、溝を廃絶させた。上位は擾拌され耕土化する。磨滅した土師器・瓦器片や動物遺体等が少量出土した。上面のレベルはT.P.+約1.8m前後である。この層は、3B工区(現道部)の第2層、4工区の第3層と同一層である。

3A-1地区でのみ確認された第3、4A・B層は、他の地区で検出した溝との位置や層位の関係を考慮すると、それぞれ溝の堆積層になると考えられ、溝7とした。

第6層 6A層 青灰色粘土。層厚0.1~0.5m。溝3~6の構築面にあたる。

6B層 暗灰黄色粘土。層厚0.2~0.5m。上面のレベルはT.P.+約1.4m前後である。

6D層 灰色粘土にオリーブ黒色粘土がブロック状に混じる層。層厚0.1~0.2m。植物遺体(堅果)を少量含む。土師器・瓦器片が少量出土した。

以下の土層は分層数や検出レベルに若干の違いがあるが3B工区、4工区と基本的に同一層である。

第7層 暗オリーブ灰色粘土。植物の根の痕跡あり。層厚0.2~0.3m。古墳時代に属する須恵器・土師器片や3~5cm大の礫が少量出土した。上面のレベルはT.P.+約0.6m前後である。

第8層 オリーブ黒色粘土と黒色粘土がブロック状に混じる層。層厚約0.1m。庄内期に属する土師器片が1点出土した。

第9層 黒色シルト質粘土。ヨシ等の植物遺体を多量に含み、腐植土状を呈す。層厚約0.05m。自然木が出土した。

第10層 オリーブ黒色粘土に炭化物がラミナ状に混じる。層厚約0.1m。

第11層 黒色粘土。上位にヨシ等の植物遺体を含む。層厚0.2~0.3m。弥生時代中期前半(畿内第II様式)に属する土師器片が1点出土した。上面のレベルはT.P.+約0.2m前後である。

第12層 3層に分けられた。無遺物層である。上面のレベルはT.P.-約0.1m前後である。

12A層 灰色粘土。植物遺体を含む。層厚0.1~0.15m。

12B層 明緑灰色粘土に灰色粘土が混じる。層厚0.2~0.3m。

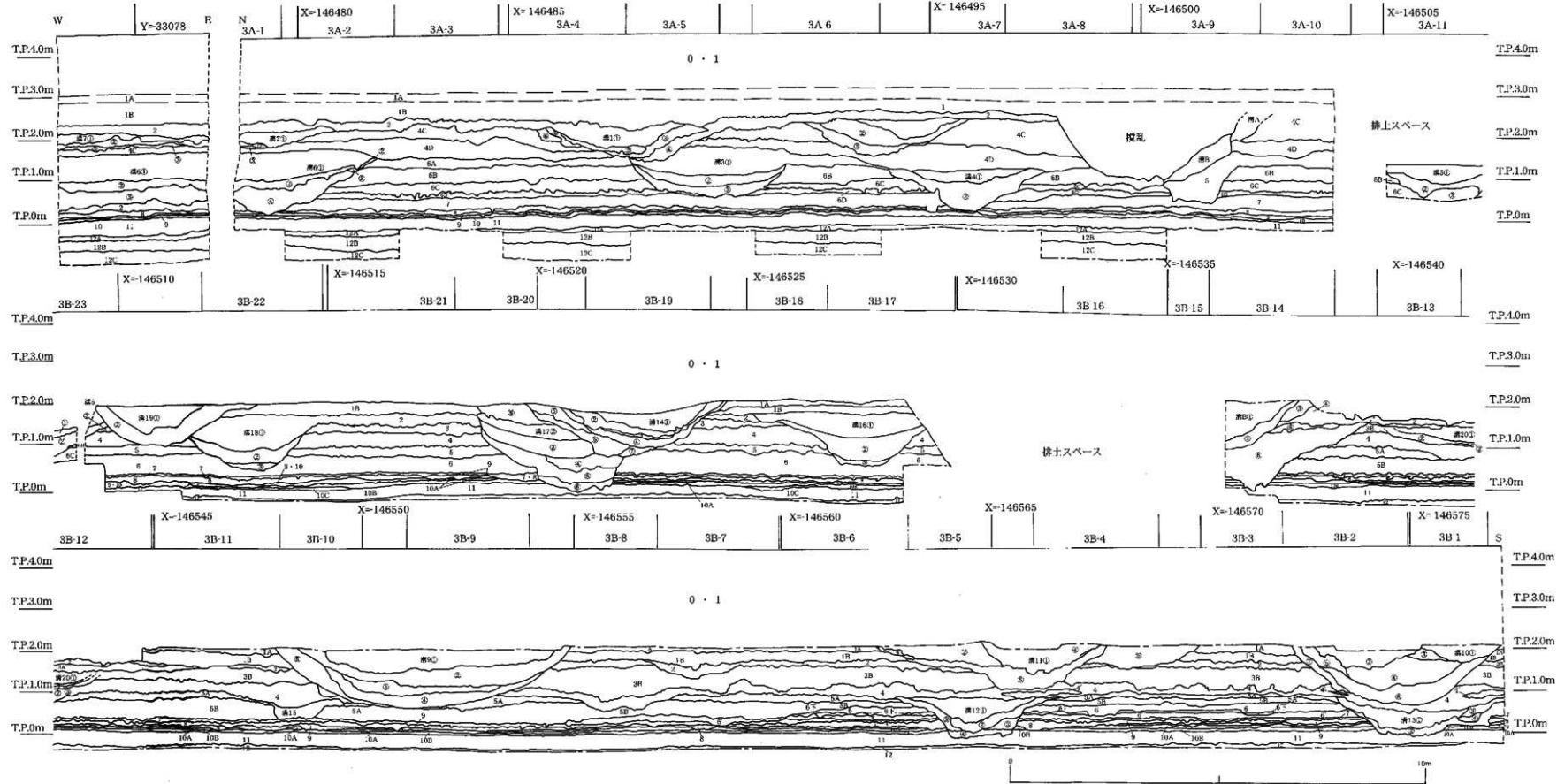
12C層 灰色シルト質粘土(下位になるほどシルトの含有量が増す。)層厚0.3m。

### 3A工区土色・質一覧

- 1 暗オリーブ灰色(5GY3/1)纏混じり粘土  
 2 黄褐色(2.5Y5/1)粘土  
 3 墓碑灰色(5BG4/1)粘土  
 4 A 灰色(5Y4/1)粘土  
 4 B 緑灰色(10G5/1)細纏混じり粘土  
 4 C 灰色(7.5Y4/1)粘土  
 4 D 暗青灰色(5BG3/1)纏混じり粘土  
 5 緑緑灰色(5G4/1)シルトと灰白色(7.5Y7/2)細粒砂の互層  
 6 A 青灰色(10GY5/1)粘土  
 6 B 暗灰黄色(2.5Y4/1)粘土  
 6 C オリーブ黒色(10Y3/1)シルト質粘土  
 6 D 灰色(7.5Y4/1)粘土にオリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土がブロック状に混じる  
 7 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土  
 8 オリーブ黒色(10Y3/1)粘土と黒色(7.5Y2/1)粘土がブロック状に混じる  
 9 黒色(N2/0)シルト質粘土  
 10 オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土に黒色(7.5Y2/1)粘土がマーブル状に混じる  
 11 黒色(2.5Y3/1)粘土  
 12 A 灰色(N5/0)粘土、植物遺体を含む  
 12 B 明礫灰色粘土(10GY7/1)に灰色(7.5Y6/1)粘土が混じる  
 12 C 灰色(7.5Y4/1)シルト質粘土  
 • 溝 1  
 ① オリーブ黒色(7.5Y3/2)シルト質粘土、水分含有量多、植物遺体を少量含む  
 ② 灰色(5Y4/1)粘土、水分含有量多、植物遺体・炭を少量含む  
 ③ オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土とオリーブ黒色(2.5GY5/1)粘土がブロック状に混じる、植物遺体を少量含む  
 ④ オリーブ黒色(10Y3/1)纏混じり粘土(5mm以下、下位の砂粒を巻き上げる)  
 ⑤ 灰色(10Y4/1)シルト質粘土  
 ⑥ 暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘土、粘性強、水分含有量多  
 • 溝 2  
 ① オリーブ黒色(10Y3/1)シルト質粘土、水分含有量多、炭を少量含む  
 ② 黒褐色(2.5Y3/1)粘土とオリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土がブロック状に混ざる、水分含有量多  
 ③ オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質粘土に灰色(10Y3/1)粘土、粘性強がブロック状に混じる、植物遺体を少量含む  
 • 溝 3  
 ① 灰オリーブ色(5Y5/3)極細粒砂とオリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト～細粒砂の互層  
 ② オリーブ黒色(7.5Y3/2)シルト～細粒砂の互層、自然木などの植物遺体を少量含む  
 ③ オリーブ黒色(10Y3/1)粘土と灰色(10Y4/1)粘土がブロック状に混じる、流木などの植物遺体を少量含む  
 • 溝 4  
 ① 灰色(10Y4/1)粘土と灰色(10Y3/1)粘土がブロック状に混ざる、炭化物を含む  
 ② 暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)粘土にオリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土と中纏～シルトがブロック状に混じる
- 溝 5  
 ① 緑灰色(5GY4/1)シルトと灰白色(7.5Y7/2)中粒砂の互層  
 ② オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土と灰色(10Y4/1)粘土と纏(5mm以下)がブロック状に混じる、炭化物を含む  
 ③ 灰オリーブ色(7.5Y4/2)粘土、粘性強  
 ④ シルト質混じる
- 溝 6  
 ① 緑灰色(5GY4/1)シルトと灰白色(7.5Y7/2)中粒砂の互層  
 ② オリーブ黒色(5Y3/1)粘土、粘性強  
 ③ オリーブ黒色(10Y3/1)シルト質粘土とオリーブ黒色(7.5Y3/2)シルト質粘土がブロック状に混じる、炭化物を中量含む  
 ④ オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト質粘土と暗オリーブ黒色(2.5GY4/1)粘土がブロック状に混じる
- 溝 7  
 ① 暗青灰色(5BG4/1)粘土  
 ② 灰色(5Y4/1)粘土  
 ③ 緑灰色(10G5/1)細纏混じり粘土  
 • 溝 A  
 オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土、3mm以下の纏、中粒砂が混じる  
 • 溝 B  
 緑灰色(7.5GY5/1)纏混じり粘土(5mm大の中纏、多量)

### 3B 工区土色・質一覧

- 3B-1～16 (南側調査区)
- 1A 青灰色(GBG5/1)砂砾じり粘土
  - 1B オリーブ灰色(2SGY6/1)粘土
  - 2 灰色(10Y7/2)粘土
  - 3A 灰色(10Y4/1)粘土
  - 3B 青灰色(SHG2/1)砂砾じり粘土
  - 4 河床(10Y4/1)粘土
  - 4' ブロック状の青灰色(5BG5/1)～灰黑色(10Y5/1)砂砾じり粘土(3mm以下の塊、中量)
  - 5A 離灰土(10G5/1)砂砾じり粘土
  - 5B 砂離灰土(10G5/1)砂砾離じり粘土
  - 6 細粒灰土(5G5/1)粗粒灰土～シルト
  - 6' 灰色(10Y4/1)粘土～粗粒粉
  - 7 粗粒灰土(7.5GY4/1)粘土に砂層と粗粒灰土(5GY4/1)シルト質粘土が混じる
  - 8 オリーブ灰色(5Y3/2)粘土
  - 9 黑褐色(2.5Y3/1)粘土
  - 10A オリーブ灰色(5Y3/1)粘土、ラミナ有り
  - 10B オリーブ黑色(5Y3/2)粘土、ラミナ有り
  - 10C オリーブ黑色(7.5Y3/1)粘土、ラミナ有り
  - 11 黑褐色(2.5Y3/1)粘土
  - 12 灰色(10Y5/1)粘土
- 3B-17～23 (北側)
- 1A 灰色(7.5Y4/1)砂砾じり粘土
  - 1B 灰色(10Y4/1)砂砾じり粘土
  - 2 灰白色(7.5Y7/1)砂～粗粒粉と灰黑色(7.5Y4/2)シルトの互層
  - 3 オリーブ灰土(5GY4/1)粘土
  - 4 オリーブ黑色(5Y3/2)粘土にオリーブ色(5Y4/2)粘土がブロック状に混じる
  - 5 灰色(7.5Y4/1)粘土
  - 6 オリーブ黑色(10Y3/2)粘土
  - 7 粗粒灰土(7.5GY4/1)粘土に第8層と細粒灰土(5GY4/1)シルト質粘土が混じる
  - 8 オリーブ黑色(5Y3/2)粘土
  - 9 黑褐色(2.5Y2/1)粘土
  - 10A オリーブ黑色(5Y3/1)粘土、ラミナ有り
  - 10B オリーブ黑色(5Y3/2)粘土、ラミナ有り
  - 10C オリーブ黑色(7.5Y3/1)粘土、ラミナ有り
  - 11 基岩(2.5Y3/1)粘土
  - 12 灰色(10Y5/1)粘土
  - 消8
  - ⑨ オリーブ灰色(7.5Y3/2)砂～粗粒粉とオリーブ灰色(2.5GY5/1)シルト質粘土がブロック状に混じる
  - ⑩ 粗粒灰土(5GY4/1)砂砾じり粘土(3mm以下)
  - ⑪ 灰色(7.5Y4/1)粘土、粘土質
  - ⑫ オリーブ灰色(2.5GY5/1)粘土、粘土質、植物遺体少含む
  - ⑬ 灰色(5Y4/1)粘土にオリーブ色(5Y4/2)砂～粗粒粉が混じる
  - ⑭ 灰色(5Y4/1)、水分含有量多、部分的に灰色(7.5Y4/1)粘土(水分含有量少)、硬塑性を含む
  - 消9
  - ⑮ 細粒オリーブ灰色(5GY4/1)砂離じりシルト質粘土(5mm以下、多量)、黑色(7.5Y2/1)砂土のロック状を呈する
  - ⑯ 粗粒灰土(7.5G4/4)砂離じりシルト質粘土(3mm以下、中量)、黑色(7.5Y2/1)砂土のブロックが少含む
  - ⑰ 細粒オリーブ灰色(5GY4/1)砂離じりシルト質粘土(8mm以下、少額)、黑色(7.5Y2/1)砂土のロック状を呈する
  - ⑱ 灰色(10Y4/1)シルト質粘土、オリーブ灰色(7.5Y3/2)シルト～細砂のブロックが混じる
  - 上位 細粒オリーブ灰色(5GY4/1)粘土、植物遺体を中量含む、水分含有量多  
下位 灰色(10Y4/1)粘土、植物遺体を中量含む、ラミナ有り
  - ⑲ 黑褐色(5Y5/2)粘土、粘土質、植物遺体を少含む
  - ⑳ 灰色(5Y4/1)粘土、粘土質
  - 消10
  - ㉑ 灰色(7.5Y4/1)砂離じりシルト質粘土(3mm以下の塊、少量)
  - ㉒ 灰色(10GY4/1)砂離じり粘土(5mm以下、中量)
  - ㉓ 粗粒灰土(2.5Y5/2)砂離じりシルト質粘土(5mm以下、中量)
  - ㉔ 灰色(10Y4/1)砂離じり質シルト(5mm以下の塊、中量)、植物遺体を少含む
  - ㉕ オリーブ黑色(10Y3/1)砂離じりシルト質粘土(5mmの大塊、少量)、黑色粘土のブロックが混じる
- 番号オリーブ灰色(5GY3/1)砂離じり粘土
- ㉖ 灰色(7.5YS/1)粘土、細砂が少含む、植物遺体を中量含む
  - 消11
  - ㉗ 青灰色(2BS/1)粘土、四くじまる、植物の根の根糸あり
  - ㉘ 粗粒灰土(5GY4/1)砂離じりシルト質粘土(10mmの大塊、多量)
  - ㉙ オリーブ黑色(10Y3/2)砂離じりシルト質粘土(3mmの大塊、多量)、植物遺体を中量含む
  - ㉚ 白色(7.5Y7/1)粘土、東面に向く露頂
  - ㉛ オリーブ色(5GY5/2)粘土、腐食土の植物遺体を多量含む
  - ㉜ オリーブ色(5GY7/1)粘土上、マングル痕有り
  - 消12
  - ㉝ 灰色(7.5Y5/1)粘土と灰黑色(7.5Y4/1)粘土がマーブル状に混じる、植物遺体を含む
  - ㉞ 灰色(7.5Y4/1)粘土、炭化物、植物遺体を少量含む
  - ㉟ 灰色(7.5Y4/1)砂離じり粘土、炭化物、植物遺体を少量含む
  - ㉟ 第9～8層がブロック状に混じる
  - 消13
  - ㉡ オリーブ灰色(2.5GY6/1)粘土、植物遺体を中量含む
  - ㉢ 細粒オリーブ色(5Y4/2)粘土、植物遺体を中量含む、第6層の砂が混じる
  - ㉤ 灰色(7.5Y4/1)砂離じり粘土上(3mm以下の塊、中量)、第6層の砂が混じる
  - ㉥ オリーブ黒色(7.5Y3/2)砂離じり粘土(2mmの大塊、中量)、第11層がブロック状に混じる
  - 消14
  - ㉧ オリーブ黑色(5Y3/2)砂離じり粘土に無灰色(5G4/1)シルト質粘土がブロック状に混じる
  - ㉨ 灰色(7.5Y4/1)砂離じり粘土に灰黑色(7.5Y5/1)粘土がブロック状に混じる
  - ㉩ オリーブ黑色(5Y3/2)粘土、水分含有量多、ラミナ有り、繊かな植物遺体を少量含む
  - ㉪ オリーブ黑色(5Y3/1)砂離じり粘土にオリーブ黑色(7.5Y3/2)粘土がブロック状に混じる
  - ㉫ オリーブ黑色(5Y3/2)粗粒砂～シルトとオリーブ黒色(5Y3/2)シルト質粘土の互層
  - ㉬ 灰色(5Y4/2)砂～粗粒粉にオリーブ黑色(5Y3/2)シルト質粘土がブロック状に混じる
  - ㉭ 灰色(7.5Y4/1)粘土、水分含有量多、繊かな植物遺体を中量含む
  - 消15
  - ㉧ オリーブ黑色(10Y3/2)砂離じり粘土、水分含有量多、繊かな植物遺体を中量含む
  - 消16
  - ㉩ 灰色(7.5Y7/1)砂～粗粒粉と灰オリーブ色(7.5Y4/2)シルトの互層、汚水含む
  - ㉪ オリーブ黑色(5Y3/2)粗粒砂～シルトの互層
  - ㉫ 灰色(5Y4/2)シルト質粘土、水分含有量多
  - 消17
  - ㉬ 古青灰色(5BG6/1)シルト質粘土、植物遺体を中量含むと灰白色(7.5Y6/1)中粒砂の互層
  - ㉭ 灰白色(10Y7/2)粗粒砂、ラミナ有り
  - ㉮ 細粒灰土(1GY4/1)シルト、ラミナ有り
  - ㉯ 細粒灰土(7.5GY3/1)砂離じり粘土(1mm以下、中量)、植物遺体を少量含む
  - ㉰ 灰色(7.5GY5/1)粘土、炭化物を少量含む
  - ㉱ 第9～10層の脱鉻
  - 消18
  - ㉲ 上位 灰色(5Y4/1)砂離じりシルトの互層
  - 下位 灰色(7.5Y5/2)砂～粗粒砂
  - ㉳ オリーブ黑色(7.5Y3/2)シルト質粘土、水分含有量多
  - ㉴ オリーブ黑色(7.5Y3/2)粗粒砂～シルト
  - 消19
  - ㉵ 灰色(7.5Y4/2)後離じり粘土に灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質粘土がブロック状に混じる
  - ㉶ オリーブ黑色(5Y3/2)シルト質粘土、水分含有量多、植物遺体を少量含む
  - 消20
  - ㉷ オリーブ黑色(7.5Y3/1)粘土、繊かな植物遺体を少量含む
  - ㉸ 灰色(5Y4/1)粘土、粘土質
  - ㉹ 灰色(7.5Y4/1)粘土、粘土質



第6図 3工区北・東壁断面図

## b. 遺構

調査工程の関係で、人力掘削部分のうちT.P.+1.5m以上の遺構は平面検出を断念し、土層断面観察と遺物の取り上げのみを行なった。また、遺構名については、個々の性格・機能は問わず、形状から判断して付した。各遺構埋土に関しては前出の土色・質一覧を参照されたい。

### 近世以降

調査区北側の地区で東西方向の溝を2条検出した。土層断面等で2条の溝を確認した。

#### 溝1

3A-4・5で検出した。4C層から切り込む。検出レベルはT.P.+2.4m、最下部はT.P.+1.5mを測り、6A層に達する。また、溝3の北肩を削平する。幅4.5m、深さ0.9m。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は6層に分けられた。土質からみて、滲水を目的として掘られたものであり、掘り上げ田に伴う井路と考える。土器は出土しなかったが、堆積土①から漆器碗や木製品が出土した。

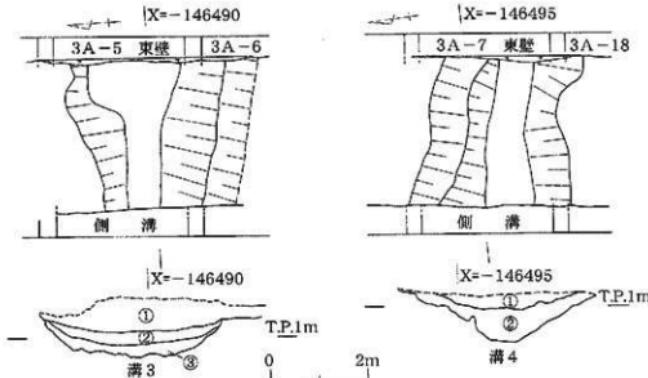
#### 溝2

3A-6・7で検出した。4C層から切り込む。検出レベルはT.P.+2.4m、最下部はT.P.+1.6mを測り、4D層に達する。幅3.9m、深さ0.8m。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は3層に分けられた。土質は泥質であることから、滲水を目的として掘られたものであり、掘り上げ田に伴う井路と考える。土器は出土しなかったが、堆積土②から漆器碗が出土した。

溝1・2は同一面で検出したので、同時期に井路として機能していたと考えられる。隣接地で行われた第38次調査で確認した層位から、これらの溝は近世～近代にかけて機能していたと思われる。また、3A-8・9で検出した搅乱は、土層観察や層中から出土した遺物および他工区での調査結果を考えると、井路である可能性が高い。

#### 溝7

3A-1・2で土層断面観察中に検出した。4C層から切り込む。検出レベルはT.P.+2.3m、最下部はT.P.+1.8mを測り、4D層に達する。北肩は調査区外へ延びるため不明である。幅2.2m、深さ0.4m。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は3層に分けられた。土質は泥質であることから、滲水を目的として掘られたものであると考える。遺物は出土しなかった。ただ、深さから考えると掘り上げ田に伴



第7図 3A工区検出遺構実測図

う溝に該当するかは検討を要する。

#### 中世

東西方向の溝を4条検出した。

#### 溝3

3A-4~6で検出した。6A層から切り込む。北肩は溝1に削平されている。検出レベルはT.P.+1.6m. 最下部はT.P.+0.7mを測り、第7層に達する。幅3.7m以上、深さ1.2m。断面形状は浅い皿状を呈する。堆積土は3層に分けられた。堆積土②③は滝水時にたまたまものであるが、溝の凹みに、周辺河川の氾濫に起因する粗粒砂（①即ち第5層）が流入して溝は廃絶した。第5層から古代～15世紀前半に属する遺物が、また、第6層から13世紀代に属する遺物が出土したことから、溝は13～15世紀前半にかけて機能していたと考えられる。また、他に①からは動物遺体（ウマ、イヌ）が出土した。

#### 溝4

3A-7・8で検出した。6B層から切り込む。検出レベルはT.P.+1.3m. 最下部はT.P.+0.3mを測り、第9層に達する。幅4.0m、深さ1.3m。断面形状は浅い皿状を呈する。堆積土は2層に分けられた。堆積土は滝水時にたまたまものである。上面は4D層により撥押される。堆積土②から古墳時代に属する土師器・須恵器等が出土したが、第7層からの混入であると考えられる。第6層から13世紀代の遺物が出土しているので当該期に機能していた溝と見られる。

#### 溝5

3A-11（排土スペース）および3B-23で検出した。北肩口は3A-10付近にあったと思われるが確認できなかった。南肩口は3B工区調査中に溝19に切られた状況で検出したため、溝の掘り込み面は不明である。排土スペース内で検出した溝底部はT.P.+0.6mを測り、第6C層に達するが最下部は不明である。堆積土は3層に分けられた。堆積土②③は滝水時にたまたまものであるが、溝の凹みに①（第5層）が流入し、溝は廃絶した。第5層から古代～15世紀前半に属する遺物が出土したことから、溝の下限機能時期は15世紀前半と考えられる。また、他に①からは動物遺体（ウマ、イヌ）が出土した。

#### 溝6

3A-1～3で検出した。6A層から切り込む。北肩は調査区外へ延びるため不明である。検出レベルはT.P.+1.5m. 最下部はT.P.+0.2mを測り、第9層に達する。幅2.6m以上、深さ1.5m。堆積土は3層に分けられた。堆積土②③は滝水時にたまたまものであるが、溝の凹みに①（第5層）が流入し、溝は廃絶した。第5層から古代～15世紀前半に属する遺物が、また、第6層から13世紀代に属する遺物が出土したことから、溝は13～15世紀前半にかけて機能していたと考える。また、他に①からは動物遺体が、堆積土③から漆器碗が出土した。

溝3・5・6はいずれも第5層の流入により同時期に廃絶した。しかし、断面形状や堆積状況を見ると、溝6は廃絶するまで長期間滝水していたと考えられ、開削時期に若干の時期差もしくは溝の使用目的に違いがあったと思われる。

#### c. 遺物

##### 出土遺物について

今回の調査で出土した遺物は、土器・陶磁器・石製品・木製品・動物遺体等である。遺物の所属時期は出土量の多少を問わなければ、弥生時代から近世までの各時代にわたる。遺物は細片のため図化できないものが多数を占めていたが、なるべく図版に掲載するように心がけた。

土師器、弥生土器については、胎土に角閃石を含み、色調が茶褐色を呈するものを在地産とし、異

なるものについては、他地域産とした。なお、実測図の番号の後に付した数字(1/5)(1/6)等は、その遺物のスケールを示す。数字を記載していないものについては1/4である。なお、この記述は後述する3B工区、4工区においても踏襲している。

#### 溝3出土遺物(図版55)

細片であるため、図版に掲げる。和泉型瓦器楕の口縁部122～124、底部125がある。いずれも摩滅がはげしい。125は見込に螺旋状暗文がわずかに残る。

#### 溝4出土遺物(図版55)

細片であるため、図版に掲げる。土師器皿126、製塙土器127、須恵器甕128がある。126は胎土に微粒の雲母を含み、色調は黄灰色を呈する。127は胎土に礫状のチャート、長石を含む。内面にハケメがわずかに残る。128は焼成が堅緻で断面は赤灰色を呈する。

#### 溝5出土遺物(第8図1～2、図版55)

1は土師器小皿、いわゆるへそ皿である。内面を右回りでヨコナデする。胎土に微細な雲母を含み、色調は黄褐色を呈する。口径8.2cm、器高2.0cm。

2は須恵器甕の体部である。外面の平行タタキ、内面の円弧タタキをナデ消す。胎土に白色砂粒を含み、色調は青灰色を呈する。

他に土師器皿129、玉縁口縁の中国製白磁130等がある。130は釉色が淡黄色を呈し、内外面とも細かな貫入が見られる。

#### 溝6出土遺物(第8図3、図版51・55)

3は和泉型瓦器楕である。内面に粗いヘラミガキを施す。色調は灰黒色を呈する。口径15.2cm。他に中国製白磁口縁部131、和泉型瓦器楕の口縁部132・底部133等がある。131は釉色がオリーブ灰色を呈する。口縁端部は丸く、わずかに外反する。

#### 第5層出土遺物(図版55)

細片であるため、図版に掲げる。大和型瓦器楕の口縁部134、土師器甕口縁部135等がある。

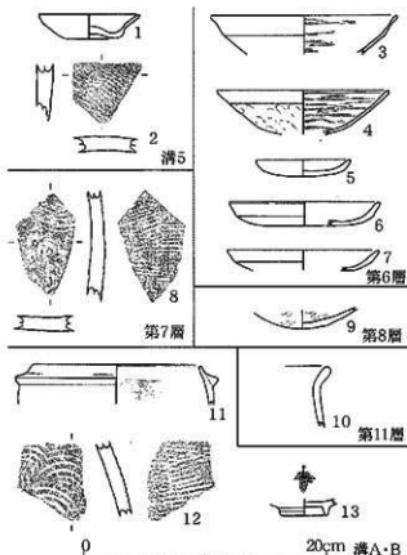
#### 第6層出土遺物(第8図4～7、図版55)

4は和泉型瓦器楕である。見込に並行線状暗文を施す。色調は灰黒色を呈する。口径14.0cm。5～7は土師器皿である。いずれも胎土に白色・黒色砂粒を多量に含み、色調は灰色を呈する特徴が似ており、同一地域産と考えられる。5は口径7.8cm、器高1.4cm。6は口径12.3cm、器高2.0cm。7は口径12.4cm、器高1.7cm。

他に土師器皿136、和泉型瓦器楕の体部137等がある。136は特徴が5～7に似ており、同一地域産と考えられる。

#### 第7層出土遺物(第8図8、図版56)

8は須恵器甕の体部である。外面の平行タタキ、内面の円弧タタキをナデ消す。焼成は堅緻



第8図 3A工区出土遺物実測図

で断面は灰赤色を呈する。他に2点138・139が出土しているが、いずれも胎土や技法の特徴が似ていることから同一個体と考えられる。

#### 第8層出土遺物（第8図9、図版56）

9は土師器壺の底部である。風化がはげしいが、内外面にハケメが残り、布留式土器と思われる。胎土に白色・黒色砂粒を多量に含む。外面は二次焼成を受け、橙色を呈する。

#### 第11層出土遺物（第8図10、図版56）

10は弥生土器壺である。畿内第Ⅱ様式に属する。内外面にヘラミガキを施す。外面に煤が付着する。在地産。

#### 溝A・B出土遺物（第8図11～13、図版56）

11は瓦器三足羽釜である。内面部をヨコハケ（14条/cm）する。胎土に微細な雲母を含み、色調は灰色を呈する。口径13.6cm、141は和泉型瓦器椀の体部である。

12は須恵器壺の体部である。外面の平行タタキ、内面の円弧タタキをナデ消す。胎土に白色・黒色砂粒を含み、色調は灰色を呈する。

#### 13は国産磁器染付碗の底部である。見込にくずれた「寿」文を描く。高台径3.6cm。肥前系。

他に摩滅した瓦140、円筒埴輪142等がある。142は胎土に長石を多量に含み、色調はにぶい橙色を呈する。

#### 木製品（第13図55・56・58～62、図版52～54）

55・56・58は漆器椀である。55は外表面黒色、内面は黒色漆の上に赤色漆を施す。高台径5.2cm。破損がはげしく、文様の有無は不明である。溝1出土。56は外表面黒色、内面は赤色漆を施す。外面に赤色漆で亀甲文を描く。高台径7.0cm。溝6出土。58は外表面に黒色漆の上に赤色漆を施す。高台径7.8cm。破損がはげしく、文様の有無は不明である。溝2出土。

59は連歛下駄である。全体的に磨耗し、歯は痕跡があるのみである。残存長14.5cm、幅6.9cm、器厚1.0cm。残存長からみて、子供もしくは女性用と思われる。溝3出土。

60は杓文字である。ヘラ状に形つくられているが、厚みは1.0cmで一定し、全長16.5cm。材はヒノキ科アヌナロ属。完形。溝1出土。

61・62は何らかの部材と考えられる。61は上部を欠く。幅2cm程度を削り凹ませる。残存長14.5cm、幅3.0cm、器厚1.0cm。溝1出土。62は下部を欠く。片面の一端を高く残し、削り込む。残存長27.0cm、幅8.4cm、器厚1.7cm。溝1出土。

#### d. 小結

1. 本調査区は中世から近世にわたり溝群を伴う生産域であった。

2. 4C層上面で江戸時代後半から明治時代後半の東西方向の溝を4条検出した。このうち3条（溝1・2・搅乱部）は掘り上げ田に伴う井路であった。各溝内の遺物は少なく、漆器椀・杓文字などが出土したのみであった。

3. 中世期の東西方向に延びる4条の溝は2時期に分かれ、溝3・5・6（6A層からの切り込み）は15世紀前半まで機能していたが、6B層上面から切り込んでいた溝4は13世紀代にその機能を終えていた。溝6から漆器椀、溝3から下駄、溝3・5内からウマ・イヌなどが出土したが、出土遺物は多くない。

4. 第6層からは瓦器椀・土師器皿などが出土したが、第7層以下は遺物は少なかったが、第7層から須恵器壺、第8層から布留式の壺、第11層から弥生土器壺が出土し、相当時期の確認ができた。

#### 4. 3B工区

##### a. 層序

今回の調査で確認した土層は以下のとおりである。南側調査区、現道部調査区での層序は、様相が異なるため、それぞれに層序説明を設けた。

第0層 道路舗装および盛土。現地表面のレベルはT.P.+4.2~4.5m前後である。

##### 南側調査区 (3B-1~16)

第1層 1A層 青灰色礫混じり粘土。マンガン斑あり。現存層厚0.2m。上面のレベルはT.P.+2.2m前後である。

1B層 オリーブ灰色粘土。植物堅果を含む。層厚0.2m。

第2層 灰白色粘土。植物遺体が少量混じる。

第3層 3A層 青灰色粘土。層厚0.1m。部分的に見られた。

3B層 青灰色礫混じり粘土。層厚0.2~0.6m。上面のレベルはT.P.+1.6m前後である。

第4層 灰色粘土。植物堅果を少量含む。層厚0.2~0.3m。

第5層 5A層 灰色礫混じり粘土。層厚0.1~0.2m。上面のレベルはT.P.+1.0m前後である。溝12・13の構築面にあたる。

5B層 緑灰色礫混じり粘土。層厚0.1~0.4m。

第6層 緑灰色粗粒砂。層厚0.2~0.4m。3B-6以北では第5層に削平される。古墳~中世の遺物が少量出土した。

##### 現道部調査区 (3B-17~23)

第1層 1A層 灰色礫混じり粘土。マンガン斑あり。現存層厚0.1m。上面のレベルはT.P.+2.0m前後である。

1B層 灰色礫混じり粘土。マンガン・炭を含む。層厚0.1m。

第2層 灰白色礫~粗粒砂と灰オリーブ色シルトの互層。層厚0.2m。河川の氾濫に起因する砂層で、中世期の溝の凹みに流入し、溝を廃絶させた。上位は攪拌され耕土化する。磨滅した土師器・瓦器片や獸骨等が少量出土した。上面のレベルはT.P.+約1.8mである。

第3層 オリーブ灰色粘土。層厚0.1m。溝16~18の構築面にあたる。

第4層 オリーブ黒色粘土に灰オリーブ色粘土がブロック状に混じる。植物堅果を含む。層厚0.4m。

第5層 灰色粘土。細かな植物遺体と炭化物が全体的に少量混じる。層厚0.2m。

第6層 オリーブ黒色粘土。植物の根の痕跡あり。層厚0.4~0.5m。

以下の土層は、両地区で見られた。

第7層 暗緑灰色粘土に第8層と暗緑灰色シルトが混じる。層厚約0.05m。3B-6で古墳時代に属する土師器羽釜が出土した。上面のレベルはT.P.+0.3m前後である。

第8層 オリーブ黒色粘土、細かな炭化物がドット状に少量混じる。層厚0.1m。3B-3で庄内式土器が出土した。

第9層 黒色粘土。ヨシ等の植物遺体を多量に含み腐植土状を呈す。層厚約0.05m。自然木が出土。

第10層 10A~10Cの3層に分けられた。いずれもオリーブ黒色粘土で植物遺体がラミナ状に含まれる。不安定な堆積であり、混ざりあっている箇所も見られた。層厚0.2m。

第11層 黒褐色粘土。自然木、ヨシ等の植物遺体を含む。層厚0.2~0.3m。弥生時代中期前半(畿内第Ⅱ様式)に属する土器片が少量出土した。上面のレベルはT.P.約0.0mである。

第12層 灰色粘土。ヨシ等の植物遺体を多量に含む。上位は第11層が混じる。層厚0.1m以上。

b. 造構

造構名については、個々の性格・機能は問わず、形状から判断して付した。

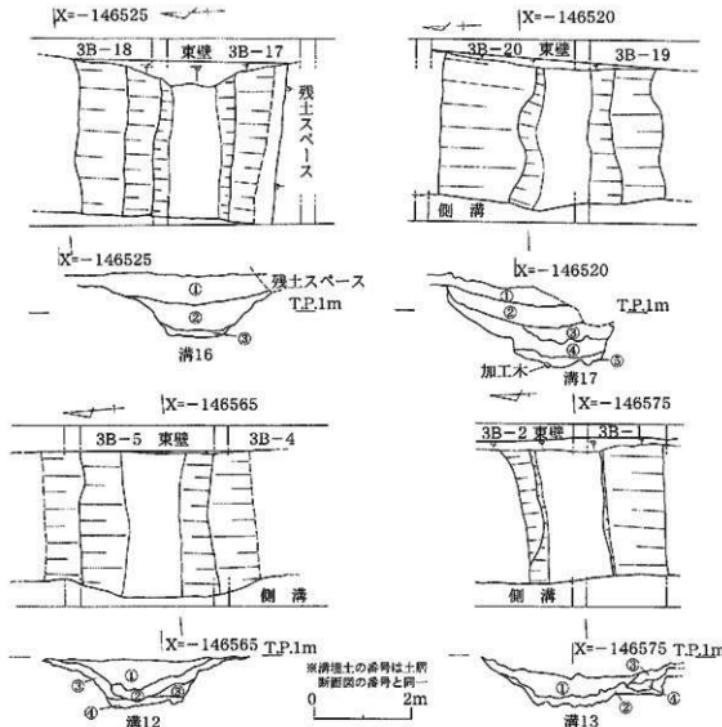
近世以降

東西方向の掘り上げ田に伴う井路等を6条検出した。

溝8

3B-14・15で検出した。北肩は堆土スペース中のため、確認できなかった。検出レベルはT.P.+2.1m、最下部はT.P.±0.0mを測り、第11層に達する。掘り込み面は機械掘削で除去した層から続く可能性があり、確定できない。南肩に杭列が一部残っていた。幅3.4m以上、深さ2.1m。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は6層に分けられた。①②は廃絶時の埋土、③～⑥は滞水時にたまつた堆積層と考える。埋土①②からは18～19世紀代に属する遺物が出土した。よって、当該期に機能していた掘り上げ田に伴う井路と考える。なお、この溝は170号線を挟んで調査した4工区で検出した溝4とつながる（第21図参照）。

溝9



第9図 3B工区検出造構実測図(1)

3B-8~10で検出した。検出レベルはT.P.+2.1m、最下部はT.P.+0.7mを測り、5B層に達する。幅7.0m、深さ1.4m。掘り込み面は機械掘削で除去した層から続く可能性があり、確定できない。断面形は浅い皿状を呈する。北肩に径8cm前後の杭列が一部残っていた。堆積土は6層に分けられた。  
①~③は廃絶時の埋土、④~⑥は滌水時にたまたま堆積層と考える。各層からは18~19世紀代に属する遺物や牡蠣貝殻が出土した。近世期に機能していた掘り上げ田に伴う井路と考える。また、他に土師器や須恵器、埴輪等の混入品が少量出土した。

#### 溝10

3B-1・2で検出した。検出レベルはT.P.+2.1m、最下部はT.P.+0.7mを測り、第4層に達し、下層の溝13を削平する。幅5.0m、深さ1.4m。掘り込み面は機械掘削で除去した層から続く可能性があり、確定できない。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は7層に分けられた。  
①~③は廃絶時の埋土、④~⑦は滌水時にたまたま堆積層と考える。各層からは18~19世紀代に属する遺物や貝遺体(バイ貝)が出土した。当該期に機能していた掘り上げ田に伴う井路と考える。また、他に土師器や須恵器、弥生土器等の混入品が出土した。

#### 溝11

3B-3~6で検出した。検出レベルはT.P.+2.2m、最下部はT.P.+1.1mを測り、第4層に達する。幅7.8m、深さ1.1m。断面形は逆台形状を呈する。掘り込み面は機械掘削で除去した層から続く可能性があり、確定できない。堆積土は6層に分けられた。  
①~③⑥は廃絶時の埋土、④⑤は滌水時にたまたま堆積層と考える。各層からは18~19世紀代に属する遺物や貝遺体(バイ貝)が出土した。当該期に機能していた掘り上げ田に伴う井路と考える。また、他に②から土師器・須恵器等の混入品が出土した。

#### 溝14

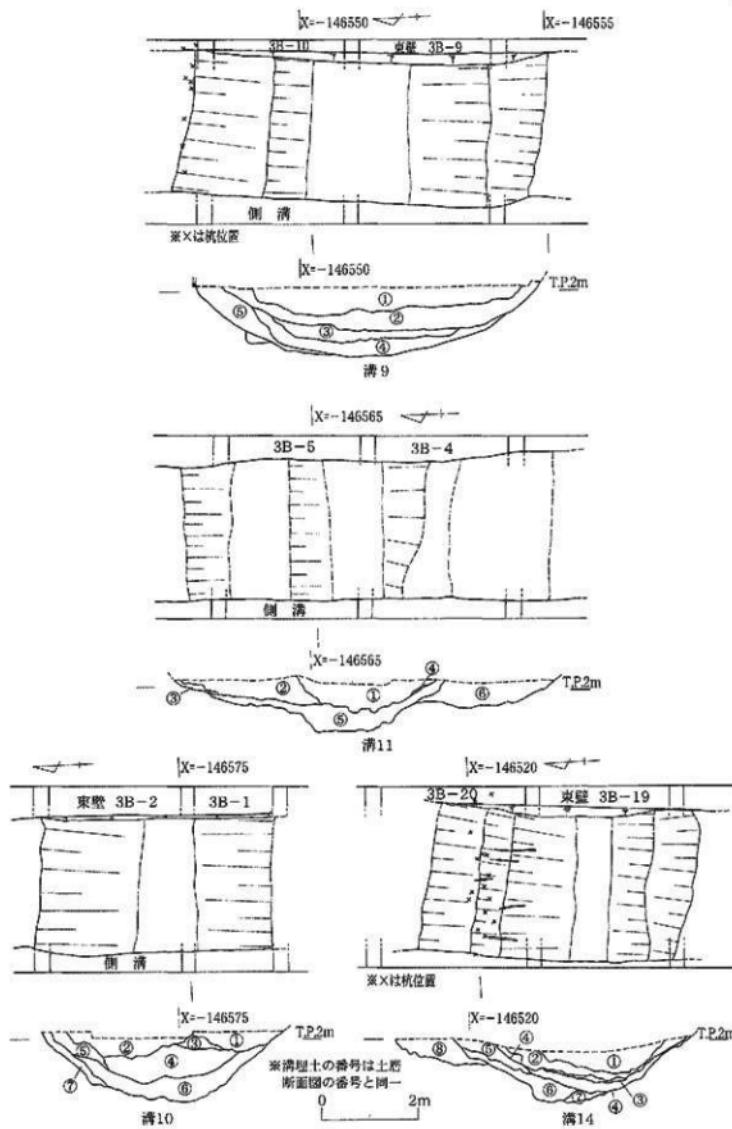
3B-19・20で検出した。検出レベルはT.P.+2.0m、最下部はT.P.+0.7mを測り、第5層に達する。また、下層の溝17を削平する。幅4.8m、深さ1.1m。掘り込み面は機械掘削で除去した層から続く可能性があり、確定できない。断面形は浅い皿状を呈する。北肩に径8cm前後の杭が一部残っていた。堆積土は7層に分けられた。  
①②は廃絶時の埋土、③~⑦は滌水時にたまたま堆積層と考える。各層からは近世以降の遺物が出土した。近世期に機能していた掘り上げ田に伴う井路と考える。また、溝17の堆積を巻き上げたので、中世の土師器や瓦器などの混入品が見られた。なお、この溝は4工区で検出した溝5とつながる(第21図参照)。

#### 溝19

3B-22・23で検出した。検出レベルはT.P.+2.0m、最下部はT.P.+1.0mを測り、第4層に達する。また、下層の溝18を削平する。幅4.0m、深さ1.0m。断面形は浅い皿状を呈する。掘り込み面は機械掘削で除去した層から続く可能性があり、確定できない。堆積土は2層に分けられた。  
①が廃絶時の埋土で、②が滌水時にたまたま堆積層と考える。埋土①からは18~19世紀代に属する遺物が出土した。当該期に機能していた掘り上げ田に伴う井路と考える。なお、この溝は4工区で検出した溝10とつながる(第21図参照)。

#### 溝20

3B-12・13の土層断面観察中に検出した。検出レベルはT.P.+1.4m、最下部はT.P.+1.1mを測り、第4層に達する。幅3.2m、深さ0.3m。断面形は平皿状を呈する。掘り込み面は確定できなかった。堆積土は3層に分けられた。滌水時にたまたま堆積層と考える。遺物は出土しなかった。検出層位から近世以降に機能していた溝と思われるが、深さからみて掘り上げ田に伴う井路に該当するかは検討を要する。



第10図 3B工区検出造構実測図 (2)

## 中世

東西方向の溝を6条検出した。

### 溝12

3B-4~6で検出した。5A層から切り込む。検出レベルはT.P.+0.9m、最下部はT.P.+0.0mを測り、第11層に達する。幅4.2m、深さ0.9m。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は4層に分けられた。層中からは遺物は出土しなかったが、5A~6層からは13世紀代に属する遺物が出土したことから、当該期に機能していた溝と見られる。土質から見て、水が流れていると考えられることから、掘り上げ田に伴う溝の可能性が高い。

### 溝13

3B-1~2で検出した。5A層から切り込む。検出レベルはT.P.+0.9m、最下部はT.P.+0.0mを測り、第11層に達する。幅4.0m、深さ0.9m。断面形は浅い逆台形状を呈する。上部の一部は溝10の削平を受ける。堆積土は4層に分けられた。土質から滯水時にたまたま堆積層と考える。土器は出土しなかったが④から漆器椀が出土した。層位から溝12と同時期に機能していた溝と見られる。

### 溝15

3B-10~11で検出した。5A層から切り込む。検出レベルはT.P.+0.8m、最下部はT.P.+0.3mを測り、第9層に達する。幅1.4m、深さ0.5m。断面形は皿状を呈する。堆積土は単層である。遺物は出土しなかったが、検出層位から13世紀代に機能していた溝と見られる。

### 溝16

3B-17~18で検出した。第3層から切り込む。検出レベルはT.P.+1.3m、最下部はT.P.+0.5mを測り、第6層に達する。南肩は拂土スペース中のため、確認できなかった。幅4.0m以上、深さ130cm。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は3層に分けられた。堆積土②③は滯水時にたまたまものであるが、溝の凹みに周辺河川の氾濫に起因する粗粒砂（①即ち第2層）が流入し、溝は廃絶した。第2層から古代～15世紀前半に属する遺物が出土したことから溝の上限時期は15世紀前半と見られる。①からは他に動物遺体（ウマ、シカ）、中国産磁器等が出土した。なお、この溝は4工区で検出した溝9とつながる（第21図参照）。

### 溝17

3B-19~20で検出した。第3層から切り込む。検出レベルはT.P.+1.3m、最下部はT.P.+0.6mを測り、第11層に達する。南肩は溝14に削平される。幅2.4m以上、深さ160cm。断面形は逆台形を呈する。堆積土は6層に分けられた。堆積土④～⑥は滯水時にたまたまものであるが、溝の凹みに①（第2層）が流入し、溝は廃絶した。溝の上限時期は溝16と同様に15世紀前半と見られる。また、堆積土⑥から柱材が出土している。なお、この溝は4工区で検出した溝5とつながる（第21図参照）。

### 溝18

3B-22~23で検出した。第3層から切り込む。検出レベルはT.P.+1.3m、最下部はT.P.+0.4mを測り、第6層に達する。北肩は溝19に削平される。幅2.6m以上、深さ1.3m。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は3層に分けられた。堆積土②③は滯水時にたまたまものであるが、溝の凹みに①（第2層）が流入し、溝は廃絶した。溝の上限時期は15世紀前半と見られる。また、①から動物遺体が出土した。なお、この溝は4工区で検出した溝11とつながる（第18図参照）。

溝16~18はいずれも第2層の流入により同時期に廃絶したと見られる。しかし、断面形状や堆積状況を見ると、溝17は廃絶するまで長期間滯水していたと考えられ、開削時期に若干の時期差もしくは溝の使用目的に違いがあったと思われる。

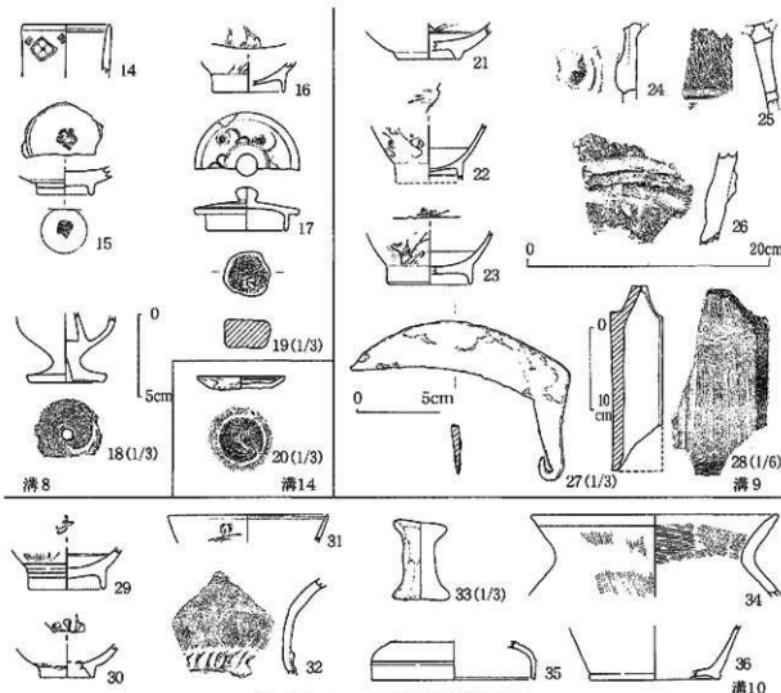
c. 遺物

溝8出土遺物 (第11図14~19、図版57)

14~16、18は国产磁器である。14は染付の筒形碗である。口径7.4cm。15は碗底部である。見込にコンニャク印判の五弁花文、高台内にくずれた「青」文を描く。高台径4.8cm。16は広東碗である。見込に鶯文を描く。釉はやや緑がかる。高台径6.0cm。14~16は肥前系。18は灯火具の乗燭である。内外面に褐色の鉄釉を施す。高台は糸切りで、中央に釘穴がある。高台径4.8cm。17は陶器土瓶もしくは急須の蓋である。中央部が山形に盛り上がり、つまみを持つ。外面に鉄釉と緑色釉で文様を描き浅黄色の釉薬を施す。内面無釉。口径6.8cm。19は瓦を打ち欠いた円板製品である。径2.7cm、厚さ1.6cm、重さ14.6g。

溝9出土遺物 (第11図21~28、図版57・58)

21~23は国产磁器である。21はくらわんか手の染付皿の底部である。見込を蛇目釉ハギし、釉ハギ部分にアルミナを塗布する。内面に二重格子文を描く。染付の発色はオリーブ灰色を呈する。底径5.0cm。22・23は広東碗である。22は見込に波千鳥文、外面に草花文を描く。23は見込に波千鳥文、外面に山水文を描く。高台径7.0cm。いずれも肥前系。他にくらわんか手の碗143・144・148、瀬戸美濃系の碗145、肥前系の碗146・147等がある。24~28は瓦である。24は巴文軒丸瓦である。内面はナ



第11図 3B工区造構出土遺物実測図

て調整する。胎土に白色砂粒と雲母を含み、色調は灰白色を呈する。28は丸瓦である。内面に布目（縦12本/cm、横10本/cm）が残る。25は須恵器高杯の脚部である。外面に波状文を施す。26は円筒埴輪である。焼成がやや不良で断面の色調は黒色を呈する。外面をタテハケ、内面をヨコハケ（8条/cm）調整する。27は鉄製鎌である。全体に錆が付着する。刃部11.4cm。

#### 溝10出土遺物（第11図29～36、図版51・57～59）

29～31は国産磁器である。29は広東碗である。見込にくずれた「寿」文を描く。高台径6.4cm。肥前系。30は青磁碗である。高台内外面は無釉で、見込に菊花文を描く。17世紀前半～中期にかけての肥前系。高台径4.4cm。31は碗の口縁部である。口径13.2cm。35・36は須恵器である。35は杯蓋である。稜線は凹線状に退化する。胎土に黑色砂粒を多量に含む。口径13.4cm。36は杯の底部である。内面は火ぶくれする。高台径10.6cm。34は土師器底である。内面口縁部をヨコハケ（9条/cm）、外面を同一原体のタテハケを施す。口径20.2cm。在地産。他に甌の破片149～151等がある。いずれも在地産。32は弥生土器広口壺の頸部である。畿内第Ⅲ様式に属する。境内に工具による刻目凸帯を施す。胎土に白色砂粒とクサリ礫を含み、色調は橙色を呈する。他地域産。弥生土器は他に鉢の口縁部152・153、高杯脚154がある。いずれも在地産。33は用途不明土製品である。手づくねで、瓦質に焼かれる。支脚か。径3.5cm、器高4.9cm、重さ39.5g。155は繩文土器深鉢の底部である。内外面ともケズリを施す。在地産。

#### 溝14出土遺物（第11図20、図版51）

20は土師器灯火皿である。鉛による透明釉を施す。口径5.4cm。完形。

#### 溝16出土遺物（図版59）

細片であるため、図版に掲げる。和泉型瓦器柾の口縁部156・157、底部158～161、轍羽口162、土師器羽釜口縁部163等がある。

#### 溝17出土遺物（図版59）

細片であるため、図版に掲げる。和泉型瓦器柾の口縁部164、土師器鍥上皿165、羽釜口縁部167、須恵器壺底部166等がある。

#### 溝18出土遺物（図版59）

細片であるため、図版に掲げる。大和型瓦器柾の口縁部168・169、和泉型瓦器柾の口縁部170・171、底部172・173、須恵器捏鉢174等がある。

#### 第2層出土遺物（第12図44・45、図版60）

44・45は土師器小皿である。内外面ともヨコナデで仕上げる。44は胎土に微細な雲母とクサリ礫を含み、色調は灰白色を呈する。口径9.6cm。45は胎土に微細な雲母とクサリ礫と黑色砂粒を含み、色調はにぶい黄橙色を呈する。口径10.0cm。他に口縁部175～177がある。

#### 第5層出土遺物（第12図46、図版60）

46は和泉型瓦器柾である。内面に粗いヘラミガキを施す。外面はヨコナデの下にユビオサエが残る。口径14.7cm。他に土師器皿178がある。

#### 第6層出土遺物（第12図37～43、図版60）

38～42は須恵器である。38・39は杯蓋である。38は口径11.6cm。39の稜は退化する。口径13.6cm。40は杯の口縁部で、口径8.0cm。41・42は杯身である。41は立ち上がりの形状からみて、5世紀後半に属すと思われる。42は胎土に白色砂粒を多量に含み、色調は灰色を呈する。口径10.0cm。43は土師器小皿である。胎土に微細な雲母を多量に含み、色調は黄橙色を呈する。口径7.8cm。他に土師器杯179がある。内面に放射状暗文を施す。37は砥石である。使用面は2面で、裏面は原面を残す。全

長9.5cm。

第7層出土遺物（第12図47、図版60）

47は土師器長胴形の羽釜である。鋤の形状からみて、古墳時代に属すと思われる。内面口縁部をヨコハケ（6条/cm）し、外面体部を同一原体のタテハケを施す。口径24.0cm。鋤径33.2cm。在地産。

第8層出土遺物（第12図48、図版60）

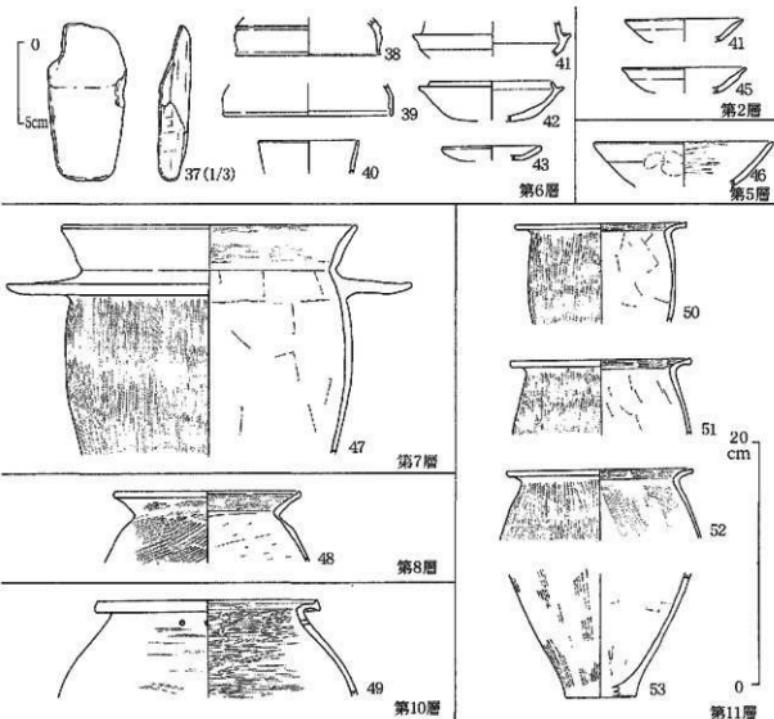
48は庄内式甕である。内面口縁部をヨコハケ（7条/cm）、外面を同一原体でタテハケ後タキ（7条/cm）を施す。口径15.2cm。

第10層出土遺物（第12図49、図版61）

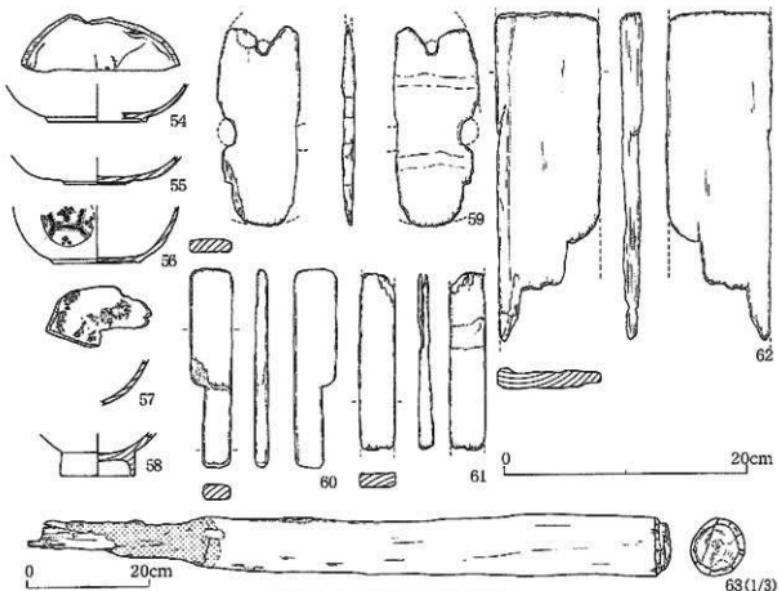
49は弥生土器無頸甕である。畿内Ⅲ様式に属する。内外面にヘラミガキを施し、頭部に2孔の紐穴を穿つ。口径18.0cm。在地産。

第11層出土遺物（第12図50～53、図版61）

50～53は弥生土器甕である。いずれも畿内第Ⅱ様式に属し、他地域産である。50の胸部はふくらまない。内面口縁部、外面に粗いハケメ（4条/cm）、内面体部を工具によるナデを施す。外面に煤付着。口径14.0cm。51は胸部がややふくらむ。内面口縁部、外面に粗いハケメ（4条/cm）、内面体部



第12図 3B工区各層出土遺物実測図



第13図 3工区出土木製品実測図

を工具によるナデを施す。外面に煤付着。口径14.6cm。52は側部が球形になり、口縫端部がつまみあげられる。内面口縫部、外面に粗いハケメ(4条/cm)、内面体部に別原体のハケメ(8条/cm)を施す。外面に煤付着。口径15.2cm。53は外面に粗いハケメ(4条/cm)、内面に工具によるナデを施す。底径5.1cm。他に蓋体部180・181がある。180は横ハケ、181は廉状文を施す。いずれも在地産。

#### 木製品(第13図54・57・63、図版52~54)

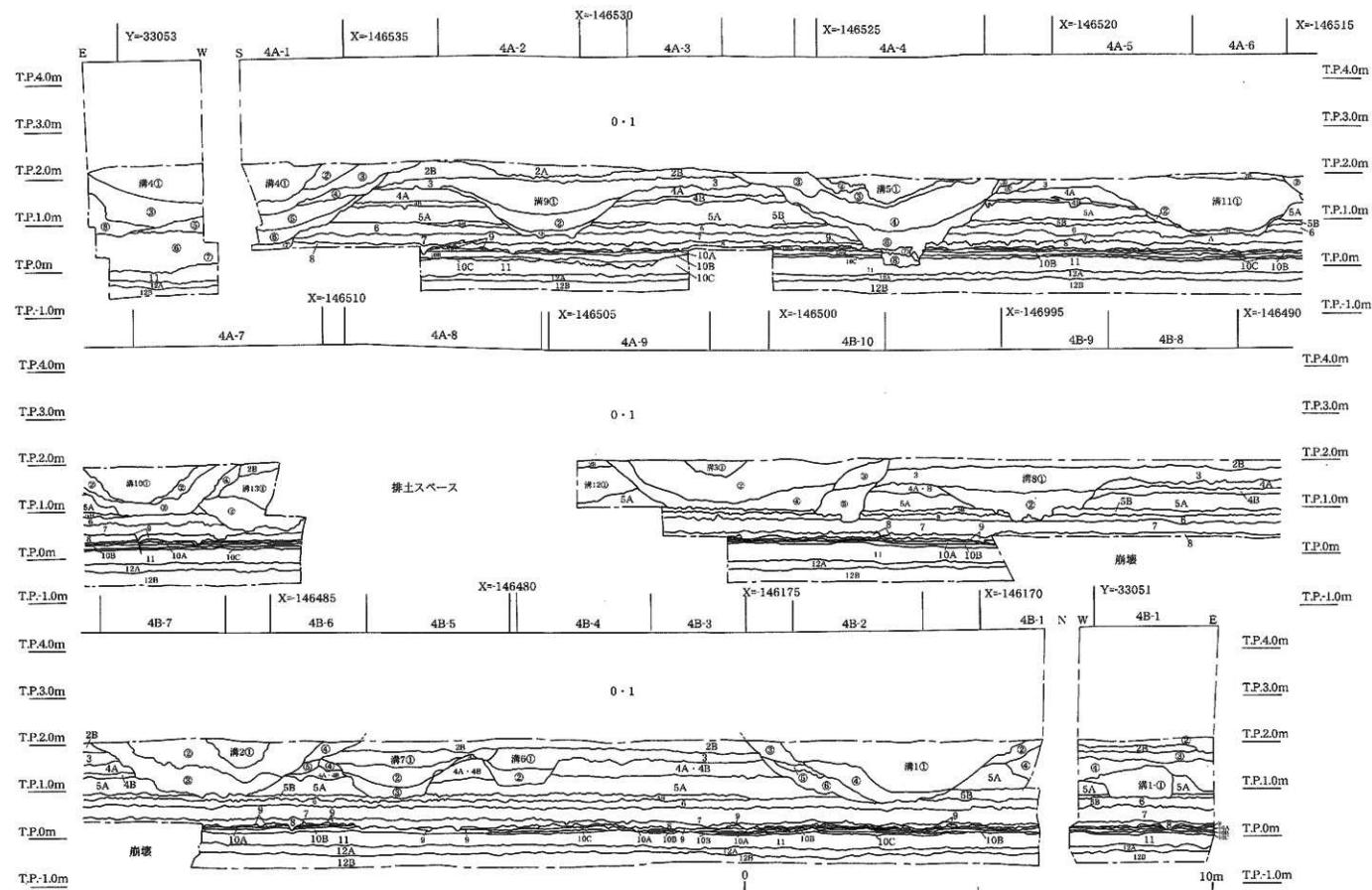
54・57は漆器椀である。54は内外面とも黒色漆を施す。見込に草文を描く。高台径8.0cm。溝13出土。57は内外面とも黒色漆を施し、内面に菊花文をスタンプで押す。溝16出土。63は柱材である。一端は被熱で炭化し、欠損する。芯持材の円周面を鉋で削り、一端は削り込んでD形に凹めた部分を残し、上部を斧状の工具ではつる。残存長104.7cm、径9.0cm。材はマツ科。溝17出土。

#### d. 小結

1. 第1層上面において江戸時代後半から明治時代後半までの掘り上げ田に伴う東西方向の井路など、6条の溝—溝8~11・14・19・20—を検出した。溝内からは国産陶磁器片とともに瓦・土師器・須恵器・弥生土器・繩文土器・鉄製品・木製品など原始から近代に亘る遺物が出土した。
2. 第3層上面で耕作に伴う室町時代後半(15世紀前半まで)の東西方向の溝を3条—溝16・17・18—検出した。溝内からは瓦器椀、漆器椀・柱材・動物遺体・輸入磁器・土師器など古代から中世に亘る遺物が出土した。
3. 第5A層上面で耕作に伴う鎌倉時代(13世紀代)耕作に伴う東西方向の溝を3条—溝12・13・15—検出した。遺物は少なく漆器椀、瓦器椀などが出土したのみであった。
4. 第10・11層は弥生時代中期以前の遺物包含層で壺・甕などが出土したが極めて少ない。

## 4工区土色・質一覧

- 2 A 嗜青灰色(5BG4/1)細混じりシルト質粘土  
 2 B 灰色(7.5Y4/1)混泥じりシルト  
 3 灰色(10Y4/1)シルト質粘土と細粒砂～細礫の互層  
 4 A 灰色(7.5Y4/1)粘土  
 4 B オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルトとオリーブ灰色(7.5Y3/1)シルト質粘土の互層  
 5 A 灰色(5Y4/1)粘土  
 5 B 灰色(7.5Y4/1)粘土  
 6 略オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土  
 7 略オリーブ灰色(5GY4/1)粘土  
 8 上位 緑灰色(5G4/1)シルト質粘土、下位 嗜青灰色(10BG3/1)粘土  
 9 黒色(7.5Y2/1)粘土  
 10 A 略オリーブ灰色(5GY4/1)粘土  
 10 B オリーブ黒色(10Y3/1)粘土  
 10 C オリーブ黒色(7.5Y2/2)粘土  
 11 黑色(7.5Y2/1)粘土  
 12 A 灰色(10Y5/1)粘土  
 12 B 灰色(7.5Y5/1)粘土  
 ・溝1  
 ① オリーブ黑色(7.5Y3/2) 糙～細粒砂とオリーブ灰色(2.5GY5/1)シルト質粘土がブロック状に混じる  
 ② 灰色(10Y4/1)粘土、粘性強  
 ③ 嗜青灰色(7.5GY4/1)細混じり粘土(3mm以下)  
 ④ 略オリーブ色(7.5Y4/2)細粒砂～細粒砂と灰オリーブ色(5Y4/2)シルトの互層、流本含む  
 ⑤ 灰色(10Y4/1)細混じり粘土と灰色(7.5Y4/1)細砂～細粒砂が混じる  
 ⑥ 灰色(7.5Y4/1)細混じり粘土(5mm以下)、水分含有量多、炭化物含む  
 ・溝2  
 ① 嗜青灰色(7.5GY4/1)細混じりシルト質粘土(3mm以下)、黑色(7.5Y2/1)粘土のブロックが少量混じる  
 ② 略オリーブ灰色(2.5GY4/1)細混じり粘土(5mm以下)、マンガノ既存有り  
 ③ 略オリーブ灰色(2.5GY3/1)細混じり粘土(2mm以下)  
 ④ 灰色(7.5Y4/1)粘土、粘性強、上位に繊維とマンガノ既存が混じる  
 ⑤ 灰色(10Y4/1)粘土、水分含有量多、植物の根の痕跡有り  
 ・溝3  
 ① オリーブ黑色(7.5Y3/2) 糙～細粒砂とオリーブ灰色(2.5GY5/1)シルト質粘土がブロック状に混じる  
 ② 青灰色(10BG6/1)粘土  
 ③ 青灰色(5BG6/1)細混じり粘土  
 ④ 略オリーブ灰色(2.5GY4/1)細混じり粘土(3mm以下)  
 ⑤ 嗜青灰色(7.5GY4/1)シルトと灰色(N6/1)粘土の互層  
 ・溝4  
 ① 嗜青灰色(7.5GY4/1)細混じりシルト質粘土(3mm以下)、黑色(7.5Y2/1)粘土のブロックが少量混じる  
 ② オリーブ黑色(10Y3/1)細混じり粘土、マンガノ既存有り  
 ③ 灰色(10Y4/1)粘土と灰色(5Y5/1)細粒砂がブロック状に混じる  
 ④ 灰色(7.5Y4/1)細粒砂～細粒砂と灰色(5Y5/1)シルトの互層  
 ⑤ 灰オリーブ色(7.5Y4/2)細粒砂と灰色(5Y5/1)シルトの互層  
 ⑥ オリーブ黒色(10Y3/1)粘土  
 ⑦ 灰色(7.5Y5/1)粘土、植物遺体を少額含む  
 ・溝5  
 ① 緑灰色(10GY4/1)細混じり粘土、上位にマンガノ既存有り  
 ② 略オリーブ灰色(2.5GY3/1)細混じり粘土  
 ③ オリーブ黑色(5Y3/1)粘土、粘性強  
 ④ 灰色(10Y4/2)細砂～細粒砂とシルトの互層  
 ⑤ 嗜青灰色(7.5GY4/1)粘土、粘性強  
 ⑥ 略オリーブ灰色(5GY3/1)細混じり粘土、植物遺体を少額含む  
 ⑦ 灰色(10Y5/1)粘土、中粒砂がブロック状に混じる  
 ⑧ オリーブ灰色(5GY3/2)粘土、粘性強  
 ・溝6  
 ① 灰色(7.5Y4/1)細粒砂～礫(5mm以下)  
 ② オリーブ黒色(5Y3/1)シルトと灰色(5Y4/1)細粒砂の互層、自然木などの植物遺体を含む  
 ③ 灰色(5Y4/1)シルト～細粒砂の互層、植物遺体を多量に含む  
 ④ 灰色(7.5Y4/1)シルト質粘土  
 ⑤ オリーブ黒色(5Y3/2)粘土、粘性強  
 ・溝7  
 ① 灰色(5Y4/1)細粒砂～礫(5mm以下)  
 ② オリーブ黒色(5Y3/1)シルトと灰色(5Y4/1)細粒砂の互層、自然木などの植物遺体を含む  
 ③ 灰色(5Y4/1)シルト～細粒砂の互層、植物遺体を多量に含む  
 ④ 灰色(7.5Y4/1)シルト質粘土  
 ⑤ オリーブ黒色(5Y3/2)粘土、粘性強  
 ・溝8  
 ① 灰色(10Y4/1)細粒砂～礫(0.5～1.0cm)、肩口灰色(5Y4/1)シルトと灰白色(5Y7/2)細粒砂が混じる  
 ② 灰色(5Y4/1)シルト、中層で灰色(10Y5/1)細粒砂がレンズ状に堆積する  
 ・溝9  
 ① 灰白色(7.5Y8/2)細粒砂～礫(0.5～1.0cm)、肩口灰色(5Y4/1)シルトと灰白色(5Y7/2)細粒砂が混じる  
 ② オリーブ黒色(5Y3/2)シルトと灰オリーブ色(5Y4/2)細粒砂の互層  
 ③ オリーブ黒色(7.5Y3/2)シルト質粘土  
 ・溝10  
 ① オリーブ黒色(7.5Y3/2) 糙～細粒砂とオリーブ黒色(2.5GY5/1)シルト質粘土がブロック状に混じる  
 ② 灰色(7.5Y4/1)細混じり粘土(5～8mm)  
 ③ 緑灰色(10GY4/1)細混じり粘土(5mm以下の既多見)、植物遺体を多量に含む  
 ④ 緑灰色(10GY5/1)粘土混じり砂質粘土  
 ・溝11  
 ① 灰色(7.5Y5/1)シルト、植物遺体を含む、細粒砂～礫の互層  
 ② オリーブ黒色(7.5Y3/2)粘土  
 ③ 略オリーブ灰色(5GY4/1)粘土  
 ・溝12  
 ① 灰色(10Y5/1)細粒砂～細粒砂と灰色(10Y4/1)シルトの互層  
 ② 灰色(7.5Y7/1)粘土～細粒砂の互層  
 ③ 灰オリーブ色(5Y4/2)細混じり粘土、粘性弱、炭化物・植物遺体を多量に含む



第14圖 4工区北·西·南壁断面圖

## 5. 4工区

### a. 層序

今回の調査で確認した土層は以下のとおりである。現地表面のレベルはT.P.+4.5m前後である。なお、2A層までは機械掘削で除去した。

第0層 道路舗装および盛土。

第1層 1A層 緑灰色細砂混じり粘土。

1B層 黄褐色礫混じり粘土。

第2層 2A層 暗青灰色シルト質粘土。0.2cm大の礫を少量含む。層厚約0.3m。

2B層 灰色礫混じり粘土。炭を少量含む。部分的にマンガンを多量に含む。層厚50cm。層中から土師器・須恵器・瓦器等が少量出土した。中世の耕作土と考えられる。上面のレベルはT.P.+2.1m前後である。

第3層 灰色シルト質粘土と細粒砂～細礫の互層。層厚約0.2m。河川の氾濫に起因する砂層で、中世期の溝の凹みに流入し、溝を廃絶させた。上位は擾拌され耕化する。廃棄した土師器・瓦器片や動物遺体等が少量出土した。上面のレベルはT.P.+1.8m前後である。

第4層 4A層 灰色粘土。層厚0.2～0.3m。中世の溝の構築面にあたる。

4B層 オリーブ黒色シルトとオリーブ灰色シルト質粘土の互層。植物遺体を少量含む。層厚約10cm。

第5層 5A層 灰色粘土。炭・植物遺体（堅果・ヒシの実か）を少量含む。層厚0.3m。上面のレベルはT.P.+1.3m前後である。

5B層 灰色粘土。炭・植物遺体（堅果・ヒシの実か）を少量含む。部分的に見られた。層中からは土師器・瓦器・漆器などが少量出土した。

第6層 暗オリーブ灰色粘土。炭・マンガンが少量混じる。植物の根の痕跡あり。層厚0.3m。上面のレベルはT.P.+1.0m前後である。

第7層 暗オリーブ灰色粘土。植物の根の痕跡あり。層厚20cm。

第8層 暗緑灰色シルト質粘土（上位）、暗青灰色粘土（下位）に分けられる。層厚0.1～0.2m。不安定な堆積。層中からは古墳時代の土師器・須恵器が少量出土した。

第9層 黒色粘土。ヨシ等の植物遺体を多量に含み、腐植土状を呈す不安定な堆積。層厚約0.05m。上面のレベルはT.P.+0.4m前後である。

第10層 3層に分けられ、どの層にも細かいラミナが見られる。水分含有量は下位ほど多くなる。

10A層 暗オリーブ灰色（5G Y4/1）粘土。層厚約0.05m。

10B層 オリーブ黒色（10Y3/1）粘土。層厚約0.1m。

10C層 オリーブ黒色（7.5Y2/2）粘土。部分的に確認した。層厚0.05m。

第11層 黒色粘土。粘性が強い。ヨシ等の植物遺体が腐り、腐葉土化したものである。層中からは弥生時代中期（畿内第Ⅱ様式）に属する土器片が少量出土した。層厚0.3～0.4m。上面のレベルはT.P.+0.1m前後である。

第12層 2層に分けられる。いずれもヨシ等の植物遺体を多量に含む。上面のレベルはT.P.-0.2m前後である。無遺物層。

12A層 灰色（10Y5/1）粘土。第11層の巻き上げがみられる。層厚約0.2m。

12B層 灰色（7.5Y5/1）粘土。水分含有量がA層より多い。層厚0.3m以上。下位になるほどオリーブ灰色（10Y4/2）シルトがドット状に含まれるようになる。

### b. 遺構

遺構名については、個々の性格・機能は問わず、形状から判断して付した。

#### 近世以降

東西方向の掘り上げ田に伴う井路を6条検出した。

#### 溝1

4B-1～3で検出した。検出レベルはT.P.+2.1m、最下部はT.P.+0.8mを測り、5B層に達する。掘り込み面は機械掘削で除去した層から続く可能性があり、確定できない。幅6.0m、深さ1.3m。断面形は逆台形を呈する。両肩口に杭列が一部残っていた。堆積土は6層に分けられた。①は廃絶時の埋土、②③は潜水時にたまたま堆積層、④～⑥は中世期の河川の氾濫に起因する粗粒砂(第3層)を掘り返した層と考える。埋土①からは18～19世紀代に属する遺物や貝遺体(牡蠣・バイ貝等)が出土した。よって当該期に機能していた掘り上げ田に伴う井路と考える。また、磨耗した中世の土師器・瓦器、須恵器、瓦等が出土したが第3層の遺物を巻き込んだために混入したと考えられる。

#### 溝2

4B-6～8で検出した。検出レベルはT.P.+2.2m、最下部はT.P.+0.9mを測り、5B層に達する。掘り込み面は機械掘削で除去した層から続く可能性があり、確定できない。幅5.6m、深さ1.3m。断面形は浅い皿状を呈する。両肩口に杭列が一部残っていた。堆積土は5層に分けられた。①は廃絶時の埋土、②③は潜水時にたまたま堆積層、④⑤は清開削時の堆積層と考える。埋土①からは近世以降の遺物や貝遺体(牡蠣・バイ貝等)が出土した。当該期に機能していた掘り上げ田に伴う井路と考える。堆積土②から磨耗した中世の土師器・瓦器、須恵器、瓦等の遺物が出土したが第3層の遺物を巻き込んだために混入したと考えられる。また、③から動物遺体(ウシ)が出土した。

#### 溝3

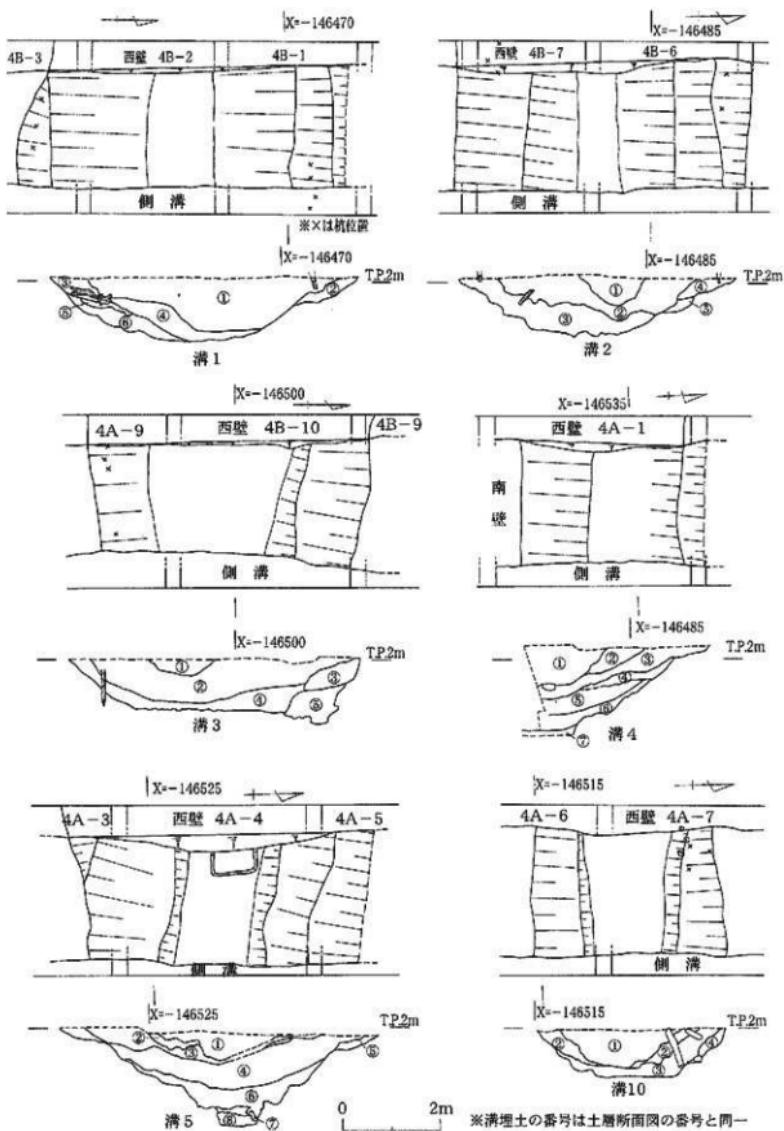
4B-10、4A-9で検出した。検出レベルはT.P.+2.0m、最下部はT.P.+0.7mを測り、第7層に達する。南肩口に杭列が一部残っていた。掘り込み面は機械掘削で除去した層から続く可能性があり、確定できない。幅6.0m、深さ1.1m。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は5層に分けられた。①は廃絶時の埋土、②～④は潜水時にたまたま堆積層、⑤は清開削時の堆積層と考える。①～④からは18～19世紀代に属する遺物や動物遺体(ウシ)、貝遺体(牡蠣)等が出土した。当該期に機能していたと掘り上げ田に伴う井路と考える。また、磨耗した中世の土師器・瓦器、須恵器、瓦等の遺物が出土したが第3層の遺物を巻き込んだために混入したと考えられる。

#### 溝4

4A-1・2で検出した。南肩は調査区外へ延びるために不明である。検出レベルはT.P.+2.3m、最下部はT.P.±0.0mを測り、第11層に達する。掘り込み面は機械掘削で除去した層から続く可能性があり、確定できない。幅3.8m以上、深さ1.3m。断面形は逆台形形状を呈する。堆積土は7層に分けられた。①は廃絶時の埋土、②～④は潜水時にたまたま堆積層、⑤～⑦は中世期の溝の堆積層と考える。⑤は河川の氾濫に起因する粗粒砂(第3層)である。第3層からは古代～15世紀前半に属する遺物が出土したことから、中世期の溝を掘り返してつくられた掘り上げ田に伴う井路と考える。①～④から18～19世紀代に属する遺物や動物遺体(ウマ)、貝遺体(牡蠣)等が出土したことから、溝は18～19世紀前半に機能していたと考える。なお、この溝は170号線を挟んで調査した3工区で検出した溝8とつながる(第21図参照)。

#### 溝5

4A-3～5で検出した。検出レベルはT.P.+2.0m、最下部はT.P.±0.0mを測り、第11層に達する。



第15図 4工区検出遭構実測図(1)

掘り込み面は機械掘削で除去した層から続く可能性があり、確定できない。幅6.6m、深さ1.6~2.0m。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は8層に分けられた。①②は廃絶時の埋土、③⑤は滯水時にたまつた堆積層、④、⑥~⑧は中世期の溝の堆積層と考える。④は第3層である。よって、この溝は中世期の溝を掘り返してつくられた掘り上げ田に伴う井路と考える。なお、この溝は3工区で検出した溝14、下層の中世期の溝は同溝17とそれつながる（第20図参照）。①から動物遺体（ウマ）、④から動物遺体（ウシ）が出土した。

#### 溝10

4A-6・7で検出した。検出レベルはT.P.+2.0m、最下部はT.P.+1.0mを測り、第6層に達する。掘り込み面は機械掘削で除去した層から続く可能性があり、確定できない。北肩に杭列と敷石が一部残っていた。幅3.8m、深さ1.0m。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は4層に分けられた。①は廃絶時の埋土、②~④は滯水時にたまつた堆積層と考える。掘り上げ田に伴う井路と考える。層位から、他の溝と同時期に機能していた溝とみられる。なお、この溝は3工区で検出した溝19とつながる（第21図参照）。

#### 中世

東西方向の溝を7条検出した。

#### 溝6

4B-4・5で検出した。4A層から切り込む。検出レベルはT.P.+1.8m、最下部はT.P.+1.1mを測り、5A層に達する。幅2.1m、深さ0.8m。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は2層に分けられた。溝の凹みに、周辺河川の氾濫に起因する粗粒砂（①、即ち第3層）が流入し、溝は廃絶した。第3層からは古代~15世紀前半に属す遺物が出土したことから、溝の上限時期は15世紀前半と見られる。また、他に①から動物遺体（ウマ）、宋錢「天聖元寶」（1023年初鋤）が1枚出土した。

#### 溝7

4B-5・6で検出した。4A層から切り込む。検出レベルはT.P.+1.6m、最下部はT.P.+0.9mを測り、5B層に達する。南肩は溝2に削平される。幅3.2m、深さ1.0m。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は5層に分けられた。溝の凹みに第3層が流入し、溝は廃絶した。第3層からは古代~15世紀前半に属す遺物が出土したことから、溝の上限時期は15世紀前半と見られる。また、他に、下駄や薄板等の木製品が出土した。

#### 溝8

4B-8・9で検出した。4A層から切り込む。検出レベルはT.P.+1.6m、最下部はT.P.+0.7mを測り第6層に達する。幅3.6m、深さ1.1m。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は2層に分けられた。②の堆積時の溝の凹みに①（第3層）が流入し、溝は廃絶した。第3層からは古代~15世紀前半に属す遺物が出土したことから、溝の上限時期は15世紀前半と見られる。また、他に①から動物遺体（ウマ他）が、②から蘊衍の部材が出土した。なお、この溝は3工区で検出した溝3とつながる（第21図参照）。

#### 溝9

4A-2・3で検出した。4A層から切り込む。検出レベルはT.P.+1.6m、最下部はT.P.+0.7mを測り、第7層に達する。幅4.4m、深さ1.1m。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は3層に分けられた。溝の凹みに第3層が流入し、溝は廃絶した。第3層からは古代~15世紀前半に属す遺物が出土したことから、溝の上限時期は15世紀前半と見られる。また、他に①から動物遺体（ウマ）、③から動物遺体（ウマもしくはウシ）が出土した。なお、この溝は3工区で検出した溝16とつながる（第21図参照）。

#### 溝11

4A-5・6で検出した。4A層から切り込む。検出レベルはT.P.+1.6m、最下部はT.P.+0.6mを測り、第7層に達する。北肩を溝10に削平される。幅5.5m以上、深さ1.2m。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は3層に分けられた。溝の凹みに①(第3層)が流入し、溝は廃絶した。第3層からは古代～15世紀前半に属す遺物が出土したことから、溝の上限時期は15世紀前半と見られる。また、他に①から動物遺体(ウシ)が出土した。なお、この溝は3工区で検出した溝18とつながる(第21図参照)。

#### 溝12

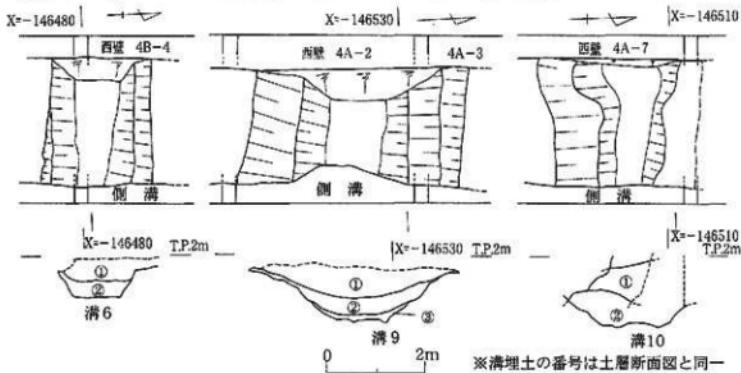
4A-9で確認した。北肩を溝3に削平され、南肩は排土スペース中のため確認できなかった。切込み面は不明である。検出レベルはT.P.+1.9m、最下部は確認できなかった。堆積土は2層に分けられた。溝の凹みに①(第3層)が流入し、溝は廃絶した。第3層からは古代～15世紀前半に属す遺物が出土したことから、溝の上限時期は15世紀前半と見られる。また、他に①から動物遺体(ネズミ)が出土した。

#### 溝13

4A-7・8で検出した。南肩を溝10に削平され、北肩は排土スペース中のため確認できなかった。切込み面は不明である。検出レベルはT.P.+1.6m、最下部はT.P.+0.5mを測り、第7層に達する。堆積土は2層に分けられた。溝の凹みに①(第3層)が流入し、溝は廃絶した。第3層からは古代～15世紀前半に属す遺物が出土したことから、溝の上限時期は15世紀前半と見られる。また、他に①から動物遺体(ウマ)が出土した。

溝12・13は排土スペースを挟んで検出したが、出土遺物や堆積状況が同様であり、同一造構の可能性が高い。そう捉えるならば3工区で検出した溝5につながると思われる。

中世期の溝はいずれも周辺河川の氾濫に起因する粗粒砂(第3層)の流入により、同時期に廃絶した。断面形状や堆積状況を見ると、溝9と溝11、溝7と溝8がそれぞれ類似している。溝6は開削間もなく一気に埋没した状況が推測された。類似するそれぞれの溝は使用目的や機能期間が一致すると見られる。しかし他の溝と比較すると同一面で検出したが、開削時期や使用目的に差異があったと考えられる。また、掘り上げ田に伴う井路の溝4・5の下層で見られた中世期の溝も第3層の流入により廃絶したと見られるが、堆積状況を比較すると、他の溝より長期間滞水していたと考えられる。



第16図 4工区検出造構実測図(2)

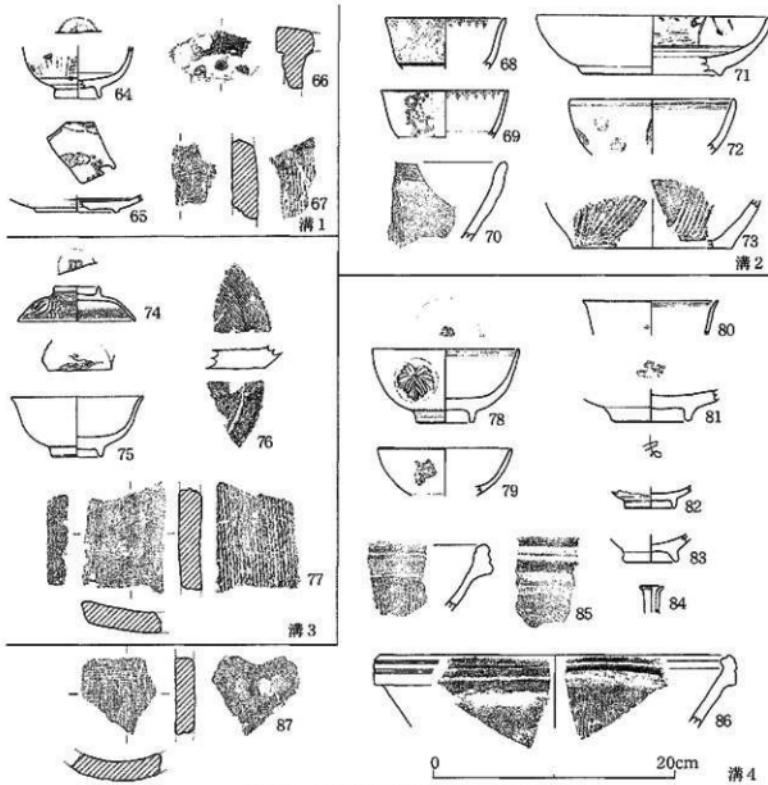
c. 遺物

溝1出土遺物 (第17図64~67、図版61・62)

64・65は国産磁器である。64は染付碗である。コバルトによって文様を描く。高台径3.9cm。瀬戸美濃系。65は染付皿である。染付圖線を呉須、他をコバルトによって描く。見込はくずれた松竹梅文。高台は釉ハギする。高台径6.8cm。肥前系。66・67は瓦である。66は巴文軒丸瓦である。胎土に白色・黒色砂粒を含み、色調は灰色を呈する。67は平瓦である。外面は縄目タタキ (4条/cm)、内面は布目 (縦・横7本/cm) が残る。他に京焼風陶器碗182、瓦質三足羽釜の脚部185がある。182の釉色は鈍い橙色を呈する。

溝2出土遺物 (第17図68~73、図版61・62)

68~69、71~72は国産磁器である。68~69は銅判転写による染付碗である。68は白ヌキで紅葉、染付で菊を描く。口径10.0cm。69は口径10.5cm。71はくらわんか手の染付皿である。見込を蛇目輪ハギし、アルミナを塗布する。口径19.2cm。72はくらわんか手の碗である。丸文を描く。口径13.4cm。



第17図 4工区遺構出土遺物実測図 (1)

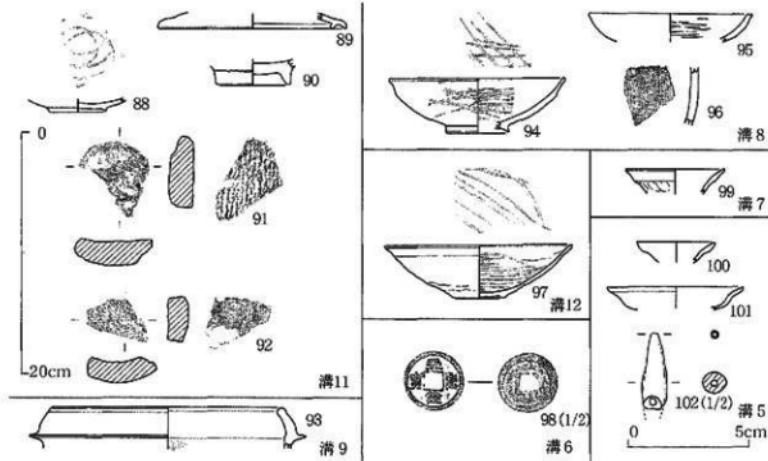
他に草木文を描いた碗183、瓶184がある。いずれも肥前系。70・73は大和型瓦器擂鉢である。70は擂目(4条/cm)が入る。胎土に白色・黒色砂粒を含み、色調は灰色を呈する。73は擂目(8条/3.0cm)が入る。外面はタテハケ(4条/cm)を施す。

溝3出土遺物(第17図74~77、図版62・63)

74・75は国産磁器である。74は染付碗蓋である。つまみ内面にくずれた「青」文を描く。口径9.7cm。75はくらわんか手の白磁の端反碗である。見込を蛇目釉ハギし、アルミナを塗布した上に離れ砂が付着する。高台は蛇目凹高台で、疊付部分に離れ砂が付着する。口径10.9cm。他にくらわんか手の碗186がある。コンニャク印判で文様を施す。76は備前焼擂鉢の底部である。3~4条/cmの擂目がつけられ、色調は赤褐色を呈する。77は平瓦である。外面は縄目タタキ(4条/cm)、内面は布目(縦横7本/cm)が残る。

溝4出土遺物(第17図78~87、図版62・63)

78~82は国産磁器である。78・79・81はくらわんか手の染付碗・皿である。いずれもコンニャク印判で文様を施す。78は見込に五弁花文、外面に薦葉文を施す。口径12.2cm。79は桐葉文を施す。口径11.0cm。81は皿の底部で、見込に五弁花文を施す。見込を蛇目釉ハギした上に離れ砂が付着する。高台内にくずれた「青」文を描く。疊付部分に離れ砂が付着する。高台径6.0cm。80は端反碗の口縁部で、端部の釉が一部剥がれている。口径11.0cm。82は碗の底部で、高台内に染付圓線を1条描く。高台は蛇目凹高台である。高台径10.9cm。肥前系。84は小瓶である。釉はオリーブ灰色を呈する。口径1.8cm、肥前系。83は京焼風陶器碗である。内外面に灰釉を施す。釉は淡黄色を呈し、全体に細かな貫入が見られる。高台径4.6cm。85・86は備前焼擂鉢である。85は4条/cmの擂目が口縁部直下まで密につけられ、色調は赤褐色を呈する。86は口縁部内面に1条、外面に2条の沈線を棒状の工具でつける。4条/cm以上の擂目がつけられ、色調はにぶい赤褐色を呈する。口径26.8cm。87は丸瓦である。外面はナデ調整し、内面に布目(縦10本/cm、横5本/cm)が残る。焼成はやや不良で色調はにぶい黄橙色を呈する。



第18図 4工区遺構出土遺物実測図(2)

溝5出土遺物(第18図100~102、図版63)

100・101は土師器皿、いわゆるへそ皿で、いずれも摩滅している。100は小皿である。胎土に微細な雲母と黒色砂粒を含み、色調はにぶい黄橙色を呈する。口径6.4cm。101は中皿である。胎土に微細な雲母を含み、色調は淡黄橙色を呈する。口径11.0cm。102は漁網用土錐である。1/2残存する。残存長3.1cm、最大幅1.0cm。他に大和型瓦器碗189~191、瓦質羽釜三足の脚部188等がある。

溝6出土遺物(第18図98、図版51~63)

98は銭貨「天慶元寶」(初鑄1023年、中国)である。文字は隸書である。他に土師器皿192~193、大和型瓦器碗194~195等がある。

溝7出土遺物(第18図99、図版51~63)

99は土師器皿、いわゆるへそ皿の小皿である。ナデの下にユビオサエが残る。胎土に微細なクサリ穂を含み、色調は灰白色を呈する。口径8.2cm。他に和泉型瓦器碗197~198等がある。

溝8出土遺物(第18図94~96、図版64)

94~95は瓦器碗である。94は和泉型碗である。見込に斜格子状暗文を施した後に体部をヘラミガキする。断面三角形の高台を持つ。口径14.4cm、高台径5.0cm。95は大和型碗である。口径13.4cm。96は縦式系土器甕の体部片である。外面に繩文タタキを施す。色調は赤灰色を呈する。他に土師器羽釜鉢199、蘋柄(114)、脚(115)等がある。

溝9出土遺物(第18図93、図版64)

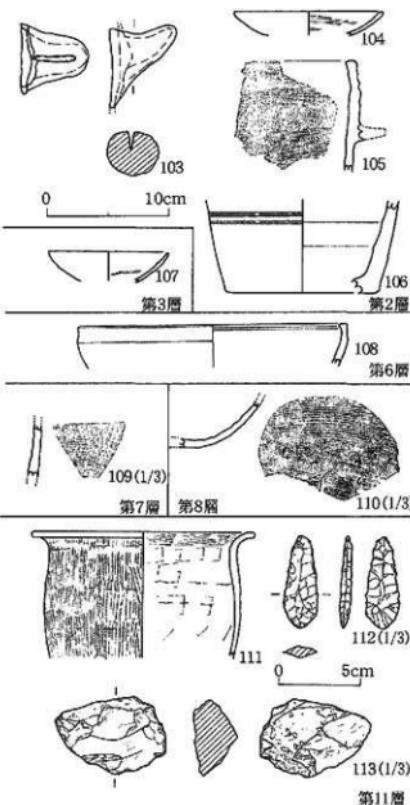
93は土師器羽釜である。胎土に微細な長石・チャートを含み、色調は灰黄色を呈する。鉢下は煤ける。口径18.8cm。他に中国産白磁200等がある。200の口縁部は外反し、端部に平坦面を持つ。

溝11出土遺物(第18図88~92、図版64)

88は大和型瓦器碗である。はりつけ高台の接合部分は粗雑である。高台径4.7cm。他に羽釜202~203がある。90は中国製白磁碗である。釉は灰白色を呈する。高台は削り出しで、無輪。高台径5.6cm。89は須恵器杯蓋である。胎土に長石を含み、色調は灰色を呈する。口径15.4cm。91~92は瓦である。91は平瓦で、外面は繩目タタキ(3条/cm)、内面は布目(縦7本/cm、横5本/cm)が残る。焼成はやや不良で色調は黄灰色を呈する。92は丸瓦で、外面はナデ調整し、内面は布目(縦7本/cm、横5本/cm)が残る。

溝12出土遺物(第18図97、図版51~65)

97は和泉型瓦器碗である。1/3残存する。全体的に粗雑な作りで、外面には粘土巻き上げ痕が残る。



第19図 4工区各層出土遺物実測図

口径15.4cm、高台径3.8cm。他に大和型瓦器椀204～206、土師器羽釜207、須恵器壺208等がある。208は外面に自然釉が掛かり緑灰色を呈する。

#### 溝13出土遺物（図版65）

細片であるため、図版に掲げる。大和型瓦器椀210・211、瓦器羽釜212、土師器羽釜213・214等がある。

#### 第2層出土遺物（第19図103～106、図版65）

104・105は瓦器である。104は和泉型椀である。全体的に摩滅しているが、内面にヘラミガキが残る。口径12.0cm。105は羽釜である。锷は欠損する。内面にタテハケ（7条/cm）、外面に3条の沈線を施す。15世紀代。106は蓋もしくは須恵器鉢の底部である。外面に2条の沈線を施す。底径12.6cm、束縛系。103は土師器甌もしくは瓶の把手である。上面に切込みを施す。胎土に微細な長石・雲母・クサリ礫を含み、色調は灰白色を呈する。古墳時代。

#### 第3層出土遺物（第19図107、図版65）

107は和泉型瓦器椀である。口径9.8cm。層中からは他に、11～15世紀前半に属す土師器、13～14世紀代に属す瓦器椀、瓦器三足羽釜の脚部、中国製磁器などが細片で出土した。

#### 第6層出土遺物（第19図108、図版66）

108は土師器鉄鉢型の鉢Bである。（奈良国文化財研究所『平城京跡発掘調査報告VII』に準拠）摩滅がはげしいが、口縁部にわずかにヘラミガキが残る。胎土に微細な長石・雲母・クサリ礫を含み、色調はにぶい橙色を呈する。口径22.0cm。奈良時代。

#### 第7層出土遺物（第19図109、図版66）

109は須恵器甌の体部片である。外面は平行タタキの上にカキメ（8条/cm）を施し、内面は青海波文をナデ消す。古墳時代。

#### 第8層出土遺物（第19図110、図版66）

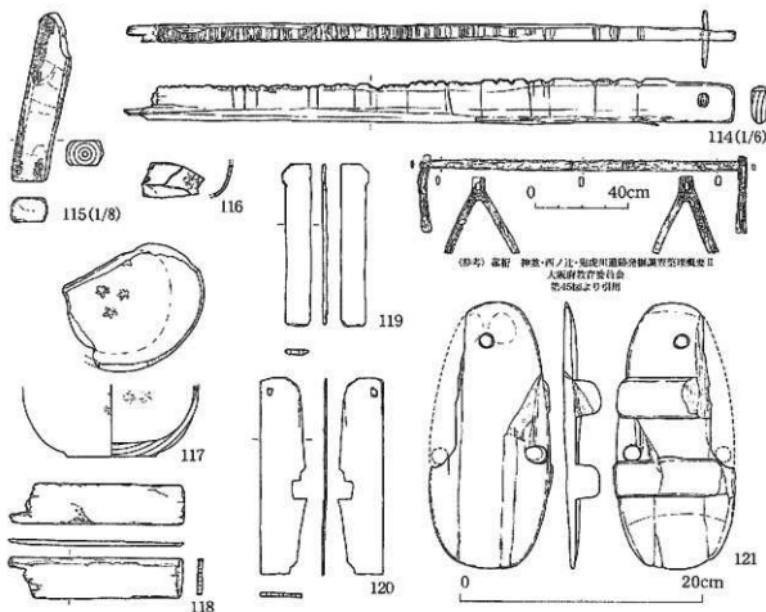
110は須恵器体部片である。外面下部はヘラケズリ、上部はカキメ（6条/cm）を施す。古墳時代。

#### 第11層出土遺物（第19図111～113、図版66）

111は弥生土器甌である。畿内第Ⅱ様式に属する。口縁部がわずかに外反し、胴部はふくらまない。内面口縁部に粗いヨコハケ（4条/cm）、外面体部に同一原体のタテハケを施す。口径17.5cm。他地城産。他に215、壺体部216がある。215は111と特徴が似ており、同一個体の可能性が高い。216は3条の凹線を施す。畿内第Ⅰ様式に属すと思われる。在地産。112・113はサヌカイト製石製品である。いずれも二上山の石材を使用していると思われる。112は柳葉形石鎌である。先端部を欠く。残存長5.6cm、幅2.0cm、厚さ0.5cm、重さ7.0g。113は削器である。表面と縁辺に原面を残す。長さ6.7cm、幅4.7cm、厚さ2.5cm、重さ80.3g。

#### 木製品（第20図114～121、図版53・54）

114・115は蘆桁の部材である。蘆桁は蘆・俵などを編むための道具である。紐をかけるための刻み目を付けた横木と脚からなる。114は横木、115は脚と思われる。溝8出土。114は板目取りで、残存長77.4cm、幅5.5cm、厚さ2.0cmを測る。一端には1.5cm四方の穴を穿ち、長さ7.0cm、厚さ0.6cmの部材をはめ込んでいる。刻み目の間隔は不揃いで、44箇所認められる。深さは2～4mmで、使用時の紐類の痕跡が残る。材はスギ。115は斜めに立ち上がるのでもう1本を渡して、計4本で横木を支えたと考えられる。芯持材を利用して、防腐目的に表面を焼いてある。残存長20.5cm、幅4.7cm、厚さ3.0cmを測る。材はケヤキ。116・117は漆器椀である。116は内外面とも黒色漆を施す。外面に梅花文を描く。溝3出土。117は内外面とも黒色漆を施し、スタンプによる紅葉文を描く。高台には



第20図 4工区出土木製品実測図

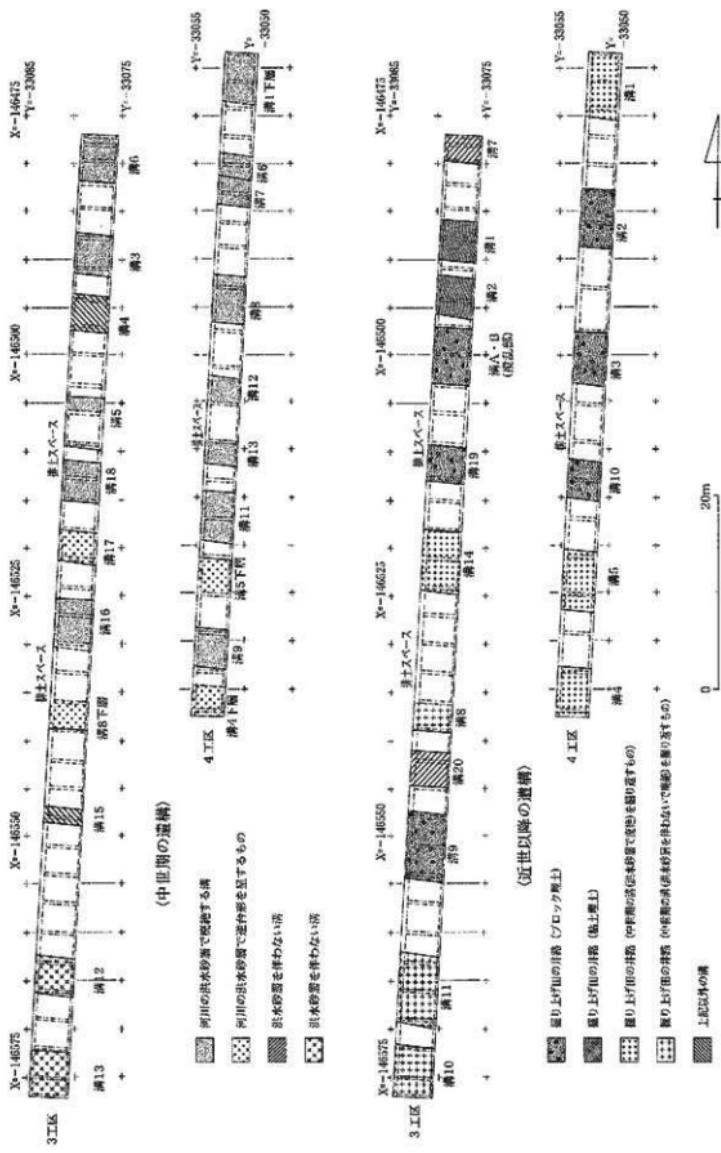
轆轤の目痕が残る。高台径7.2cm。第5層出土。118は折敷等の部材と思われる。両面と側面に黒色漆の上に赤色漆を施す。片面の端に別材を組むための幅0.4cmのホゾを持つ。残存長14.4cm、幅3.4cm、厚さ0.4cm。溝2出土。119は荷札である。長さ13.5cm、幅2.0cm、厚さ0.3cm。文字は見られない。材はヒノキ。溝6出土。120は草履状木製品で、左右対称に削り整えた2枚の薄板を芯にして、藁などを編み込んで鼻緒をつけた履物である。芯の部分が出土した。板目取りで、残存長16.2cm、幅3.8cm、厚さ0.3cm。上部に0.5cm四方の穴を穿ち、中央端部を1.5cm削る。材はスギ。溝7出土。他に第3層からも破片が出土している。121は連歛下駄である。全長21.9cm、厚さ1.3cm。台部より歛部がわずかに張り出し、歛部の下部に製作時の線刻が残る。歛の内側が減っていることから、女性の右足用であると考える。材はヒノキ。溝7出土。

#### d. 小結

1. 第2層上面において江戸時代後半から明治時代後半にかけての掘り上げ田に伴う東西方向の溝（井路）を6条検出した。
2. 第4A層上面などで中世期の耕作に伴う東西方向の溝を7条検出した。いずれも15世紀前半の氾濫による砂の堆積で埋没した。
3. 第6層以下からの出土遺物は少ないが、第6層から奈良時代の土師器鉢、第7層から古墳時代の須恵器、第11層から弥生土器壺・甕と石礎などが検出され、各層の相当期を確認できた。

第3表 3·4工区检出遗構一覽表

工区遺構一覽



第21圖 3·4工区梭出邊位置模式圖

## 6. 5工区

### a. 層序

本調査区においてはその内容に粗密はあるが、原始から近代に亘る層を確認した。以下、本工区の層序の概要を記す。ここに記した土層は各層の主体となるものを示した。その詳細については第22・23図を参照されたい。

第0層 道路舗装および近・現代の盛土・擾乱土など。層厚2.5~2.9m。

第1層 黒色~灰黄色礫混じり粘土。礫は1cm以下のものが比較的多い。層厚0.5m以上。

5 A工区4~13で確認したのみで、南側は第0層により削平されていた。遺物は少量であるが近世磁器が出土。溝1はこの面よりも上からの掘り込み。

第2層 黒色~オリーブ灰色中礫混じり粘土。多量の砂礫ブロック・植物遺体を含む。層厚0.6~1.0m。瓦器陶・古代~中世の土師器・古代の須恵器・弥生土器が出土。量的には中世より古代以前の遺物の方がやや多い。溝3~7・土坑1はこの面よりも上からの掘り込み。

第3層 オリーブ黒色~灰色砂礫とシルトの互層。層厚0.1~0.5m。

古代~中世の土師器・古代の須恵器・弥生土器などが多量に出土。量的には中世より古代以前の遺物の方が圧倒的に多い。

第4層 黄灰色粘土。植物遺体含む。層厚0.2~0.4m。

古墳時代の土師器少量出土。5 B工区南側において上面で足跡を検出。

第5層 黒褐色~オリーブ黒色シルト。層厚0.2m。第6・7層を搅拌。

5 B工区のみに存在。6~7世紀の須恵器1点のみ出土。

第6層 緑灰色シルト質粘土。層厚0.1m以下。

5 A工区11より北側に見られ、それより南は所々に散見するのみ。

第7層 黒褐色粘土。層厚0.1m。第8層を搅拌。

5 B工区4より南では見られない。布留式土器1点出土。

第8層 黒色腐植土。植物遺体層。層厚0.05m前後。

庄内式土器1点・板状木製品・自然木出土。

第9層 暗オリーブ灰色~暗灰黄色シルト~粘土。第10層との境に植物遺体。層厚0.1~0.2m。

弥生時代中期(第II~III様式)土器が少量出土。

第10層 黒褐色~オリーブ黒色シルト質粘土。層厚0.1~0.2m。第11層を搅拌。

弥生時代中期(第II~III様式)土器が第9層よりも多く出土。上面で自然流路1を検出。

第11層 黒色~オリーブ黒色シルト質粘土。層厚0.1m。

弥生時代中期(第II様式)土器が少量出土。

第12層 黒色粘土。第13層を巻き上げていた。層厚0.05~0.1m。

弥生時代中期(第II様式)土器が第9~11層よりも多く出土。

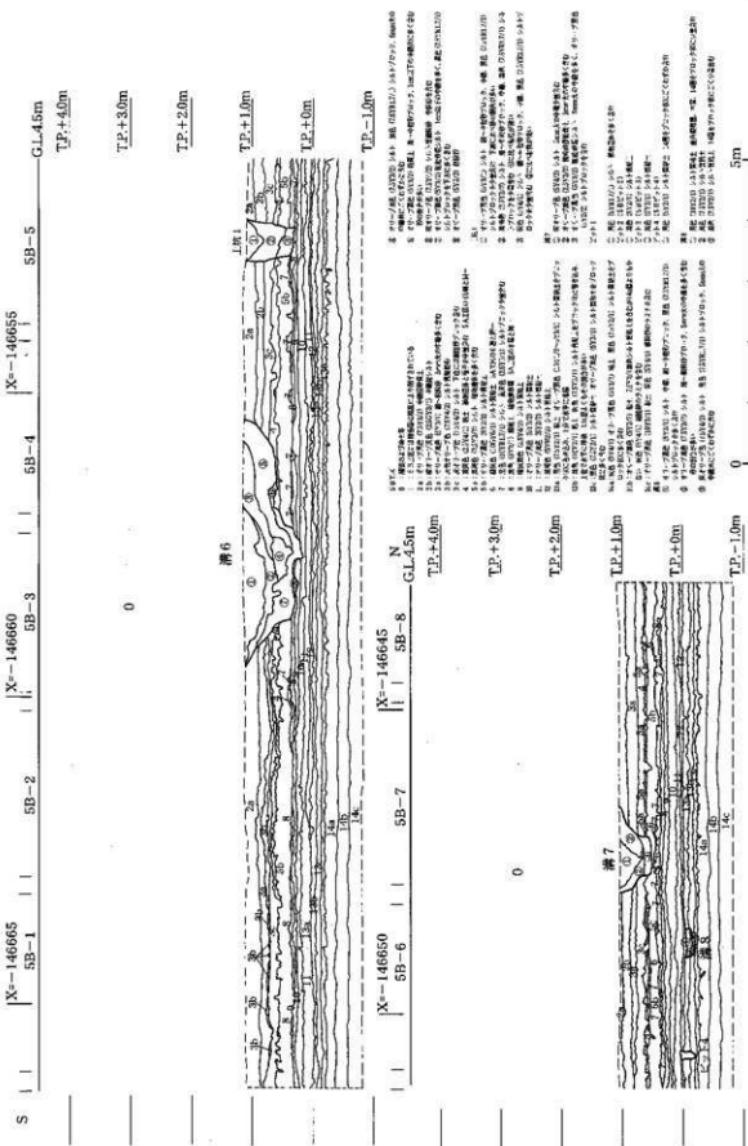
第13層 黒色粘土に灰色シルト質粘土が水平に堆積。層厚0.2m。

上面で溝8、ピット1・4、杭1~3を検出。弥生前期らしき土器片1点出土。

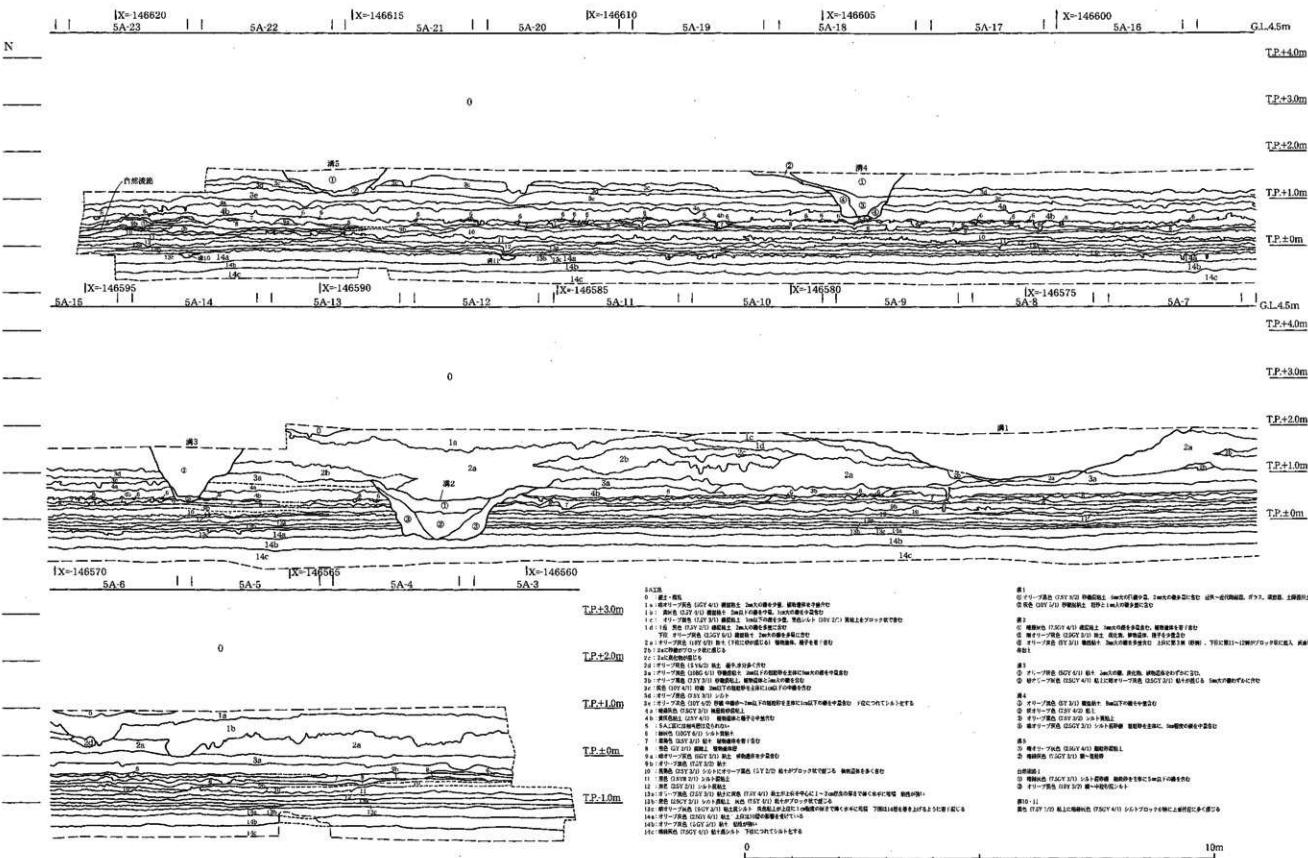
第14層 灰色~暗緑灰色シルト~粘土。下位になるほどシルト化、またはラミナが見られた。

本調査区のベース層。上面で溝9~11、ピット2・3を検出。

以上が本調査区の主要層序である。出土遺物および層位関係などから第9~13層は弥生時代、第4~8層は古代、第2・3層は中世、第0・1層が近世~現代にそれぞれ相当することが確認することができた。以下、造構・遺物をこの区分に従って説明していく。



第22図 5B工区西壁断面図



第23図 5A工区西壁断面図

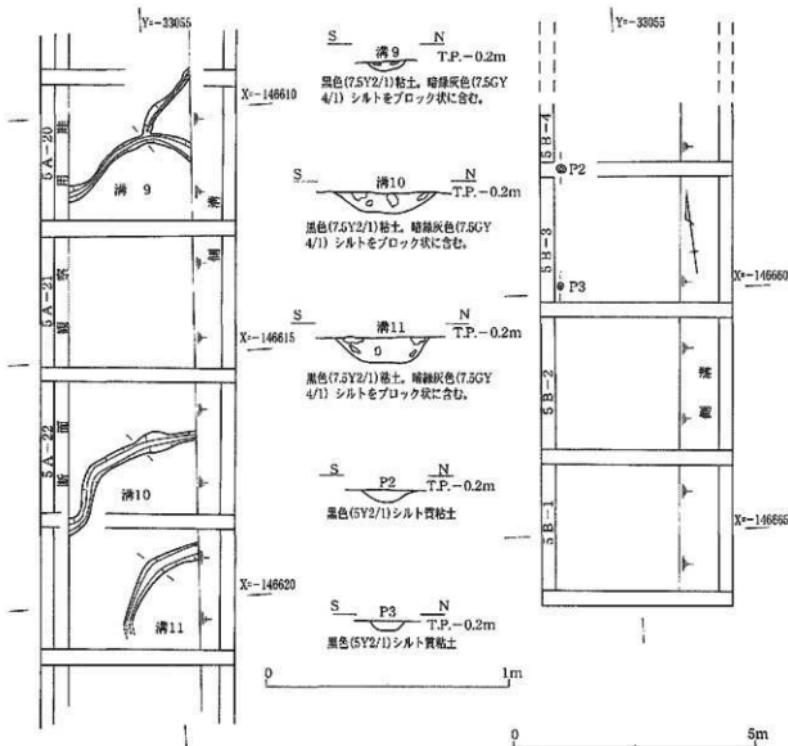
### b. 遺構と遺物

調査トレンチ北側5A-3~13では地表下約2mまで、それより南側は約2.5~2.9mまでの道路舗装と盛土・搅乱土などを機械掘削し、以下を主に人力掘削によって調査を行なった。その結果、弥生時代~近代に亘る遺構および遺物を検出した。その概要を時代・時期ごとに記す。

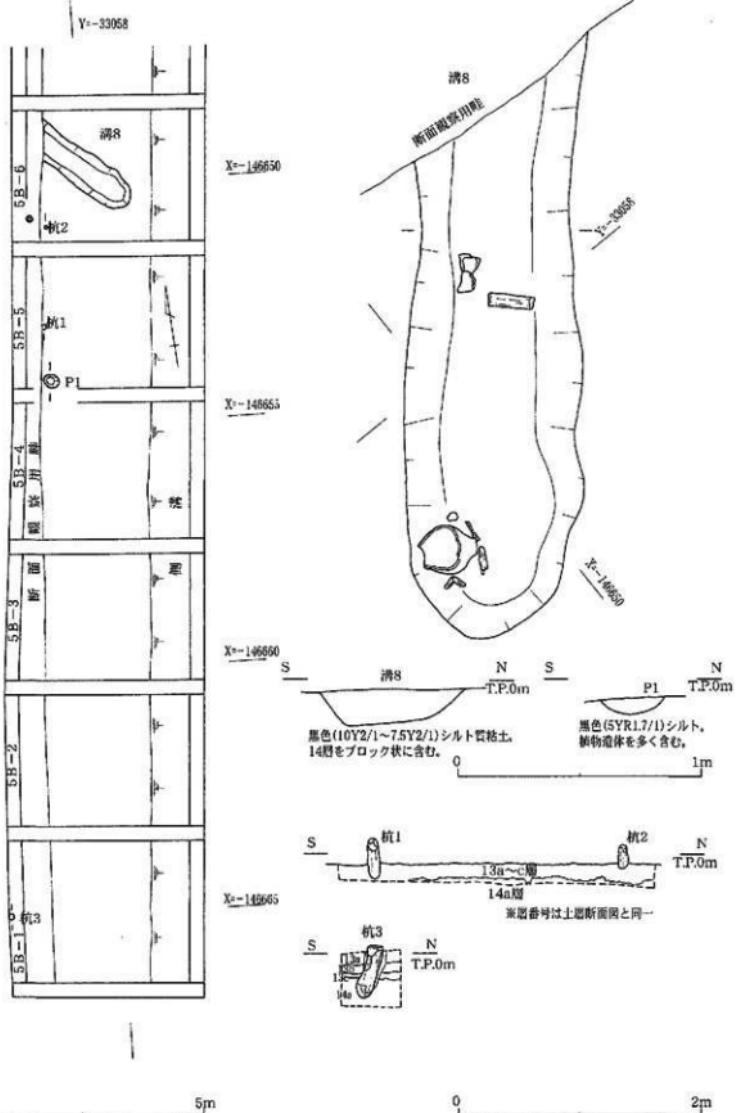
生駒西麓域は花崗岩系の地質であり、なかでも閃綠岩には角閃石が含まれる。生駒西麓産の土器は、この閃綠岩の風化土を用いて製作するため、胎土中に角閃石を多量に含むことが多い。これは他地域には見られない一つの特徴である。本調査の出土遺物においても、胎土に角閃石を含むものが多数存在する。そこで、胎土に角閃石を含むものを生駒西麓産、含まないものを他地域産とした。他地域産のものについては含有鉱物種を記すが、生駒西麓産のものについては特筆しないこととした。

弥生時代以前（第24図、図版34~36）

第14層は弥生時代前期以前の自然堆積層で、遺構検出の最終面である。調査地を含む本遺跡周辺に広がり、第25・33・32次調査などで縄文時代前期の海食崖および縄文土器・石器・動物遺体を検出しているが、明確な遺構は確認されていない。



第24図 第14a層上面検出遺構実測図（弥生時代前期以前）



第25図 第13層上面検出造構実測図（弥生時代中期）

上面において、5A—20~23で溝9~11を検出した。溝9は幅0.16m、深さ0.04mを測る。Y=33055付近で二股に分かれる。溝10は幅0.42m、深さ0.09mを測る。南西から北東方向に曲線を描いて延びる。溝11は幅0.38m、深さ0.11mを測る。南から北東方向に弧状に延びる。これらの溝の断面形は浅い皿状を呈する。埋土は黒色粘土に暗緑灰色シルト（第14層）がブロック状に混じるが、上面付近に特に多い。遺物は出土しなかった。溝は自然地形的によるものか、人為的に掘られたものであるかは不明である。5B—3地区でピット2・3を検出した。ピット2は直径0.2m、深さ0.06m、ピット3は直径0.14m、深さ0.04mを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は黒色シルト質粘土である。遺物は出土しなかった。ピット間距離は約2.4mを測る。

弥生時代中期（第25図、図版37~40）

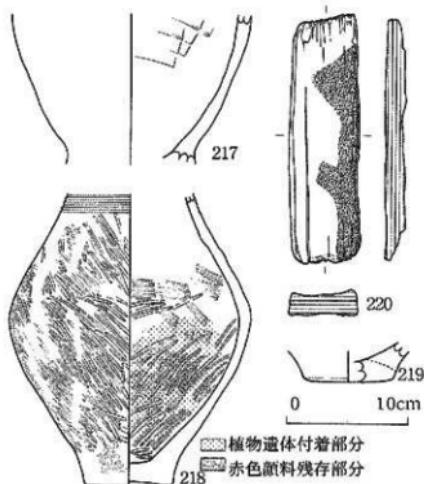
弥生時代中期の包含層は第9~12層である。第12層を中心に畿内第II~III様式の土器や加工板が出土している。第13層、第10層上面で造構を検出した。第13層は人為的な手が加わった層で、黒色シルト質粘土（第14層）をブロック状に含む。各層とも上面にブロック状のシルト質粘土がほぼ水平に堆積していることからa~cの3層に分層したものである。最下面是第14層を巻き上げており、層境が著しく乱れている。弥生時代前期の土器が1点ではあるが出土している。第12~10層も人為的な手が加わった層で、第12層は第13層、第10層は第11層をそれぞれ巻き上げている。第11~12層は一度に掘り下げたため遺物を分けることができなかったが、遺物の出土レベルから大半は第12層に属するものと思われる。

第13層上面において5B—6で溝8、5B—5・6で杭1・2、5B—1で杭3、5B—4でピット1、5B—6地区でピット4を検出した（第25図、図版37）。溝8は南東から北東方向に延びる溝である。当初方形周溝墓に伴う溝の可能性も考えられたが、断面において盛土状の高まりの痕跡は一切認められなかった。幅0.61~0.73m、深さ0.06mを測り、断面形は逆台形を呈する。埋土は黒色シルト質粘土で灰色~オリーブ色粘土（第14層）をブロック状に含む。溝からは弥生土器の壺や底部（畿内第II様式）、一部炭化した加工板が出土した。杭1（ツバキ科ナツツバキ属）・2（コナラ科コナラ属アカシヤ属）は溝8の南側に位置する。2.06m間隔で南北方向に並び、直径約0.1mを測る。腐食が著しい。杭1~3は検出面が第13層上面であるが、杭上面の高さが第11層中におさまるので、打ち込み面は第10層堆積段階まではくだらないものと思われる。ピット1は直径0.28m、深さ0.07mを測る。遺物は出土しなかった。ピット4は断面観察用畦において検出したものである。遺物は出土しなかった。幅の狭いトレーンチでの調査であるためこれらの性格は不明である。

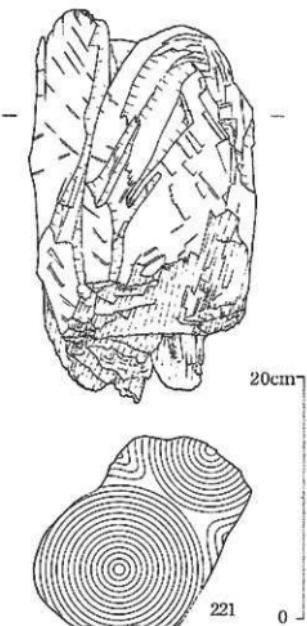
5B溝8出土遺物（第26図217~220、図版67・68・81）で図化できたものは、弥生土器3点（217~219）、板状木製品1点（220）である。

217~219は壺。217は体部。外面はユビナデでナデまわした痕跡がみられる。内面は摩滅が激しく、ハケ原体の小口痕跡がみられるのみである。胎土には石英を多く含み、他に長石とチャートを含む。他地域産。218は広口壺ないしは広口長頸壺。底径6.4cm、胴部最大径19.7cm。外面はヘラミガキであり、底部付近を横方向にナデる。頸部にはヘラ描き沈線（4条/1.5cm）を施す。畿内第II様式でも古相を示すものである。また、体部外面下半部には黒斑があり、外面底部付近には赤色顔料の付着がみられる。内面はヨコハケ（9条/cm）のちヘラミガキである。内面には植物遺体が付着しているが、土器遺棄後の2次的な流入と思われる。胎土は石英を多く含み、他に長石・雲母・クサリ礫を含む。他地域産。219は底部。底径7.0cm。外面は摩滅し、その詳細は不明である。内面はナデ。生駒西麓産。

220は残存長20.5cm、最大幅5.3cm、最大厚1.7cm。3面に面取りを施している板目材である。1面は焼成を受け、焼け焦げて剥離が激しいため詳細は不明。カヤ材。他にシイ・シャシャンボの自然木が出土した。



第26図 溝3出土遺物実測図



第27図 杭3実測図

5B-1杭3(第27図221、図版80)は残存長32.2cm、長径18.5cm、短径13.2cm。樹木の幹とその枝に分かれる部分、あるいは枝が二股に分かれる部分を使用した杭である。樹皮を剥いた部分と工具で削った面が見られる。ケヤキ材。

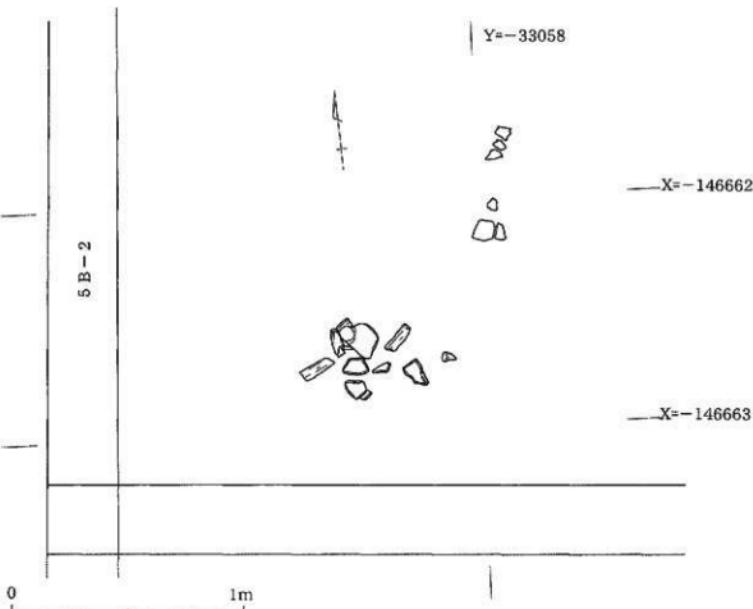
5B-2で第12層から弥生土器片(畿内第Ⅱ様式)と木片が集中して出土した(第28図、図版41)。土器片等周辺には、平面および断面観察では明確な掘り込みはみられず、また散乱した状態で出土していることから単に廻棄されたものと思われる。これは本調査地の西約25mのところで行われた第49次調査で弥生中期前半～中頃(畿内第Ⅱ～Ⅲ様式)の土器および炭化米が出土している状況に類似する<sup>1)</sup>。第49次では国土座標X=-146651～-654、当地ではX=-146662・3付近で検出している。

この土器だまりを検出したC地区の第11層は当調査地における第12層に対応するものと思われ、これらは一連のものである可能性が考えられる。

鬼虎川遺跡の中心・居住域は調査区の南約250mのところに位置しており、これらの資料を参考にしつつ、今後当概期の集落の範囲を検討していきたい。

第12層出土遺物(第29図222～228、図版67・68・79)で図化できたものは、弥生土器5点(224～228)、石器1点(222)、土製円板1点(223)である。

224・226・227は壺。224は口縁部。口径18.2cm。口縁はゆるやかに外反し、端部は丸く終わる。端部には刻目文を施す。口縁の内面にはヘラ状工具で刻目を施し、さらにその上をナデている。生駒西麓産。畿内第Ⅱ様式。226は細頸壺。口径7.9cm、胴部最大径12.5cm。胴部が球形に膨らみ、そこから頸部がしならかに立ち上がる。口縁は若干外反し、端部は丸く終わる。外面には柳描直線文(5条/0.7cm)と柳描波状文(5条/0.7cm)を施す。また胴部下半にはヘラ書きの線刻が見られる。内面は胴部がイタナデ、頸部はシボリ調整の後にナデる。また、柳描文に残った顔料から外面を赤彩していたことがうかがえる。生駒西麓産。畿内第Ⅱ様式。227は肩部～頸部。外面はヘラミガキした後に流水文(6条/1.2cm)を施す。内面は細かいハケ(20条/cm)である。胎土は石英・長石



第28図 第12km弥生土器出土状況実測図

・雲母・クサリ礫をわずかに含む。他地城産。畿内第II様式。

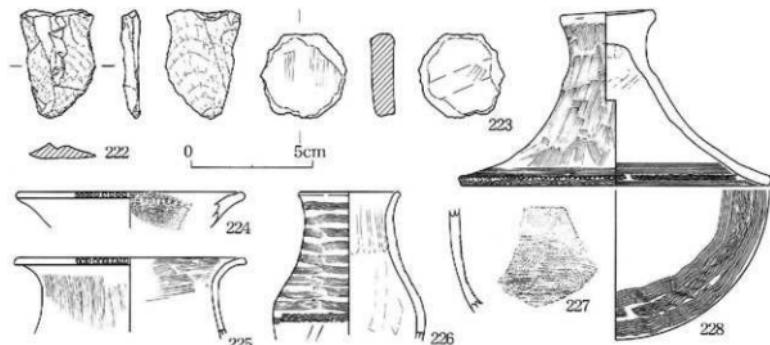
225は甕である。口径18.4cm。口縁が強く外反し、端部に面を持つ、刻目文を施す。外面はタテハケ（6条/cm）し、口縁付近はタテハケの後ヨコナデする。内面は口縁付近をヨコハケ（6条/cm）する。胎土は長石とチャートを多く含むほか、石英とクサリ礫がみられる。山城系の土器か？他地城産。煤付着。畿内第II様式。

228は甕蓋。口径25.2cm、幅高14.4cm、つまみ部径7.15cm。口縁は据広がりで端部に面を持つ。端部は上端に刻目、端面に櫛描波状文（3条/0.5cm）を施す。外面はタテハケ（9条/cm）で、口縁付近はヨコハケ（9条/cm）する。内面はナデとユビオサエであるが、口縁付近を櫛描直線文（7条/1.3cm）と櫛描波状文（7条/1.3cm）で加飾する。当該期における口縁内面のこの文様構成は、河内には見られず、山城地方の広口長頸甕の口縁に見ることができる。胎土はチャート・雲母を主体に石英・長石・クサリ礫を含む。山城系の土器か？他地城産。煤付着。畿内第II様式。

222は細部調整剥片。最大長4.6cm、最大幅3.0cm、最大厚0.7cm、重量9.09g。サヌカイトの剥片の片面を打ち欠き整形している。内部に一部不純物が混じる。

223は最大長3.7cm、最大厚1.0cm、重量14.66g。土器の破片の周囲を打ち欠き成形し、その後断面を部分的に研磨した土製円板。外面はハケ（6条/cm）、内面はナデとハケ（4条/0.5cm）。胎土は雲母を多く含み、長石を少量含む。他地城産。

木片にはカヤおよびスギ材の加工板があった。



第29図 第12層出土遺物実測図

第10層上面（第30・31図）では5A-21～5C-1で自然流路1を検出した。自然流路1は平面で検出することができなかったが、断面観察用畦および排水用側溝壁において5A-21地区で北端、5C-1地区で南端を確認したのである。幅約15m、深さ約0.1mである。埋土は暗緑灰色シルト混じり砂礫とオリーブ黒色細～粗粒砂混じりシルトの上下2層からなる。遺物は出土しなかったもののベース面となる第10層、流路埋没後に堆積した第9層からは弥生時代中期（畿内第II～III様式）の土器が出土していることから、その時期におさまるものであろう。

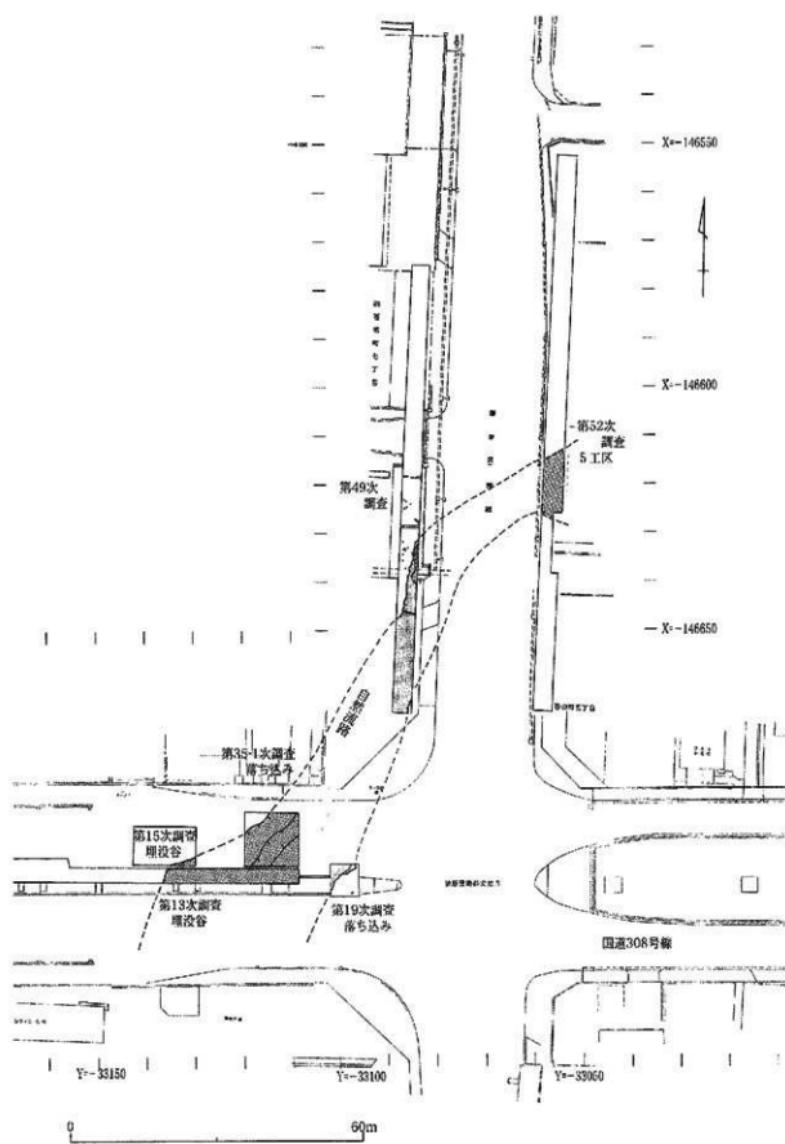
本調査地の西約25mのところで行われた第49次調査で検出した自然流路は、遺物は出土しなかったが、弥生時代中期～古墳時代中期の時期が当てられている<sup>2</sup>。この流路は南西方向に流下し、第13・15次調査の弥生中期（畿内第II～III様式）の埋没谷、第19・35-1次調査の弥生時代中期（畿内第III様式）の落ちこみに続くものとしている。今回検出した自然流路はこれらに続くものとしている<sup>3</sup>。前者には黒色系シルト質粘土が堆積しており、流れがゆるやかでよどんだ状態であったことがわかる。本調査では

は上面に砂礫が堆積しており、流路が埋まり凹地上に残っているところに砂が流れ込んだ状況がうかがえる。

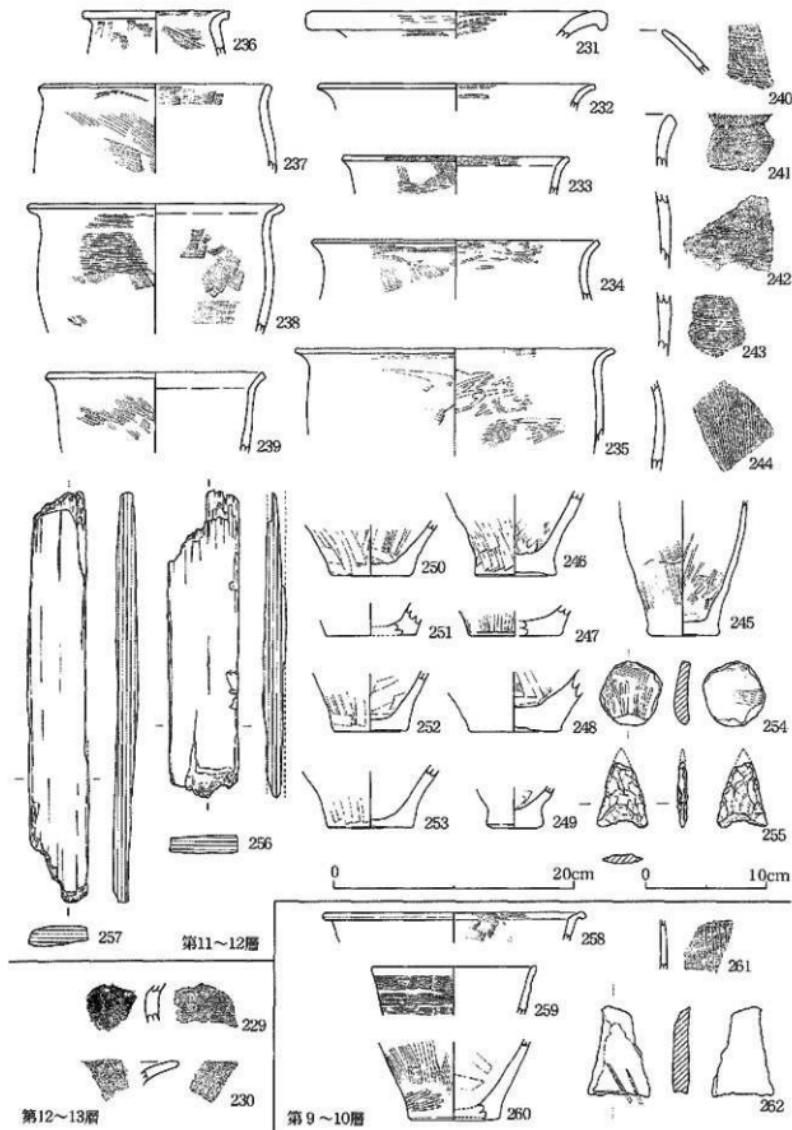
また第19次調査の南側で行われた第10・11・14次調査では自然流路の続きは確認されておらず、さらに南側の第5・7次調査ではIV様式まで存続する流向の異なる自然流路を確認している。このため本調査地周辺で確認した自然流路の南側の状況は明らかになっていない。少なくとも第5・



第30図 西壁断面自然流路1



第31図 第52次調査周辺調査地自然流路図



第32圖 第9～10・11～12・12～13層出土遺物実測図

7次調査地との間で流れの向きを変えるか、あるいはよどみ状に終わっているものと考えられる。

第12～13層出土遺物（第32図229・230、図版68）で図化できたものは、弥生土器2点のみである。229は壺の頸部。外面はタテハケ（6条/cm）の後、櫛描直線文（5条/0.8cm）と櫛描波状文を施す。内面はユビナデ。生駒西麓産。230は壺の口縁部。唯一、第13層から出土。強く外反し、端部は丸みを持って終わる。内外面ともに摩滅が激しく、調整は不明。生駒西麓産。層位的に弥生時代前期の可能性があるが、判然としない。

第11～12層出土遺物（第32図231～257、図版67・69・70・79・81）で図化できたものは、弥生土器23点（231～257）、円板形土製品1点（254）、石器1点（255）、板状木製品2点（256・257）である。弥生土器はすべて畿内第II様式の範疇に収まるものである。

232～239は壺の口縁～胴部である。232は口径22.8cm。ゆるやかに外反する口縁で、端部がやや肥厚する。口縁外面をヨコナデし、内面をヨコハケ（6条/cm）する。生駒西麓産。233は口径18.6cm。体部は上方にやや開き気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。外面にはタテハケ（6条/cm）の後に同一工具を用いて、櫛描直線文風にヨコハケを施す。内面は口縁部がヨコハケ（8条/cm）、体部はナデ。口縁端面には櫛描波状文（3条/0.4cm）を施す。胎土は石英・長石・クサリ礫を主体に雲母が少量混じる。他地域産。234は口径23.6cm。頸部で一度内湾し、ゆるやかに外反する。外面は口縁付近をヨコハケ（6条/0.5cm）した後、一部ヨコナデする。体部はタテハケ（6条/0.5cm）する。内面は口縁付近を横方向にヘラミガキし、体部はナデ調整。煤付着。生駒西麓産。235は口径26.2cm。やや張った胴部から強く外反する口縁で、口縁端部は丸みを持ち終わる。外面は口縁付近をヨコハケ（3条/cm）した後にヨコナデする。体部はナナメハケ（8条/cm）の後にナデする。内面は口縁付近に細かいヨコハケ（18条/cm）を、体部内面にヘラミガキとヨコハケ（6条/cm）を施した後にナデする。煤付着。生駒西麓産。236は小型の壺である。口径12.0cm。口縁は頸部で強く屈曲・外反し、「く」の字状を呈する。端部はやや肥厚する。また端面は若干の凹みを持つ。外面は口縁をヨコナデし、体部はタテハケ（13条/cm）を施す。内面は口縁をヨコハケ（13条/cm）し、体部をヨコハケ（13条/cm）の後にナナメハケ（13条/cm）する。煤付着。生駒西麓産。237は口径18.6cm。口縁は頸部より若干小さい径で、やや外反しながら立ち上がる。口縁端部はやや丸みを持って終わる。外面は口縁付近をヨコナデするが、一部ヨコハケ（4条/0.3cm）を施す箇所もみられる。体部はナナメハケ（5条/cm）を施す。内面は口縁付近に細かいヨコハケ（18条/cm）を施し、体部はナデ調整。胎土は非常に精良で、石英・長石・雲母・クサリ礫をわずかに含む。低温地産か？他地域産。238は口径20.7cm。口縁は倒錐形の胴部から頸部で強く折れ、屈曲する。外面は口縁をヨコナデする。体部はタテハケ（12条/cm）を施すが、上半部にはヨコハケ（7条/cm）を明瞭に施している。外面の一部にはさらにその上から細かいタテハケ（25条/cm）を施している部分もある。下半部はタテハケの後ナデする。内面は口縁をヨコナデし、体部に細かいヨコハケ（18条/cm）やナナメハケとヨコハケ（14条/cm）を施す。煤付着。生駒西麓産。239は口径17.6cm。やや上方に開く体部から口縁は若干外反する。外面はヘラミガキし、口縁付近はヨコナデ。内面は口縁をヨコナデし、体部はナデ調整。煤付着。生駒西麓産。

231は広口壺の口縁部。口径23.8cm。口縁は強く外反して端部は肥厚し丸みを持ち、下方へやや拡張する。端面にはヨコハケ（4条/cm）を施す。口縁外面は細かいハケ（15条/cm）でヨコハケした後にヨコナデする。口縁内面は横方向にヘラミガキする。胎土は長石と雲母を多量に含み、クサリ礫と石英を含む。他地域産。

240・241は壺。240は無頸壺。口縁端部は丸みを持って終わる。外面は櫛描直線文の一部に扇形文を施すといわゆる擬似流水文（4条/0.6cm）である。内面はヘラミガキ。生駒西麓産。241は壺の口縁部。ゆるやかに口縁が外反し、端部は若干厚くなる。端面には刺突列点文を部分的に施す。外面

には柳幅直線文（3条/0.7cm）を施す。内面はヘラミガキ調整。生駒西麓産。

242・243は壺ないしは鉢の体部破片。242の外面には典型的な流水文（9条/1.1cm）を、内面はナメハケ（9条/cm）を施す。生駒西麓産。243の外面は流水文（7条/cm）を施し、内面は細かいハケ（11条/cm）を施す。生駒西麓産。

244は壺の体部破片である。外面はタテハケ（5条/cm）、内面はユビナデ調整。胎土は石英・長石・雲母・チャートを含む。他地域産。

245～247・250-252は甕の底部。245は底径5.4cm。体部はあまり広がらずに上方に伸びる。底部は平底である。外面は体部がタテハケ（6条/cm）で、底部付近はナデ調整。内面は体部に細かいハケを施した後にヘラミガキを行い、底部はユビナデ。生駒西麓産。246は底径6.4cm。底部はやや上げ底である。外面はヘラないしは板状工具で下から上へケズリを施し、底部付近には工具の小口痕跡が明瞭に残る。内面は細かいハケが施されているが、風化が激しいため、工具の小口痕跡をわずかに認めるのみである。生駒西麓産。247は底径7.4cm。平底の甕である。外面はタテハケ（4条/cm）を施すが、内面は摩滅が激しく調整不明。胎土は石英とチャートを多量に含み、長石とクサリ礫が若干混じる。他地域産。250は底径6.4cm。やや開く体部を持つ。底部は薄く、平底である。外面は縦方向のイタナデであるが、一部横方向のイタナデがみられる。内面はイタナデとユビナデを併用し、一部ヘラミガキが見られる。生駒西麓産。黒斑有り。252は底径5.9cm。平底の底部。外面は縦方向のイタナデで調整するが、一部底部付近を横方向にイタナデする箇所も見られる。内面もイタナデによる調整であるが、底部はユビナデ調整し、明確な稜が残る。生駒西麓産。

248・253は壺の底部。248は底径7.2cm。体部はやや広がり気味に立ち上がる。底部は中央付近が若干凹む上げ底である。外面はナデ調整。内面はヨコハケ（12条/cm）の後ナデである。胎土は石英・長石・チャートを含み、クサリ礫がわずかに混じる。他地域産。253は底径6.8cm。底部は薄く、中央付近が若干凹むが、平底である。外面は縦方向のイタナデ、内面はナデ調整。底面に勧らしき圧痕がある。生駒西麓産。

249・251は壺ないしは壺の底部。249は底径3.6cm。底部が厚く、若干内湾したあと体部が広がるというプロポーションになる。平底の底部。外面は摩滅のため調整不明。内面も摩滅が激しく、ハケ工具の小口痕跡を認めるのみである。胎土は石英を多量に含み、長石・雲母・クサリ礫をわずかに含む。他地域産。251は底径7.4cm。平底の底部。内外面ともにナデ調整。生駒西麓産。

254は最大長5.4cm、最大厚1.1cm、重量30.91g。土器の破片の周囲を打ち欠き、断面を一部研磨した円板形土製品。外面はヘラミガキとハケ（6条/cm）、内面はハケ（5条/cm）である。胎土は長石・雲母・チャートをわずかに含む。他地域産。

255は石器。残存長2.7cm、最大幅2.05cm、最大厚0.4cm、重量1.94g。尖端部は欠損。凹基無基式。サヌカイトの薄い剥片を整形して製作している。サヌカイトは白色の斑点を含み、剥片自体が非常に薄い。香川県金山産のサヌカイトか？

256・257は板状木製品。256は残存長25.5cm、最大幅5.7cm、最大厚1.8cmの板目材である。いずれの面も面取りを施しているが、一部焼け焦げて剥離している部分が見られる。257は残存長34.25cm、最大幅4.9cm、最大厚1.65cmの板目材である。各面に面取りを施すが、一部焼け焦げて剥離する部分が見られる。ともにヒノキ科アスナロ属材。

第9～10層出土遺物（第32図258～262、図版68）で図化できたものは、弥生土器5点のみである。

258・260は甕。258は口縁部。口径21.2cm。口縁を内面から強くハケナデすることで、強く「く」の字状に外反させている。口縁端部は肥厚し、やや下方へ拡張する。外面は2次的な焼成によって風化し調整不明。内面は口縁を粗いヨコハケ（4条/cm）し、一部細かいハケ（15条/cm）で調整する。体部は

細かいヨコハケ(10条/0.5cm)する。胎土は非常に精良で石英・長石・クサリ礫を微量に含み、雲母を少量含む。他地域産。畿内第Ⅱ～Ⅲ様式。260は底部。底径6.6cm。外面をタテハケ(4条/cm)し、底部付近を横方向にヘラミガキする。内面はハケで調整しているが、条数は摩滅が激しく不明である。生駒西麓産。

259は細頸壺の口縁部。口径13.2cm。口縁はやや開き気味に上方へ伸び、端部は丸く終わる。外面に櫛描直線文(6条/1.1cm)を施し、内面はナデ調整。生駒西麓産。畿内第Ⅱ～Ⅲ様式。

261は壺ないしは鉢の体部破片。櫛状の工具(26条/2.9cm)を用いて3～6cmというピッチで櫛状文を施している。内面は細かいタテハケ(13条/cm)。生駒西麓産。畿内第Ⅲ様式。

262は縁刻土器の破片である。2条の縁刻が見られる。内外面ともにナデ調整。

注 1・2・3.『鬼虎川遺跡第49次発掘調査報告』東大阪市教育委員会 平成13年3月

#### 古代

古代の明確な遺構は検出していない。ただ、層序においては以下に説明する出土遺物から、第4～8層がおおよそ古代に堆積した層と考えている。

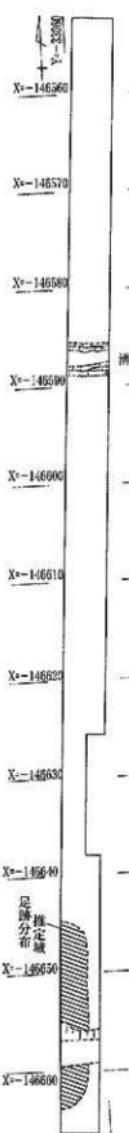
第8層は、層厚が0.05m前後と薄い黒色の植物遺体層である。この層は、既往の調査では層位的な前後関係などから弥生時代後期相当層と考えられていた。本調査区では細片のため図化できなかったが、庄内式土器の壺体部と思われる破片が1点出土した。ただ、出土遺物が少なく、この層の時期的な確定は今後に委ねたい。

第8層出土遺物(第33図 図版71・80・81) 先述の庄内式土器の他に、マツ科モミ属などの数本の自然木、砥石、木製品がある。

263は5A-14の第8層上面で出土した砂岩製砥石である。法量は全長32.05cm、最大幅8.8cm、最大厚6.25cmを測る。砥石として使用した面は平坦な1面のみである。この面の左下から側面にかけて煤の



第33図 第4～8層出土遺物実測図



第34図中世検出遺構図

付着、亦変もしくは黒変した所があり、火を受けたものと思われる。

266・267は板状木製品である。266は5 A-18の第8層上面で出土した。板目材を使用し、先端が三角形を呈する狭長のものである。基部が欠損しているため全長は不明で、最大幅2.9cm、最大厚0.8cmを測る。267は砥石に隣接して出土した。柾目材を使用し、四辺を整形して台形状にしたものであるが、何らかの転用品の可能性もある。法量は全長48.05cm、最大幅8.6cm、最大厚1.3cmを測る。ともにヒノキ科ヒノキ属材。

第7層は、層厚0.1mの黒色粘土であるが、第8層を攪拌しているので人為的な土壤化層と考えられる。5 B工区では層厚が薄くなり、その南側では見られなくなる。この層からは数片であるが、高杯の脚部と思われる破片を含めた布留式土器が出土している。

第6層は、5 A工区北側に見られた層厚0.1mの緑灰色シルト質粘土であるが、それより南側では所々に散見されるのみである。ただ、堆積自体は比較的均質な土質である。

第5層は、5 B工区のみで見られる層厚0.2mの黒褐色～オリーブ黒色シルトである。5 B工区北側では第6層を、南側では第7層をそれぞれ攪拌しているので、人為的な土壤化層と思われる。この層からは6～7世紀の長頸壺と思われる骨部片が1点だけ出土している。

第5～7層出土遺物（第33図 図版80）5 C-2での出土のため厳密ではないが、木製品がある。

264は心持材を使用して、径1.2～1.7cmの円形に加工した棒状木製品である。一端が原状を留めており、その部分から欠損部に向かって細くなっている。その一端から8.0cm間に13個の刻み目が五列にわたって施されている。用途は不明であるが、その形状から何らかの柄に当たるものと思われる。ヒノキ科ヒノキ属材。

第4層は、層厚が5 A工区北側で0.2m、その南側では厚くなり0.4m、5 B工区では再び薄くなり0.1mとなる黄灰色粘土である。その上面は、後述する足跡が検出されて、波打っている所もあるが、堆積自体は安定しており自然堆積層と思われる。

第4層出土遺物（第33図 図版71）弥生土器の底部（265）、細片であるが古墳時代の土師器が数点出土している。ただ、これらは先述の第5層の年代観からすると、第4層の直接的な年代を示しているものではないと思われる。

#### 中世

中世の層としては、第2・3層が相当する。遺構としては第4層上面の足跡、第3層上面の溝2がある。また後述するが、溝6は層位的には近世以降のものであるが、掘り直しの痕跡から中世に遡る可能性がある。他に、第2・3層間に杭列を1ヵ所検出しているが、明確な遺構面は不明である。

第3層下面、つまり第4層上面では5 B-2から3にかけて足跡を検出した。足跡は主に人間のものであるが、四足動物と思われるものも若干存在した。これらは第3層の堆積土で充填されており、粘土に砂礫が落ち込んで形

成されるロードキャストによるものも含まれると思われる。また、西壁断面を観察すると、5B-4~6付近にも第4層上面への踏み込みおよび流れこみが見られるので、足跡およびロードキャストはこの付近まで存在していた可能性がある。

第3層は、オリーブ黒色～灰色砂礫とシルトの互層で、層厚が5A工区北側で0.1~0.2mと薄く、南側では0.3~0.5mと厚くなり、5B工区では再度0.2mと薄くなる。層厚の薄い5A工区北側では砂礫が主体となっている。この層の砂礫の部分からはローリングを受けた多くの遺物が出土しているので、洪水によってもたらされた堆積層と考えられる。

第3層出土遺物（第36図 図版72・73・79） 時期的には弥生時代から中世にかけてのものがある。

268~278は弥生土器である。これらは全て、胎土に角閃石を含むことから生駒西麓産である。

268~270・272~274は壺である。268は広口壺の口頭部と考えられるが、器台の可能性も否定できない。口径29.0cm。口縁は外反し、端部は肥厚し垂下する。端面には5条の凹線文を施した後に円形浮文を貼付する。頸部外面は縦方向のヘラミガキ、口縁付近はヨコナデを施している。内面は摩滅のために調整不明。270は壺または鉢の体部破片である。外面はナデ調整の後に櫛描直線文（4条/0.8cm）と扇形文（7条/1.4cm）を施す。内面は細かいハケ（10条/cm）を施す。272は広口壺または広口長頸壺である。口径21.7cm。垂下口縁で、口縁端面に櫛描波状文（6条/1.2cm）を施す。口縁外面はナデ調整。内面は摩滅のため調整不明。273は広口長頸壺である。口径19.0cm。ゆるやかに外反し、端部は若干肥厚し、丸みを持って終わる。外面はヨコハケ（8条/cm）の後、一部ナデを行なう。内面は摩滅のため調整不明。274は広口壺である。口径17.0cm。口縁は外反し、端部は肥厚し若干下方へ拡張・垂下する。端部は面を持ちヨコハケ（4条/cm）を施す。調整は頸部外面が板ナデ、口縁付近がヨコナデである。内面は口縁付近をヨコハケ（4条/cm）、頸部は細かいヨコハケ（20条/cm）を施す。

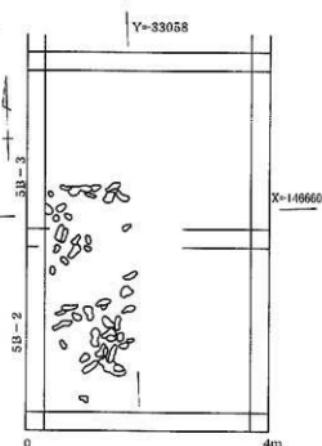
269は壺ないし鉢の口縁部である。口径34.2cm。口縁部を折り返し、垂下させる。外面は摩滅が激しいが、口縁をナデ調整、体部に一部タテハケ（4条/0.5cm）を施す。内面は口縁にナデ調整、体部にヨコハケ（4条/cm）を施す。

271は高杯の脚部である。脚部最大径5.8cm。脚部は中空で、杯部はおそらく皿状を呈する。外面はヘラミガキ。脚部内面はナデ調整。杯部内面はヘラミガキ。

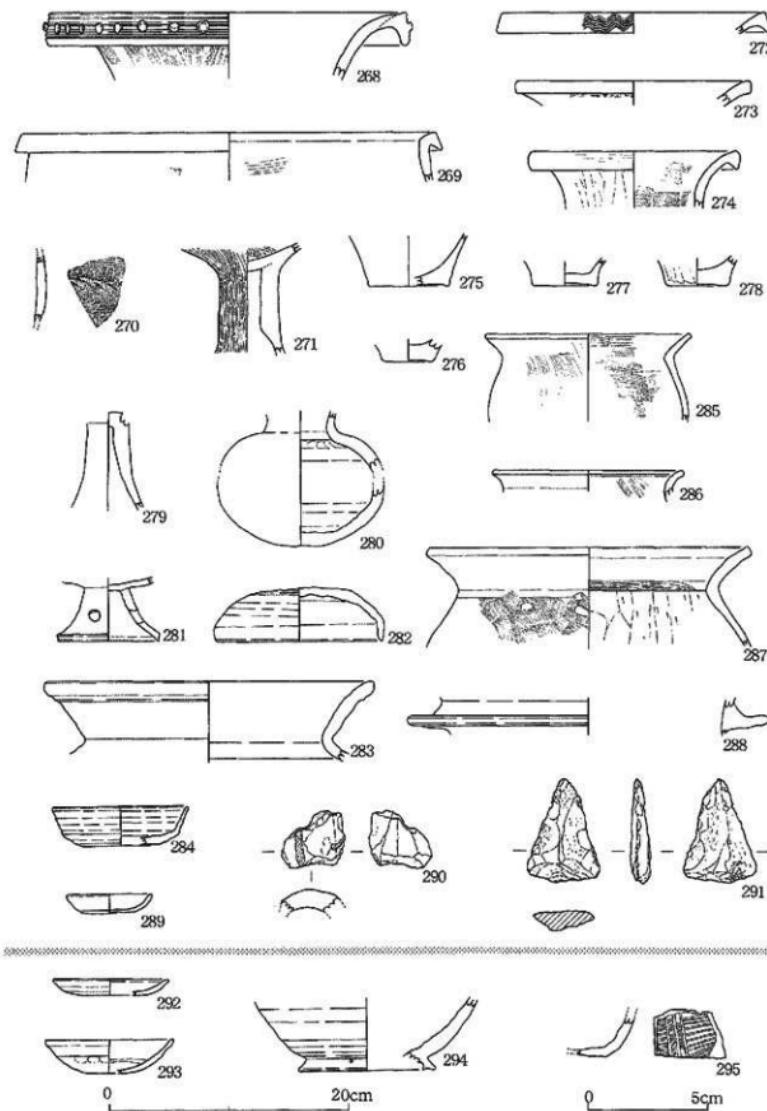
275~278は底部である。275は甕の底部。底径6.6cm。底面はわずかに凹むが、平底の甕である。内外面ともにナデ調整。276は壺の底部。底径3.8cm。若干上げ底の底部である。外面はナデ調整であるが、内面は付着物のため調整不明。胎土はやや精良である。277は甕または壺の底部。底面が凹む上げ底の底部である。内外面ともにナデを施す。胎土は非常に精良である。278は壺もしくは甕の底部。底径4.6cm。底面は若干凹むが、平底である。外面は板ナデ調整、内面はユビオサエである。

多くは畿内第三～IV様式のものだが、273・274が第二II様式、268・271が第V様式である。

279・280は古墳時代の土師器である。279は高杯の脚部である。280は小型壺で口縁は短くやや外側に開くものと思われる。



第35図 第4層上面検出足跡実測図



第36図 第2～3層出土遺物実測図

281～283は須恵器である。281は短脚高杯の脚部で、スカシは円形で3方向に施す。282は杯H蓋で、口径13.7cm、器高4.5cmを測る。283は甕の口縁である。284は杯G身（奈良国立文化財研究所『平城宮跡発掘調査報告VII』に準拠）で、体部上半がやや開き、復元口径10.6cm、器高3.3cmを測る。

285～288は古代の土師器である。285は体部外面がハケメ、体部内面が板ナデの球形の甕である。286は下半が欠損しているので断定できないが、体部があまり張らないタイプと思われる。287は体部外面が細かいハケ、体部内面がケズリ、頸部内面がやや粗いハケ調整による長胴形の甕で、いわゆる河内型のものである。288は生駒西麓産の羽釜である。

289は中世の土師器である。器形は皿で、口縁端部には面取りがなく、体部は丸みを帯びたもので、おおよそ13世紀代のものと思われる。

290はふいごと思われるが時期は不明。表面には赤変・剥離が見られ、二次焼成を受けている。291は打製石鎌である。基部はわずかに膨らみをもつ平基式。石材はサヌカイトで、片面3分の1に自然面を残す。法量は、全長4.3cm、最大幅3.0cm、最大厚0.75cm、重量8.35gを測る。

他に細片であるため、図化できなかったが埴輪片と思われるものが1点だけ出土している。

第3層からは大量の古代以前の遺物と、ごく少数の中世の遺物が出土している。この層の時期は、洪水堆積層であることと、下層である第5層からは6～7世紀の遺物が出土していることなどから考えると、おおよそ中世と推測される。この点については、既往の鬼虎川遺跡第38・42・43次調査などの周辺の成果からもその妥当性が高く、後章（V-3）で詳述したい。

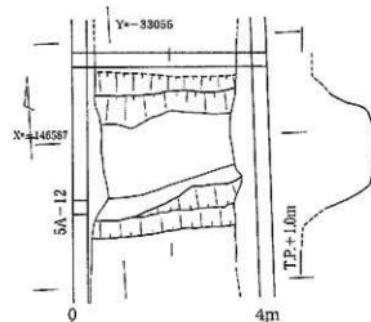
第3層上面の5A-12では溝2を検出した。溝

2は、南北幅3.6m、深さは1.1mの東西方向で、底面のレベルは西側が0.1m程低いので、西へ流下した可能性が考えられる。埋土は大きく見ると2層に掘えられる。下層は底面両端の第3層に由来すると思われる礫が多く混じるオリーブ黒色礫混粘土と、中央部の暗オリーブ灰色粘土が堆積している。このような堆積から、この溝が機能時には常に水が淀んだような状態であったものと推察できる。一方、上層は暗緑灰色礫混粘土で第2層と近い土質であることから、溝は廃絶期には埋められたものと考えられる。最終的には、この壅み状になった部分に第2層が堆積する。このように第2

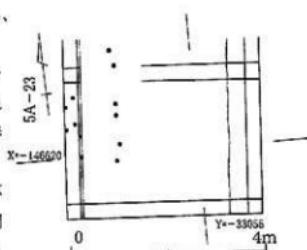
層は埋まつた溝と間層を挟むことなく堆積していることから、整地土的な性格が考えられる。

溝2出土遺物（図版83）溝の底面から牛の骨が肩甲骨を中心に出土した。耕作地に伴う溝では、動物遺体が埋置された状況で出土することがあり、農耕に関する祭祀・地鎮に伴うものと考えられている。

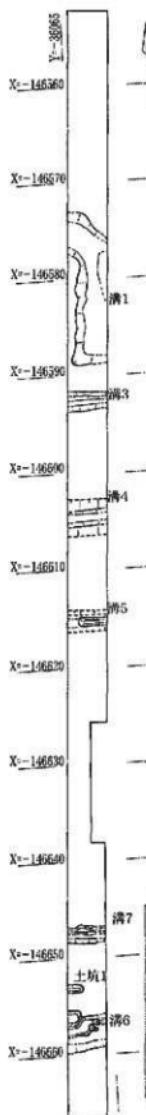
5A-23では、杭列を検出しているが、明確な遺構面は不明である。ただ、杭の上面のレベルがT.P.+1.0～1.4mの間にあり、近くとも第2層が堆積している間に打ち込まれたものと考えられる。この杭列は、西列と東列が約0.8mの間隔を



第37図 溝2実測図



第38図 第2～3層上面検出杭列実測図



もって、約2.5mの長さで検出した。この杭列の幅から考えると、畦の土留めに使用された可能性が想定されるが、確定はできない。

第2層は、5A工区南側、5B工区では擾乱・盛土により削平を受けているが、残存している5A工区北側では層厚が0.6~1.0mと非常に厚い黒色~オリーブ灰色中疊混粘土である。砂礫の割合が高く、またブロックを含んでいる所もあるので、第3層を搅拌しているものと思われ、耕作土もしくは先述したように整地土的な性格をもつものと考えられる。

第2層・2~3層出土遺物（第36図 図版73） 弥生土器・土師器・須恵器・瓦器碗・陶器等が出土している。292・294は第2~3層間、293・295は第2層で出土したものである。

292は土師器皿で、体部上半が外反するもので、13世紀後半~14世紀前半に相当する。

293は和泉型瓦器椀で、高台を有さないもので、土師器皿とほぼ同様の時期である。294は須恵器長頸壺の底部で、8世紀代のものと思われる。295はやや黒ずんだ部分があるが緑白色の透明な釉がかかった陶器である。胎土は軟質の白色の精良なものである。外面体部には、綾杉文をはさんで両側に9条の斜線が施されている。このような特徴から、細片であるが瀬戸・美濃系の鳥形水滴の可能性が考えられる。

第2層も第3層と同様に、古代以前の遺物が量的には多く出土している。

しかしながら、数点でも中世の遺物が含まれていることと、周辺の調査成果との対応から、おおよそ中世の幅で考えたい。

#### 近世~近代

近世以降の層としては、第0・1層が相当する。第0層は、近現代の盛土および擾乱である。第1層は、後述するように出土遺物が少なく中世に遡る可能性は否定できないが、近世以降の層と考えられる。遺構は、擾乱のため実際の遺構面は確認出来なかったが、第2層より新しい溝3~7、土坑1と、第1層より新しい溝1がある。ただ、前者の遺構を検出した地区では、擾乱により第1層が削平されているため、第1層との関係は不明である。また、第0~1層の間で5A工区北側の溝1付近の数ヶ所で杭列を検出しているが、近世~近代に打ち込まれたものと思われる。

第1層は、大部分が第0層による削平を受けているため、5A工区4~13のみ一部確認できたもので、層厚0.5m以上の黒色~灰黄色疊混粘土である。第2層を搅拌している部分があり、また比較的の穢が混じることから、人為的に堆積した層で耕作土的なものと考えられる。

第0~1層出土遺物（第41図 図版75） 第0層か第1層かは限定できないが陶磁器を1点確認した。

307は芭麦猪口で、高台と体部の境が明瞭な腰折形である。このように遺物の出土層位が明確でなくやや不安が残るが、本調査区西側の49次調査では今回の第1層に相当する層が近世期とされている。

次に遺構の説明に入るが、先述したように溝1以外は第1層より古いか新

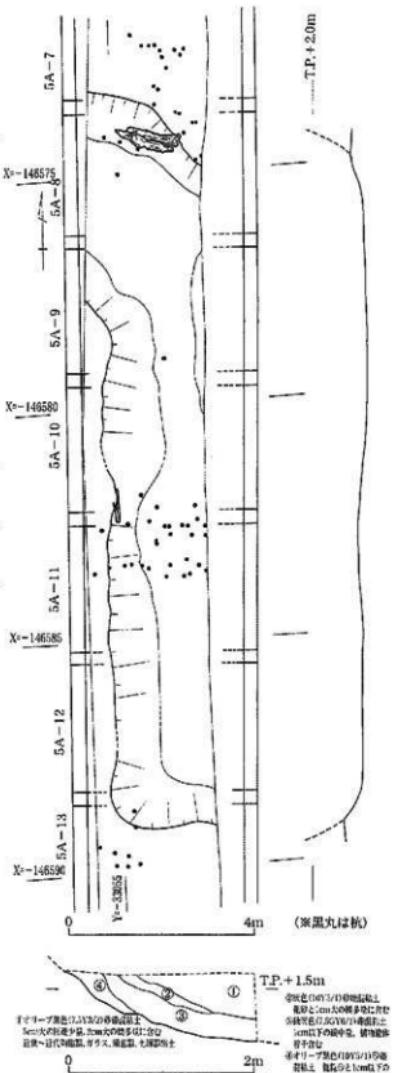
第39図 近世~近代検出  
遺構実測図

しいかどうかは層位的には判断できない。よって、5 A工区から造構番号順に記述していくことにする。

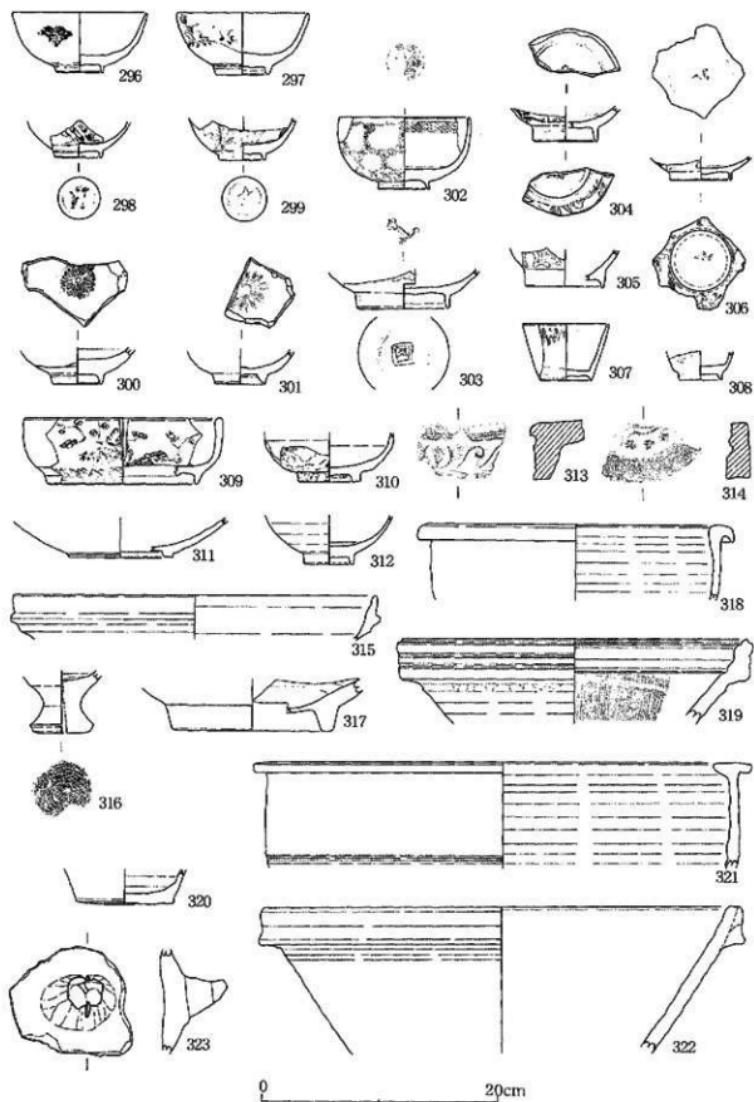
溝1は、5A-8~12で検出した。この溝は、その北側に西から南へ曲がるコーナー、南側に東へ曲がるコーナーがそれぞれ検出されているので、推定であるが南北に蛇行する部分であると思われる。仮にそのように考えると、溝の幅は北側の部分で約4.5m であったものと推定できる。しかし、西側に対応する東側の肩は検出されておらず、この部分の幅は不明である。また、溝の深さは検出面から1.0m、底面の高さは最低所でT.P.+0.8mである。断面形態は緩やかな逆台形状である。堆積状況は大きく2層に分かれ、上層はオリーブ黒色砂混粘土で2cm以上の比較的大きな礫が多く混じり、下層はオリーブ黒色～緑灰色砂礫混粘土である。上層は近世～近代の遺物を多量に含むので、堆積状況と合わせて考えると、廃絶時には溝というよりも廐棄場となっていた可能性が考えられる。下層は、それほど礫が混じらないが粘土であるので、水は淀んでいた状況であったものと思われる。

またこの溝1付近には、多くの杭が見られ、その分布から溝1北岸、中央部、南岸の3ヵ所のまとまりで捉えられる。杭の上面は第0～1層の間にあり、溝1よりも新しいものも含まれよう。北岸のものは溝の内側と外側に分布している。外側のものは規則的な配列ではなく、溝1との関連、その性格についても判らない。一方、内側のものは岸に沿って一列に打たれており、その岸側に長さ約1.5mの板を支えているものと見られ、護岸施設の可能性が考えられる。中央部は、東西方向に幅約1.0mの間隔をあけて南北両側にはぼ一列ずつ並ぶ杭列である。杭列は溝の内側だけでなく外側にもあり、溝1とは関係しない時期的に後のものである可能性が高い。仮にそう考えると、畦の土留めと思われる。南側のものは不規則な分布があるので溝1との関係、機能共に不明である。

溝1出土遺物(第41・42図34~45・47~64図版73~78) 近世~近代の陶器・瓦・ガラス瓶や、中世以前の土師器・須恵器がある。中世以前の遺



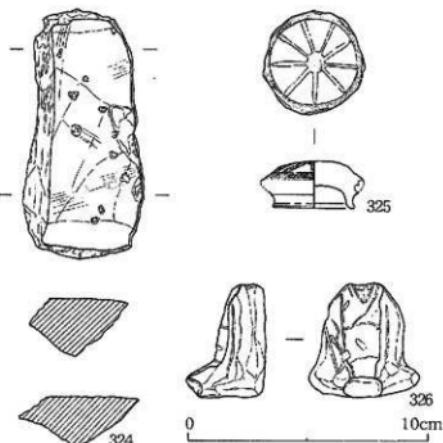
第40図 溝1実測図



第41図 溝1出土遺物実測図(1)

物は細片であったためほとんど図化できなかった。また、近代の遺物は特徴的なもの以外は図化をしていない。

296～306は肥前系磁器である。296～300は染付丸形碗である。296は内面見込みにアルミニウムを塗布していない蛇の目釉剥ぎが見られ、外表面にはコンニャク印判による桐葉文が施される。297は内面見込みにアルミニウムを塗布した蛇の目釉剥ぎが見られ、外表面には梅樹文が描かれる。298・299は共に判読不能の裏銘を有するもので、焼きが甘く釉の発色も悪い。300は内面見込みにコンニャク印判による圓圈を有した菊花文が施される。301は高台無釉の青磁碗で、内面見込みには菊花文を描くもので、17世紀中頃の伊万里と思われる。302は染付半



第42図 溝1出土遺物実測図(2)

球形碗で、高台はややバチ状に開くものである。303はやや大型の碗の底部である。内面見込みは筆書きによるもので、裏銘は太い圓線の中に判読不能のものを描く。304・305は広東碗である。304は内面見込みに二重圓線の内にコンニャク印判による五弁花、高台内に圓線の内に判読不能の裏銘を描いている。305は304に比べると直線的な高台を持つものである。306は器壁が3～5mmと薄い染付碗である。内面見込みと高台内共に、おそらく筆による同種の文様が描かれている。308は薔薇猪口である。307は高台が体部に明瞭な境のない桶形のものである。これらの肥前系磁器の多くは、その特徴から伊万里と限定できる301を除いて、全体的に釉および呉須の発色が鈍いことから、18世紀後半～19世紀前半の波佐見と思われる。

309・310は瀬戸・美濃系陶磁器である。309は酸化コバルトを顔料とした染付鉢で、19世紀後半のものである。310は外面が白色と褐色の釉を掛け分けた陶器茶碗で、内面は緑白色のガラス質の釉がかけられたものである。

311・312・318は灰釉系陶器であるが、それぞれ特徴があるため、产地が同一であるかも判らない。311・312は精良な胎土を硬質で灰色に焼かれている。311は平鉢で、外面は無釉であるが、内面は緑青色の釉がかけられている。312は丸碗で、高台内面を除き緑白色で一部コバルトの釉が薄くかけられ、内面見込みは釉剥ぎされている。318は胎土は粗く軟質で、灰白色の釉がかけられたもので、器形は不明であるが深鉢であろうか。

313・314は瓦である。313は均整唐草文軒平瓦である。314は巴文軒丸瓦で、珠文は径1.1cmである。他に図化していないが、近世以降の道具瓦の破片や、丸瓦も出土している。

315・316は土師質土器である。315は炮烙で、口縁部が短く直立し、その下間に突帯を有するものである。316は脚付秉揚である。糸切底のもので、焼成後に黒褐色の顔料を塗布している。

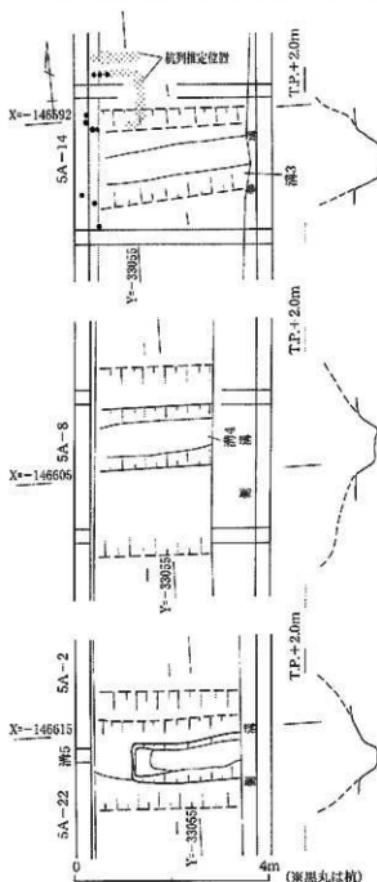
317・322は陶器鉢である。317は高台の付く底部で、胎土はやや粗く赤色、焼成は甘く軟質のものである。内面には白土がかけられた黄灰色の刷毛目文様が描かれている。322は断面が赤色、内外面が暗赤褐色の色調を呈し、口縁外側頸部が大きく張り出るものである。器形的には19世紀後半の大谷

焼の鉢に類似するが、断定できない。

319は備前摺鉢である。色調は断面が灰赤色、内外面が暗赤褐色を呈する。口縁外面頸部の張り出しが顯著ではあるがならだかで、口縁端部は上方に鋭く突出する。摺目は14本／2.8cmの単位で施されている。これらの特徴から、おおむね17世紀のものと考えられる。

320・321は褐釉系陶器である。これらは、白色でやや粗く軟質の胎土であること、釉が褐色で類似するものであるといった共通する特徴をもつたもので、同一個体の可能性も考えられるが断定できない。320は底部であるが、底面外側には釉がかけられていない。321は口縁端部が内外に大きく拡張して上方に面をもち、上方から8cmの所に1条の沈線を有する破片であるが、おそらく甕と思われる。

323は土師器皿の把手で、5世紀前半のものである。



324は粘板岩製の砥石である。砥石として利用した面は1面のみで、非常になめらかである。その他の面は、図の上方は折れているが、他は自然面を残している。

325は青磁蓋である。口径3.4cm、器高1.9cmと非常に小さなもので、何に相当するものかは判らない。釉は外腹天井部のみかけられ、ヘラガキにより8つの花弁状に施されている。

326は土師質の土人形で、空洞部はない。頭部は欠損しており、おそらく故意に取られたものと思われる。全容は不明であるが、男子が座った姿を表現したものである。

以上の図化したもの以外に、19世紀後半以降と思われる酸化コバルトを顔料とした瀬戸・肥前系等の陶器なども多く出土している。また、ガラス瓶の底部やスギ材・マツ科モミ属材などの加工板も出土している。

このように、溝1からは中世以前の遺物を含みながらも、主に18世紀後半～19世紀後半の陶磁器・瓦を中心としている。このことは、後に検討するよう、本調査区付近では1908～1911年にかけての耕地整理によりいわゆる掘り上げ田の溝(井路)が造成を受けて消滅したことによると合致している。

以下、説明する溝3～7、土坑1は第2層よりも新しいことは確実であるが、削平のため第1層との関係は不明である。溝3は、5A-14で検出した。溝は東西方向を指向するもので、全長は調査区外に及ぶので不明であるが、幅は2.0m、深さは検出面から1.2m、底面の高さはT.P.+0.4mである。断面形状は、北側に1段のテラスがある逆台形状である。堆積状況は大きく捉えると均質的

第43図 溝3～5実測図

な土質で、暗オリーブ灰色粘土が非常に厚く堆積しており、一気に埋められた可能性がある。出土遺物はない。

この溝3の周囲には、多くの杭を検出している。これらの杭の上面は溝1のものと同様の高さである。特に、溝5北岸東側には圓い状に配列された杭列がある。その用途は現状からは決めがたいが、杭の検出レベルとその分布からは溝3が埋まつたあとに構築されたものと考えたい。

溝4は、5A-18で検出した。溝は同様に東西方向を指向し、全長は不明であるが、幅は3.2m、深さは検出面から0.9m、底面の高さはT.P.+0.7mである。断面形態は、南側に長さ1.6mのゆるやかなテラスがある逆台形状である。堆積状況は大きく2層に分かれ、上層がオリーブ黒色砂混粘土で、下層は両端が暗オリーブ灰色シルト混砂砾、中央部がオリーブ黒色シルト質粘土である。この状況は溝2と類似し、下層が溝機能時の埋土に相当し、常に水が淀んでいた状況であったと推定できる。一方、上層が廃絶時に相当するのは埋められたものと考えられる。出土遺物は弥生土器片のみである。

溝5は、5A-21で検出した。溝はやはり同様に東西方向のもので、全長不明だが、幅は2.5m、深さは東に向かって2段に落ちているので、検出面から西側が0.5m、東側が0.9m、底面の高さはそれぞれT.P.+0.8m、T.P.+0.5mとなっている。断面形態は、西側では逆台形状で、東西に2段落ちになっている東側では上部は緩やかであるが底面付近のみ逆台形状になっている。堆積状況は、2層に分かれ、上層が暗オリーブ灰色細粒砂混粘土で、下層が暗緑灰色細粒砂である。今までの溝に比べると、下層の砂の割合が高いので若干水が流れている可能性が考えられる。しかし、上層は他とそれ程差がないので最終的には埋められたものと思われる。

溝5出土遺物（第44図 図版78）土師器皿が出土している。327はその形態から13世紀代の土師器皿である。ただ、この遺物は溝の検出層位から考えると、直接的な年代を示すものとは思われない。

溝6は、5B-3・4にわたって検出した。溝は東西方向を指向するもので、全長は不明であるが、幅は北岸の西側が4.5mであるが、東に1.0mいった地点で南へ直角に0.5m内側に入り、検出部分の東端では3.5mとなる。この北岸の屈曲部では、底面に向かっておむね3段の平坦面がある段々状となっている。これは溝の底面に下るために階段的な役割を果たした可能性が考えられる。

さて、この溝の堆積状況であるが、第22図に示したように各層の土質は多くの砂礫が混じる①・③・⑤・⑦層と、砂礫のみの⑥・⑧層、そしてほとんど砂礫が混じらない②・④層で構成されている。これまで記述してきた溝から考えると、前1者が廃絶時、後2者が機能時の堆積を表しているものと思われる。そのように考えると、この溝には現状では大きく3時期の変遷があったことが推察できる。

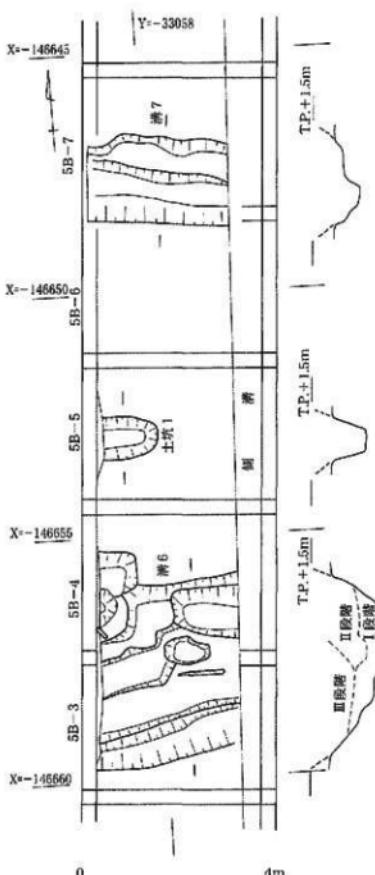
まず、一番初期の溝は⑤～⑧層に対応し、その底面の高さはT.P.+0.2mである。断面形態は、北側に約1.0mの平坦面をもつ二段掘りとなっている。その堆積は、砂礫のみの⑧層が下層に薄くあることからすると、若干水が流れているような状況であったものと思われる。その後、砂礫が混じる⑤・⑦層が堆積したものと思われる。時期については、⑦層の肩が第3層上面に対応していることから、先述したように溝2と同時期、つまり中世まで遡ることになる。後述するがこの段階に出土した遺物に、およそ15～16世紀と推定される卒塔婆や用途不明の板状製品、動物遺体がある。

次の段階は、③・④層に対応し、その底面の高さはT.P.+0.4mである。断面形態は、東西中央部に幅0.7mの落ち込みがある二段掘りとなっている。この落ち込みに礫の混じらない④層が堆積していることから考えると、水は常に淀んでいたのであろう。そして、その後⑤層が堆積するのであるが、多くの砂礫だけでなくシルトブロックも含んでいるので、人為的に埋めた可能性も考えられる。

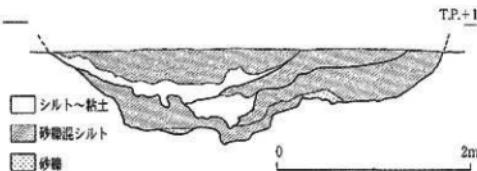
最後の段階は、①・②層に対応し、その底面の高さはT.P.+0.6mである。断面形態は、底面は緩



第44図 溝5出土  
遺物実測図



第45図 溝6・7、土坑1実測図



第46図 溝6断面実測図

やかに丸くなっている。堆積状況は、③・④層の段階と酷似するので、滞水的な②層が堆積した後、①層により埋められたものと考えられる。この段階に出土した遺物としては、重圓文軒丸(328)があるが直接的に年代を示すものとは考えられない。

溝6出土遺物(第48図 図版74・81・82)須恵器・土師器・軒丸瓦・板状木製品・卒塔婆・大型哺乳類骨があるが、土器類には図化ができるものはなかった。

328は三重圓文軒丸瓦である。各部の法量は、瓦当径13.3cm、瓦当厚3.5cm、内区径10.9cm、第1圈内径2.5cm、第2圈内径5.3cm、第3圈内径9.0cm、外縁幅0.9cm、外縁高1.3cmを測る。胎土は生駒西麓のものではない。法量は0.1~0.2cm程度の誤差はあるが、難波宮跡の軒丸瓦6012型式に相当するものと思われる。また、本調査区東方約500mに位置する法通寺跡から同型式のものが出土しており、本来は同寺跡のものであった可能性が考えられる。

329は板状木製品である。法量は、残存長34.2cm、最大幅7.1cm、最大厚1.2cmを測る。下半には目釘穴、鉄製工具によると思われる長さ2.0cm程の横方向の線刻が見られる。スギ材。

330は木製卒塔婆である。下半は欠損しているため、法量は残存長96.8cm、最大幅8.5cm、最大厚0.9cmを測る。頭部は五輪塔形で、基部との境は抉りを入れることで画しており、その長さは27.7cmを測る。スギ材。五輪塔部の表現は一応それを模しているが、空風輪部が他の部位よりもはるかに大きいこと、風輪部と火輪部はほぼ同形の台形状のものを相対させることで表現しており、本来の五輪塔とは異なっている部分がある。また、

全体的に各部位の表現は不明瞭と言える。墨書きが片面のみであるが記されており、五輪の塔部には胎藏大日真言を表わす五大種子「**ナ・ニ・タ・テ・タ**」(真言)が、基部には上方右に「是口」、下方右に「□□□□□法家加」、下方中央に「正」が残存している。基

部の墨書の意味は残存文字が少ないため判らないが、墨書の配列・位置から、文字が上方では2行、下方では3行にわたって記された可能性が考えられる（墨書の判読は、木下密運・水野正好・渡辺晃宏3氏の御教示を賜つた）。この卒塔婆は、西本安秀氏の研究（「木製卒塔婆の変遷と用途に関する一考察」『網干善教先生古稀記念考古学論文集』1998年）を参考にすると、その幅・厚さから考えると16世紀代の可能性が高いが、記年銘がないので断定はできない。ただ、地輪部が基部から区別されているが、やはり五輪塔の各部の表現がそれほど明瞭ではないことから、15～16世紀という時期幅で捉えられる。

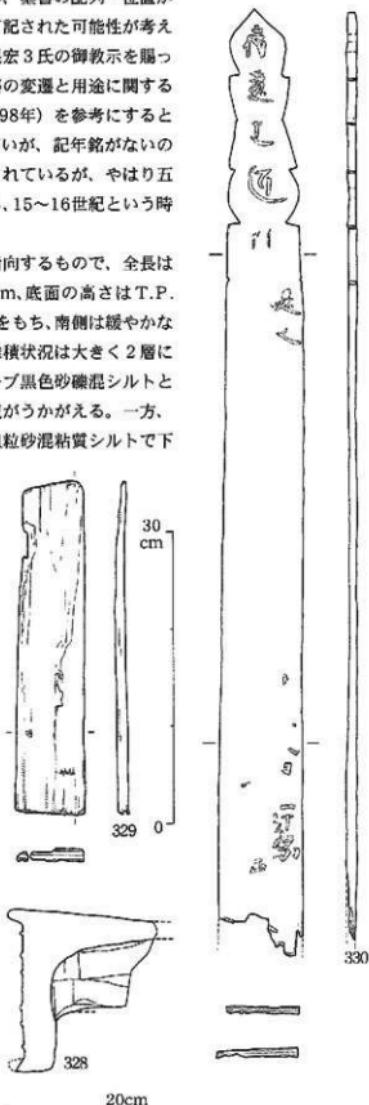
溝7は、5B-7で検出した。溝は東西方向を指向するもので、全長は不明であるが、幅1.2～1.4m、深さは検出面から0.5m、底面の高さはT.P.+0.5mである。断面形状は、北側が0.5mの平坦面をもち、南側は緩やかなテラスをもつ2段掘りの逆台形状となっている。堆積状況は大きく2層に分かれるが、今までの溝に比べると、下層がオリーブ黒色砂礫混シルトと砂礫が多く混じっており、水が若干流れている状況がうかがえる。一方、上層はさらに2層に分かれ、両端がオリーブ黒色粗粒砂混粘質シルトで下層に近いが、中央部が灰オリーブ色シルトでそれほど砂礫は混じらない。この上層中央部の埋土から考えると、この段階は水が淀んでいた状態であったものと思われる。細片であるため実測出来なかったが、黒色土器B類が出土しているが、この溝の上限を示しているかは言えない。

土坑1は、5B-5で検出した。西側が調査区外に当たり全容が不明であるが、先述してきた溝と同様に東西方向を指向するようである。幅は0.7m、深さは検出面から0.8m、底面の高さはT.P.+0.3mを測る。断面形状は、ほぼ直線的に落ちる逆台形状を呈する。堆積状況は、3層に分かれるがやや砂礫の混じるシルトである。現状では、土坑の性格・用途は判断しがたい。出土遺物はない。



0 10cm

第47図 5B-9付近  
出土遺物実測図



第48図 溝6 出土遺物実測図

5B-8・9付近採集遺物（第47図 図版78）

排水スペースのため開削区外とした場所であるが、近世陶磁器・瓦等を数点採集した。

331・332は肥前系磁器である。331は白磁の丸形碗、332は染付の丸形碗で内面見込みは蛇の目釉剥ぎを施し、その部分には白濁したアルミナを微布している。いずれも18世紀後半のものである。また、図化していないが、19世紀後半と思われる酸化コバルトの顔料による染付碗や、瓦も數点見られる。

これらの遺物は、溝1のものと同様のものであり、当該期の造構があった可能性が考えられる。後章（V-3）で述べるが、明治30年作成の地籍図（第59図）にはこの場所に東西方向の掘り上げ田の井路溝が描かれており、この想定を裏付けている。

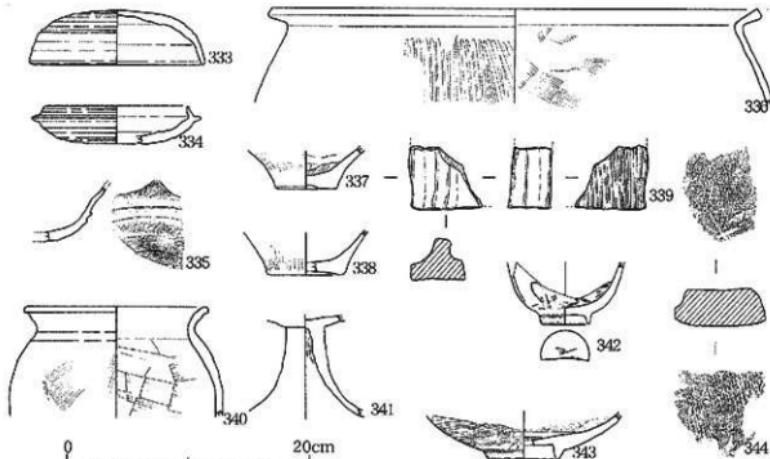
第0～1層で検出した遺構で、明確に時期決定ができたものは溝1のみである。ただ、溝6は掘り直しの痕跡から中世に遡る可能性が指摘できた。鬼虎川遺跡周辺では近世に多くの掘り上げ田の井路が掘削されており、従来から近世期の溝はこれに相当するものと考えられていた。後章（V-3）では、周辺の調査成果と併せてこれら近世期の溝について検討する。

側溝等出土遺物（第49図 図版79）

側溝等で出土したため、具体的な層位が不明な遺物で、特徴的なものを図化した。

333～335は須恵器である。333は杯H蓋である。法量は、復元口径14.2cm、器高4.5cmを測る。334は杯H身である。法量は、復元口径11.6cm、器高3.0cmを測る。335は無蓋高杯杯部である。体部外面には、2条の突線、その下方に波状文（6本/0.6cm）を施したものである。

336～338は弥生土器である。336は甌の口縁である。口径39.8cm。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は肥厚する。外面は体部が縱方向のヘラミガキで、口縁はヨコナデ調整。内面は体部がナナメハケ（4条/cm）、口縁はヨコナデを施す。胎土は雲母と角閃石を多く含む生駒西麓のものである。時期は畿内第Ⅲ様式である。337は蓋ないしは鉢の底部である。底径4.6cm。底面中央が凹むドーナツ形となっている。外面はタテハケ（8条/cm）、底部付近はナデを施す。内面は摩滅が激しく、ハ



第49図 側溝等出土遺物実測図

ケの小口痕跡しか観察することができない。胎土は非常に精良で、石英・長石・雲母・クサリ礫がわずかに混じる程度であり、生駒西龍のものではなく、河内平野低湿地の可能性がある。時期は畿内第V様式である。338は壺の底部である。底径6.0cm。底面は若干凹む上げ底である。外面は粗いタテハケ（3条/cm）で、内面は摩滅が激しく調整不明である。胎土は石英・雲母・チャートを含み、長石とクサリ礫をわずかに含むのみで、生駒西龍のものではない。

339～341は土師器である。339は竈の裾にあたるものと思われる。類例に若江遺跡第38次調査のものがあり、時期的には12～13世紀である。340は体部が球形をなす壺である。調整は外面ハケメ、内面板ナデにより、7世紀後半～8世紀前半のものである。341は古墳時代の高杯脚部である。

342は肥前系磁器碗である。器形は染付丸形碗で、釉は光沢がない灰白色を呈し、体部には梅樹文を施し、底部の裏銘は判読不能のものである。343は肥前系陶器皿である。断面は褐灰色で、体部内外面には白土による刷毛目が施される。内面見込みには蛇の目輪剥ぎが見られる。

344は軒平瓦である。凹面には布目、外面には繩叩き目が見られる。

#### C. 小結

1. 造構検出の最終ベース面（第14層上面）において、弥生時代前期相当期の溝3条と2ピットを検出した。
2. 第13層上面で弥生時代中期の溝1条、2ピットと3本の杭を検出した。
3. 第11～13層は弥生時代中期前・中葉の遺物包含層で、特に5B地区の第12層では壺・壺・蓋などが散乱した土器溜りを確認した。
4. 5A地区南部から5C地区の第10層上面において弥生時代中期中葉ごろの東西に延びる自然流路に伴う砂礫層を検出した。
5. 自然流路の砂礫層をも覆う第9層からも弥生時代中期前・中葉の土器片が出土した。
6. 第8層の植物遺体層（腐植土層）から庄内式土器の甕片1点とともに砥石・木製品などが出土した。
7. 第7層からは高杯などの布留式土器片が出土した。
8. 第5層は須恵器片などが出土し、第6・7層を搅拌した古墳時代後半ごろの人為的な層である。
9. 第4層は自然堆積の粘土で、5B地区ではその上面で鎌倉時代ごろの人などの足跡を検出した。
10. 第3層は鎌倉時代の洪水による砂礫層であるが、石塙・弥生土器・土師器・須恵器など古代以前の遺物を多く包含していた。
11. 5A地区的第3層上面において東西方向に延びる宝町時代ころの1条の溝（溝2）を検出した。
12. 第2層は砂礫混じりの粘土で瓦器椀・陶器片などが出土し、宝町時代後半から末の整地または耕作に伴う層と考えられる。
13. 第1層の大半は道路建設時の搅乱などでほとんど削平されていたが、江戸時代以降の耕作土で磁器片が出土した。
14. 第1ないし2層上面において、鉤状に屈折する溝1条（溝1）と東西方向に走る5条の溝（溝2～6）および土坑1基を検出した。これらの造構は江戸時代以降のもので、大半は明治時代後半までつづいた掘り上げ田に伴う井路である。
15. 5B地区で検出した溝6は掘り返しなど2時期にわたり、下層の中世後半の堆積層内からは木製塔婆や三重圓文軒丸瓦などが出土した。

## IV. 自然科学

### 1. 動物遺体の同定

大阪市立大学医学部 安部 みき子

今回動物遺体が出土した遺構の年代は中世が主であるが、わずかに弥生時代以前の包含層も含んでいる。中世の遺溝は3カ所あり、14から15世紀の砂礫で覆われた溝(3A工区)、粘土質が堆積した14世紀以前の溝(3A・4B工区)と同様に14世紀以前の溝で粘土質が堆積した5工区である。動物遺体はウマ、ウシ、イヌの家畜種と野生種のシカ、ネズミとスッポンである(第4表)。

3A工区の遺溝からはイヌとウマのみ出土し、出土数は8点と少ないが、ウマは右の距骨が2点出土し、最小個体数は2で、動物遺体の中で最も多かった(第5表)。これらの骨が出土した砂礫層は洪水等で他地域から流入した可能性があり、形態や大きさから見ても流れやすいイヌの骨格やウマの椎骨、距骨が流されて堆積したとも考えられる。イヌとウマの骨計測値から体格を推定した。イヌは下顎骨が計測できその計測値(第6表)を八尾市亀井遺跡出土の弥生犬と比較した。中型犬でメスの亀井2号犬の下顎骨全長が123.3mmで本遺跡のイヌの方が約2mm小さく、中型犬のなかでも小さい方に分類される。ウマの距骨の最大高(第8表)から林田(1957)の推定式で体高を推定すると、資料番号11が118.03cm、資料番号13が105.15cmで、両方ともに小型馬と思われる。

3B・4工区の遺溝からはウマ、ウシ、シカ、ネズミ、スッポンと多くの種が出土している。

ウマの出土部位は下顎骨や椎骨、上腕骨や脛骨などほぼ全身におよんでいるが同一個体であるかどうかの確認は出来ない。下顎骨の保存は良く、左はほぼ完全な形であり右は第1大臼歯から後ろが破損している。左側の歯は全て釘植しており、右側は第1大臼歯までの全ての歯が残存し臼歯は釘植していた。臼歯列の摩耗は特異な形で、左右ともに第4小白歯の遠心面と第1大臼歯の近心面が最も高く第2小白歯と第3大臼歯が低くなる山状であった。このような摩耗面を呈する原因是不明であるが、年齢や食性と関係あるのかもしれない。この個体は摩耗が大きいことより老齢と推定される。下顎骨全長(第6表)から体高を推定した値は115.2cmで、3A工区の溝から出土したウマと同様、小型馬に分類される。中世のウマは体高110cmから120cmの小型馬が一般的であったとされ、本遺跡のウマもその範囲内である。ウシの出土はこの遺溝では少なく、臼歯のエナメル質と大腿骨、中足骨のみであったが、中足骨は骨計測が出来た(第8表)。シカは角の破片のみ出土し、骨格は出土していない。大型のネズミの大脛骨が出土し、遠位端が未発達で若い個体である。日本の野生種で大型のものはドブネズミとクマネズミのみであるが、この2種の同定は若い大脛骨では困難である。スッポンは肋骨板が1片のみ出土し、食用であるか自然に混入したものかどうかは不明である。

5工区の遺溝から出土した骨の保存状態は良く、種の同定ができた5点はすべてがウシであった。特に左肩甲骨と左中足骨はほぼ完全な形で出土し計測が可能であった(第8表)。左中足骨の上関節面の周囲には骨増殖がみられ、加令性によるものと思われ、老齢であったと推察される。中世のウシについての研究はあまりなされていないため、骨計測値(第8表)から体格の復元は出来なかった。残りの3点は破損が大きく、種の特定は出来なかった。

弥生時代以前の包含層から海面質状をした骨片のようなものが出土している。これは骨かどうか不明であるが、もし骨片であれば海面質の形質がクジラに近い。

参考文献 林田重幸 1957 馬における骨長より体高の推定、鹿児島大学農学部学術報告 6: 146-15  
宮崎泰史 1982 亀井遺跡のイヌについて、亀井遺跡 205-230

第4表 鬼虎川遺跡出土の哺乳類の同定表

資料番号	報告番号	種名	出土部位		計測値および備考
			左右	部位名	
11	427	ウマ	右	距骨	表5
13		ウマ	右	距骨	表5
20	424	ウマ	-	第1胸椎	椎体の前半分破損 表4
31		中型哺乳類	左	上腕骨	両骨端破損
34	413	イヌ	-	第1腰椎	表4
40	411	イヌ	右	下顎骨	第4小白歯以外は全て針歯 第4小白歯は脱落後歯槽閉鎖
41	412	イヌ	-	第5頸椎	表4
75		ウマ	-	後位の胸椎	
127		ウシ	不明	臼歯	エナメル質のみ残存
135		ウシ	左	中足骨	第4中足骨頭破損 表5
136	426	ウマ	左	踵骨	表5
145	423	ウマ	-	第3?胸椎	表4
154	428	ウマ	左	脛骨	表5
154		不明			
160	419	ウマ	左	上腕骨	表5
162		ウシ	左	大腿骨	両骨端破損
163		ウシ	右	中足骨	両骨端破損 表5
163		ウマ	左	上顎臼齒	
166		ウマorウシ	-	腰椎	
175	425	ウマ	右	寛骨	腸骨と寛骨臼残存
183	415	クマネズミorドブネズミ	右	大腸骨	遠位端未癒合
271-1	421	ウマ	左右	下顎骨	左は筋突起先端のみ破損 右は第1小白歯以降破損 表3
271-2	429	ウマ	右	基節骨(足)	表4
271-3	422	ウマ	-	軸椎	歯突起と椎体の前部のみ残存 表4
271-4		シカ	不明	角	表面研磨?
275		不明		骨片	
288	414	スッポン	不明	肋骨板	
5032	416	ウシ	右	肩甲骨	背縫破損 表5
5032		ウシ	左	肩甲骨	表5
5032	417	ウシ	左	脛骨	表5
5032	418	ウシ	不明	末節骨	
5035	420	ウシ	左	中足骨	近位関節面の周囲に加令性の骨増殖 表5
5052		大型哺乳類	不明	長骨片	
5071		大型哺乳類	右	脛骨	両骨端破損
5223		大型哺乳類	不明	長骨片	
5230		不明		骨片?	

第5表 哺乳類の出現頻度表

	角	3A工区		3B・4工区			5工区
		イス	ウマ	ウマ	ウシ	シカ	ネズミ
下頸骨	右	1		1			1
	左			1			
軸椎				1			
第5頸椎		1					
第1胸椎			1				
第3？胸椎				1			
第1腰椎		1					
肩甲骨	右						1
	左						1
上腕骨	左			1			
寛骨	右			1			
大腸骨	右				1		
	左						
脛骨	左			1			
距骨	右	2					
踵骨	左			1			
中足骨	右				1		
	左				1		
基節骨(足)	右			1			

第6表 下顎骨の計測表

資料番号	41			271		
	種名	イス		ウマ		左
		左右	右	右	右	
下顎骨全長(1) id-goc			121.81	—	359.50	
			122.78	—	379.00	
			41.15	—	109.00	
			96.07	—	265.19	
			80.94	—	253.51	
			59.89	—	—	
			54.67	—	158.12	
			—	77.36	80.26	
			27.45	—	78.46	
			24.75	—	208.03	
			26.63	—	97.22	
			21.31	—	68.03	
			18.97	43.08	43.36	
			10.09	—	23.61	
			9.06	—	—	
			7.66	—	—	
			17.00	—	—	
			7.52	—	—	
			26.35	—	—	
			13.18	—	—	

単位はmm

第7表 椎骨の計測表

資料番号		34	41	20	145	271
種名		イス	イス	ウマ	ウマ	ウマ
軸椎	前椎突起					76.21
第5頸椎	前関節突起間最大幅	30.69				
	後関節突起間品大根	28.36				
	前後関節突起間最大長	29.52				
	椎体中央長	20.53				
	前椎高	25.15				
第1胸椎	前関節突起間最大幅	75.59				
	後関節突起間品大根	60.95				
	前後関節突起間最大長	59.94				
	横突起最大長	91.12				
	胸椎高	112.75				
第3?胸椎	前関節突起間最大幅	29.21				
	後関節突起間品大根	25.49				
	前後関節突起間最大長	50.92				
	横突起最大長	71.17				
	椎体中央長	38.88				
第1腰椎	後関節突起間最大幅	12.29				
	前後関節突起間最大長	32.05				
	肋骨突起最大長	36.32				
	椎体中央長	22.06				
	椎体最大幅	17.46				
	椎体高	12.38				
	前椎高	32.75				

単位はmm

第8表 四肢骨の計測表

資料番号	11	13	136	154	160	271	135	163	5032	5035
種名	ウマ	ウマ	ウマ	ウマ	ウマ	ウマ	ウシ	ウシ	ウシ	ウシ
左右	右	右	左	左	左	左	右	右	右	右
肩甲骨	最大高								—	355.50
	肩甲骨最小径								50.26	51.07
	関節窓長								—	60.26
	胸節部	関節部長							—	69.22
	関節窓幅								—	49.39
	後縁長								—	315.00
上腕骨	背縫長								—	178.57
	屈大長（肩頭から）				244.06					
	中央	矢状径			37.54					
		横径			31.22					
	遠位端	矢状径			71.08					
		横径			69.25					
脛骨	最大長					—				334.00
	外側長					—				294.80
	近位端	矢状径			—					—
		横径			—					37.23
	中央	矢状径			—					40.81
		横径			39.32					45.40
距骨	遠位端	矢状径			63.55					39.60
		横径								
	最大高	54.51	49.11							
	最大幅	54.13	48.71							
	内側滑車長	51.87	47.43							
	後関節面幅	47.31	42.65							
中足骨	最大幅			44.31			203.70			
	最大長					—				
	近位端	矢状径				38.17				
		横径				43.60				
	中央	矢状径				—				24.78
		横径				—				—
基節骨(足)	遠位端	矢状径				—				
	最大長					74.89				

単位はmm

## 2. 樹種および植物遺体の同定

東大阪市鬼虎川遺跡出土木製品等の樹種同定調査結果

(株)吉田生物研究所 沙見 真

京都造形芸術大学 岡田 文男

### 1. 試料

試料は東大阪市鬼虎川遺跡から出土した農具2点、服飾具2点、食事具1点、建築材3点、祭祀具1点、文房具1点、加工材14点、自然木4点の合計28点である。

### 2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

### 3. 結果

樹種同定結果（針葉樹5種、広葉樹5種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

#### 1) イチイ科カヤ属カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.)

（遺物No.10,20）

（図版86、写真No.1）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。晩材部は狭く年輪界は比較的不明瞭である。軸方向柔細胞を欠く。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～4個ある。仮道管の壁には対になった螺旋肥厚が存在する。板目では放射組織はすべて単列であった。カヤは本州（中・南部）、四国、九州に分布する。

#### 2) マツ科モミ属 (*Abies* sp.)

（遺物No.4,22,24,27）

（図版86、写真No.2）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで晩材部の幅は狭い。柾目では放射組織の上下縁辺部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射柔細胞の壁は厚く、数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個ある。板目では放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ、モミ、シラベがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

#### 3) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D.Don)

（遺物No.2,6,9,21,23,25,26,31）

（図版86、写真No.3）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

#### 4) ヒノキ科ヒノキ属 (*Chamaecyparis* sp.)

（遺物No.3,7,8,11,12,28,29）

（図版87、写真No.4）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州（福島以南）、四国、九州に分布する。

#### 5) ヒノキ科アヌラ属 (*Thujopsis* sp.)

（遺物No.1,13,14）

（図版87、写真No.5）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ(ヒバ、アテ)とヒノキアスナロ(ヒバ)があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

6) プナ科シイ属 (*Castanopsis* sp.)

(遺物No.18)

(図版87、写真No.6)

環孔性放射孔材である。木口では孔圈部の道管(~300 μm)は単独でかつ大きいが接線方向には連続していない。孔圈外に移るにしたがって大きさを減じ、放射方向に火炎状に配列している。柾目では道管は單穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型で横状の壁孔がある。板目では多数の単列放射組織が見られる。シイ属にはツブライジとスダジイがあるが、ツブライジに見られる集合~複合放射組織の出現頻度が低く、両者の雑種もあるので区別は難しい。シイ属は本州(福島、佐渡以南)、四国、九州、琉球に分布する。

7) プナ科コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.)

(遺物No.17)

(図版88、写真No.7)

放射孔材である。木口では年輪に関係なくまちまちな大きさの道管 (~200 μm) が放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に1~3細胞幅の独立帶状柔細胞をつくっている。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織はおむね平伏細胞からなり、時々上下縁辺に方形細胞が見られる。道管放射組織間壁孔は大型で横状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の塊の間に道管以外の軸方向要素が挟まれている集合型と複合型の中間となる型の広放射組織が見られる。アカガシ亜属はイチイガシ、アカガシ、シラカシ等があり、本州(宮城、新潟以南)、四国、九州、琉球に分布する。

8) ニレ科ケヤキ属ケヤキ (*Zelkova serrata* Makino)

(遺物No.5,15)

(図版88、写真No.8)

環孔材である。木口ではおむね円形で単独の大道管(~270 μm)が1列で孔圈部を形成している。孔圈外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圈部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している(イニシアル柔組織)。放射組織は1~数列で多数の筋として見られる。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚を持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少数の1~3列のものと大部分を占める6~7細胞列のほぼ大きさの一様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

9) ツバキ科ナツツバキ属 (*Stewartia* sp.)

(遺物No.16)

(図版88、写真No.9)

散孔材である。木口では中庸の道管 (~140 μm) が単独ないし2~4個複合して分布する。柾目では道管は階段穿孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔はレンズ状の壁孔が階段状に並んでいる。板目では放射組織は1~3細胞列、高さ~400 μmからなる。ナツツバキ属はナツツバキ、ヒメシャラがあり、本州、四国、九州に分布する。

10) ツツジ科スノキ属シャシャンボ (*Vaccinium bracteatum* Thunb.)

(遺物No.19)

(図版89、写真No.10)

散孔材である。木口ではきわめて小さい道管（～ $50\mu\text{m}$ ）が単独あるいは2～3個複合して散在する。柾目では道管は單穿孔、階段穿孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は凸レンズ形を呈する直立細胞の単列のものと、5～8細胞列で高さがきわめて高い多列放射組織（～2mm以上）からなる。多列部には精細胞が見られる。シャシャンボは本州(関東南部、東海、石川以西)、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版 (1988)

島地 謙・伊東隆夫 「図説木材組織」 地球社 (1982)

伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I～V」 京都大学木質科学研究所 (1999)

北村四郎・村田源 「原色日本植物図鑑木本編 I・II」 保育社 (1979)

深澤和三 「樹体の解剖」 海青社 (1997)

◆使用顕微鏡◆

Nikon

MICROFLEX UFX-DX Type 115

第9表 東大阪市鬼虎川遺跡出土木製品等樹種同定表

No.	報告	品名	樹種
1	60	近世(17～19世紀)	ヘラ状 ヒノキ科アスナロ属
2	120	中世(15～16世紀)	草履状 スギ科スギ属スギ
3		中世(15～16世紀)	下駄 ヒノキ科ヒノキ属
4	63	中世(13～16世紀)	柱材 マツ科モミ属
5	115	中世(13～16世紀)	蘿桁の脚?
6	114	中世(13～16世紀)	蘿桁 スギ科スギ属スギ
7	119	中世(15～16世紀)	荷札?
8	264	古代(古墳時代～)	加工棒 ヒノキ科ヒノキ属
9	329	中世(15～16世紀)	加工板 スギ科スギ属スギ
10	220	弥生時代中期	加工板 イチイ科カヤ属カヤ
11	266	弥生時代後期	加工木 ヒノキ科ヒノキ属
12	267	弥生時代後期～古墳時代初頭	加工板 ヒノキ科ヒノキ属
13	257	弥生時代中期	加工板 ヒノキ科アスナロ属
14	256	弥生時代中期	加工板 ヒノキ科アスナロ属
15	221	弥生時代中期	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
16		弥生時代中期	杭1 ツバキ科ナツツバキ属
17		弥生時代中期	杭2 ブナ科コナラ属アカガシ亜属
18		弥生時代中期	自然木 ブナ科シイ属
19		弥生時代中期	自然木 ツツジ科スノキ属シャシャンボ
20		弥生時代中期	加工板 イチイ科カヤ属カヤ
21		弥生時代中期	加工板 スギ科スギ属スギ
22		弥生時代中期	自然木 マツ科モミ属
23		近世(18世紀後半～19世紀後半)	加工板 スギ科スギ属スギ
24		近世(18世紀後半～19世紀後半)	マツ科モミ属
25		近世(18世紀後半～19世紀後半)	スギ科スギ属スギ
26		近世(18世紀後半～19世紀後半)	スギ科スギ属スギ
27		弥生時代後期～古墳時代初頭	自然木 マツ科モミ属
28	330	中世(15～16世紀)	卒塔婆 スギ科スギ属スギ

## 東大阪市鬼虎川遺跡出土の植物遺体の同定調査結果

(株)吉田生物研究所 本吉 恵理子  
京都造形芸術大学 岡田 文雄

東大阪市鬼虎川遺跡から出土した植物遺体の同定結果を以下に報告する。

### 1. 調査した試料

5 工区溝8 から出土した弥生時代中期に比定された土器の内面に付着した植物遺体である。

### 2. 調査方法

試料を実体顕微鏡下で観察し、その形態から種の同定を試みた。一部試料を採取し、還元状態で燃焼させ、灰の様子も観察した。

### 3. 結果

溝8 から出土した土器と、土器の中に詰まった土の間に、植物が見られた。土器内面に植物は付着した状態であった(図版89、写真 11-1)。その植物を1本取り出して観察した(図版89、写真 11-2,3)。そして還元状態で燃焼した(図版89、写真 11-4)ところ、イネ科植物の茎や葉に多量に含有される、珪酸体は検出されなかった。出土時の状況と観察から、この植物遺体は何らかの植物の根で、土器が土中に埋蔵された期間に成長した根が、偶然土器内面に接触し伸長を阻害され、土器に沿うように成長した、とするのが妥当な解釈であろう。

## V. 調査の成果—各論—

### 1. 鬼虎川遺跡周辺の自然流路について

#### 1.はじめに

鬼虎川遺跡では本調査を含め52次にわたって調査が行なわれている。多くは遺跡の中央から北側にかけての範囲に集中しており、この範囲で弥生時代中期の自然流路を幾筋か確認している。遺跡内において自然流路などのように土地の利用を規制する地形の存在は、集落の範囲や変遷を考える手がかりになるものである。したがってこれまでの調査で確認した自然流路について、流れの向きや埋没時期、検出面から自然流路①～⑥に区分し、若干の検討を付け加えたい。

#### 2. 鬼虎川遺跡の自然流路

北西部に位置する第13・15次調査では、流向が南から北方向の自然流路①と浅い谷状の窪地を検出した<sup>1)</sup>。流路は浅い壅み状を呈する。埋土は植物遺体を含む黒褐色粘土で砂の堆積はみられず、よどみの状態であったことを示している。幅は1.2～2.8m、深さは0.15～0.3m。時期は弥生時代中期前半（畿内第Ⅱ様式）である。一時的な分流といった様相を呈する。

北部中央に位置する第13・15・19・35-1・49次調査で自然流路②を検出した<sup>2)</sup>。第49次調査において流路は、極細粒砂やラミナを含む黒色系シルト質粘土で埋まっており、緩やかな流れであったことがわかる。流向は北東から南西方向である。南側の第13・15・19・35-1次調査でも流路の埋土に砂層の堆積がみられず、よどんだ状態であったことを示している。第49次調査で幅推定10m以上、深さ0.5m、第35-1次調査で幅12m、深さ0.8mを測る。これまでの調査結果から弥生時代中期前葉～中葉（畿内第Ⅱ～Ⅲ様式）の時期があてられる。

ほぼ中央部にあたる第34次調査で検出した流路<sup>3)</sup>は、北流して北東約70mに位置する第7次調査で検出した南西から北東方向へ流れる自然流路③に続く<sup>4)</sup>。自然流路③は調査地北西隅で北西に流れる自然流路④とに分岐して、北隣接地の第5次調査で検出した流路に続く<sup>5)</sup>。埋土は花崗岩を主体とする中粒砂層である。第7次調査の自然流路③は分岐部以南で幅約5.5m、深さ約0.7m、分岐部以北で幅約5m、深さ約0.4m。自然流路④は幅約8m、深さ約0.6mをはかる。時期は弥生時代中期中葉～後葉（畿内第Ⅲ～Ⅳ様式）である。

北西端に位置する第20・21・27・28・35-2次調査で自然流路⑤を検出した<sup>6)</sup>。流向は南東から北西方向である。第20次調査で幅6.4m、深さ0.81～0.9mを測る。調査地付近では、縄文晩期末～弥生時代前期初頭にかけて大きな凹地に貝塚が形成され、その後弥生時代前期～中期にかけて凹地が徐々に埋まっていく過程で、凹地に沿って形成された流路であり、弥生時代後期以前の大規模な洪水によって埋没したことがこれまでの調査によりあきらかになっている<sup>7)</sup>。この流路は流向や埋没時期がほぼ同じことから、南東約300mに位置する自然流路④から続く流路であると考えられる。

またこれらの自然流路より時期が遅るものとして、第7次調査地の南東約150mに位置する第40・46次調査では、縄文時代以前の自然流路と思われる砂と礫を主体とする層の堆積を確認している。流向は南東から北西方向である<sup>8)</sup>。

今回の調査において自然流路②は第10層（黒褐色～オリーブ黒色シルト質粘土）上面で検出したが、第7次調査の自然流路③・④は、弥生時代後期にあたられている第10層の黒色粘土層（植物遺体層を含む）直下の第11層（暗オリーブ灰色シルト質粘土～粘土）上面で検出しており、これは本調査地では、第9層（暗オリーブ灰～暗灰色シルト～粘土）に対応するものと考えられる。したがって、自然流路②埋没後に自然流路③～⑥が形成されたということがいえる。また第13・15次調査の成果から、

第50圖 横堀川道路開刃の自然施設



自然流路①より自然流路②が新しい時期のものであることがいえるため、自然流路は①→②→③～⑤の順に埋没していったことがわかる。

### 3. 鬼虎川遺跡周辺の自然流路

次に鬼虎川遺跡の東側に隣接する西ノ辻遺跡で検出した自然流路について若干触れることにする。鉄道・国道建設に伴う調査により、西ノ辻遺跡からその東側に隣接する神並遺跡にかけて谷1、谷2を検出している<sup>12)</sup>。谷1は遺跡の北部で行われた第5・9・10・13・14・16・17・22・23・25・27・32・33次調査で検出した開削谷で、縄文時代以前に形成され、室町時代に埋没した。全長約300m以上、幅7～10m、深さ2.5～3.5mを測る。現在生駒山の分水嶺から西側の水は北から善根寺谷、日下谷、辻子谷、額田谷、豊浦谷、鳴川谷、横小路谷などの峡谷に集まって西流し、いずれも旧大和川の支流である恩智川に流入している<sup>13)</sup>。谷1は北東方向（辻子谷）から蛇行しつつ、途中南東方向からの流路と合流しながら西へ向かって流れ、北西方に向流れを変えていく。鬼虎川遺跡の自然流路②は、この谷1から分岐した流れであると想定することも可能であろう。谷2は谷1の東に位置し、西側は縄文時代以前に埋没し、流路を南に変えたと考えられている<sup>14)</sup>。遺跡のほぼ中央部に位置する第42次調査で検出した自然流路は、流向から谷2から続いていると思われ、現在の鬼虎川がその名残である可能性が高い。

南西端の第31次調査では、古墳時代の自然流路を検出している<sup>15)</sup>。埋土は自然木を多く含む黒色シリト質粘土と黒色砂質粘土である。幅3.8m、深さ2～1.4mである。南東端の第41次調査では、ほぼ東から西へ流れる古墳時代以前の自然流路を検出している<sup>16)</sup>。幅12.3～18.6m、深さ1m以上である。両調査地東側の生駒山西麓には現在額田谷があり、そこから流れる流路（長尾川）の一端であったともみることも可能であろう。第31次調査地の北西約400mで行われた鬼虎川遺跡第40・46次調査では、既述しているが縄文時代以前の自然流路を検出しており、流向からこれらは一連の流路とみることもできよう。

### 3.まとめ

本遺跡が位置する河内平野の低地部分は、縄文時代前期の縄文海進により広く海（河内湾）が進入していた。河内湾には旧大和川、淀川、生駒からの河川が幾筋も流れ込み、河川によって運び込まれた土砂の堆積により溝岸地域が陸化し、縄文時代の終わりには河内潟に変化した。弥生時代にはいると堆積作用でさらに陸化が進み、海が後退して淡水の河内湖に変わる。河内潟・湖の沿岸には、河川に運ばれた土砂の堆積によって発達した三角州により、次第に埋め立てられていったことがあきらかになっている<sup>17)</sup>。また地理的環境の復原に関する研究は、松田氏、別所氏によって進められており、より詳細な河内平野の古地理が明らかになってきている<sup>18)</sup>。

本遺跡は河内潟・湖の東岸近くに位置しており、周辺で確認した自然流路や谷は、河内潟・湖へ流れ込んでいた流路の一部といえる。これまでの調査によると、縄文時代晩期末～弥生時代前期には遺跡の北西部から水走遺跡にかけての範囲で居住域を営んでいたが、弥生時代中期になると南側に居住域が移動し、墓域は遺跡北東部につくられる。そして弥生時代後期までに本遺跡周辺は湖層の泥層下に埋没しており<sup>19)</sup>、この時期の居住域は見つかっていない。一方で東側に隣接する西ノ辻遺跡ではこの時期に集落が拡大しており、それとの関連が指摘されている。集落の移動には、洪水砂で短期間に埋没した自然流路③～⑤や一時的な分流と考えられる自然流路①などにみられるような自然流路の発達や埋没、河内湖の水位の変化といった地理的要因も影響を及ぼしていることが考えられ、このような自然環境の変化は人々の生活に大きな影響を与えるものであり、それらと戦い、利用したであろう人々の苦労をかいまみることができる。

註

- 1) ①国道308号線関係遺跡調査会『鬼虎川遺跡—東大阪市高速鉄道東大阪線計画事業に伴う発掘調査概要（その2）—』1981年  
②(財)東大阪市文化財協会『鬼虎川遺跡—東大阪市高速鉄道東大阪線計画事業に伴う第15次発掘調査概要（その2-2）—』1983年
- 2) ①①と同じ  
②(財)東大阪市文化財協会 東大阪市教育委員会『鬼虎川遺跡第19次発掘調査報告』1988年  
③(財)東大阪市文化財協会『鬼虎川遺跡第35-1次発掘調査報告』1997年  
④東大阪市教育委員会『鬼虎川遺跡第49次発掘調査報告—一般国道170号線西石切立体交差事業に伴う—』2001年
- 3) (財)東大阪市文化財協会『東大阪市下水道関係発掘調査報告—平成3・4年度—』(事業報告参照)
- 4) (財)東大阪市文化財協会『鬼虎川遺跡第7次発掘調査報告3—遺構編—』1984年
- 5) 東大阪市遺跡保護調査会『鬼虎川遺跡調査概要I』1980年
- 6) ①(財)東大阪市文化財協会 東大阪市教育委員会『水走遺跡第2次・鬼虎川遺跡第20次発掘調査報告』1992年  
②(財)東大阪市文化財協会 東大阪市教育委員会『水走遺跡第3次・鬼虎川遺跡第21次発掘調査報告』1997年  
③(財)東大阪市文化財協会 東大阪市教育委員会『水走・鬼虎川遺跡発掘調査報告—阪神高速道路東大阪線水走ランプ建設に伴う調査—』1998年  
④(財)東大阪市文化財協会『鬼虎川遺跡第35-2・3次発掘調査報告—大阪府道高速大阪東大阪線建設に係る西石切工区下部工事に伴う鬼虎川遺跡発掘調査報告書—』1998年
- 7) (財)東大阪市文化財協会 東大阪市教育委員会『水走遺跡第2次・鬼虎川遺跡第20次発掘調査報告』1992年
- 8) (財)東大阪市文化財協会『鬼虎川遺跡第40次発掘調査報告』『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告1998年度』1999年
- 9) ①(財)東大阪市文化財協会『西ノ辻遺跡第32次発掘調査報告』1996年  
②東大阪教育委員会『西ノ辻遺跡第42次発掘調査報告』2001年
- 10) 枚岡市史編纂委員会『枚岡市史』1965年
- 11) 9 ②と同じ
- 12) (財)東大阪市文化財協会『東大阪市文化財協会概報集—1996年度（1）—』1997年
- 13) 東大阪市教育委員会『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報—平成11年度—』2000年
- 14) ①梶山彦太郎 市原実「大阪平野の発達史」『地質学論集第7号』1972年  
②松田順一郎「河内平野沖積低地南部における完新世後半の旧大和川分流路発達と人間活動」『第50回埋蔵文化財研究集会発表要旨集』2001年
- 15) 松田順一郎・別所秀高「縄文海進高海水準期の河内湾」・「縄文時代後期から晩期に発達した河内湾」・「弥生時代中期の河内湾」『大地のおいたち』築地書館 1999年
- 16) 鬼虎川遺跡の範囲に広く分布する植物遺体を多く含む土層で、弥生時代後期（畿内第V様式）の時期があてられている。本調査地では第8層に相当する。

## 2. 弥生時代中期前葉における鬼虎川遺跡について ～出土遺物を中心～

### 1. はじめに

鬼虎川遺跡は、弥生時代中期を中心とする遺跡であり、なかでも中期前葉の遺物が多数出土することで著名である。今回の調査においても、弥生時代中期前葉（畿内第II様式）の遺物が出土した。

ところが、整理を進めていく中で、当該期ではあまり例を見ない遺物の存在に気付いた。そこで、鬼虎川遺跡の既往の調査で出土した土器、さらに河内平野内の遺跡での類例を含めて、これらの遺物の検討を行いたい。また、河内に所在する当該期の遺跡と鬼虎川遺跡とを比較し、弥生時代中期前葉における鬼虎川遺跡の様相についてまとめ、若干の所見を述べることにする。

### 2. 被蓋について

#### 2-1. 被蓋の概要

今回の調査で出土した被蓋は比較的大きく、口縁内面に加飾するという特異なものである。

この被蓋の概要は報告文の中で既に述べたが、特徴的なものをもう一度述べたい。口径は25.2cm、器高14.4cm、つまみ部径7.15cm。外面はタテハケを、口縁付近にヨコハケを施す。口縁上端面に刻み目を、口縁端面に3条の櫛描波状紋を施紋する。内面はユビナデ、ユビオサ工調整で、口縁付近には7条（1.3cm）の原体で、櫛描直線紋、櫛描波状紋、櫛描直線紋と順に近接して施す。焼成は比較的硬質で、色調は内外面ともに暗灰黄色を呈する。胎土は精良であるが、最大粒径5mm程度のチャートを含む。また、角閃石は含まれておらず、生駒西麓域以外の地で製作されたものと思われる。内面には煤が付着しており、壺の上に被せ、日常的に煮炊きに使用していたものと思われる。出土状況も廃棄されたような形であり、土器棺などの蓋に用いられたものではない。

このような被蓋は、管見の及ぶ限り、鬼虎川遺跡の第19次調査で出土した2例しか見当たらない。ここでその2例を紹介しておく（第51図）。

b [福永1988] は口径18.5cm、上部は欠損していて不明。形態は裾広がりで、口縁端部は面を持ち、上方に若干拡張する。口縁端部には5条（0.6cm）の原体で櫛描波状紋を施し、上端には刻み目を入れる。外面は部分的にタテハケを施すが、全体的にヘラミガキで調整している。内面は口縁付近に7条（0.8cm）の原体で波状紋を施す。内面は横方向のヘラミガキである。胎土には角閃石を含み、生駒西麓産のものと考えられる。

c [福永1988] は口径25.5cmで、上部は欠損している。外面は横方向のヘラミガキ調整。内面もヘラミガキ調整である。口縁内面には7条（0.7cm）の波状紋を時計回りに施す。胎土には角閃石を含むことから生駒西麓産と思われる。

#### 2-2. 被蓋の製作地と紋様構成について

さて、今回出土した被蓋であるが、胎土に生駒西麓域特有の角閃石を含まないことから、他地域から当遺跡に搬入されたことは間違いないだろう。しかし、河内低湿地部の諸遺跡を見回しても、このような特異な被蓋の出土例は見当たらず、河内以外の他地域の所産であると思われる。だが、周辺地域を見渡しても、このような被蓋は見当たらない。

ところで、山城地方におけるII様式期の広口長頸壺には、この被蓋と非常に良く似た紋様構成を持つものがある。口縁の下端ないしは上下両端に刻み目を施し、口縁内面に櫛描直線紋と櫛描波状紋を施紋するものである。近江地方の該期の広口壺や壺の口縁内面には、櫛描波状紋を施すもの、さらに広口壺の口縁端面には櫛描波状紋を、壺の口縁端面には刻み目を入れるもののがよくみられる。

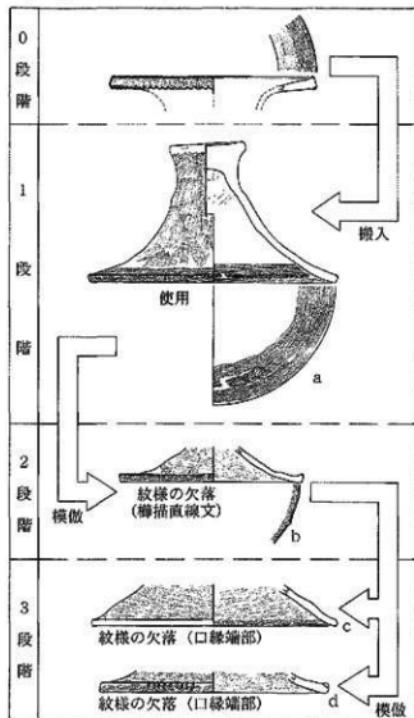
今回出土した甕蓋は、他に類例が見出せない。しかし、内面に施された紋様構成を積極的に評価するならば、山城地方の広口長頸壺の口縁に施された紋様に非常に近似していると思われる。近江地方の広口壺や甕にも柳描波状紋の施紋という点で類似する部分はあるが、柳描直線紋はみられない。また、地理的にも近江地方より山城地方の方が鬼虎川遺跡に近いということを考慮すれば、山城地方で製作されたと考えるのが妥当であろう。しかし、未だ山城地方でも類例が見出せない。類例の増加に期待したい。

さて、鬼虎川遺跡出土のこれらの特異な甕蓋であるが、第19次調査で出土した2例は、今回出土例とは若干様相が異なる。以下にその相違点を述べる。

- ① 胎土に角閃石を含み、生駒西麓産と推察されること。
- ② 調整技法がハケ調整ではなくヘラミガキ調整であること。
- ③ 口縁内面の加飾が柳描波状紋のみであること。
- ④ c は口縁端部の加飾が無いこと。

以上の点が挙げられる。

①、②の理由から第19次調査の2例(b・c)は河内で製作されたことは間違いないだろう。ヘラ



ミガキ調整は該期における和泉・河内地方に顯著に見られる調整技法である。また、胎土に角閃石を含むのは、生駒西麓域に見られる特徴である。さらに、河内の他の遺跡で、未だ類例を見ないことがから、現時点では他の生駒西麓域の集落から持ち運ばれた可能性は低いと言わざるを得ない。

したがって、鬼虎川遺跡の集落内ないしは集落にきわめて近いところで製作されたものであると推察される。

### 2-3. 紋様の受容形態について

さて、ここでは甕蓋に施された紋様が、鬼虎川遺跡でどのように受容されたのか考えてみたい。前述の③、④の理由から以下のモデルが考えられる(第51図)。

- (0) 山城地方で甕蓋の製作(紋様の施紋)。
- (1) 山城地方から淀川水系を介して、鬼虎川遺跡への甕蓋の搬入。遺跡内の使用。
- (2) aを模倣してbの製作、使用。
- (3) bを模倣してc、dの製作、使用。

これらの3段階が考えられる。

(2)の段階では、aを模倣したために内面への加飾が行われ、口縁端部の刻み目、柳描波状紋も模された。だが、内面への加飾は柳描直線紋を省いたものとなり、また製作にあたって、在地の材料(粘土)を用いて在地の

第51図 紋様の受容形態変遷図(1/5)

人物が製作したために、胎土に角閃石を含み、調整技法が在地の調整技法（ヘラミガキ）になったと考えられる。

(3)の段階ではbの模倣がなされたと思われる。しかし、この段階ではcは口縁端部への加飾が欠落し、形態も幅広がりではなく、体部中央が張る形に変化している。また、d【福永1988】は形態が幅広がりで、口縁端部への加飾が残るもの、口縁内面の波状紋を省いたと思われる。これは外側から見える部分だけを模倣したものと考えることができる。

#### 2-4. 小結

このように一つの特異な甕蓋の搬入を契機として、その模倣がなされ、紋様が省略し、消失していく過程が以上の4つの甕蓋から看取できるのである。恐らく、(3)段階以降は紋様の施紋も行われなくなったであろう。

#### 3. 細頸壺について

##### 3-1. 義内第II様式期の細頸壺

本調査でもう一つの興味深い遺物が出土した。細頸壺である。この土器はII様式に位置付けられるものであることは既に報告文のなかで述べた。しかし、II様式のなかにも時期差があり、II様式初頭と末期では形態などの分類の基準となる諸属性も異なってくることは当然のことである。

広瀬和雄氏は大阪府八尾市亀井遺跡の資料をもとに、II様式を前半と後半に分け、前者を中期1、後者を中期2とした【広瀬1986】。また、寺沢萬・森井貞雄両氏は、河内地域を対象にII様式を3小様式に分け、それぞれ河内II-1様式、河内II-2様式、河内II-3様式（以下、河内を省略）とした【寺沢・森井1989】。

今回出土した細頸壺は広瀬氏編年の中期1、寺沢・森井両氏編年のII-1様式に該当するものと思われる。だが、森井氏は「…この様式では典型的のものはみられず…」とし、大阪府八尾市美園遺跡BSK-210出土資料を挙げるにとどまっている【寺沢・森井1989】。広瀬氏は亀井遺跡出土資料には該当するものがなかったためか、中期1の段階で具体的な資料を挙げていない【広瀬1986】。

このように、該期の細頸壺は資料としての点数がきわめて少ないため、判然としない部分が多い。

##### 3-2. 細頸壺の類例と型式分類

さて、ここでは今回出土した細頸壺の類例を抽出し、分類を行い、検討の前段階としたい。しかしながら、類例としては、管見ではわずかに6例を認めるだけで、非常に僅少である。以下にその6例を紹介する（第52図、番号と挿図番号は対応）。

①鬼虎川遺跡52-5次例……本調査で出土。球形の胴部からなだらかに頸部が立ち上がる。口縁は若干外反。櫛描直線紋を9帯、櫛描波状紋を1帯施す。胴部下半欠損。生駒西麓産。明確な造構に伴うものではなく、散乱した状態で木片等と共に出土した。廃棄されたものと思われる。

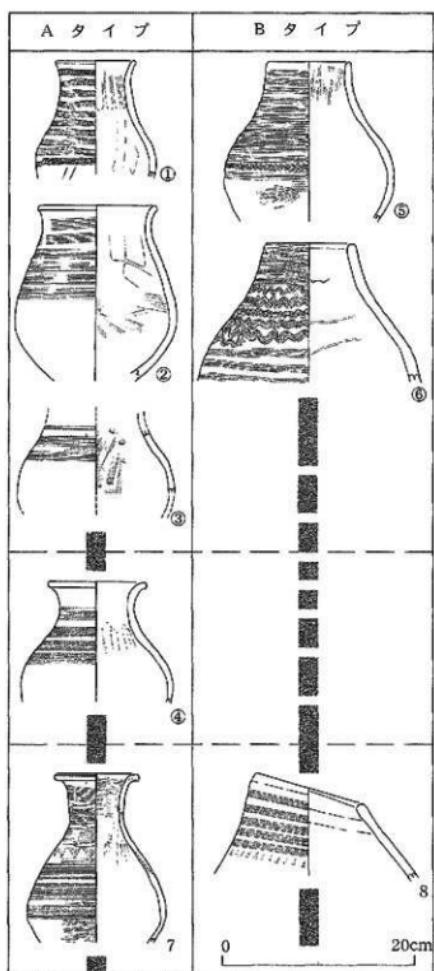
②宮ノ下遺跡例【下村・牛本1996】……無花果形の胴部から口縁はやや外反する。頸部と胴部の境は不明瞭。櫛描直線紋を6帯施す。底部欠損。他地域産。開析谷内の貝塚内から出土。廃棄されたものと思われる。

③鬼虎川遺跡12次例【上野他1987】……球形の胴部から頸部がなだらかに立ち上がる。口縁部・底部欠損。櫛描直線紋を3帯施す。口縁部と胴部下半欠損。生駒西麓産。幅3.6~4.0m、深さ1.5~1.6m、逆台形の溝から出土。付近には環濠と考えられる大溝がある。

④亀井遺跡SD3021A例【若林編1993】……球形の胴部から頸部はなだらかに立ち上がり、口縁はやや強く外反する。頸部から胴部にかけて4帯の櫛描直線紋を施す。胴部下半欠損。他地域産。幅1.3m、

深さ0.7mの断面V字状ないしは逆台形の溝から出土。他にも同時期の土器が多数出土。一括廃棄されたものか?

⑤美園遺跡BSK-210例〔渡辺編1985〕……球形の胴部からなだらかに頸部が立ち上がる。口縁は真直ぐに伸びる。口縁から櫛描直線紋12帯、櫛描波状紋1帯、櫛描直線紋1帯の順で施紋。底部欠損。他地域産。深さ0.2mの落ち込み状の土坑から弥生時代前期の土器や木製品と共に出土。



第52図 II様式細頸壺変遷図(1/5)

⑥城山遺跡FSD0703例〔若林編1993〕

……球形の胴部から緩やかに頸部が立ち上がる。口縁は頸部から真直ぐに伸びる。口縁から順に櫛描直線紋4帯、櫛描波状紋6帯、櫛描直線紋3帯を施紋。胴部下半欠損。他地域産。飛鳥時代までの遺物と混じって出土。

以上の6例である。

さて、これらの6例は以下の特徴から、2つの形式に分類できる。

- ・Aタイプ……胴部は球形で、頸部はなだらかに立ち上がり、やや内湾する。口縁は若干外反する。(①・②・③・④)
- ・Bタイプ……胴部は球形で、頸部がなだらかに立ち上がる。口縁は真っ直ぐに伸び、端部は丸く終わる。(⑤・⑥)

両者とも形態に関しては大差なく、非常に近似している。だが、わずかに頸部と口縁部に相違点が見られるのである。そして、この相違点は、きわめて大きな違いであるといえよう。

### 3-3. 問題の所在

AタイプはII-1様式〔寺沢・森井1989〕・中期1〔広瀬1986〕に位置付けられるものと思われるが、その中でもやや時間的な差が認められ、④は口縁の外反度が強くなり、若干新しい様相を呈すると考えられる。そしてII-2様式〔寺沢・森井1989〕・中期2〔広瀬1986〕古段階に出現する広口長径壺(第52図7)に継続していくものと考えられる。

Bタイプは寺沢・森井両氏がII-1様式で⑤を取り上げ、細頸壺と位置付けているものである〔寺沢・森井1989〕。井藤暁氏も『美園』の報告の中で、⑤を細頸壺とし

て位置付けている〔井藤1985〕。

このBタイプは、寺沢・森井両氏の小様式において、明確に胸部と頸部が識別できる典型的な細頸壺へと変化する。しかし、その変化はあまりにも劇的で、飛躍的に変化している。たとえⅡ-1様式で「…典型的のものはみられ」なかったとしても、とても型式変化の範疇に収まりきれるものではない。

ところで、⑤は、河内ではなく播磨（加古川流域）の胎土をもつ搬入土器であると報告されている〔井藤1985〕。また、⑥も他地域の胎土を有し、櫛描波状紋を多く施紋する点など西摂地域によく見られる特徴を持つ。つまり、Bタイプは、河内以外の地域で製作された可能性が高いのである。

#### 3-4. 小考

そこで、本来製作されていたと考えられる西摂～播磨地域のものと比較したところ、このBタイプは、Ⅱ様式中頃に出現する水差形土器（第52図8）に非常に形態が近似している。だが、水差形土器に見られるような抉りや口縁の傾きはみられない。時期的にも⑤の相伴関係から、きわめて前期に近い時期であると考えられる。そのため、古い段階の型式と考えて差し支えないだろう。そうすると、水差形土器へと発展していく前段階のものと考えられないだろうか。

西摂地域にあたる大阪府豊中市勝部遺跡では、Ⅲ様式の「細頸壺形土器」が数点出土している〔鳥越他1972〕。その中には、頸部と胸部が明確に分かれる典型的な細頸壺の他に、頸部の後が不明瞭な細頸壺が存在している。そして「…口縁部の一部を削り取って、水差形土器と同様の口縁部をなしている」ものが存在することからも、それ以前のⅡ様式期という時期には、水差形土器と細頸壺が未分化であったことを裏付けることができよう。

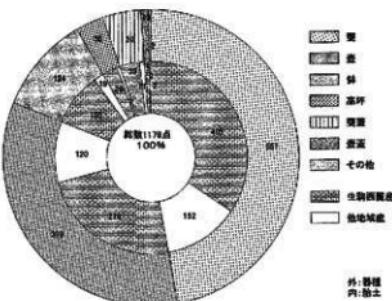
一方、Aタイプは次小様式における広口細頸壺（第52図7）の前段階のものと考えられる。④は口縁の外反度が強いことから、この段階ではやや新しい段階（Ⅱ-1新段階、中期1新段階）に位置付けられるものと考えられよう。そうすると、④より古い様相を呈する①、②は、さらにその前段階（Ⅱ-1古段階、中期1古段階）に属することになる。つまり広口細頸壺の祖形と考えられるのではないかだろうか。だが、このAタイプが河内地方独自のものなのか、他地域の影響を受けて生成されたもののかは、今のところ判然としない。

また、この細頸壺については、類例が非常に乏しいため、今回は可能性を示唆する程度で留めておきたい。更なる類例の増加を待ち、今後の課題としたい。

#### 4. 壺について

##### 4-1. 鬼虎川遺跡の既往の調査

ここで、鬼虎川遺跡のⅡ様式期の様相について壺を対象にして検討を行いたい。勿論、壺のみを対象に扱って結論を述べるのは危険であり、遺跡の持つ本来の様相を歪めかねない。だが、壺は各地域の特徴を如実に反映しているため分類し易く、煮炊きに利用されたため使用頻度、また破損の率も高い。それゆえ代謝が早く、比較的出土量が多い（第10表）。換言すれば、最もポピュラーな土器であり、当時の様相を反映していると考えられる。



第53図 鬼虎川遺跡Ⅱ様式出土壺物グラフ



第54図 他地域産甕模式図 (1/5)

一方、甕は全体的な形状がある程度判明していなければ、実測図上でその地域を特定し、分類することは難しい。また、そのような良好な資料は各遺跡でも多いとは言えない。そのような器種を含めて分類することは、反対に遺跡の持つ様相を歪めてしまう危険性を孕んでいる。

その点、甕は口縁～頸部や口縁～体部といったところに地域的な特徴が反映されており、部分的な小破片でも、実測図上での分類が可能である。今回の調査においても、「いわゆる大和型甕」や「播磨型甕」など他地域の影響を受けた甕が出土している。

鬼虎川遺跡の既往の調査で、図化されているII様式期の土器と、今回の出土遺物を総計してみると<sup>11)</sup>、II様式総数が1178点、そのうち生駒西麓の胎土をもつものが865点(73.4%)、それ以外の胎土をもつものが313点(26.6%)である。II様式の土器の中で甕は557点(47.3%)あり、そのうち生駒西麓の胎土をもつものは405点(全体の34.4%、甕の中で72.7%)である。

#### 4-2. 他地域産甕にみる鬼虎川遺跡の様相

他地域産の甕の中には、「いわゆる摂津型甕」・「いわゆる大和型甕」<sup>12)</sup>(以下、「いわゆる」を省略)・播磨型甕・紀伊型甕・山城系甕<sup>13)</sup>・低湿地産甕がある。以下にその形態的特徴を略述する(第54図)。

- ・「摂津型甕」……体部外面に粗いタテハケを施し、口縁内面にヨコハケを施すもの。
- ・「大和型甕」……体部外面にタテハケを施し、口縁内面をヨコハケ調整するもの。また、口縁端面に刻み目を施すもの。
- ・播磨型甕……頸部から体部上半にかけて櫛描直線紋や櫛描波状紋を施すもの。
- ・紀伊型甕……体部外面をヘラケグリするもの。
- ・山城系甕……口縁端部にハケ原体や指などで数箇所圧痕を施し、上方に突出させるもの。
- ・低湿地産甕……体部外面をヘラミガキやハケなどで調整する「河内型甕」であり、胎土に角閃石を含まないもの。

鬼虎川遺跡出土の他地域産甕152点中、「摂津型甕」は38点、「大和型甕」は24点、播磨型甕2点、紀伊型甕2点、山城系甕1点である。それ以外の85点は河内低湿地部で製作されたものと思われる(第53図)。よって、鬼虎川遺跡(生駒西麓部)と低湿地部で製作された「河内型甕」は490点となり、9割弱を遺跡内もしくはその周辺で製作していたと考えられる。したがって、河内以外で製作し、搬入された甕は1割強程度である。また、低湿地産甕も「河内型甕」全体の2割にも満たない(17.3%)。しかし、生駒西麓産の甕の中には、他地域の形態的特徴を有するものがある。

それを含めて他地域産甕を個別に検討してみたい。

①「撰津型甕」「撰津型甕」は他地域産甕の中で最も多く、他地域産が38点であり、生駒西麓産が30点である。6割弱が搬入品と見られる。数的に搬入量が多く、上記諸地域の中では最も交流が盛んであったことが想起される。また、「撰津型甕」の影響を受けた生駒西麓産の甕の量が多いことから、鬼虎川遺跡では「撰津型甕」の製作（ないしは模倣）が行われたと考えられる。

②「大和型甕」「大和型甕」は他地域産が24点、生駒西麓産が12点であり、3分の2が搬入品と考えられる。「撰津型甕」に比べて個体数が少ないことを考慮すると、北摂・山城地域よりも関係は希薄だったと思われる。そのため鬼虎川遺跡では、「撰津型甕」に比して在地の土で製作される甕も少なく、模倣して製作されることも多くなかったと思われる。

③播磨型甕 播磨型甕は他地域産が2点に対し、生駒西麓産が13点と多いのは注意を要する点である。物的移動のみであれば、それが与える影響は極めて微弱なものだろう。だが、人的移動を伴う場合、甕のみが与える影響のみならず人が与える影響も考えられよう。想像を逞しくすれば、甕を携えて播磨地方から移住してきた人が、鬼虎川遺跡に移り住んだのであろう。その結果が、搬入品2点、生駒西麓産13点という数的結果になって表されているように考えられる。

④紀伊型甕 紀伊型甕は、搬入品2点、生駒西麓産3点と数的に少い。このことから、鬼虎川遺跡と紀伊地方とは極めて希薄な関係だったと思われる。だが、紀伊型甕については、絶対数が少ないため、示唆する程度に留め、ここでは多く言及することを避けたい。

⑤山城系甕 鬼虎川遺跡では1点が出土しているのみである。他地域の胎土を有する搬入品である。1点のみの出土であるので、言及は避けることにする。

⑥低湿地産甕 低湿地産甕は85点であり、搬入品としては最も多い。距離的にも他地域に比べて近いため、当然ではあるが、個体数から見ても、他地域より河内低湿地部との交流の強さが窺える。

#### 4-3. 他の遺跡の畿内第Ⅱ様式期

当該期の様相を掴むために、河内に所在する3遺跡との比較対象を試みた<sup>47</sup>。ここでは各遺跡の大まかな概要と出土遺物から考えられることを中心に検討したい。

①宮ノ下遺跡 宮ノ下遺跡は大阪府東大阪市長堂に所在する。旧地形では、河内湖の南岸に位置していることになる。1992年の調査で、銅鏡時代晩期末～弥生時代中期初頭の貝塚、また自然流路内から多量のⅡ様式期の遺物が出土している〔下村・芋本1996〕。

図化されているものの中で、甕は259点中約半数の130点で、生駒西麓産のものは66点（50.8%）である。非生駒西麓産の64点のうち、「撰津型甕」は12点、「大和型甕」は8点、播磨型甕は2点、紀伊型甕・山城系甕はそれぞれ1点である。それ以外の40点は在地の低湿地部で製作されたものと思われる。

この結果によると、宮ノ下遺跡では在地以外に生駒西麓域や他地域から7割弱（69.2%）の甕を搬入していたことになる。

ところで、生駒西麓の胎土を持つものの中に、2点だけ「生駒西麓産撰津型甕」が存在する。これは生駒西麓部で「撰津型甕」の影響を受けて製作されたものが、宮ノ下遺跡に搬入されたものとみてよかろう。その割合は生駒西麓産の3.0%程度、甕全体でも1.5%である。これは他地域で影響を受けたものが、二次的に搬入されるという言わば間接的な搬入形態が僅ながら存在することを示していると思われる。

②山賀遺跡 山賀遺跡は大阪府東大阪市若江西新町・若江南町・南上小阪、八尾市山賀町に跨って所在する。近畿自動車道建設に伴う発掘調査で、弥生時代前期から中期中・後葉の遺物が多数出土している

[亀井・村上編1996]。その中に、II様式期の遺物がわずかではあるが存在する。

図化されているもので、II様式期の土器は60点であり、甕のみに絞ると総数13点（21.7%）で、他の2遺跡に比して少ない。生駒西麓産の甕は6点（甕总数の46.2%）で、他地域産の甕の中では、「大和型甕」が4点、紀伊型甕が1点、低湿地産甕が2点である。掲載されている個体数が少ないため、全容を把握するのは困難であるが、「大和型甕」の搬入数が多い。これは、山賀遺跡が旧大和川水系である長瀬川流域に所在することが、少なからず影響していると言えよう。

また、生駒西麓産の甕の中に、1点だけ播磨型甕が存在する。これは該期の生駒西麓域の集落に播磨地方の影響が及んでいたことを傍証していると言えよう。さらに、宮ノ下遺跡でも見られた間接的な搬入形態が山賀遺跡でも存在しているのである。

③喜志遺跡 大阪府羽曳野市東阪田から富田林市木戸山町・喜志町に所在する喜志遺跡は、石川中流域の河岸段丘上に位置している。1996年度の調査では、良好なII様式期の遺物が出土している〔栗田1997〕。

図化されているものは67点であるが、甕だけをみれば、総数42点（62.7%）であり、そのうち生駒西麓産のものは5点（11.9%）のみである。このことから、旧大和川以南の地域になると、生駒西麓域からの搬入の割合が低くなり、その影響力も低下するとと思われる。

一方で「大和型甕」が7点、紀伊型甕が3点、「摂津型甕」・播磨型甕は0点と影響を受ける地域が変化する。だが、紀伊型甕の胎土には結晶片岩が認められず〔栗田1997〕、在地産の紀伊型甕である可能性が高い。また、「大和型甕」も器形では大和型甕に分類されるが、胎土では大和からの搬入品とする決定力に欠ける。したがって、在地産の「大和型甕」である可能性も否めない。注意を要する点である。

だが、これらのものは、やはり他地域の影響無しに在地で製作されることはある得ず、何らかの形で、影響を受けていることに変わりはない。これらを統計すると、42点中15点（35.7%）は他地域の影響を受けたものである。

#### 4-4. 小考

鬼虎川遺跡は生駒山地の西麓部の扇状地末端部に所在し、弥生時代中期前葉においては河内湖の辺縁部に位置することになる。この地理的条件が、鬼虎川遺跡の交流の在り方を示していると思われる。具体的には、先述の「摂津型甕」の出土数は、「大和型甕」のおよそ2倍であり、旧大和川水系を介した大和地方よりも、淀川水系を介した北摂・山城地方との関係の方が強かったと考えられる。

しかし、それも河内平野内部との交流<sup>31</sup>と比較すると、非常に弱いものであったと思われる。

喜志遺跡は石川中流域の河岸段丘上に位置している。遺跡の立地する条件、地域は異なるが、他地域からの影響という点に関しては、鬼虎川遺跡も4割弱（37.7%）の値を示しているのは、大変興味深い結果である。

遺跡名	II様式甕	甕总数	摂津型		大和型		播磨型		紀伊型		山城型		河内型	
			生駒西麓	非西麓	生駒西麓	非西麓	生駒西麓	非西麓	生駒西麓	非西麓	生駒西麓	非西麓	生駒西麓	非西麓
鬼虎川遺跡	1178	557	30	38	12	24	13	2	3	2	0	1	347	85
	-	47.3%	5.4%	6.8%	2.2%	4.3%	2.3%	0.4%	0.5%	0.4%	-	0.2%	62.3%	15.3%
宮ノ下遺跡	259	130	2	12	0	8	1	2	0	1	0	1	63	40
	-	50.2%	1.5%	9.2%	-	6.2%	0.8%	1.5%	-	0.8%	-	0.8%	48.5%	30.8%
山賀遺跡	60	13	0	0	0	4	1	0	0	1	0	0	5	2
	-	21.7%	-	-	-	30.8%	7.7%	-	-	7.7%	-	-	38.5%	15.4%
喜志遺跡	67	42	0	0	0	7	0	0	0	3	0	0	5	27
	-	62.7%	-	-	-	16.7%	-	-	-	7.1%	-	-	11.9%	64.3%

第10表 遺跡別他地域産甕組成表

一方、河内平野低湿地部に位置する宮ノ下遺跡と山賀遺跡では、約70～85%が他地域の影響を受けており、高い割合を示す。なかでも、生駒西麓産の麥が占める割合が顕著で、宮ノ下遺跡では他地域産（生駒西麓産+非河内産）89点中66点が生駒西麓産であり、その割合は74.2%である。また、山賀遺跡では、他地域産12点中6点が生駒西麓産であり、50%という割合を示す。

この結果から、河内平野低湿地部の遺跡は、常に生駒西麓域の集落の影響を受けていたことが窺える。

ところで、鬼虎川遺跡では他地域産152点中86点が低湿地産であり、その割合は56.6%に上る。しかし、鬼虎川遺跡の搬入麦の割合は27.3%であり、河内平野内のもの（生駒西麓産+低湿地産）に限ってみれば、2割弱（17.5%）である。つまり、低湿地部からの影響はそれほど強いものではなかったと考えられる。

またこのことは、喜志遺跡においても言え、河内で製作されたとみられる麦32点中5点が生駒西麓産であり、その割合は15.6%である。したがって、喜志遺跡でも集落内ないしは集落周辺部で大半は土器を製作し、生駒西麓域からの影響はそれほど大きなものではなかったことが窺えるのである。

よって、これは遺跡（集落）の立地する高低差が、人的・物的移動に影響を与えていたと考えられないだろうか。今後、資料の増加を待つて課題としたい。

### 5 まとめ

今回の鬼虎川遺跡の出土遺物と既往の調査、また他の遺跡との比較から考えられることを検討してきた。その結果、鬼虎川遺跡は播磨東部や山城南部からの人的・物的移動が見られるものの、大半は河内低湿地部との交流であったと考えられる。しかし、播磨型麦が在地において製作されていることや、河内地方には例を見ない張蓋の搬入、またその受容形態が少ない事例から見受けられたことは一つの収穫であったと思える。

また、弥生時代中期前葉の鬼虎川遺跡は、旧大和川水系を通じた大和地方よりも、河内湖を中心とする水系によって結ばれた地域（淀川縁辺部・河内湖北岸）と交流が深かった〔福永1988〕ということを数的な面から補強できたと思う。調査回数、掘削面積・深度にもよるが、その膨大な遺物の出土量と搬入土器からすると、鬼虎川遺跡は畿内でも屈指の大集落であり、当該期の河内湖縁辺部において拠点集落と考えられるのである。

そして弥生時代中期前葉に、鬼虎川遺跡は河内平野の諸遺跡に大きな影響を与えていたことを物語っているのである。

以上、本調査の出土遺物を中心に述べてきた。浅学のために至らない点や課題が多く残る結果となつた。今後、解決するにあたって、御批判や御叱責を頂ければ幸いである。

### <註>

- 1) 本考案で挙げた数値は、鬼虎川遺跡の既往の調査報告書に実測図として掲載されたものを1点として数えたものであるため、破片資料等は除いてある。それゆえ一部偏った傾向になっている可能性は否めない。また、未報告のものがあるため、今後、大幅に数値が変更する可能性が高い。
- 2) 「摂津型麥」「大和型麥」という用語は、「いわゆる摂津型麥」「いわゆる大和型麥」を指すものであり、必ずしも摂津地域、大和地域で製作されたことを意味するものではない。また、「いわゆる摂津型麥」「いわゆる大和型麥」は、それぞれ摂津、大和を中心に分布するものの、必ずしもそれにとどまらず、山城地方にも存在する。そのため、「いわゆる摂津型麥」「いわゆる大和型麥」の出土が見られても、摂津や大和からの搬入と断言できない。注意を要する点である。最終的には、寺沢氏の指摘する通り、土器の胎土研究と「型式学的な抽出法とあわせてクロスチェック的に製作地を推定して」〔寺

沢1989】いかねばならないだろう。

- 3) 山城地方の妻は、北摂・大和・近江など諸地域の影響を受け、一つのタイプとして型を成さない。山城系妻も山城・近江に分布し、近江地方の影響を強く受けている。本来ならば「山城・近江型妻」とすべきところなのかもしれないが、便宜上「山城系妻」とした。
- 4) 他にもⅡ様式層の遺物が出土する遺跡はあるが、比較できるほどの遺物が出土しているところはなかった。また、遺物は出土しているが、胎土の記述が不明なため、また海蔵資料が乏しいために統計資料として扱うことができなかつたものもある。今後、明確な胎土の記述を望むと共に資料の増加に期待したい。
- 5) 大阪府八尾市亀井遺跡でも多くのⅡ様式層の遺物が出土している【広瀬・石神編1986・若林編1993】。だが、一部胎土の記述が不明な点があり、広瀬氏のデータの数値【広瀬・石神1986】と実測図が符合しない点もあり、分類するまでは到らなかった。御容敬頗りたい。参考として、Ⅱ様式総数は597点、妻は312点（全体の52.3%）、妻の中で生駒西麓のものは91点（妻総数の29.2%）であった。
- 6) 妻総数の下の割合は、Ⅱ様式総数に対する妻の割合を表す。また、それぞれの形式の下の割合は、妻総数に対するそれぞれの形式の割合を表す。

#### 【参考文献】

- 栗田嵩編 1997 『平成8年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書』富田林市教育委員会
- 井藤曉子 1983 「近畿『弥生土器』」佐原真編 ニューサイエンス社  
1985 「第IV章調査結果 第2節遺構及び遺物 第2項弥生時代 1. 前期 (2)B地区 BSK210出土遺物[土器]」  
『美國』一本文編—(財)大阪文化財センター
- 上野利明他 1987 「鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告」(財)東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会
- 亀井聰・村上生年編 1996 『河内平野遺跡群の動態Ⅲ』—北道跡群弥生時代中期編 本文編 大阪府教育委員会・(財)
- 大阪府文化財調査研究センター
- 下村晴文・芋本隆裕 1996 『宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書』—第1分冊— 東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会
- 寺沢薫 1989 「コラム 土器の胎土研究」「弥生土器の様式と編年」近畿編I 寺沢薫・森岡秀人編 木耳社
- 寺沢薫・森井貞雄 1989 「I河内地域」「弥生土器の様式と編年」近畿編I 寺沢薫・森岡秀人編 木耳社
- 島越嘉三郎他 1972 『勝部遺跡』飛中市教育委員会
- 広瀬和雄・石神幸子編 1986 『亀井(その2)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- 広瀬和雄 1986 「第3節 弥生土器の編年と二、三の問題」「亀井(その2)」一本文編—
- 福永信雄 1988 「鬼虎川遺跡第19次発掘調査報告」(財)東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会
- 森岡秀人 1990 『8山城地域』『弥生土器の様式と編年』近畿編II 寺沢薫・森岡秀人編 木耳社
- 森田克行 1990 『7摂津地域』『弥生土器の様式と編年』近畿編II 寺沢薫・森岡秀人編 木耳社
- 若林邦彦編 1993 『河内平野遺跡群の動態VI』—南遺跡群弥生時代中期編——遺構・遺物(土器・土製品)編— 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- 波辺昌宏編 1985 『美國』一本文編—(財)大阪文化財センター

### 3. 鬼虎川遺跡北部域における中世以降の耕作地の様相 —いわゆる掘り上げ田の初源とその性格について—

#### 1. はじめに

鬼虎川遺跡は、從来から弥生時代中期の拠点集落として評価されていた。だが近年になって、弥生時代の遺構が希薄になる遺跡北部域（現在の国道308号線より北側）に発掘調査が及ぶようになると、中世以降の耕作地の様相についても言及されるようになった。その際の観点としては、この地域で近世に多く營まれた溝を掘削することで生じた土を盛り上げた、「掘り上げ田」と言われる耕作形態についての検討が中心となっている（松田1996・1997・2000、福永1997、池崎2000）。

そういう中で、今回の調査はその面積自体は広くはないが鬼虎川遺跡北部域において南北150mに亘る比較的まとまった範囲の調査である。さらにこの北部域で行なわれた既往の第37・38・42・43・49・51次調査の成果（松田1997・2000、福永1997、池崎2000、菅原2001、東2000）も踏まえると、大まかな景観の変遷が見通せるものと思われる。そこで、主に耕作地として利用されていたと考えられているこの北部域の様相を検討することにしたい。

検討の方法としては、まず層位および堆積状況を整理し、主に土層から見た各時期の環境について把握する。次に各調査区で検出された遺構の変遷をまとめることにする。その後、この遺構の大半を占める溝の性格について考えることにし、条里との関係、いわゆる「掘り上げ田」の問題を含めた歴史的背景についても若干見通しを建てようと思う。

#### 2. 層位および堆積状況の整理と検討

今回の分析対象範囲において、幾つかの地点ごとに柱状断面図を作成することにより、層位・堆積状況について検討する。各地点の柱状断面図は、各層の内容が把握でき、その変化が掴めると考えた地点を任意に約30~40mごとに大阪外環状線沿いの東西それぞれ6ヵ所、計12ヵ所の地点について作成した。後述するように、各地点の堆積状況を比較するために、土質については大きく人為的な土壤化層と自然堆積層に分けて理解することにした。また、出土遺物が少ないために全ての層に確実な時期を与えることが困難であったため、幾つかの基準層を抽出することにした。そこで、時期が確定できる基準層を抽出し、その後に堆積状況を見していくことにする。

##### I 基準層の抽出とその様相

ここでは各層の出土遺物を検討することで、時期が確定できる基準層を抽出していく<sup>1)</sup>（第55図）。しかしながら、時期的に不安が残る層も多く、かなり長い時間幅でしか捉えることが出来なかつたので、その検証は今後も必要である。基準層は、弥生時代後期・古墳時代前期相当層から20世紀の盛土まで6層が抽出できた。以下、使用する地点番号は、第57図に記載したものを指している。

I層、20世紀の耕作土・盛土 この一帯の基本的な最上層である。18~19世紀のいわゆる「掘り上げ田」の溝を埋めてしまっており、松田順一郎氏が第38次調査の報告で述べているように、その上限時期は1908（明治41）年から3年間行なわれた区画整理時と思われる（松田1997）。

II層、18~19世紀の溝埋土および耕作土層 I層により埋没する溝がこの対象範囲では多く存在しており、ここからは主に18世紀後半~19世紀後半の遺物が出土している。この溝は、粘土堆積であり、肩部には浚渫した痕跡が見られるものもあるので、灌水を目的としたものと考えられ、いわゆる「掘り上げ田」の溝に相当するものであろう。その遺物は、肥前・瀬戸系の染付碗、土師質炮烙、備前播鉢等の日常雑器が中心を示している。これらの時期的な傾向として、18世紀後半には肥前系染付碗、備前播鉢が多く、19世紀になると瀬戸系染付碗、そして産地が推定できていない多種の碗・鉢・甕等が

多くなるようである。このようにこの溝は、遺物の時期では18世紀後半が上限となるが、本来湛水を目的とした水路に多くの遺物が出土することは、その時期には逆に溝の機能が停滞していたものと考えられる。後述するが、この「掘り上げ田」の溝は大和川の付け替え（1708年）が契機と考えられており、遺物は出土していないが18世紀前半までは遡る可能性がある。また、この溝機能時に形成されたと思われる砂礫が混在した土壤化層がⅠ層により削平されている地点もあるが、ほぼ全体的に見られる。この土壤化層は耕作土と考えられる。

Ⅲ層、14～15世紀の砂礫層 第52次調査3B工区の④地点、同調査4工区の⑩地点より北側のT.P.+1.0～1.6m付近で見られる砂礫層である。激しいローリングを受け細片となった土器が多く含んだ砂礫層であることから、近辺の河川等の洪水によりもたらされた層と思われる。この層により埋没した溝がこの砂礫層が分布する範囲に多く検出される。出土遺物であるが、13～14世紀の瓦器椀・土師器皿を中心とするが、溝内と溝外ではやや状況が異なる。溝内のものは、瓦器椀では和泉型Ⅲ～IV式

I層	1908年の区画整理以後の盛土・耕作土
II層	18～19世紀の「掘り上げ田」の埋土
	52-5次 溝1  52-4次 溝2  52-4次 溝4 
III層	14～15世紀の砂層とそれにより埋没した13～14世紀の溝
	砂礫層 52-4次  52-3次  埋没溝 52-3次溝5  52-4次溝7  52-4次溝9  42次流路1  52-4次溝5  52-4次溝8  52-4次溝8  42次流路1 
III層相当	III・IV層間 52-5次  52-3次  42次 
IV層	古代以前の遺物を多く含む・上限13世紀の砂層
IV層上部の遺物	52-5次  52-3次 
IV層主体の遺物	IV層主体の遺物 52-5次 
V層	6・7～8世紀の土壤化層
VI層	弥生後期・古墳前期の植物遺体層

第55図 各基準層の出土遺物 (1/6)

の間のもので、土師器皿は体部が短いものや体部上半が屈曲して大きく外反するものがある。これらは13~14世紀の時期幅をもつたものである。一方、溝外の遺物もこれらと同様のものが多いが、土師器皿で胎土が精良で、形態が平底から体部が直線状に伸びるものも数点見られる。これらは、若江遺跡や形態的に類似する京都のものから、およそ15世紀中葉頃の時期と考えられる。このような遺物の内容から、溝内と溝外の砂礫層は時期的に違う可能性も浮かび上がるが、遺物は細片であるので確定はできない。ただ、砂礫層のレベルも地点により差があるので、時期幅がある可能性を考慮して、およそ14~15世紀代と考えることにする。

IV層、13世紀の砂礫層　III層が分布しない範囲のT.P.+0.6~0.9m付近で見られる砂礫層で、III層と同様に洪水堆積層と思われる。出土遺物は弥生土器から8・9世紀頃の土器までが圧倒的に多く、III層の様相と異なる。しかしながら、数点であるが13世紀代の土師器皿・瓦器碗が出土している。また、このIV層はシルトと砂礫の互層になっていることから、時期幅がある可能性が考えられるので、上限を13世紀頃と考えておきたい。

V層、6~8世紀のシルト質土壤化層　調査区全体で見られる下位のVI層とした植物遺体層を搅拌している土壤化層である。出土遺物は少ないが、7世紀の土師器羽釜、須恵器壺等が出土しており、層位の前後関係から6~8世紀と考えたい。

VI層、弥生時代後期・古墳時代前期の植物遺体層　鬼虎川遺跡全体で見られる層である。出土遺物が少ないが、前後関係から当該時期であろう。

## ②各地点の堆積状況

それでは、先に抽出した基準層をもとに各地点の堆積状況を概観していくことにする。その前に、先述した対象範囲において作成した柱状断面図についてその前提と方法を記載する（第57図）。

前提と方法　この断面図は、基本的に各担当者の報告に拠り、各層の土質、対応関係、性格については、松田順一郎氏の層位の理解を参考にしながら、筆者が今回の調査を踏まえてまとめることにした（松田1996・1997・2000）。よって、事実関係の誤認などがある場合や、その判断については、全て筆者がその責を負うものである。

第1に、各層の土質はその報告から筆者の判断により、土層を構成する堆積物の類似性から、大まかに幾つかに分類して模式化することにした。この分類は、まず人為的な土壤化層と、自然堆積層に大きく2つに分けた。土壤化層は、シルトもしくは粘土が主体であるが多くの砂礫を含む層、シルト主体層の2つに分けた。また、自然堆積層は、粘土が主体で止水堆積と考えられる層、砂礫が主体で洪水もしくは流水堆積と考えられる層、植物遺体を大量に含む層の3つに分けた（第56図）。実際の土壤は、このような単純な図式により理解されるものではないが、各地点の堆積状況を大まかな傾向を窺うために試みた次第である。よって、その詳細は本報告の該当部分、既往の報告（松田1997・2000、池崎2000）を参照していただきたい。

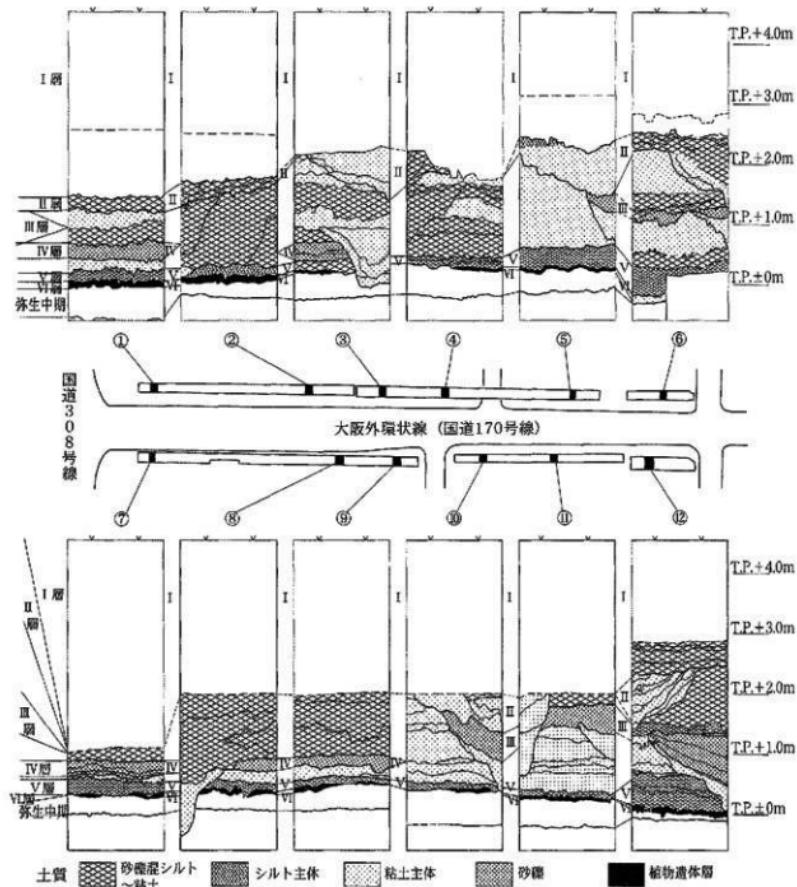


第56図 5工区上部基本層

第2に、基準層以外の層の時期は層位的前後関係から推察しており、ここから出土遺物がある場合はその都度触れることにする。そこで、時期が確定できないもしくは部分的に存在する層に関しては、基準層同志の間を例えばI-II層間というように表現する。

堆積状況の概観 各地点ごとの堆積状況を時期別に比較する前に、対象範囲における堆積状況の全体的な様相の把握を行なうこととする。そこで、柱状断面図を巨視的に眺めることにする（第57図）。

下層から見していくと、V・VI層が全ての範囲に共通していることが分かる。V層は、先述したよう



第57図 鬼虎川遺跡北部堆積状況模式図

に6～8世紀の土壌化層と考えられることから、共通した土地利用があったものと考えられる。具体的には後述するが、出土遺物が少ないと下層を搅拌していることから、耕作もしくは開発に関連した可能性が考えられるが、積極的な根拠は乏しい。

このV層より上層は、各地点によって堆積状況が異なっていることが目に留まる。つまり、大阪外環状線の東側の④地点、西側の⑨地点より南側では砂礫が混在する土壌化層、反対に北側では粘土層がそれぞれ厚いという違いである。これは簡単に言うと、北側が南側より長く湿地的な状態であったことが言える。その後、II層つまり18世紀以降は全体的に砂礫が混在する土壌化層となり、I層の20世紀の盛土・耕作土が堆積するという共通した状況となるのである。

II～V層間の堆積状況の違い 各地点の堆積状況が異なるII～IV層間について詳述する。このII～V層間の厚さは、1.2～1.8mと非常に厚く、時期幅は層位の前後関係からはおよそ9～17世紀と考えている。この間について、下層から見ていくこととする。

V層堆積後は、調査区全体に粘土が堆積することになり、調査区全体が湿地状態であったことが考えられる。その後は、③・⑩地点より南側には13世紀の洪水砂礫層であるIV層が堆積し、その後は砂礫が混在する土壌化層が堆積する。この層の砂礫はおそらくIV層に由来するものと考えられ、下層を搅拌していることになるので、IV層の性格は耕作土と思われる。また、④地点ではIV層自体は分布していないが、V層直上に同様の土壌化層が堆積しているので、この地点まではこの洪水砂礫が及んだものと思われる。ただ、一番北側の⑥地点でも同様の状況であるが、現状ではIV層に相当するものが分布したのか不明である。一方、IV層が分布しない北側では粘土堆積が続いているが、堆積状況が変化するのは14～15世紀の洪水砂礫層であるIII層が堆積する時である。このIII層が分布しない南側では、III層と同じレベルでは砂礫混土土壌化層が続いているので、III層自体は存在していたが耕作による搅拌により消失してしまった可能性もある。IV層からIII層の間では13～14世紀の土師器皿・瓦器楕が出土しており、層位の前後関係とは矛盾しない（第55図）。

III層堆積後は、やはり地点によって堆積状況が異なる。III層が分布した範囲では、その南側の⑤・⑩地点は粘土堆積、その北東側の⑪・⑫地点は土壌化層、また北西側の⑦地点は土壌化層後に粘土層がそれぞれ堆積する。一方、III層が分布しない範囲では、①地点を除き砂礫混土土壌化層が続くようである。このIII層からII層までの時期は、層位の前後関係からは16～17世紀に堆積したものと考えられる。松田氏は、第38次調査で地盤痕跡から文献資料との対比で曆年代を推定しているが、それによるとII～III層間の上位の地盤痕跡は1662年、下位のものは1596年の地震に対比されており、層位の前後関係と矛盾しない（松田1997）。

### ③小結

ここでは、鬼虎川遺跡北部域における堆積状況を検討してきた。その結果、7～8世紀と推定したV層と18世紀にいわゆる「掘り上げ田」が造られるII層までの間は、各地点ごとに堆積状況が異なっていることが判明した。この13～17世紀の間には、より湿地的な環境であった北側と、洪水によりもたらされた砂礫を原因として土壌化が進んだ南側という捉え方ができる。この環境の違いや、中世の2回の洪水砂礫層の分布の違いは、各時期の河川や地下水等に由来するものと思われるが、その具体的な自然的環境については今後の課題としたいた。

### 3. 中世以降の景観の変遷

ここでは、前項での堆積状況の検討を踏まえて、検出された遺構を幾つかの画期で捉えることにより、中世以降の景観の変遷を考えてみる。

#### ①画期の設定と前提

今回、対象とする鬼虎川遺跡北部域では、中世以降の明確な遺構は溝のみである。これらの溝はその検出層位・出土遺物から幾つかの画期に分けることができる。各画期の時期は、前項で検討した基準層との相互関係で把握することにした。この方法により設定できた画期は中世以降から5期であるが、出土遺物の少なさから一つの画期は1～2世紀という大きな時間幅でしか捉えられなかった。よって、1つの画期に含まれる溝がその間に全て機能していたかどうかについて判断しがたかった。このような方法による限界性から、ここで検討した結果については大まかな変遷であることを前提とする。

#### ②各期の景観の様相

前記の基準により抽出した中世以降の各画期の遺構を第58図に模式的に作成した。そこで、この図を基に各画期の景観について述べる。まず、13世紀以前の様相をI期以前として順に検討していきたい。

I期以前（6～12世紀） 前項で先述したように、弥生後期から古墳前期のVI層の後に、およそ6～8世紀と推定されるV層が堆積する。このV層はシルト質土壌化層であり、対象範囲全域に存在した層である。この時期の明確な遺構は出土していないが、52次調査3B工区の第7層上面で底部は欠損しているが土師器羽釜が口縁部を上に向かた状態で出土している。これらのことから考えると、この時期には全域に共通した土地利用があった可能性が示唆される。その利用法としては、鬼虎川遺跡の北方約500mに位置する北島遺跡では7・8世紀の畑地跡と推定される小畦畔が検出されていることから、当地でも耕作地の可能性が考えられる（松田1996）。また、南方約4kmに位置する池島・福万寺遺跡では、7・8世紀の畦畔は一部で検出されているのみであるが、一定の区画に沿ったようにならぬ複数の土器埋納遺構が検出されており、開発に伴う地鎮遺構と考えられている（江浦1992）。これら的事例から考えると、この地区でも耕作地として開発された可能性はあるかもしれない。

しかしながら、このV層堆積後、すなわちおおよそ9世紀以後は、粘土層が堆積することになり湿地的な状況となってしまう。よって、6～8世紀に耕作地として利用したとしても維続的ではなく、9～12世紀には耕作に不適な環境となったことと思われる。

I期（13～14世紀） 当地で、明確な遺構が認識できるのはIV層堆積後のことである。このIV層は、先述したように13世紀の洪水砂層と推定したが、対象範囲の南側、国道308号線寄りのみに見られる。このIV層を切る49次溝2・52次3工区溝12・13・同5工区溝2が、この時期の確実な遺構として認識できる。また、14～15世紀のⅢ層により埋没する溝の中で、42次流路1・2・大溝201、52次3工区溝4・17、同4工区溝1・4・5は、その底面が次のII期のものより0.5～1.0m低く、I期の溝の底面に近い。そして、Ⅲ層が分布しない範囲にある49次溝3・52次3工区溝8・同5工区溝6は、底面が同じように低く、数回の掘り直しが見られるものがある。これらは、出土遺物・層位では確定できないが、底面のレベルが共通していること、さらにI期に相当するレベルで溝の規模が類似していることから、I期の溝と考えたい。そして、これらの溝の中には掘り直し、またⅢ層により埋まつてもほぼ同じ場所に掘削されることで、維続して19世紀まで使用されるものがある。

これらの溝の規模は、幅約3.5～4.0m、深さ約1.0～1.5mのものが多い。ただ、42次流路1は幅約6.0m、深さ約2.0mと規模がかなり大きい。断面形態は逆台形状で、二段掘りであるものが多く、底面が上面に比べると幅狭である。これらの溝は、東西の調査区で対応していると思われるものもあるが、対応していないものもある。溝の埋土は基本的には粘土堆積であるが、ラミナも見られる。

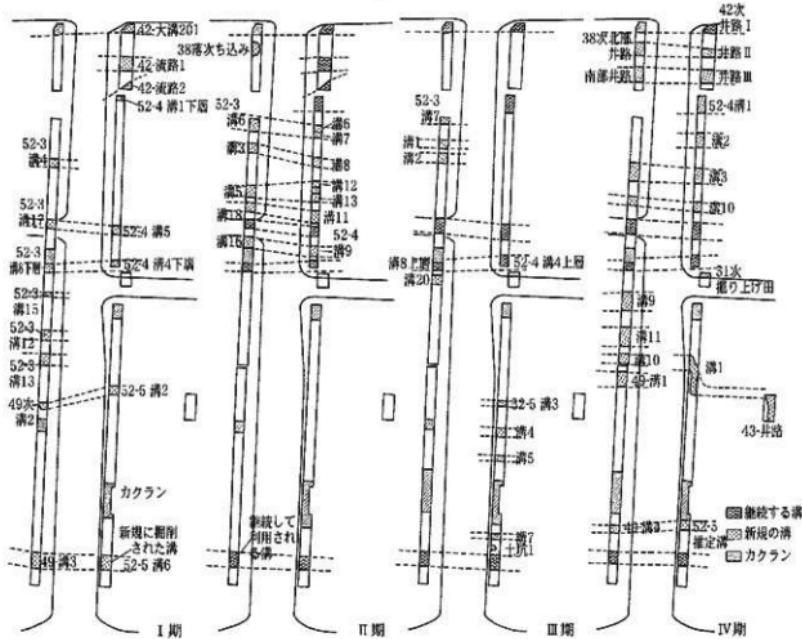
溝の性格であるが、集落域から離れていること、東西に平行して溝が位置していることから、畦等の明確な耕作に関わる遺構は検出されていないが、耕作もしくは開発に関する水路と考えたい。その根拠として、溝掘削面直上の堆積状況をみると、52次3工区溝8・同4工区溝4より南側には、土壌化層が堆積しており、耕作がなされていた可能性が指摘できる。ただ、その北側は粘土堆積が続くの

で耕作地として利用されていたかどうかは分からぬが、やはり溝を掘削していることは何らかの土地利用が行なわれていたものと思われる。また、この1期の溝から馬もしくは牛の肩甲骨や下顎骨などのまとまった部位が出土しており、このような獣骨の水田跡からの出土は何らかの農耕儀礼の存在を表すものと考えられており、この地が耕作地として利用されていた可能性を支持するものである。この溝が耕作・開発に伴うものだとすると、その後割としては悪水抜きの排水路と考えることができよう。ただ、その堆積が粘土主体であることからすると、水は常に溜まっていた状況が推察される。

Ⅱ期（14～15世紀）この画期は、Ⅰ期の溝がいくつか埋まった後から、14・15世紀の洪水砂礫層としたⅢ層が堆積するまでの間と認定した。この間には多くの溝が造られるが、それは全てⅣ層が分布しない北側で検出されているため、上限についてははっきりとした時期が確定できない。よって、Ⅰ期に遡る溝も存在していた可能性は否定できないので、年代としてはおよそ14～15世紀としてⅠ期との境は明確にはしなかった。

この時期の溝としては、38次落ち込み、52次3工区溝3・5・6・14・16、4工区溝1・6～13が相当する。これらは、全ての溝がⅢ層の堆積により埋没していること、検出面がT.P.+1.5 m前後であることから、I期の溝よりも新しいと考えられるのである。溝の規模自体は初期のものとそれ程差がないが、断面形態は逆台形状であるが、底面はやや丸みをもっている。埋土は、Ⅲ層が覆う上層を除くと、下層は粘土地盤である。

一方、I期から継続して使われる溝として、先述した42次大溝201、49次溝3、52次4工区溝4・



第58図 鬼虎川遺跡北部域の中世以降の変遷 (S-1/2000)

5、同5工区溝6がある。これらは、掘削面の認定は、後代まで使われる所以困難であるが、II期に新しく掘削される溝よりも底面が低いことからそのように考えた。これらも、III層が分布しない49次溝3、52次5工区溝6以外は、III層が堆積するのである。

この時期には多くの溝が造られるのであるが、それは全て北側に造られるのである。この範囲では、I期に引き続き粘土堆積があるので、湿地的な状態であった。ゆえに、この多くの溝はこの湿地の乾燥化のために悪水抜きの溝であったか、またはこの地点より標高の高い東方の耕作地の水路がここまで延びたものかもしれない。南側はI期の溝が埋没した後も土壤化層が続くことから、耕作地として引き続継利用されていたものと推測される。

III期（16～17世紀）先のIII層が堆積した後から、18・19世紀の掘り上げ田によるII層が堆積するまでの状況である。ただ、層位の検討でも見たように、確実にこの時期と限定できる遺物ではなく、造構も少ない。

この時期に掘削された溝は、III層よりも新しく、次のIV期に当たる18・19世紀の遺物を含まないものと考えた。52次3工区溝1・2・7、同5工区溝3～5・7がこれに相当する。溝の形態は2種あり、52次3工区溝1・2・7、同工区溝5は底面が皿状で、5工区溝3・4・7は底面が幅狭で摺鉢状に近いものである。埋土の堆積はどちらとも、粘土が主体である。また、これらは相対する調査区に対応するものではなく、溝として短い可能性があり、IV期の溝とはやや異なる。溝の性格は、水抜きもしくは距離的に短いことから一種の水溜め状の遺構であった可能性も考えられる。

一方、前代から引き続くものとして、先述した42次大溝201、49次溝3、52次4工区溝4・5、同5工区溝6が考えられる。その根拠としては、III層堆積後にはほぼ同じ位置に掘り直しているので、それ程時期差がないと考えられるからである。

さて、この時期の堆積状況であるが、土壤化層が52次3・4工区北側付近より南側とやや広がっており、前代よりはやや安定的な耕作が行なわれていたものと思われる。

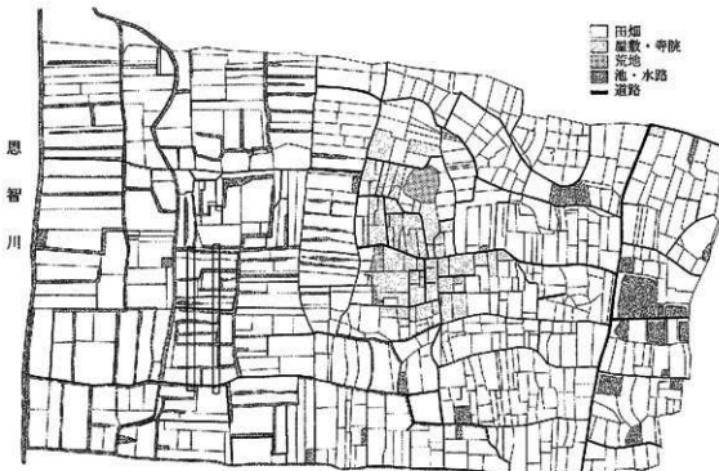
IV期（18～19世紀）18・19世紀の溝が造られるII層が形成される時期の状況である。

この時期に造られる溝としては、38次の井路とされる3本の溝、42次井路I～III、43次の南北方向の井路、49次溝1・4、51次の溝、52次3工区溝8～1・14・19、同4工区溝1・2・10・13、同5工区溝1がある。これらの規模は、幅約5.0～6.0m、深さは約2.0mと前代のものより規模的に大きい。断面形態は底面が二段掘りのものもあるが、その多くは緩やかな皿状のものが多い。埋土の堆積は粘土が主体である。それぞれの溝は、肩部が複雑な堆積状況を呈しており、浚渫が幾度か行なわれたものと思われる。

また、前代から引き続いて利用される先述した42次大溝201、49次溝3、52次4工区溝4・5、同5工区溝6がある。これらのこの時期の底面の形態を見ると、皿状のものが多く、このIV期に造られた溝と同様の形態である。埋土の堆積はやはり粘土主体で、溝の肩部には浚渫の痕跡が見られる。

この時期の溝の分布を見ると、II期の状況とほぼ同様に北側に多いことが分かる。だが、この時期の溝の様相は、II期のものと異なっている点が幾つか挙げられる。まず、溝は幾度か浚渫されているので、長期間管理がなされていたと推察できる点である。そして、溝の間には土壤化層が全体的に分布するので、この範囲全体に耕作が可能になったことも重要である。さらに、出土遺物では獸骨がなく、多くの陶磁器等が破片で出土するので、廐棄場的な使用もされたことも挙げられる。

さて、第59図は明治30年調製の大戸村字植附の地籍図である。この地籍図には、田畠の区画と多くの溝が記されている。今回の検討地点をこの地籍図で見ると、このIV期の溝がおおむね一致することが判明した。後述するが、この時期の溝がいわゆる「掘り上げ田」の溝と言える。また、II期から続く溝は距離的に長く続くものが多く、この地域の根幹的な水路でもあったのであろう。



第59図 明治三十年調整大戸村大字植附付近図（トレース図一部改変）

V期（20世紀）IV期の溝を埋めたI層であるが、松田氏も指摘するようにその時期は1908年から始まった区画整理に求めることが出来よう（松田1997・2000）。これにより、ほとんどの「掘り上げ田」の溝が埋められ、乾田化がなされたのである。

### ③小結

以上、鬼虎川遺跡北部域における中世以降の景観の変遷を追ってきたわけであるが、大阪外環状線の西側の52次調査3工区北半、東側の同4工区より北と南では洪水砂礫層の分布、時期ごとに異なる土壤化層と粘土層の堆積状況および溝の分布も異なることが判明した。18世紀の掘り上げ田造成時においては、全体的に砂礫が混在する土壤化層が見られることになるが、溝は北側の方がその間隔が密に分布し、やはりその環境は南側に比べると北側がより湿地的で、耕地化しにくい状況であったものと思われる。

今回は、この環境の違いについて、詳述する余裕はないが、扇状地が迫る沖積低地に位置する鬼虎川遺跡周辺では、生駒山麓から西へ向かって幾つもの開析谷が走る環境にあり、そこから流れ出る水流の影響を受けたことは間違いないし、湿地の程度の違いは地下水との関係も考えねばならない。いずれにせよ、この地域では環境の変化に対応した耕作地利用がなされたのである。

また、今回の調査では花粉分析等を行なっていないが、既往の調査の成果を見てみることで、中世以降の耕作による栽培植物について推測が可能である。既往の調査では、パリノ・サーヴェイ株式会社による北島遺跡での珪藻化石・植物化石・樹種の分析（パリノ・サーヴェイ株式会社1996）、金原正明・正子両氏、古環境研究所による鬼虎川遺跡35-1次調査での花粉分析（金原1997・古環境研究所1997）などの研究がある。これらの成果を簡単に見ると、今回の調査のすぐ南方の35-1次調査では平安時代前期からイネ属の花粉が、中世になるとソバ属やアブラナ科の花粉が加わり、近世ではアブラナ科が優占し、ワタ科も見られるようになる。北方の北島遺跡では、飛鳥・奈良時代にソバ属・イネ属、オオムギ属などが現われ、粘土堆積となる平安時代にはオモダカ属・ミズアオイ属などの水生植物が増え、その後の土壤化層にはアブラナ科を含めた多くの植物の花粉が見られるようになるとしている。

#### 4. いわゆる「掘り上げ田」の検討

今まで検討してきたように、この鬼虎川遺跡においては主に耕作地として利用された中世以降近世まで多くの溝が掘削された。これらの溝の堆積は、基本的に砂礫が少なく粘土堆積であるので、常に滯水していた状況であったものと思われる。よって、その性格としては水を流す水路の役割よりも水を溜めた可能性が高いと考えた。ただ、湿地的な環境の方に多くの溝が造られることから、土地を乾燥させるための水抜き的な役割も果たしていたものと考えられる。

さて、近世期においてはこのように多くの溝を掘削した耕作形態を「掘り上げ田」と呼ばれている事を先述した。そこで、今までの検討を踏まえて、この「掘り上げ田」の性格・初源を既往の研究を踏まえて若干考えてみたい。

##### ①「掘り上げ田」の既往の評価

まず、「掘り上げ田」についての従来の評価・定義について整理しておきたい。河内平野における低湿地の耕作形態である「掘り上げ田」そして「搔き揚げ田」については、芋本隆裕氏の歴史地理学的な研究がある（芋本1976）。芋本氏の整理によれば、「掘り上げ田」とは『田面の所々を掘り下げてその泥土を近接する湿田に盛り上げ、多少の高さを加えることによってその部分にのみ稻を植え付ける』耕作形態のことである。その際、『盛土された水田を「重田」、掘り起こされて水面になった部分を「掘り上げ掘り」あるいは掘り潰れ』と呼び、両者の総称を「掘り上げ田」としている。

また、芋本氏の研究を踏まえて、池島・福万寺遺跡の近年の調査成果を整理した新倉番氏は、同遺跡で検出される「島畠（搔き揚げ田）」を定義付ける際に「掘り上げ田」と比較して行なっている（新倉2000）。新倉氏によると、同遺跡の「島畠」の初源は洪水砂層で埋まった水田の復旧のために、その砂を微高地に集めて高まりを盛り上げその部分を畑とし、一段下がった部分は水田としたものと理解している。一方、「掘り上げ田」は溝を掘りその掘り上げた土を、掘り残した部分に盛って耕作を行なったものとし、溝は水溜めもしくは水路として利用したものとしている。この両者の見分けは、一段下がった部分に耕作土とを考えられる土壤化層が存在しているか否かが基準となる。つまり、耕作土がある場合が「島畠」で、ないものが「掘り上げ田」となるのである。

この「掘り上げ田」の成因は、芋本氏によれば「深野・新潟両池の新田化による恩智川の逆流現象が強まるようになった時期から、恩智川沿いの扇状地末端部に接する地域の地下水位上昇と湛水化に対応して設けられたもの」とされている。これに付け加えて、松田氏は土壤学的な見地により、溝には掘り直し・浚渫が見られることから、湛水し養分を含んだ豊かな土を供給するためだとしている（松田1996）。

##### ②鬼虎川遺跡における「掘り上げ田」の初源

これまで見てきた「掘り上げ田」についての既往の研究を踏まえるならば、その初源の時期をどのように考えることが出来ようか。溝を浚渫または掘り直した溝は、先に見たようにⅠ期からⅣ期に統くものとⅣ期に造られたものがある。前者は、溝と溝の間隔は80~100mと非常に広いことから、その役割としては何らかの区画であった可能性が高く、これについては後に検討する。

一方、後者のⅣ期に造られた溝は18~19世紀間に浚渫され続けたもので、また溝の間では耕作が行なわれていた。浚渫の行為は、松田氏が指摘した豊かな土壌の配給がその目的としてふさわしい。すなわち、いわゆる「掘り上げ田」は、従来の見解の通り、18世紀以降誕生したものとできる。その原因としては、従来から芋本・松田両氏が指摘しているように、1708年の大和川付け替えによる恩智川や生駒山麓から流下する河川の環境の変化と考えられるであろう（芋本1976・松田1996）。

しかしながら、鬼虎川遺跡第35-1次調査担当者の福永信雄氏は、10m前後の間隔で検出された13世紀代の溝を「掘り上げ田」の初源と考えている（福永1997）。だが、筆者はこれらの溝も浚渫が認め

られないことから、やはり近世の「掘り上げ田」の溝とは異なるものと考えたい。この第35-1次調査の13世紀代の溝20は、幅が5mと広く、深さは0.5mと浅い点で同時期の鬼虎川遺跡の溝とは異なる。

以上のように、從来言われてきた「掘り上げ田」の役割は、やはり18世紀に登場したものである。だが、溝を掘ることにより湿地での耕作を可能にしようという意図自体は、今回の第52次調査3・4工区で検出された14~15世紀の多くの平行する溝から、この時期までは確実に遡る。ただ、この段階では、十分な乾燥化は果たせずに継続的な利用がなされなかつたものと考えられる。

### ③河内平野における中世以降の耕作形態の諸様相

ここまでまとめとして、中世以降の河内平野における耕作形態の様相について該略する。

まず、池島・福万寺遺跡、久宝寺遺跡等でその具体相が判明した、洪水砂を搔き集めて土を盛り上げた部分で耕作を行い、一方の低い部分では水田を営む「島畠（搔き揚げ田）」は、河内平野中央部に広範囲に分布する。この「島畠」は、13~19世紀の長期間に亘って行なわれており、文献史学等の研究から商品作物としてのワタの栽培が契機となったものと考えられている（宇本1976）。

水走遺跡では、16世紀後半にハスの種子が多く出土しており、水を常時湛えた湿田にハスを植えたハス田が営まれていたと考えられている。（若松1997・2000）。全容は分からぬが、一部「島畠」状に盛り上がった部分も検出されており、この部分では畑作を行なっていた可能性も考えられる。

今回検討を行なった鬼虎川遺跡、北島遺跡では、18世紀以降に溝を短冊状に比較的深く掘り下げ水を湛える溜め池的な利用を行い、主に畑作を行なう「掘り上げ田」が造られるのである。その原型として、多くの溝を掘削することで土地の乾燥化を踏ったことは、14~15世紀に行なわれたことが指摘できる。

さらに山側の西ノ辻遺跡等では、11~12世紀以降いわゆる鍬溝が多く検出されるので、主に畑作が行なわれていたと考えられ、近世には棚田として造成されたようである（若松・吉田2001）。

以上のように、中世以降近世にかけて、この河内平野では、その環境に応じた耕作を行なっていたことになる。これらの分布やその造成技術が何に起因しているかどうか、文献史学や歴史地理学等の成果を踏まえて、多角的に分析していく必要があろう。

## 5. 鬼虎川遺跡周辺の条里の復元

鬼虎川遺跡南方の池島・福万寺遺跡では、条里に伴う坪名の字が多く残存していることから、条里の復元がなされた。それは、近年継続的に行なわれている発掘調査でも追認されている。足利健亮、荻田昭次両氏は、これらを手がかりに池島周辺を中心に河内郡の条里を復元している。それによると、河内郡の条里は基本的に同一方向である可能性が高いとされてきた（足利1965・荻田1973）。そこで、今回の調査では、ほぼ南北に約200mの調査区を設けていることから、鬼虎川遺跡周辺においての条里制との関係がつかめるのではないかと考えた。

### ①条里制と溝の関係

これまで検討してきた鬼虎川遺跡の溝は、その多くがおおよそ正方位を指向するものである。このことから、これらの溝は条里に沿ったものの可能性が考えられるが、より確証を得るためにある共通性をもつ溝に注目したい。それは、13世紀に掘削され掘り直しを繰り返して19世紀までの約700年間に亘って、断絶はあったかもしれないがほぼ同一の場所で継続した溝である。鬼虎川遺跡では第60図で示したように、他に15次SD28・47、19次溝3、32次流路といった溝が、13世紀とは断定できないが、少なくとも中世に遡り、近世・近代まで掘り直しが見られるもので、同種の溝と考えられる（下村他1983・福永他1988・勝田他1994）。

それでは、このような長期間継続する溝を先述した足利・荻田両氏の研究に基づいて復元した条里



第60図 鬼虎川遺跡北部城条里関連造構位置図 (1/5,000)

120mと一町との間隔とはやや異なる。このような本来の条里区画とずれてしまう理由としては、池島・福万寺遺跡で検出されている10世紀の最古条里型水田面が7・8世紀に遡る南北地割りに規制されていていることが参考となる（江浦1992）。また、6mという短い間隔は道であった可能性も論理上では想起されるが、この間の土壌も粘土堆積であることからすると、否定的にならざるを得ない。

いずれにせよ、13世紀には鬼虎川遺跡周辺では確実に現行条里に沿った地割りが存在したことは確かであろう。

## ②鬼虎川遺跡周辺の条里制の初源

さて、この鬼虎川遺跡周辺では、この条里はいつまで遡るものであろうか。先述したように、池島・福万寺遺跡では、古代～中世の多数の土器・銅鏡・錢貨を埋納したビットが見つかっており、これは開発に伴う地鎮もしくは水口等での祭祀に伴うものと考えられている。これらの中には現行条里とは異なる7世紀の南北地割りに沿っているものが指摘されており、この時期に条里の初源を求める見解がある（江浦1992）。

一方、鬼虎川遺跡では、先述した52次3B工区で7世紀の土師器羽釜がまとまった形で、第15次・第35-2次調査で奈良時代相当層からそれぞれ同間隔が2枚ずつ出土している（下村他1983、池崎1998）。また、北方の北島遺跡では飛鳥時代～奈良時代の耕作地跡が検出されており、畦畔等は概ね正方位に配されている（松田1996）。これらのことを踏まえると、鬼虎川遺跡周辺でも7世紀もしくは8世紀に一定の地割りが設定された可能性は考えられる。しかしながら、先に見たように9～12世紀には粘土堆積が続いたため、条里制の設定自体は7・8世紀に遡るとしても、積極的な耕作地利用はやはり13世紀の段階であろう。

その後、鬼虎川遺跡周辺では13世紀以降に現行条里に沿った区割りが設定される。これは河内平野低地において、池島・福万寺遺跡、水走遺跡、稻葉遺跡等ではおおよそ10世紀には現行条里型水田が成立していることに比べると、時期的に遅いものと考えられる（江浦1992、若松2000、中井他1986）。もちろん、溝で区画しない現行条里の地割りが13世紀以前に存在していた可能性は否定できない。しかし、先程見たように鬼虎川遺跡周辺では、顯著な土壤化層が認められるのはこの区割りが設定された13世紀以降である。このことから、この地区的耕作地としての開発は、おそらくその湿地的な状態がゆえに河内平野の他の地域よりも遅れたもしくは脆弱であったと評価したい。

図と重ね合わせてみた（第61図）。その結果、これらの溝は多くの多くが約100m前後の間隔をもっており、復元図の坪境に当たるものが多いことが判明した<sup>21</sup>。ただ、おおよそ一町（約109m）の間隔を持っていることが多いとは言え、やや外れるものもある。特に、南北に走る52次調査の3工区溝8・4工区溝4と3工区溝1・4工区溝5の両者の間隔は6mの間隔しかないことである。また、これらの溝に平行するそれぞれの溝との間隔も、北は約80m、南は約



第61図 河内郡北部条里復元図 (1/20,000)

## 6. まとめにかえて

これまでの検討により、鬼虎川遺跡周辺では13世紀に条里の坪境に沿って水路が掘削され、18世紀にはそれを基準として「掘り上げ田」の溝が環境に合わせて造られたことが判明した。最後に、この地域における中世以降の耕作地の変遷の画期の背景について若干まとめてみたい。

I期とした13~14世紀は、条里の坪境を基準に溝が掘削された段階である。文献史学の研究では、12世紀以降から在地の土豪による從来荒地であった場所の再開発が盛んになったと考えられている。また、14~15世紀は、これららの再開発を契機とした生産力の増大に伴って、村落の特權階級であった名主層の解体と一般農民の成長により村落共同体である惣村が結合しはじめた時期である（永原1967、峰岸1970）。

当遺跡周辺の史料では、『水走文書』中の「藤原康政譲状写（1279年）」に、「植櫻觀音寺別當職」という記述があり、在地土豪である水走氏の勢力が植付（現在の西石切町）周辺に及んでいたと考えられる（枚岡市史編纂委員会1966、松田1996）。そう考えると、この溝は

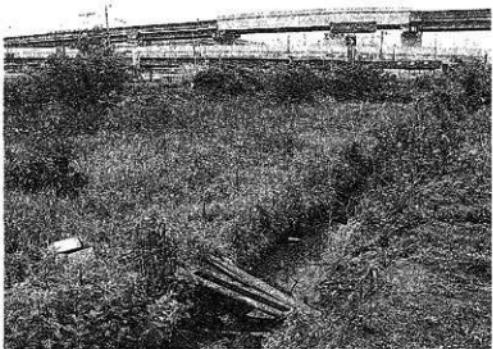
水走氏による再開発に伴うものかもしれない。また、当遺跡の西に隣接する西ノ辻遺跡では13世紀から集落の形成が始まるが、耕作地の開発と関連した動きであろう（若松・吉田2001）。やや地域は外れるが、山川均氏は奈良盆地で広く見られる蒸掘小溝は13世紀代に形成される微高地の再開発に伴うもので、13世紀後葉と見る環濠集落の成立と関連するものと考えている（山川1999）。

こういった13～14世紀の段階の開発の事例を踏まえると、鬼虎川遺跡における条里制に伴う溝の掘削は、在地領主もしくは村落共同体主導による荒地の再開発に伴うものと考えられよう。江浦洋氏は、池島・福万寺遺跡の調査を踏まえて、10世紀段階の耕作地開発を莊園領主主導によるものとしたが、この13～14世紀の再開発はその次の画期と評価できる（江浦1991）。よって、この段階の再開発の時期をより限定して、さらに耕作地の具体相を明らかにすることがこれからの課題となろう。

Ⅱ期とした14～15世紀は、坪境の北側では依然湿地状態であるを解消するために、多くの悪水抜きの溝を掘削した段階である。その南側では、Ⅰ期以降順調な耕作が可能であり、花粉分析の成果からソバやアブラナといった植物を栽培していたものと思われる。北側に多くの溝を掘削したのは、湿地を再開発し、さらに生産力を増大させることが目的であったのだろう。このことは、前代より密接に環境に適応しようとしたもので、惣村などの在地の共同体の力がさらに強まったものと考えたい。また、坪境での土地利用の違いは、もちろんその環境の差に由来するものであろうが、坪境で土地所有・管理者もしくは組織が違っていた可能性もあるのではないか。

Ⅲ期とした16～17世紀は、北側の坪境付近を除くと、砂礫を含んだ耕作土が見られるので、前代よりもやや安定した耕作が行なわれた段階である。この安定した環境は、この時期にも溝が掘られているが数的にⅡ期よりも少ないことからも裏付ける。

Ⅳ期とした18～19世紀は、いわゆる「掘り上げ田」の溝が掘削されることで、全体的に耕作が行なわれた段階である。だが、Ⅲ期よりも溝が多く掘削されていることから、実際の耕作地の面積はそれほど増大したとは思えない。いずれにせよ、從来から指摘されているように大和川の付け替えによる環境の変化が、「掘り上げ田」を造成せざるを得ない状況であったのだろう。この溝は場所によっては52次5工区溝1のように、廐棗場的な利用が見られる所も多いが、最終的に埋まる明治の区画整理までは存在していたものであり、非常に長期間にわたって管理され利用されたものと思われる。これは、この時期において積極的な耕作地の利用が行なわれていたと見たい。



第62図 被服団地前交差点付近掘り上げ田

だが、昭和30年時点での旧植附村古図には、調査区一帯は「水場」として表現されている（枚岡市史編纂委員会1965）。この古図の景観が何時のものであるかは明記されていないが、少なくとも区画整理以前のものと考えられる。この「水場」が湿地状態で耕作地としての利用が芳しくなかった事を表わしているとするならば、掘り上げ田として造成してもこの周辺はそれほど生産量が豊めた土地ではなかったのだろうか。いずれにせよ、この旧植附村より北側が、その南側の工場・商店の進出が始

まる昭和40年代まで掘り上げ田の溝が残存していた旧額田村に比べて区画整理の時期が早かったことが、この地がより湿地的であり耕作に不向きであったと推察することができる。

V期とした20世紀は、1908年から当調査区を含めた新川より北側の一带に区画整理が行なわれ、水田として利用された段階である。「掘り上げ田」が消滅し、耕地の乾燥化が可能となり長地形に区画された水田が広がることになった。しかし、昭和40年頃からは、まだ残存していた「掘り上げ田」そして区画整理された水田さえも宅地・工場・商店となり、姿を消していったのであった。2001年現在では、掘り上げ田は被服団地の交差点から南方300mの地点にある2・3の溝が残っているのみとなり、その周りに木々が見られわずかに閑かな風景を残すだけとなつた（第62図）。

以上、鬼虎川遺跡北部域における中世以降の耕作地の様相を、検出された溝の変遷から検討してみたが、その結論・分析方法にはまだ十分なものとは言えない。これから議論も材料になれば幸いである。

文末であるが、旧字植付地籍図を快く提供して戴いた飛田太一郎氏には、記して謝意を表します。

#### 註

- 1) 土器・陶磁器の年代については、主に中世土器研究会1995、九州陶磁学会2000等を参考にした。
- 2) このような長期間継続した溝が条里の坪庭であったことは、阪出育功氏が丹上遺跡で、河内一浩氏が答白島遺跡で同様の理解の下に分析している（阪出1998、河内2001）。

#### 引用文献

- 足利健亮 1965 「条里制」『枚岡市史』第三巻別編、枚岡市役所
- 池崎智詞・堀城 奉 2000 «鬼虎川遺跡第42次発掘調査報告』財團法人東大阪市文化財協会
- 池崎智詞 1998 «鬼虎川遺跡第35-2・3次発掘調査報告』財團法人東大阪市文化財協会
- 井上智博 1995 «八尾市福万寺地区における現景観の形成過程』『大阪文化財研究第9号』財團法人大阪府文化財調査研究センター
- 李木路裕 1976 «畠池の調査報告』東大阪の歴史1、東大阪市遺跡保護調査会
- 江浦 洋 1991 «条里制施行の諸段階とその背景—八尾市・東大阪市所在池島・福万寺遺跡を中心に—』『大阪文化財研究』創刊号、財團法人大阪文化財センター
- 江浦 洋 1992 «条里型水田面をめぐる諸問題』『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』財團法人大阪文化財センター
- 荻田昭次 1973 «VI 河内部・若江郡の条里復原』『池島町の条里遺構・調査概報』東大阪市遺跡保護調査会
- 鶴田邦大 1994 «西ノ辻遺跡第27次・鬼虎川遺跡第32次発掘調査報告書』財團法人東大阪市文化財協会
- 金原正明・正子 1997 «鬼虎川遺跡第35次調査における古植生および古環境の検討』『鬼虎川遺跡第35-1次発掘調査報告』財團法人東大阪市文化財協会
- 河内一浩 2001 «答白島遺跡『考察』『古市遺跡群XXII』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書、羽曳野市教育委員会
- 九州近世陶磁学会編 2000 «九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念』同学会
- 阪出育功 1998 «丹上遺跡周辺の古道と地割り』『丹上遺跡』財團法人大阪府文化財調査研究センター発掘調査報告書
- 下村晴文他 1983 «鬼虎川遺跡—東大阪都市高速鉄道東大阪線計画事業に伴う第15次発掘調査概要8その2-2』『財團法人東大阪市文化財協会
- 曾原章太郎 2001 «鬼虎川遺跡第49次発掘調査報告』東大阪市教育委員会
- 中世土器研究会編 1995 «概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 中井貞大他 1986 «鶴藤遺跡発掘調査概要I』大阪府教育委員会
- 永原慶二 1968 «日本の中世社会』岩波書店

- 新倉 春 2000 「河内平野における中・近世の耕作形態の一様相—島畠とはなにか? 池島・福万寺遺跡の例を中心に—」『池島・福万寺遺跡Ⅰ(98-3・99-1調査区)』財団法人大阪府文化財調査研究センター調査報告書第48集、財團法人大阪府文化財調査研究センター
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1996 「珪藻化石・植物化石・樹種による古環境復元」『北島遺跡の耕作地跡と古環境—寝屋川南部流域植付ポンプ場土木工事に伴う北島遺跡第1次発掘調査報告書ー』、財團法人東大阪市文化財協会
- 東 幸子 2001 「第8章 鬼虎川遺跡の第51次調査」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告ー平成12年度ー』東大阪市教育委員会
- 枚岡市史編纂委員会編 1965 『枚岡市史』第三巻別編、枚岡市役所
- 枚岡市史編纂委員会編 1966 『枚岡市史』第三巻史料編(一)、枚岡市役所
- 福永信雄編 1997 『鬼虎川遺跡第35ー1次発掘調査報告』財團法人東大阪市文化財協会
- 福永信雄他 1988 『鬼虎川遺跡第19次発掘調査報告』財團法人東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会
- 松田順一郎編 1996 『北島遺跡の耕作地跡と古環境—寝屋川南部流域植付ポンプ場土木工事に伴う北島遺跡第1次発掘調査報告書ー』、財團法人東大阪市文化財協会
- 1997 『鬼虎川遺跡北部の歴史時代耕作地と地震層序ー国道170号線被覆段地前交差点 立体交差事業に伴う鬼虎川遺跡第38次発掘調査報告ー』、財團法人東大阪市文化財協会
- 松田順一郎・藤城 泰2000 『鬼虎川遺跡北部の中・近世耕作地跡－浄化槽埋設に伴う鬼虎川遺跡第43次発掘調査報告書ー』、財團法人東大阪市文化財協会
- 峰岸純夫 1970 「村落と土臺」『講座日本史3 封建社会の展開』東京大学出版会
- 山川 均 1999 「中世集落と耕地開発」『中世集落と産業』向シンポジウム実行委員会
- 若松博志 1997 『水走遺跡第3次・鬼虎川遺跡第21次発掘調査報告』財團法人東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会
- 若松博志 2000 『水走遺跡第4次発掘調査報告書』財團法人東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会
- 若松博志・吉田綾子 2001 「第4章 西ノ辻遺跡における歴史的景観の変遷概略—まとめにかえてー」『西ノ辻遺跡第42次発掘調査報告』東大阪市教育委員会

## VI. まとめ

鬼虎川遺跡は、とくに弥生時代中期の代表的な拠点集落として周知されている。このことは数条の大溝・方形周溝墓群・貝塚などや、弥生土器・石器・木製品・金属器・土製品・動物遺体などの豊富な遺物が、それを端的に物語っている。しかしここれまでの52次によぶ調査において、後期旧石器をはじめ、縄文時代前期の海蝕崖、弥生時代前期にまで遡る集落形成、古墳時代および鎌倉・室町時代の住居域、古代から近代にわたる耕作跡など、各時代の状況が少しづつ明らかになってきている複合遺跡である。

以下、今回の調査および整理作業において知り得たことを箇条書きで記しておく。

1. 今回の調査地は、本遺跡の北西部に位置するとともに弥生時代の集落城の北縁部にあたる。そのためこの時期の遺構・遺物は希薄であった。
2. 弥生時代の遺物包含層は全域に広がっていたが、遺構としては5工区ベース（第14層）面においてA地区南側で3条の溝、B地区で2ビット、同B地区の第13層上面で1条の溝と3本の杭がみられたのみであった。
3. 5工区の第10層上面で自然流路を検出した。本調査地周辺で確認されている中期から後期にわたる自然流路との関係から、集落西部を北東から南西方向に蛇行しながら自然流路が流れていることが追認でき、当時の自然環境の一端を知り得た（V-1参照）。ただし、今回の自然流路は中期中葉の一時期におさまり、後期直前の大洪水に伴うものとは異質のものであり、これまでに検出されている各自然流路の時期についても再確認する必要があろう。
4. 弥生土器の出土数は少なかったが、生駒西麓産（河内産）以外の土器もみられた（遺物番号228など）。本遺跡でこれまでに出土した土器から、河内だけでなく播磨（西部）・山城（南部）・大和・攝津・紀伊など広い地域との交流を再確認することができた（V-2参照）。
5. これまで弥生時代後期相当層と考えられてきた黒色の植物遺体層（I層）は、5工区の調査で庄内式土器が検出されたことから再確認を要する。
6. 鬼虎川遺跡西部から水走遺跡にわたる地域では、I層の上層は奈良時代の搅乱層であったが、本調査区では古墳時代前期から後期にかけての層（遺物包含層）を確認した。
7. 本調査地周辺には近年まで（とくに外環状線建設前）、深い井路を伴う掘り上げ田が広がっており、今回の調査でも江戸時代以降の溝（井路）を多く検出した。ただ、当該地一国道308号線より北へは明治41～44年（1908～1912）に起こなわれた耕地整備（『中河内部誌』 1972年再版等）によって掘り上げ田は消滅していた。
8. 井路（溝）を伴う耕作は鎌倉時代にまでさかのぼり、洪水などによる埋没を含め近代までに4時期の溝群がみられ、当初のものは条里の坪境に設けられていたことも確認できた（V-3参照）。

# 図 版

図版1 調査地全景



1. 調査地航空写真（1984年撮影）



2. 第52次調査区全景（北から）

図版2  
3A工区  
遺構



1. 調査区全景（北から）



2. 溝1・3東壁断面

図版 3  
3A工区  
遺構

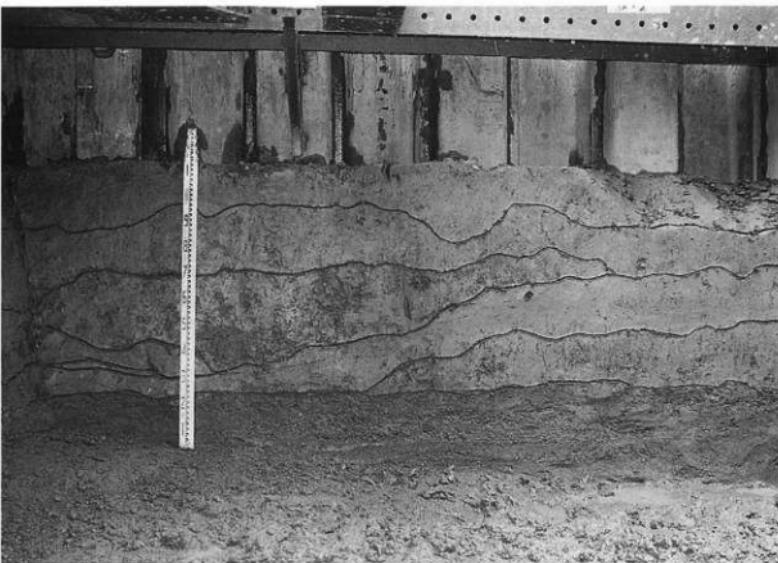


1. 溝2東壁断面



2. 溝4東壁断面

圖版 4  
3A 工区 遺構

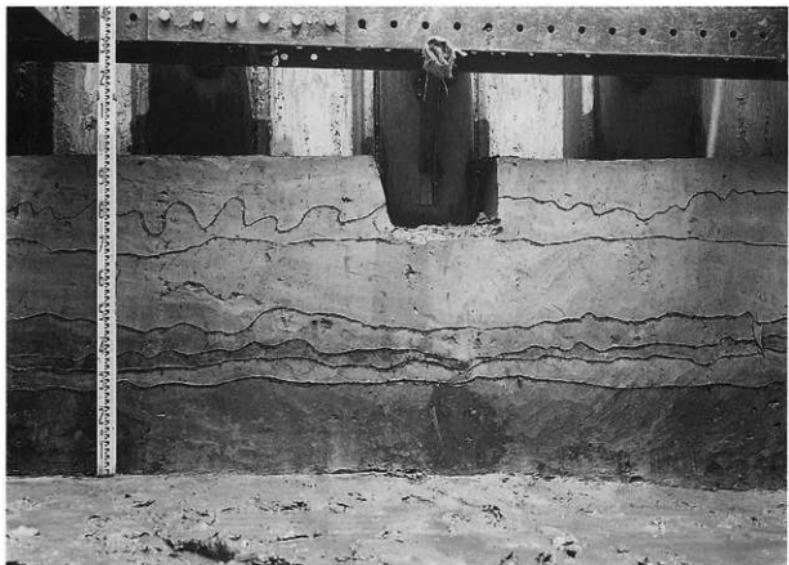


1. 溝 7 東壁断面

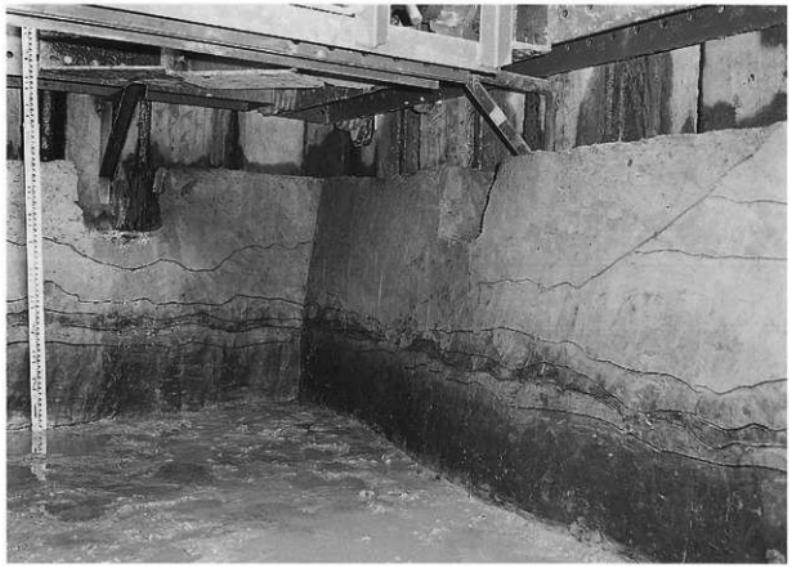


2. 第 1 層以下東壁断面

図版 5  
3A 工区  
遺構



1. 第5層以下東壁断面



2. 第6層以下東・北壁断面



1. 溝6内漆器椀出土状況（西から）



2. 第9層自然木出土状況（北から）

図版 7  
3B工区  
遺構



1. 調査区全景（北から）



2. 清9完掘状況（北から）



1. 溝10完掘状況（北から）



2. 溝14完掘状況（北から）

図版 9  
3B工区  
遺構



1. 溝12完掘状況（北から）



2. 溝13完掘状況（北から）



1. 溝16完掘状況（北から）



2. 第7層羽釜出土状況（西から）



1. 第9層自然木出土状況（南から）

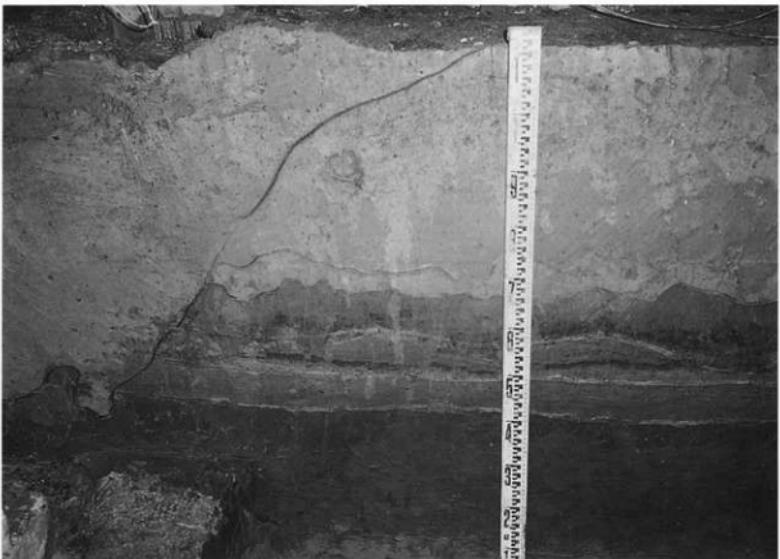


2. 溝17内柱材出土状況（南から）

圖版12  
3B工區  
遺構



1. 溝8上部東壁斷面



2. 溝8下部東壁斷面

図版 13  
3B 工区  
遺構



1. 溝10・13東壁断面

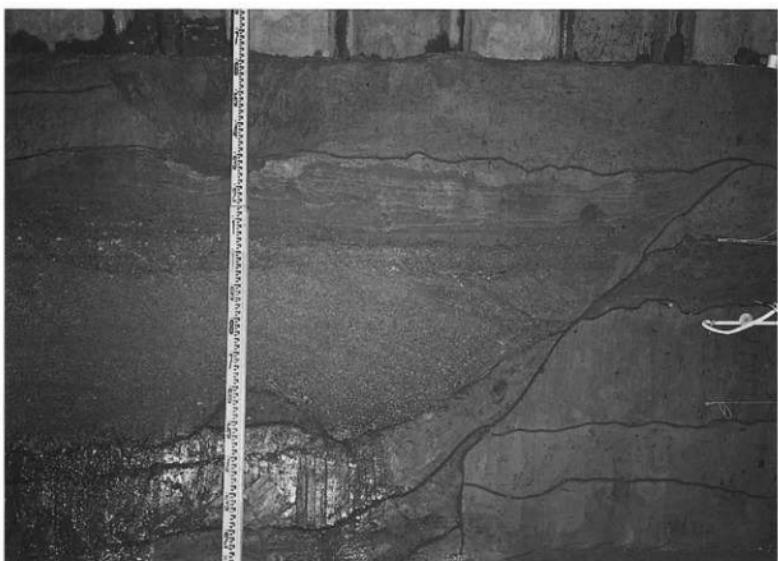


2. 溝14・17東壁断面

图版 14  
3B 工区  
遗构

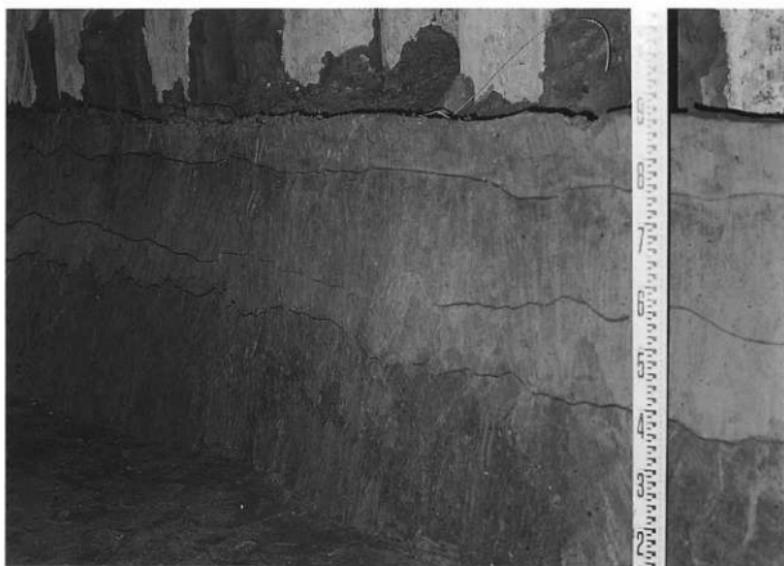


1. 溝16東壁断面

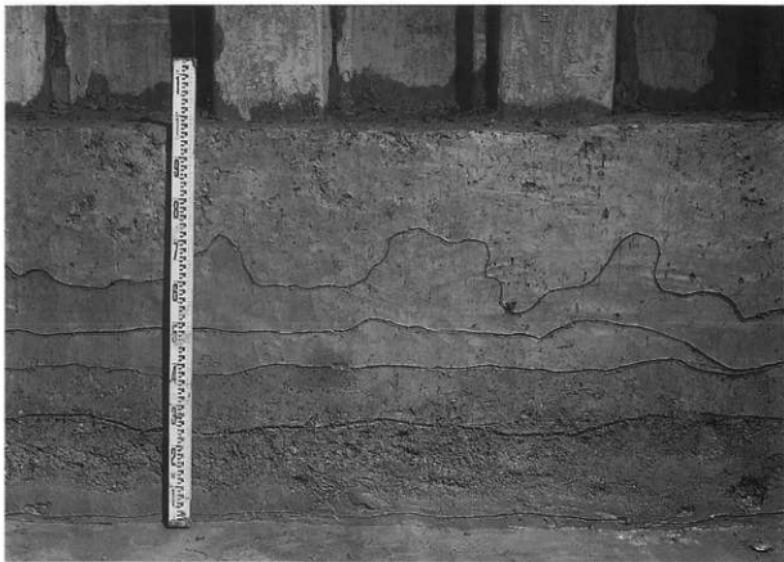


2. 溝18東壁断面

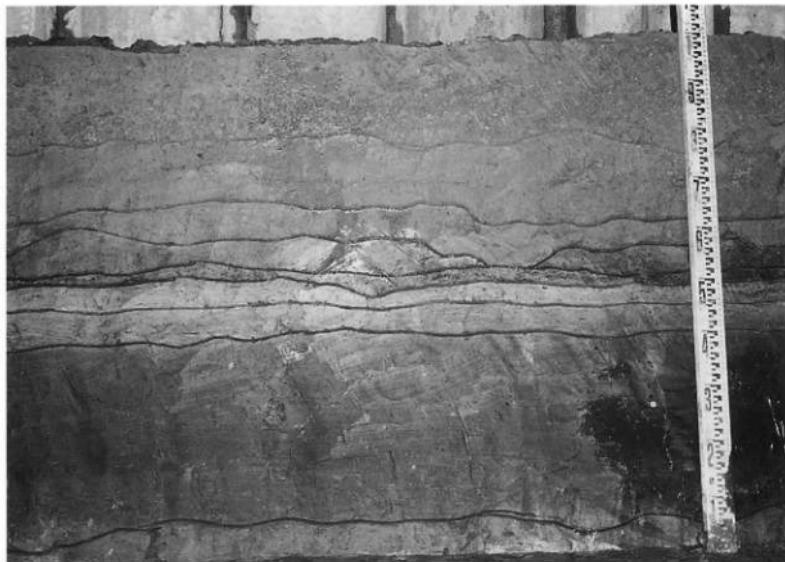
図版 15 3B 工区 遺構



1. 南側調査区第1層以下東壁断面



2. 南側調査区第3層以下東壁断面

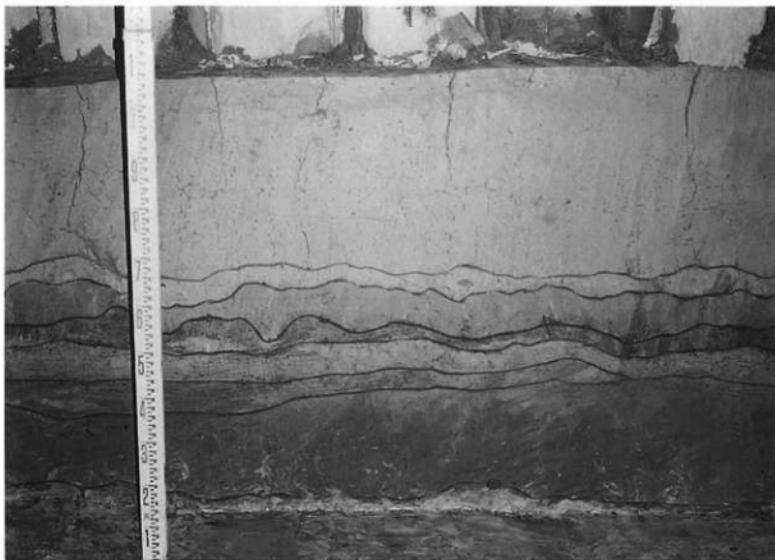


1. 南侧調查区第6層以下東壁断面



2. 現道部調査区第1層以下東壁断面

図版 17  
3B工区  
遺構



1. 現道部調査区第6層以下東壁断面



2. 作業風景

図版  
18

4工区  
遺構



1. 溝1検出状況（南から）



2. 溝1完掘状況（南から）



1. 溝 2 検出状況（北から）



2. 溝 2 完掘状況（南から）



1. 溝3完掘状況（東から）



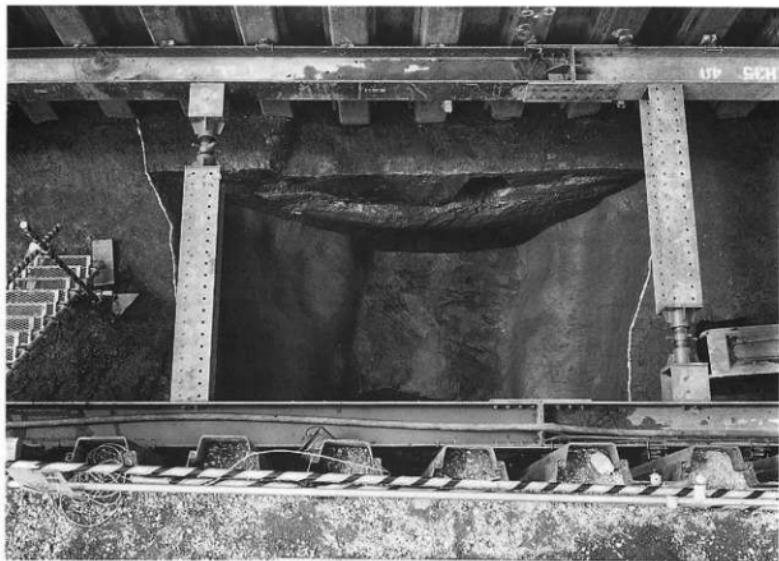
2. 溝3完掘状況（南から）



1. 溝4完掘状況（東から）



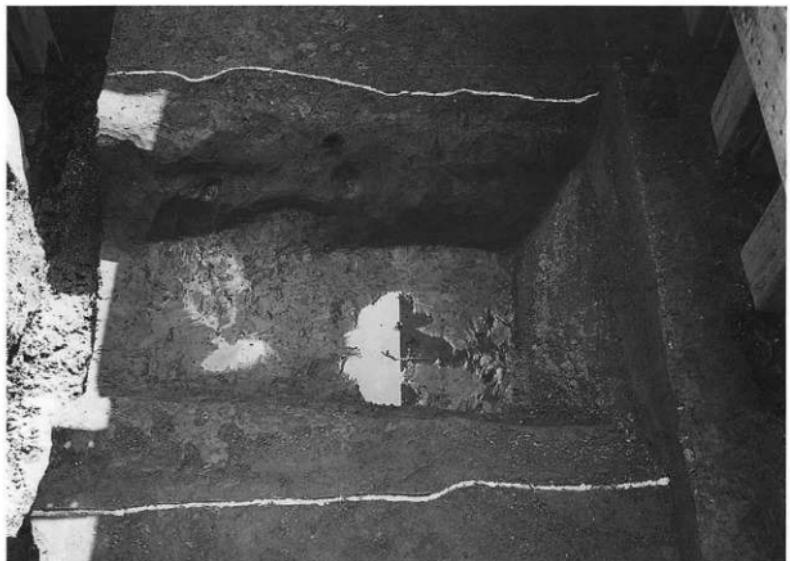
2. 溝4西壁断面



1. 溝5完掘状況（東から）



2. 溝5完掘状況（南から）



1. 溝6完掘状況（北から）



2. 溝6西壁断面



1. 溝9完掘状況（東から）



2. 溝9西壁断面



1. 溝10完掘状況（東から）



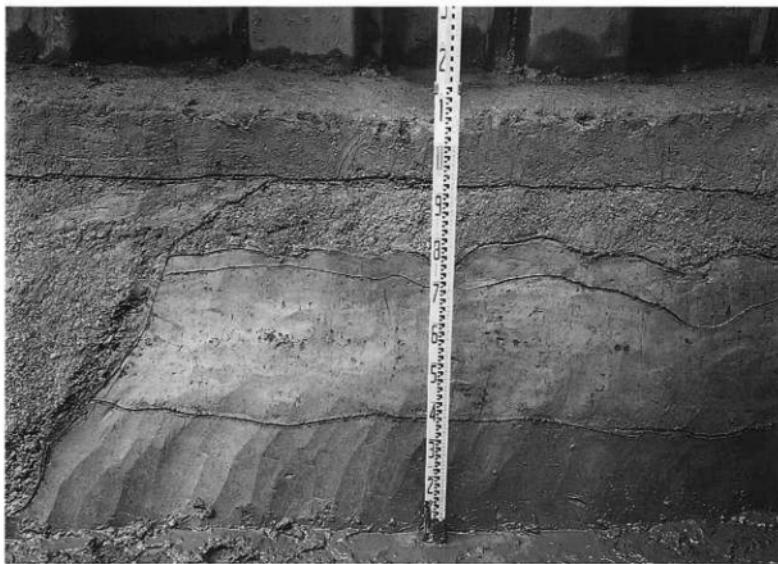
2. 溝10西壁断面



1. 溝8 内蔵朽出土状況（西から）



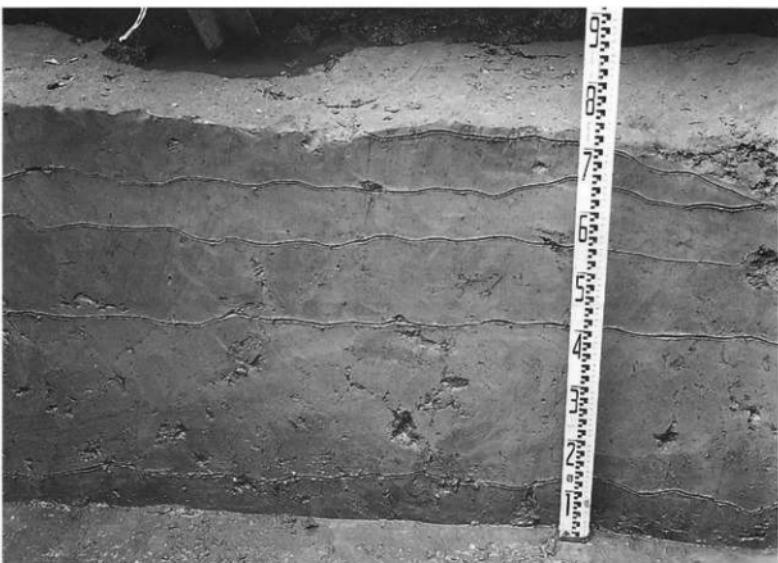
2. 蔓朽部分拡大



1. 第2層以下西壁断面



2. 溝2・7 西壁断面



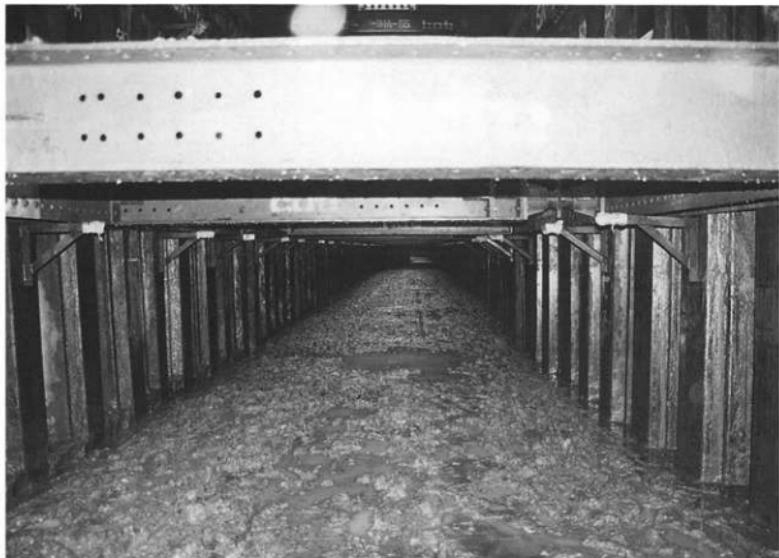
1. 第5層以下西壁断面



2. 第7層以下西壁断面



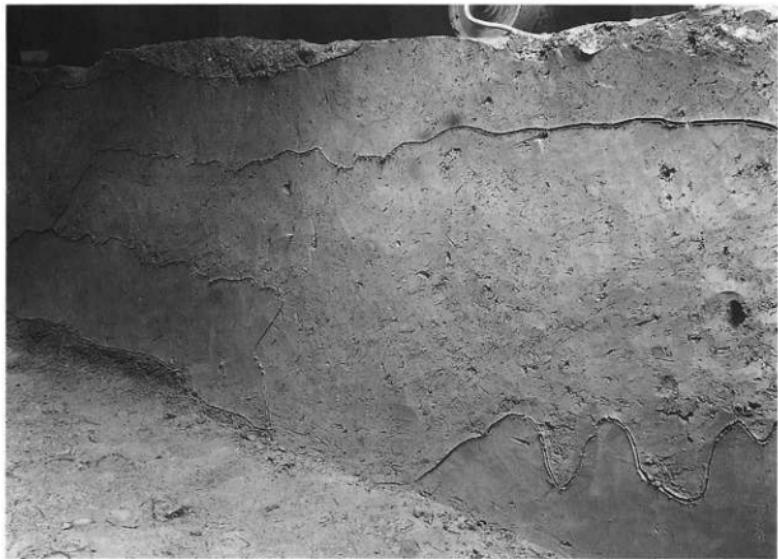
1. 調査前全景（北から）



2. 調査終了後全景（南から）

图版  
30

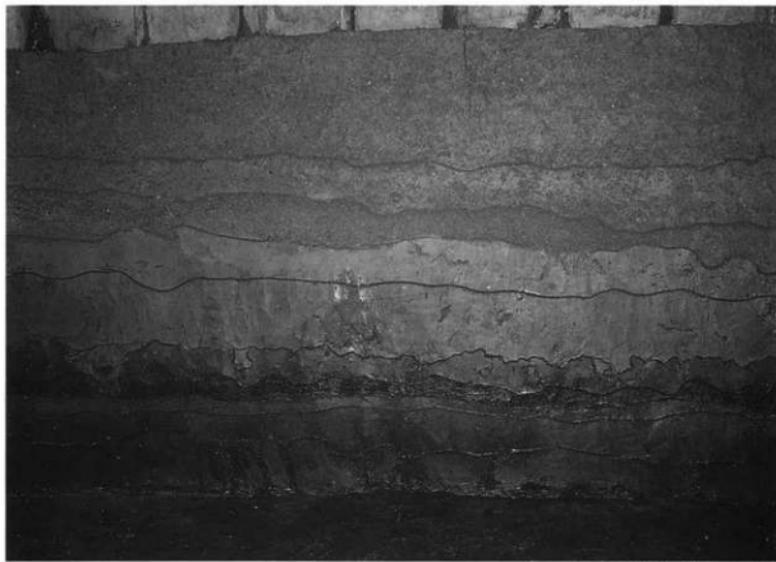
5 工区  
遺構



1. 5A-5・6 西壁断面（第0～2層）



2. 5A-5・6 西壁断面（第2～8層）





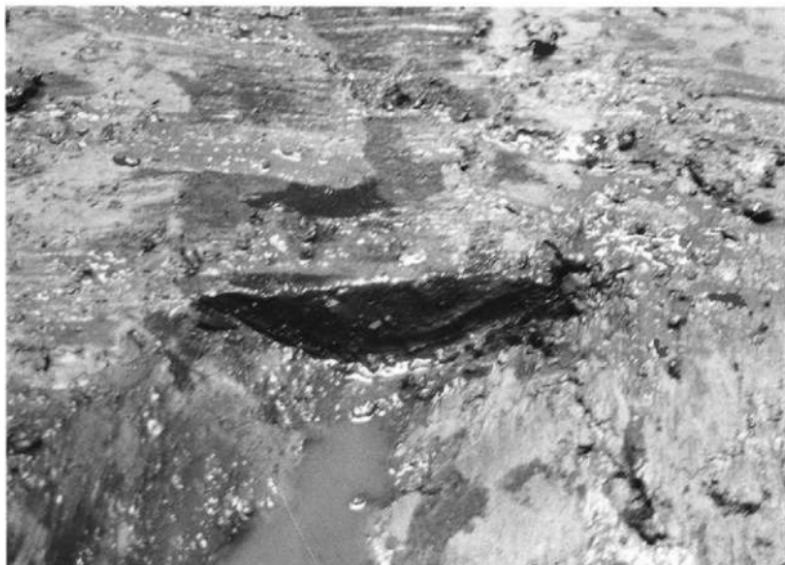
1. 5B-7・8西壁断面（第2～10層）



2. 5B-7 西壁断面（第11～14層）



1. 溝9完掘状況（東から）



2. 溝9断面（東から）

図版  
34

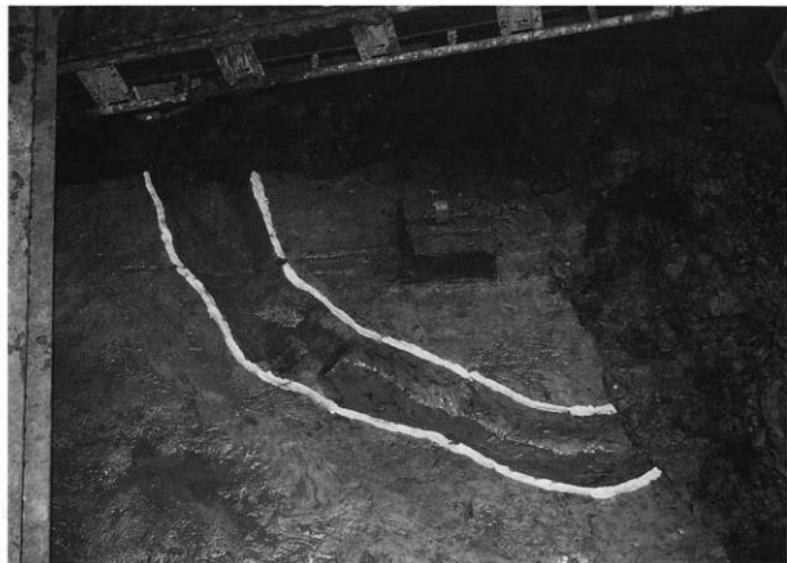
5工区  
遺構



1. 溝10完掘状況（西から）



2. 溝10断面（東から）



1. 溝11完掘状況（西から）



2. 溝11断面（東から）



1. ピット2・3検出状況（東から）



2. ピット3完掘状況（北から）



3. ピット2完掘状況（西から）



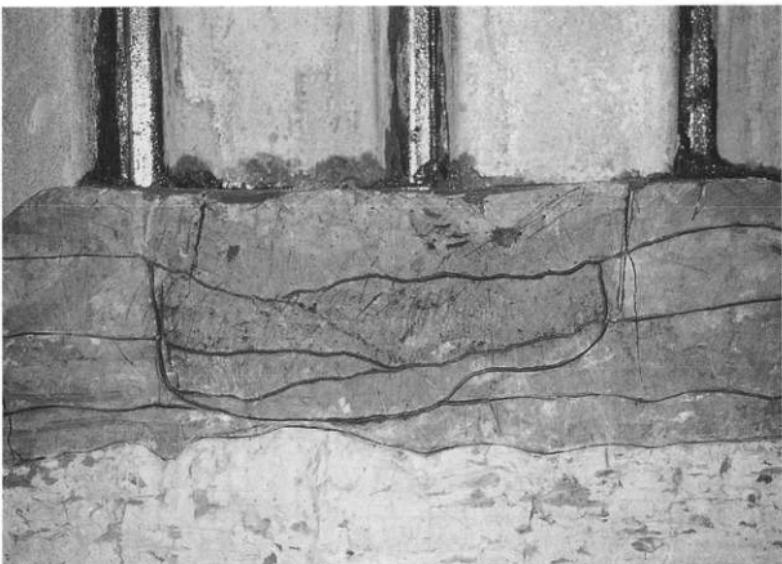
1. 第13層上面遺構完掘状況



2. ピット1断面（東から）



1. 溝8内遺物出土状況（南から）



2. 溝8断面（東から）



1. 杭1・2検出状況（東から）



2. 杭1断面（東から）



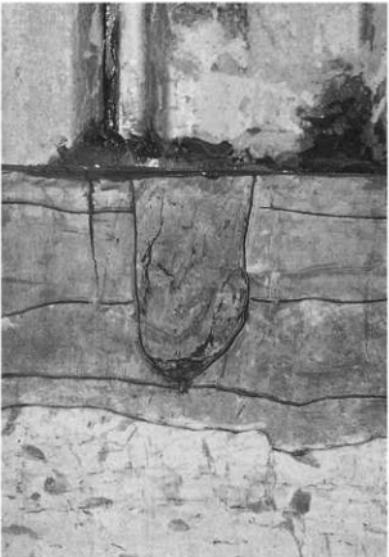
3. 杭2断面（東から）



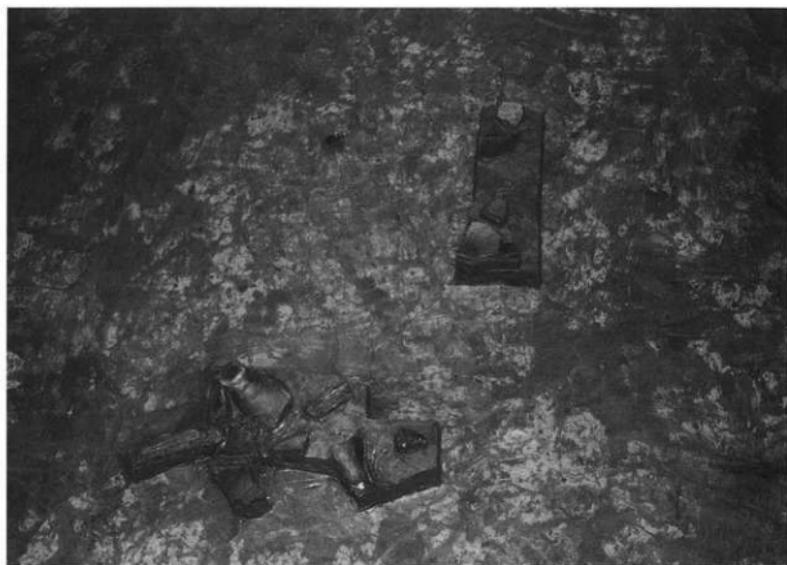
1. 桁3検出状況（東から）



2. 桁3断面（東から）



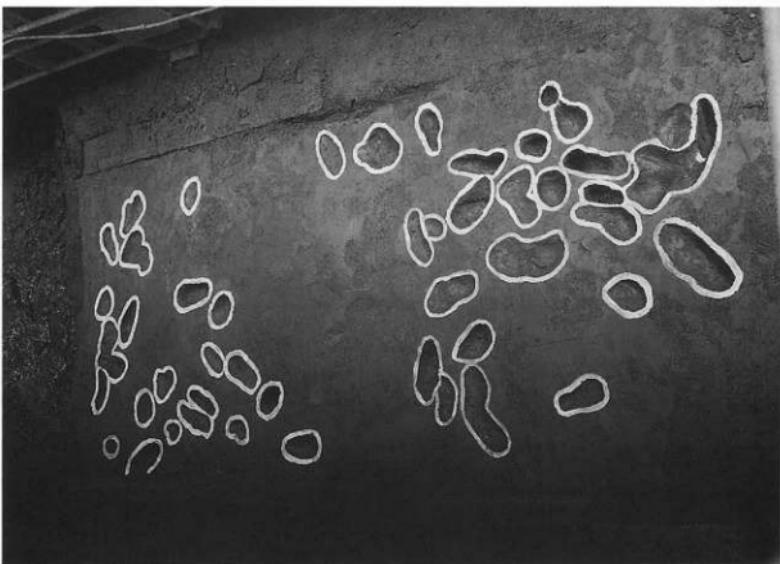
3. ピット4断面（東から）



1. 第12層弥生土器出土状況（南から）



2. 第11～12層加工板出土状況（南から）



1. 第4層上面足跡検出状況（西から）



2. 第4層上面噴砂検出状況（東から）



1. 溝2断面（東から）



2. 第2～3層杭列検出状況（東から）

図版  
44

5工区

遺構



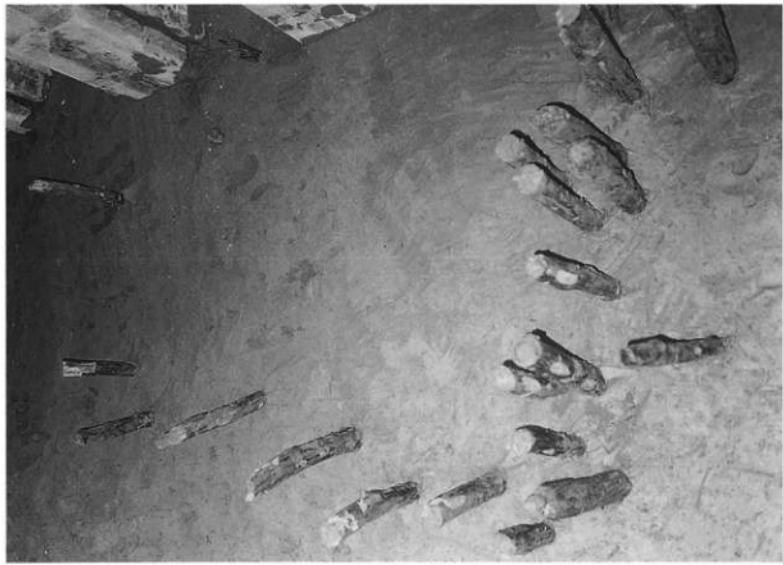
1. 溝1完掘状況（北から）



2. 溝1断面（南から）



1. 溝1内杭列検出状況（北から）



2. 5A-14杭列検出状況（東から）



1. 溝3断面（東から）



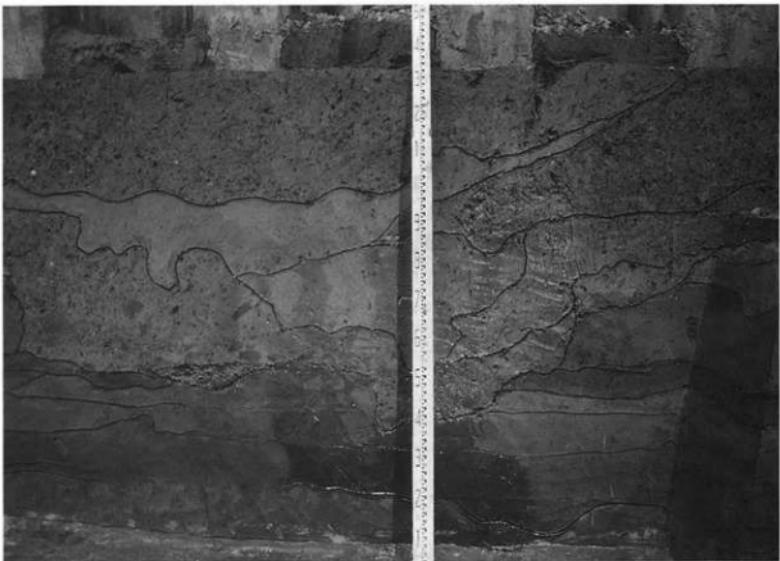
2. 溝4断面（東から）



1. 溝5断面（東から）



2. 溝6完掘状況（北東から）



1. 溝6断面（東から）

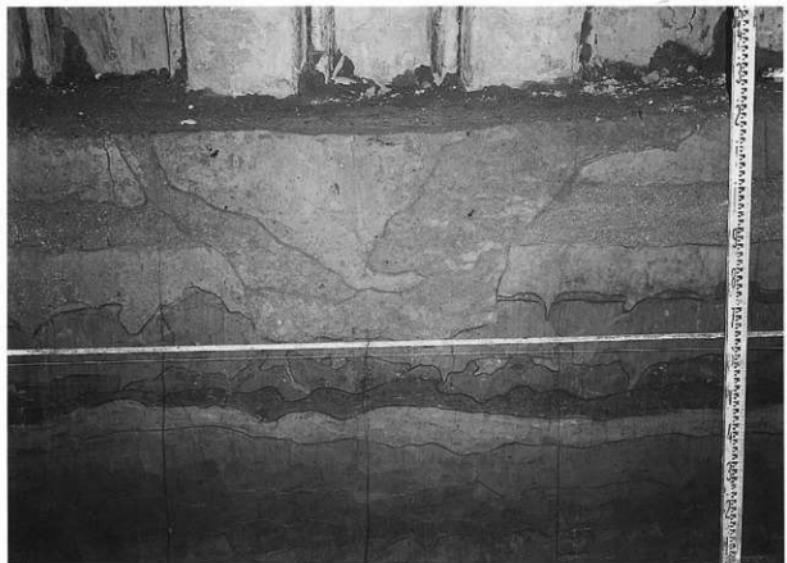


2. 溝6内卒塔婆検出状況（北から）

図版 49  
5 工区  
遺構



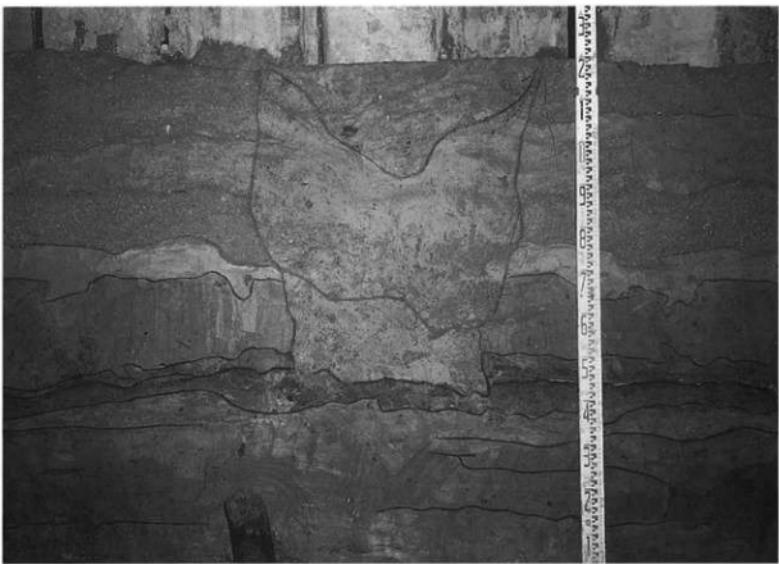
1. 溝7完掘状況（東から）



2. 溝7断面（東から）

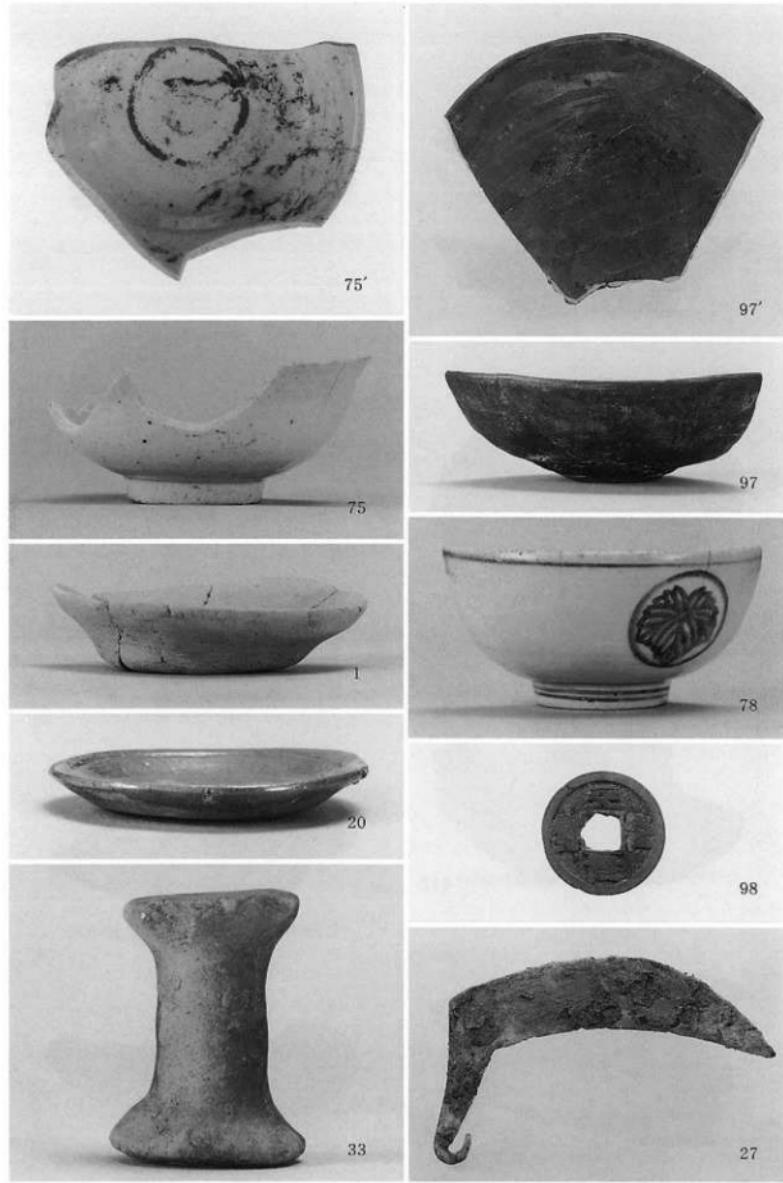


1. 土坑1 完掘状況（北から）



2. 土坑1 断面（東から）

图版 51  
3·4工区  
遗物



3工区—溝5（1）、溝14（20）、溝9（27）、溝10（33）、4工区—溝3（75）、溝4（78）、溝12（97）出土  
師器・磁器・瓦器・波来錢・鐵鍊

圖版  
52  
3 · 4 工区  
遺物



54'



54



57



117'



57'



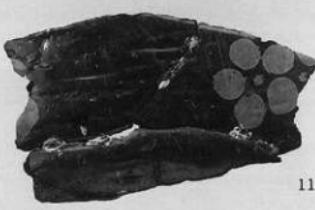
56



117



58



116



55

3工区—溝13(54)、溝1(55)、溝6(56)、溝16(57)、溝2(58)、4工区—溝3(116)、第5層(117)出土  
漆器構

圖版 53  
3·4工区  
遺物



119



60



61



63

114



118

3工区—溝1(60·61)、溝17(63)、4工区—溝8(114)、溝12(118)、溝6(119)出土棒状・板状木製品

图版 54  
3·4工区  
遗物



121



59



120



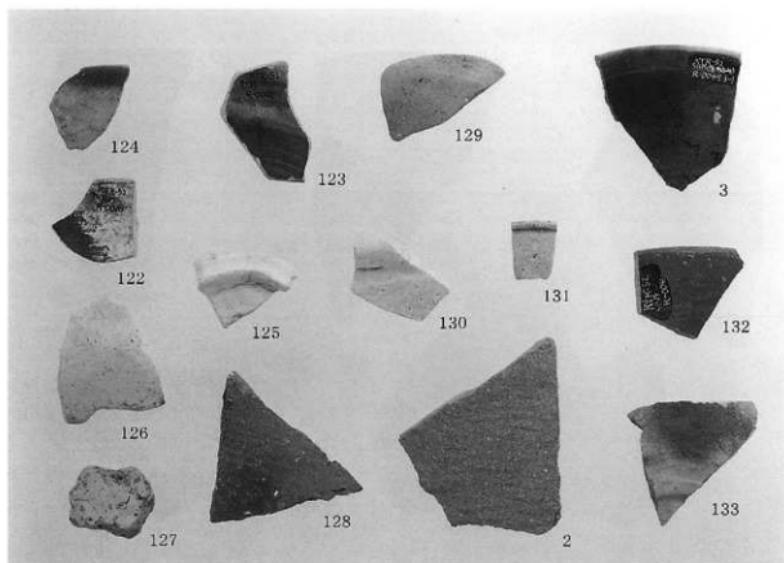
115



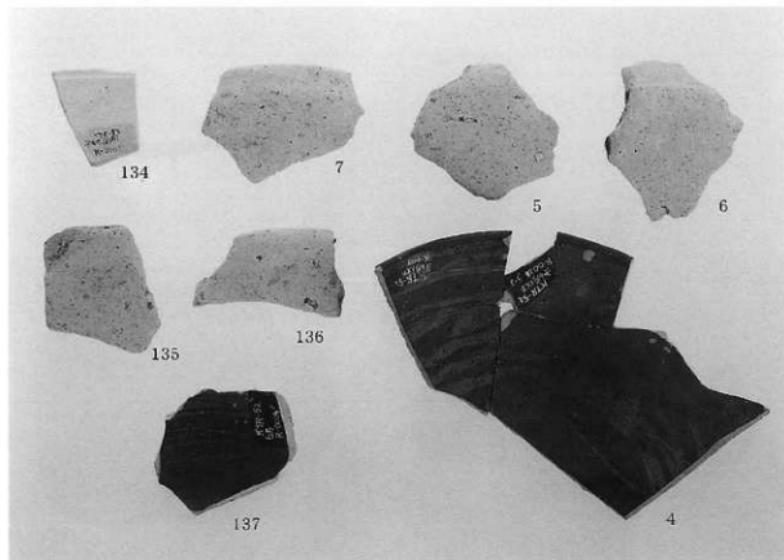
62

3工区—溝3(59)、溝1(62)、4工区—溝8(115)、溝7(120·121)出土下駄·草履状·板状木製品

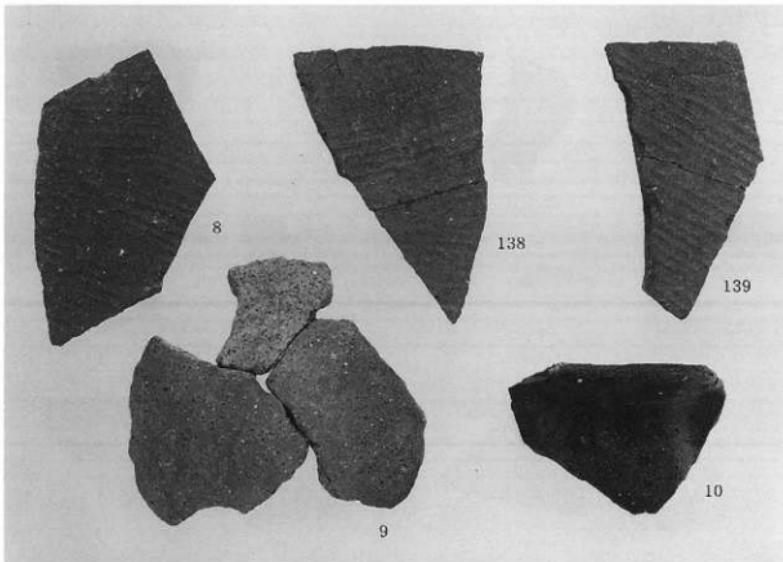
圖版 55  
3A 工区  
遺物



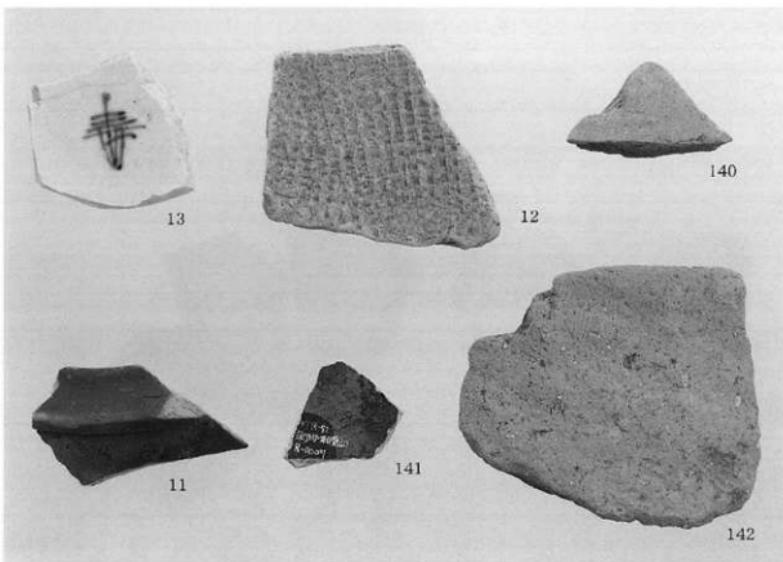
1. 溝3(122~125)、溝4(126~128)、溝5(2・129・130)、溝6(3・131~133)出土土師器・須恵器・瓦器・磁器



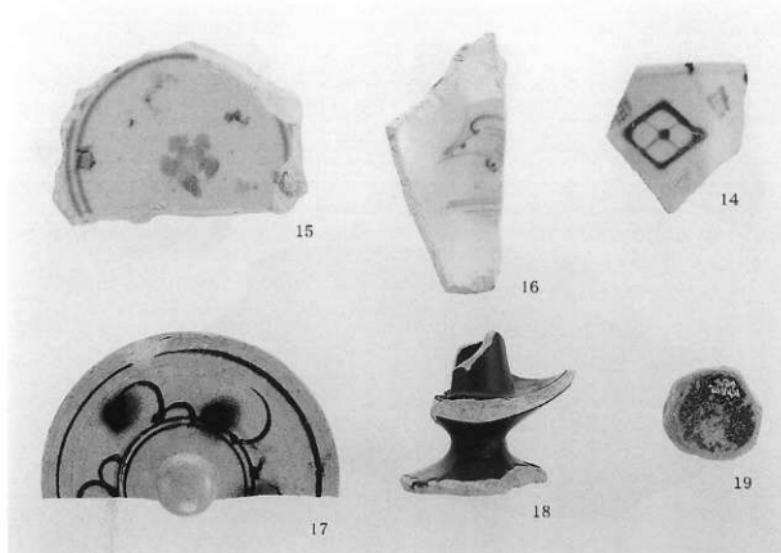
2. 第5層(134・135)、第6層(4~7・136・137)出土土師器・瓦器



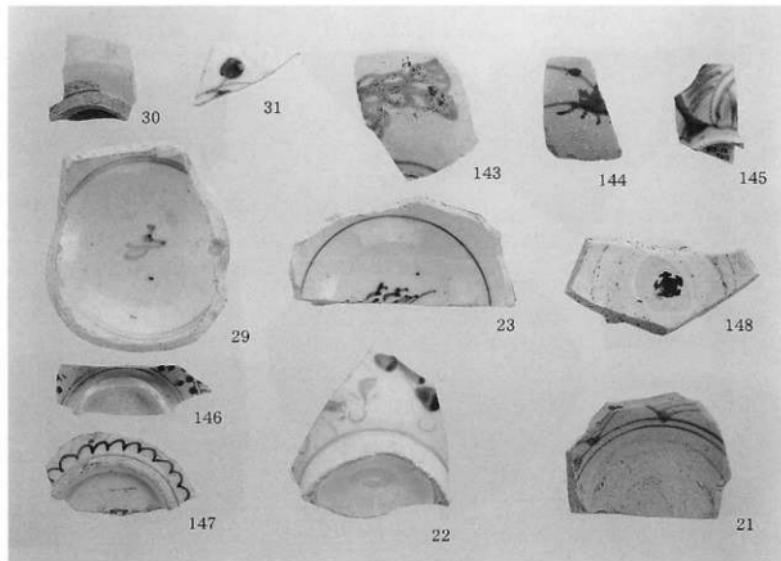
1. 第7層(8・138・139)、第8層(9)、第11層(10)出土土師器・須恵器



2. 溝A・B(11~13・140~142)出土埴輪・須恵器・瓦器・瓦質土器・織器

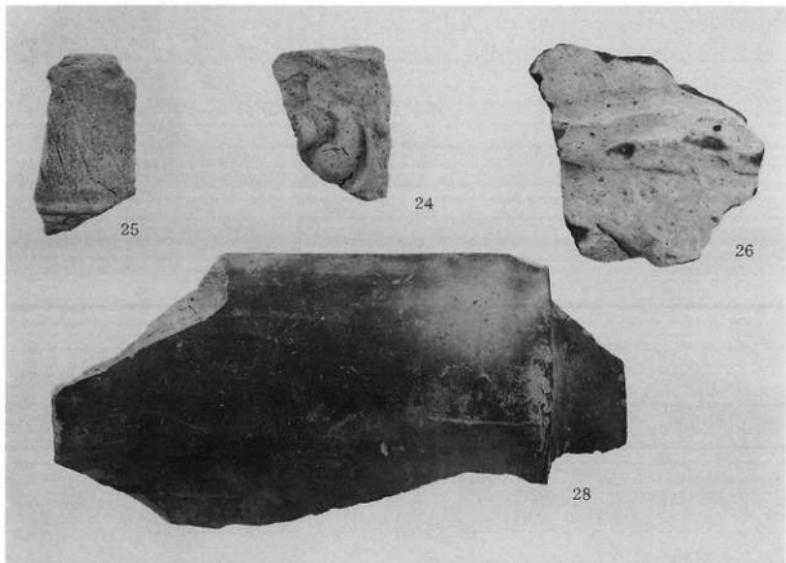


1. 溝8(15~19)出土近世磁器・円板形瓦製品

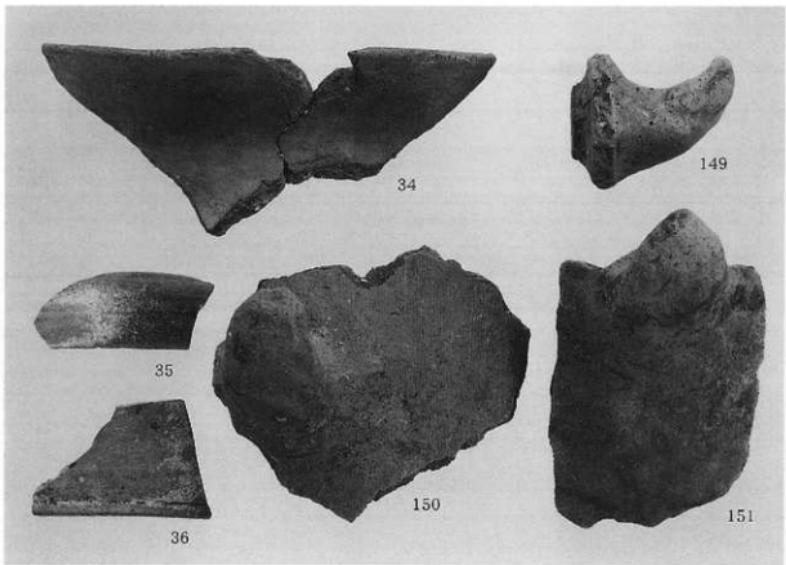


2. 溝9・10(21~23・29~31・143~148)出土近世磁器

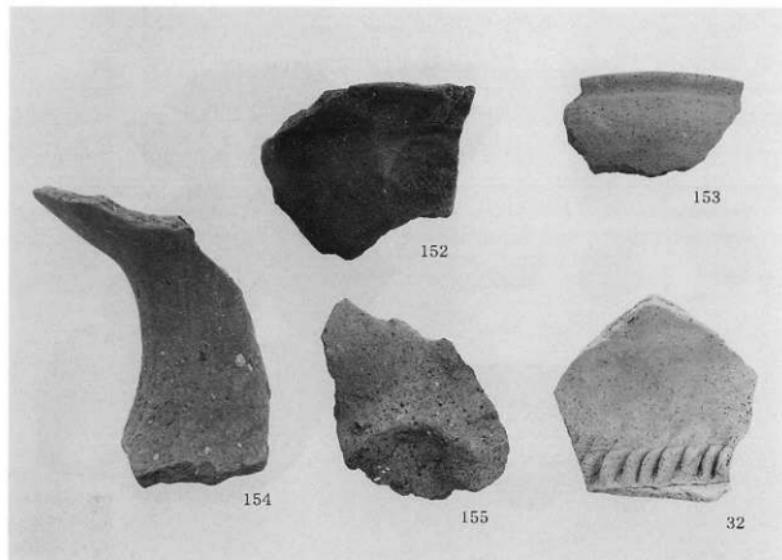
圖版  
58  
3B工区  
遺物



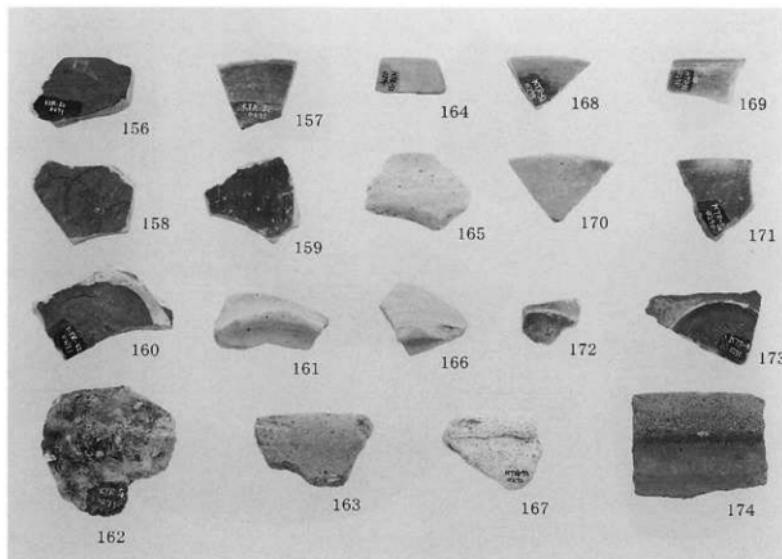
1. 溝9(24~28)出土埴輪・須恵器・瓦



2. 溝10(34~36・149~151)出土土師器・須恵器



1. 溝10(32・152~155)出土弥生土器

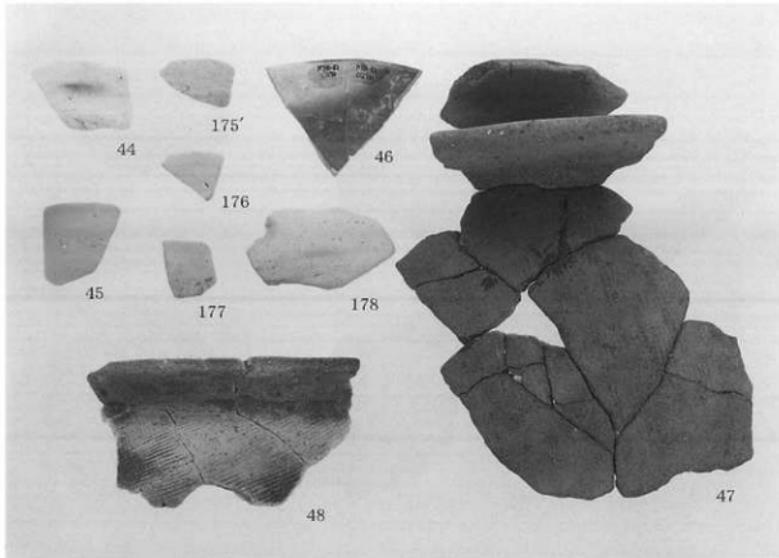


2. 溝16(156~163)・溝17(164~167)、溝18(168~174)出土土器・須恵器・瓦器・輪

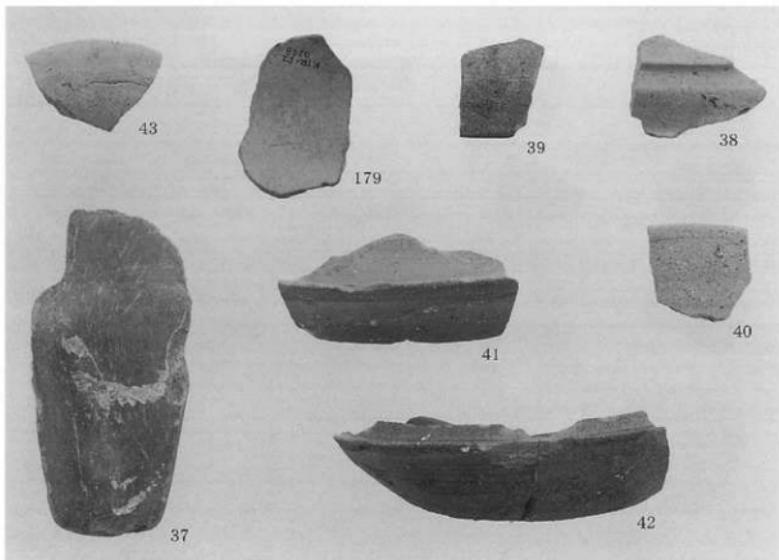
圖版  
60

3B  
工区

遺物

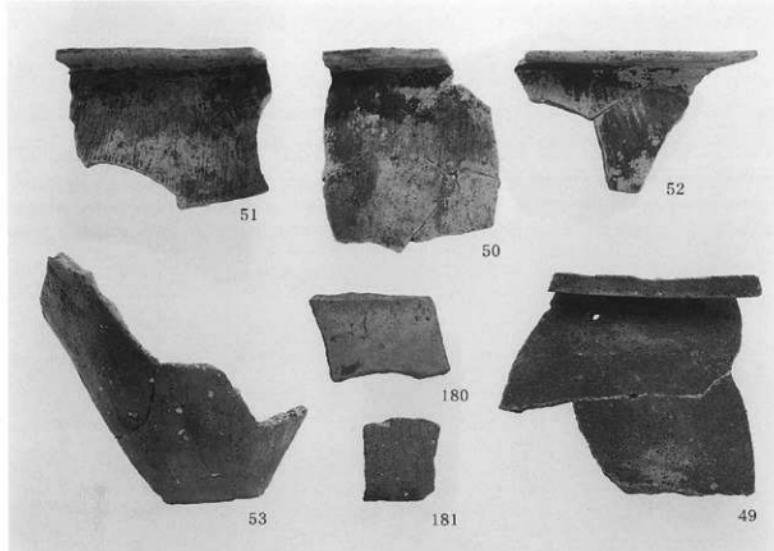


1. 第2層(44・45・175~177)、第5層(46・178)、第7層(47)、第8層(48)出土土師器・瓦器

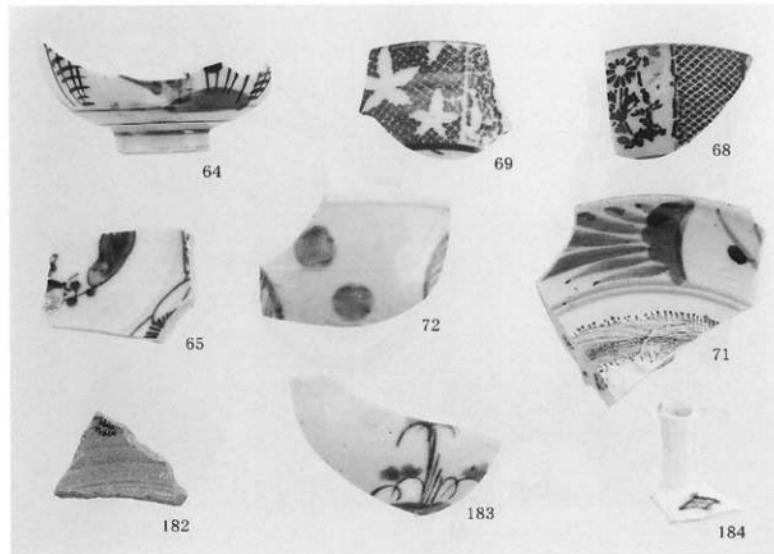


2. 第6層(37~43・179)出土土師器・須恵器・砥石

図版 61  
3B・4工区  
遺物

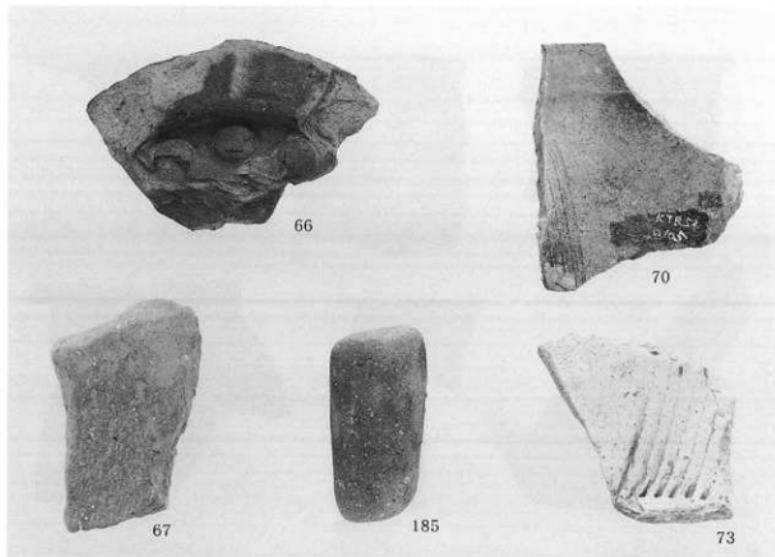


1. 第10・11層(49~53・180・181)出土弥生土器

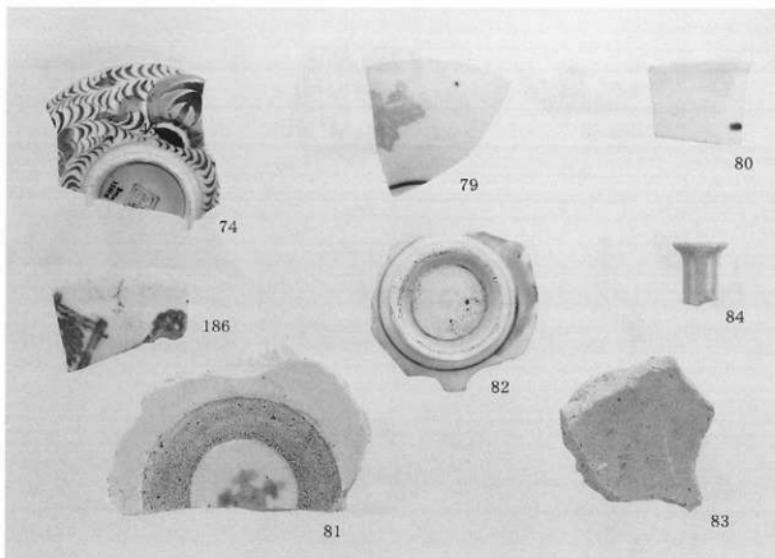


2. 溝1(64・65・182)、溝2(68・69・71・72・183・184)、出土近世・近代磁器

圖版  
62  
4 工区  
遺物

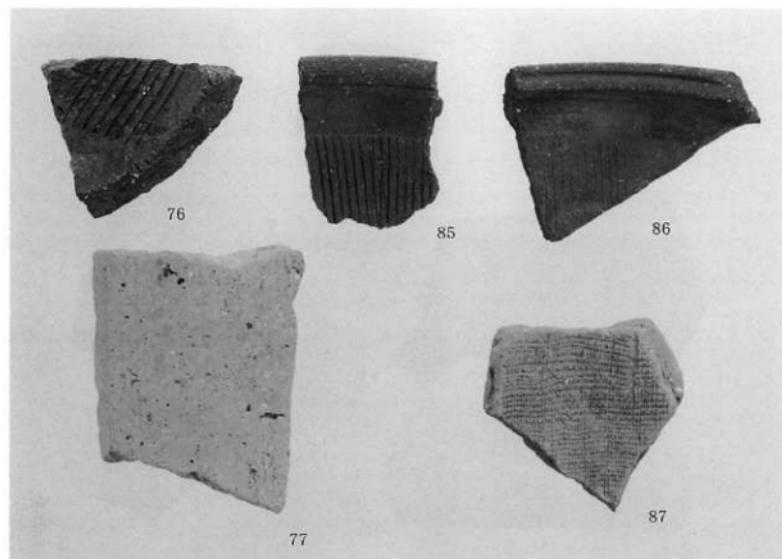


1. 溝1(66·67·185)、溝2(70·73)出土瓦質土器・瓦

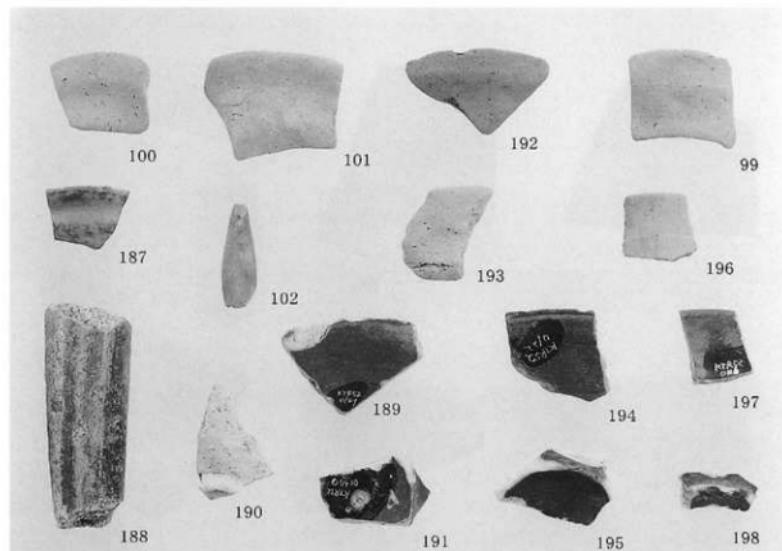


2. 溝3(74·186)、溝4(79~84)出土近世・近代磁器

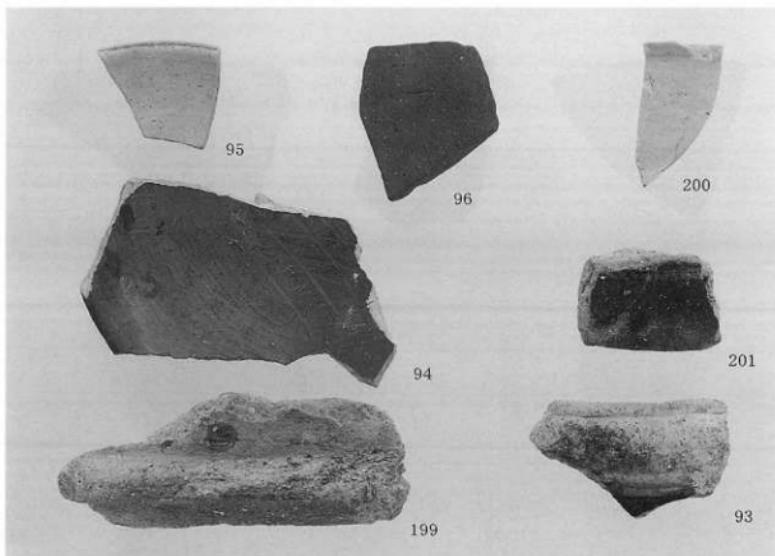
圖版 63  
4 工区  
遺物



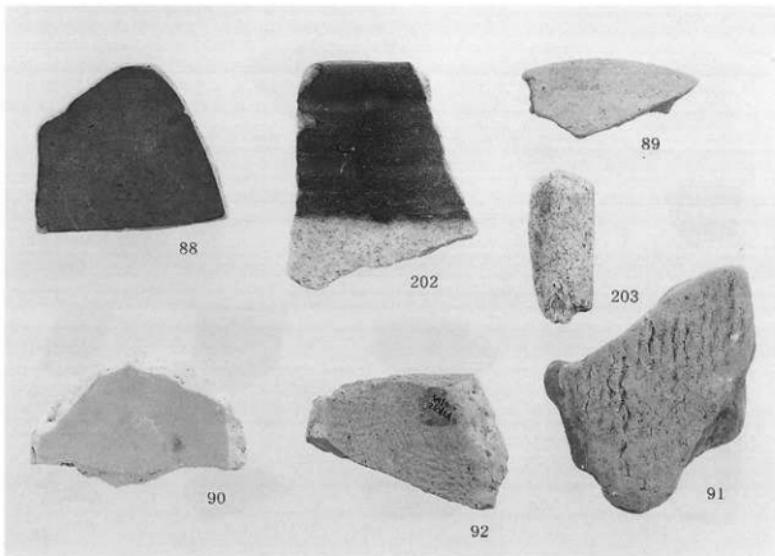
1. 溝3(76~77)、溝4(85~87)出土瓦・陶器



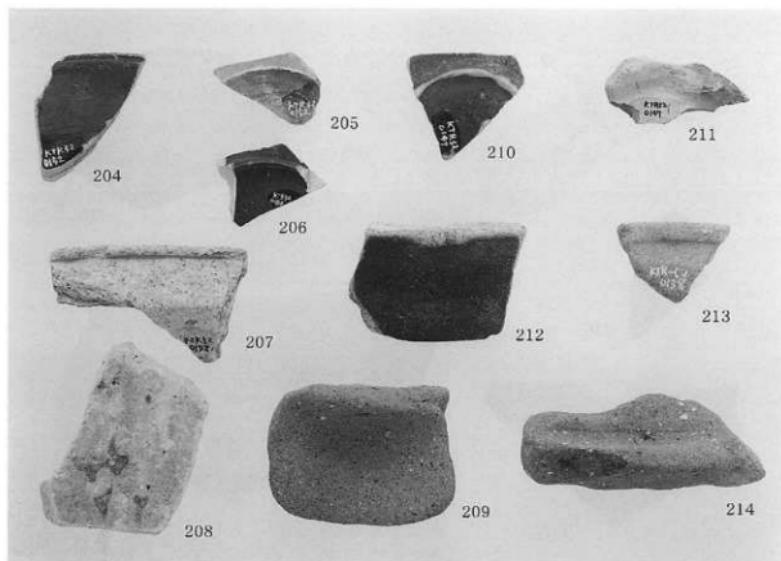
2. 溝5(100~102・187~191)、溝6(192~195)、溝7(99~196~198)出土土師器・瓦器・瓦質土器・土錘



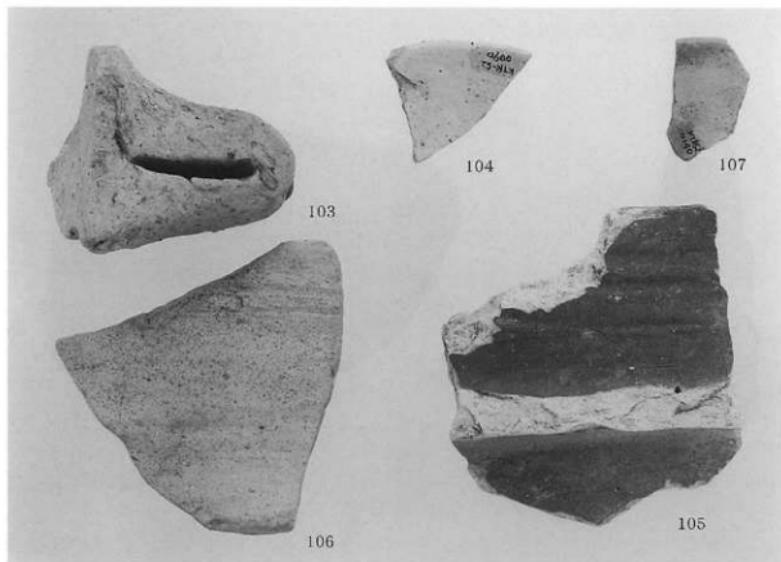
1. 溝8(94~96·199)、溝9(93·200·201)出土韓式系土器・土師器・瓦器・磁器・瓦質土器



2. 溝11(88~92,202·203)出土須器・瓦器・瓦質土器・磁器・瓦

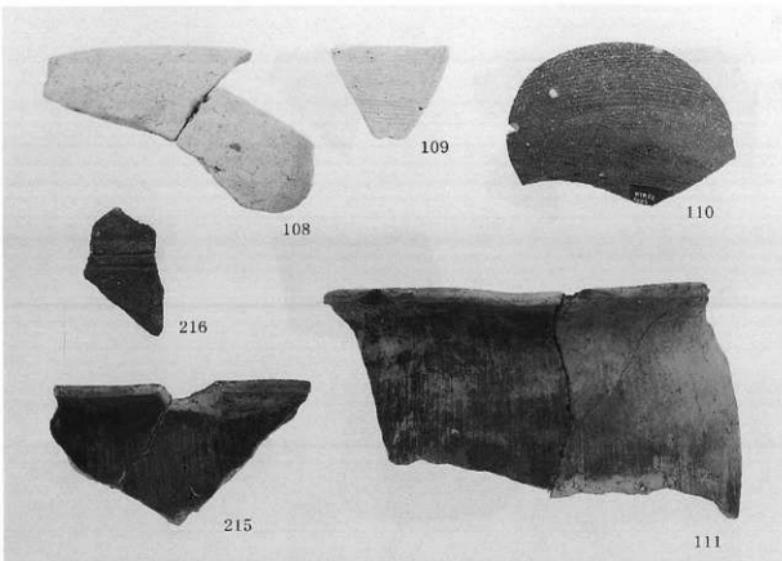


1. 溝12(204~209)、溝13(210~214)出土土師器・瓦器・瓦質土器・陶器

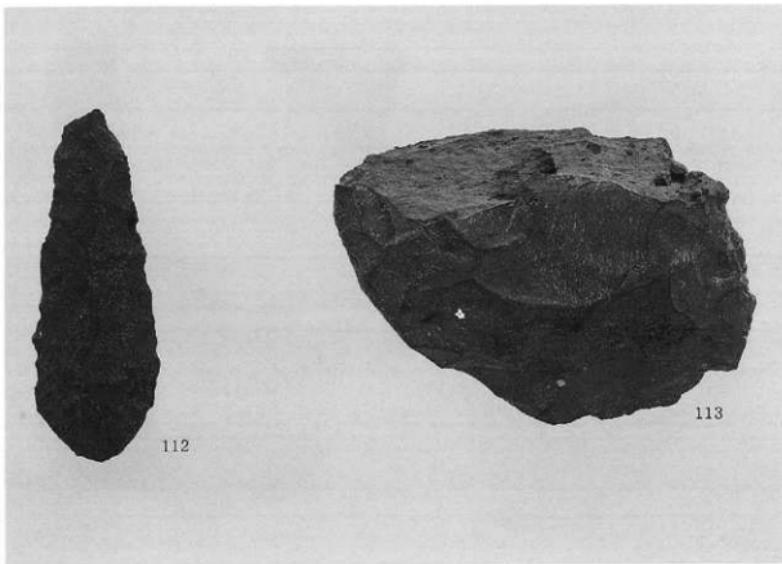


2. 第2層(103~106)、第3層(107)出土土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器

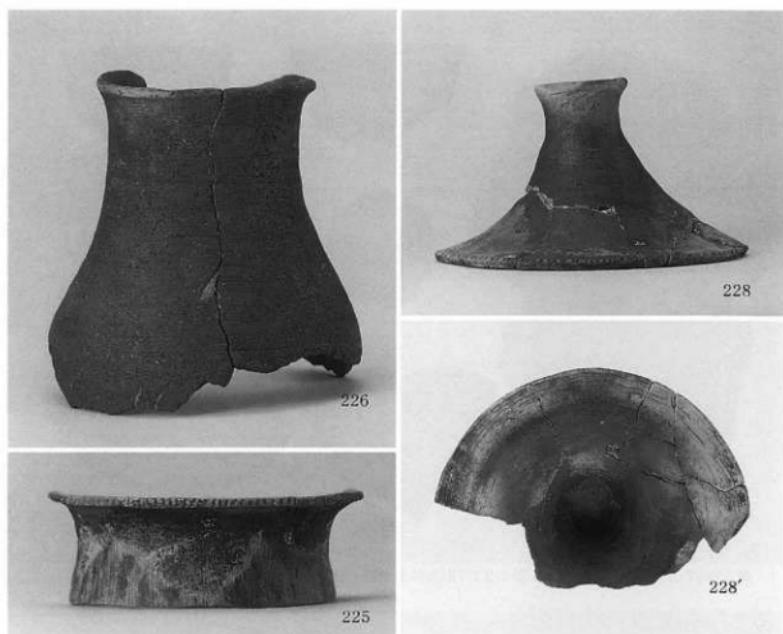
圖版 66  
4 工区  
遺物



1. 第6層(108)、第7層(109)、第8層(110)、第11層(111·215·216)出土陶器・土師器・須恵器



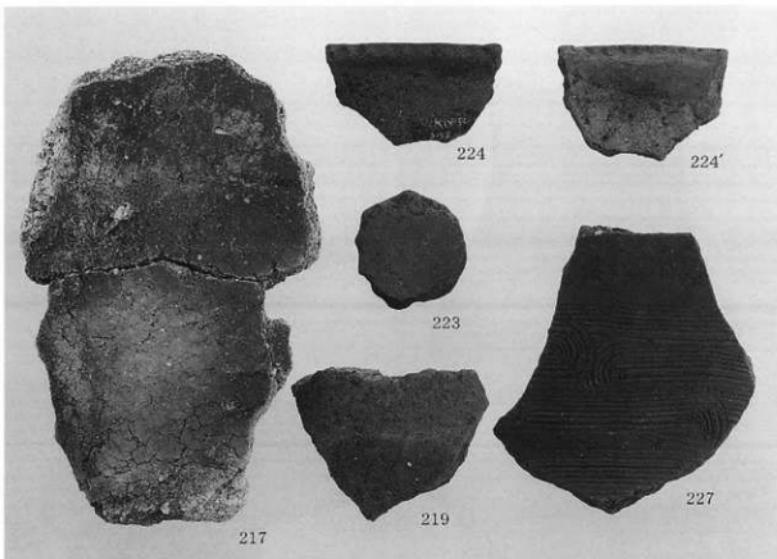
2. 第11層(112·113)出土石器



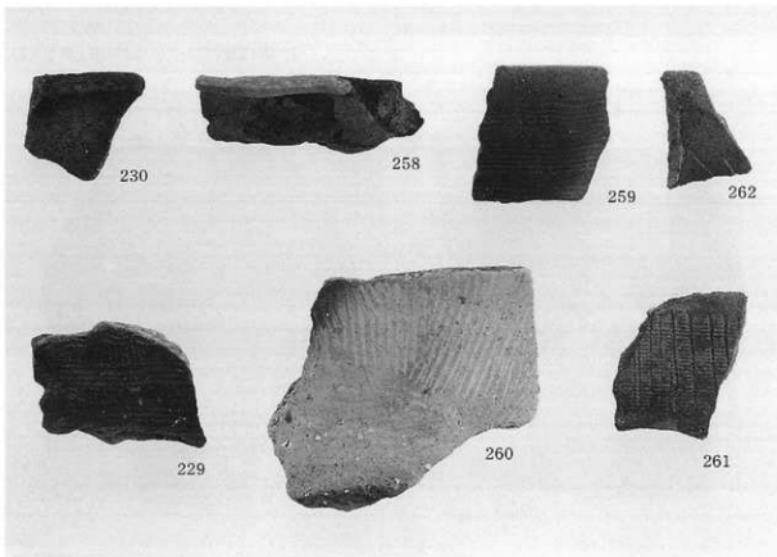
1. 第12層(225·226·228)出土弥生土器



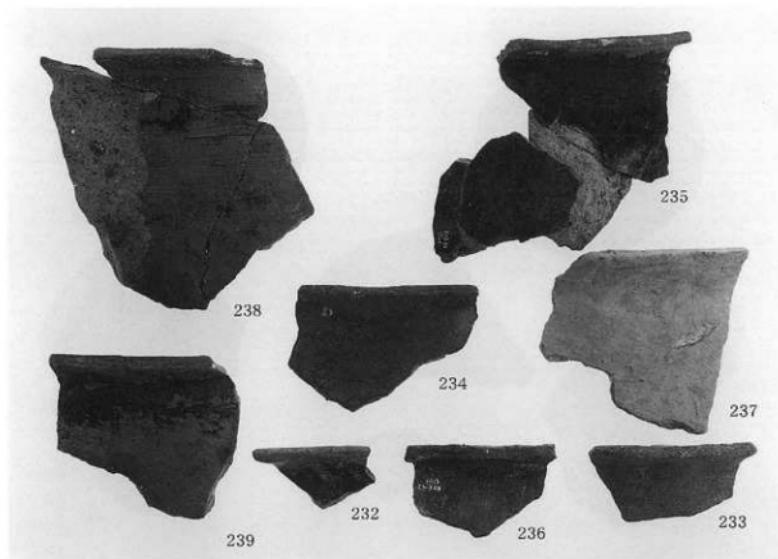
2. 第11·12層(245)、溝3(218)出土弥生土器



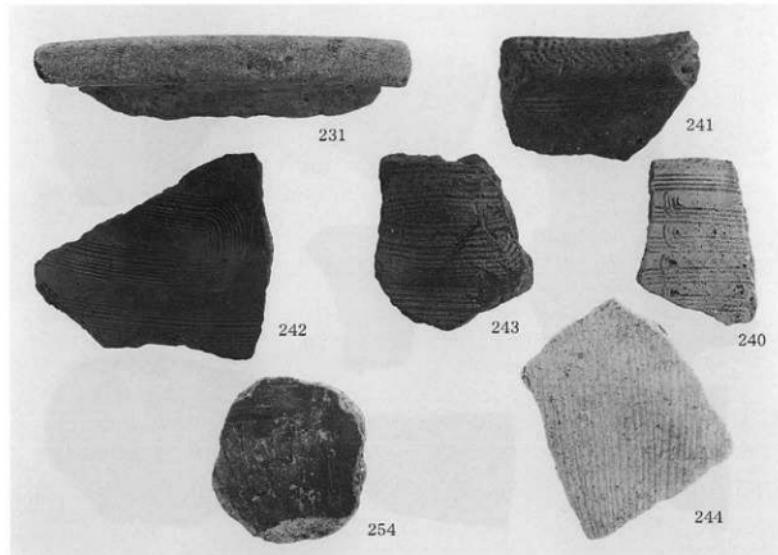
1. 溝3(217·219)、第12層(223·224·227)出土弥生土器



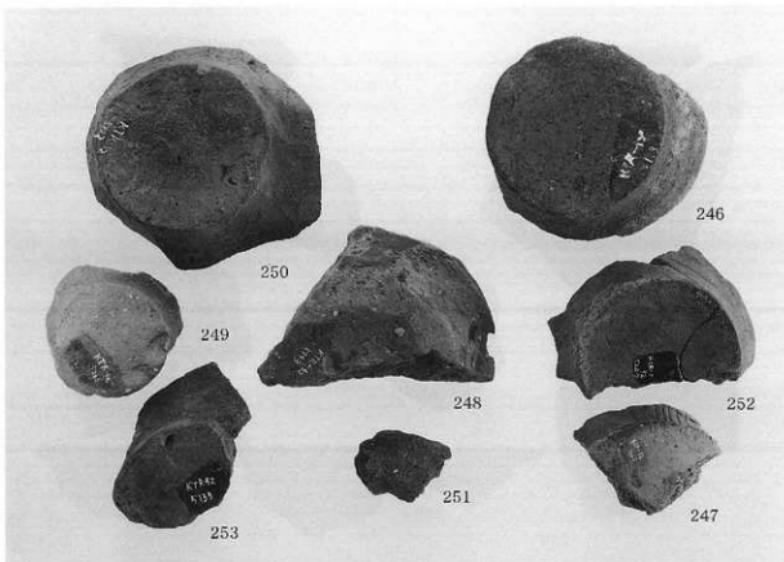
2. 第12·13層(229·230)、第9·10層(258~262)出土弥生土器



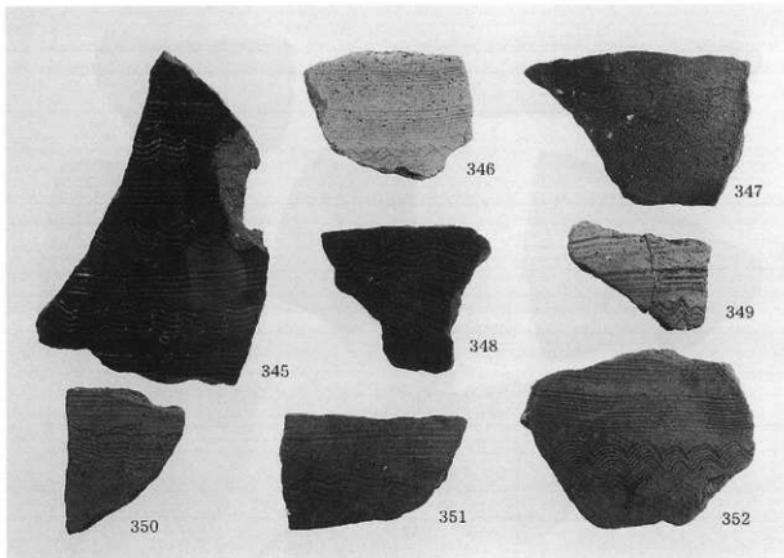
1. 第11・12層(232~239)出土弥生土器甕



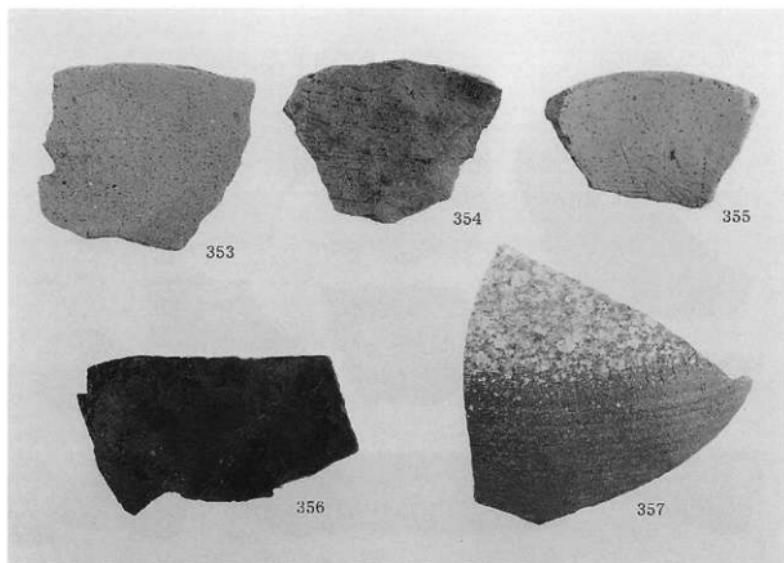
2. 第11・12層(231・240~244・254)出土弥生土器甕・甌・円板形土製品



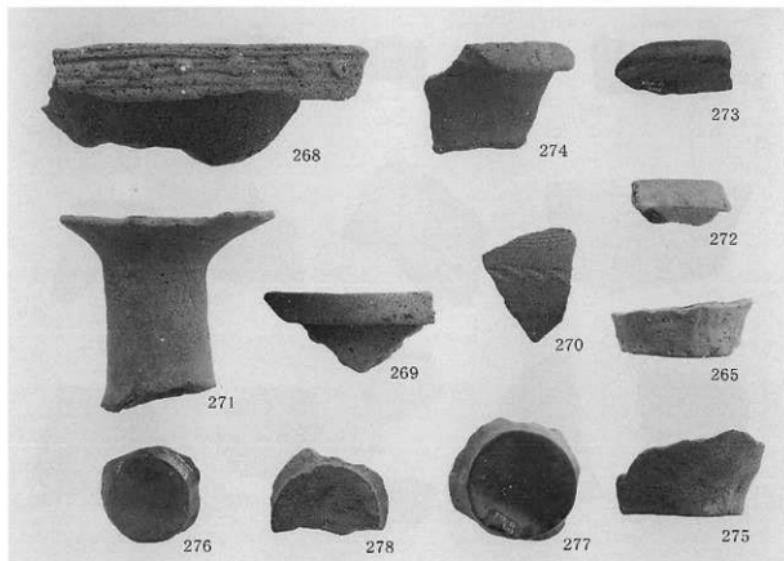
1. 第11・12層(246~253)出土弥生土器底部



2. 第11・12層(345~352)出土弥生土器飾文

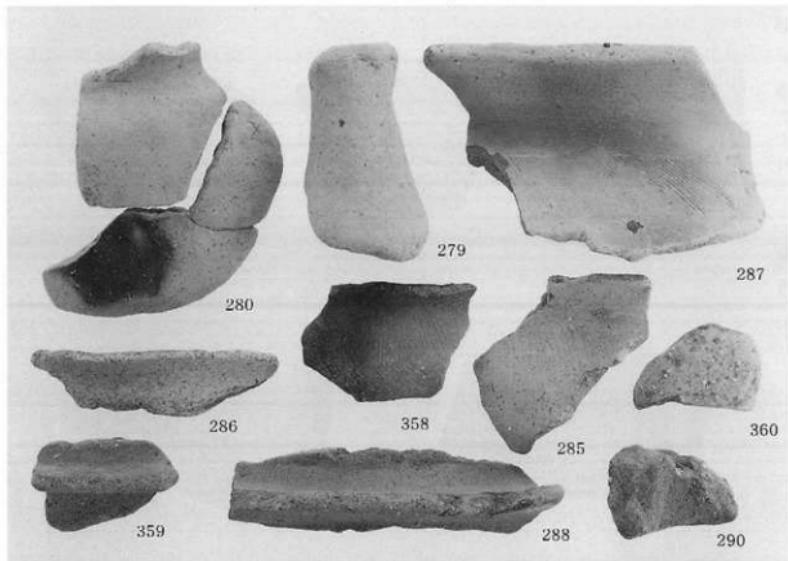


1. 第5層(357)出土須恵器、第7・8層(353～356)出土土師器

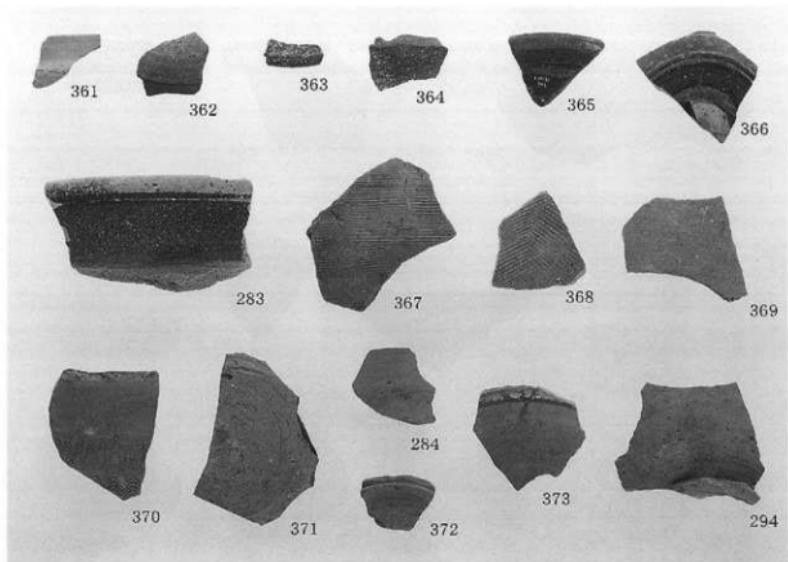


2. 第3層(268～278)、第4層(265)出土弥生上器

圖版  
72  
5工区  
遺物

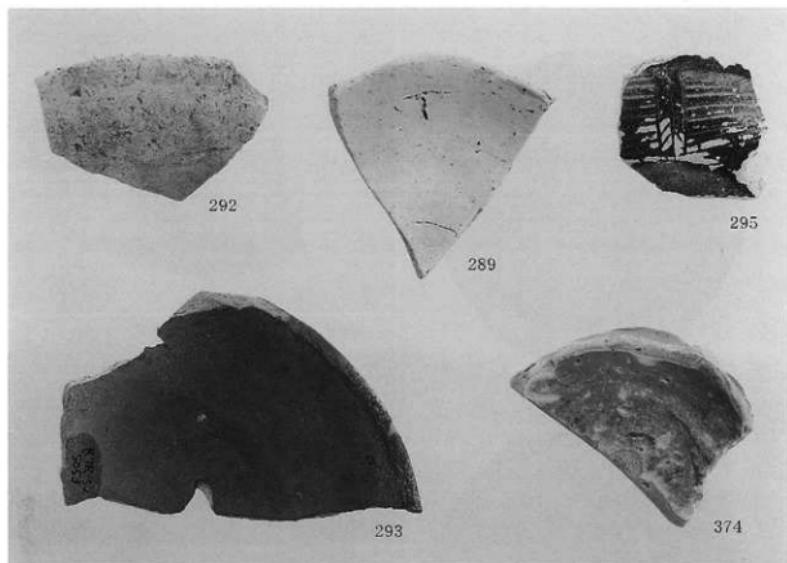


1. 第3層(279・280・285～288・290・358・359)出土土師器・埴輪・轆

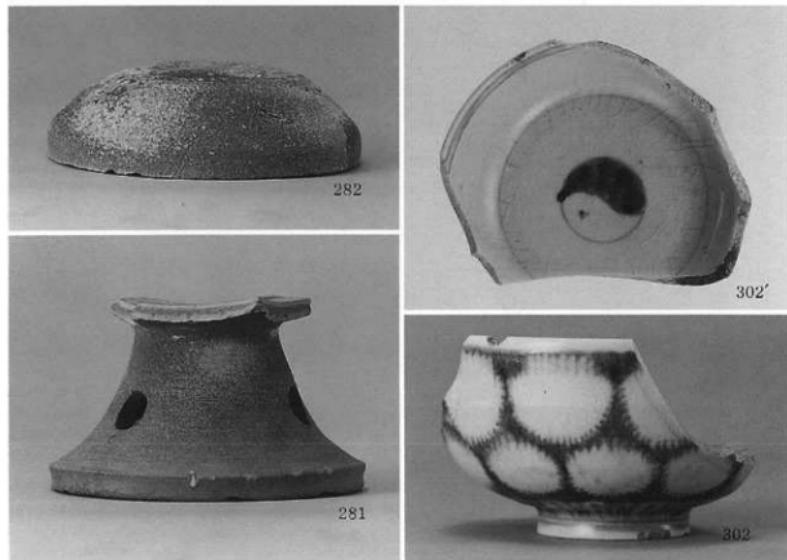


2. 第3層(283・284・361～373)、第2・3層(294)出土須恵器

圖版 73  
5 工区 遺物

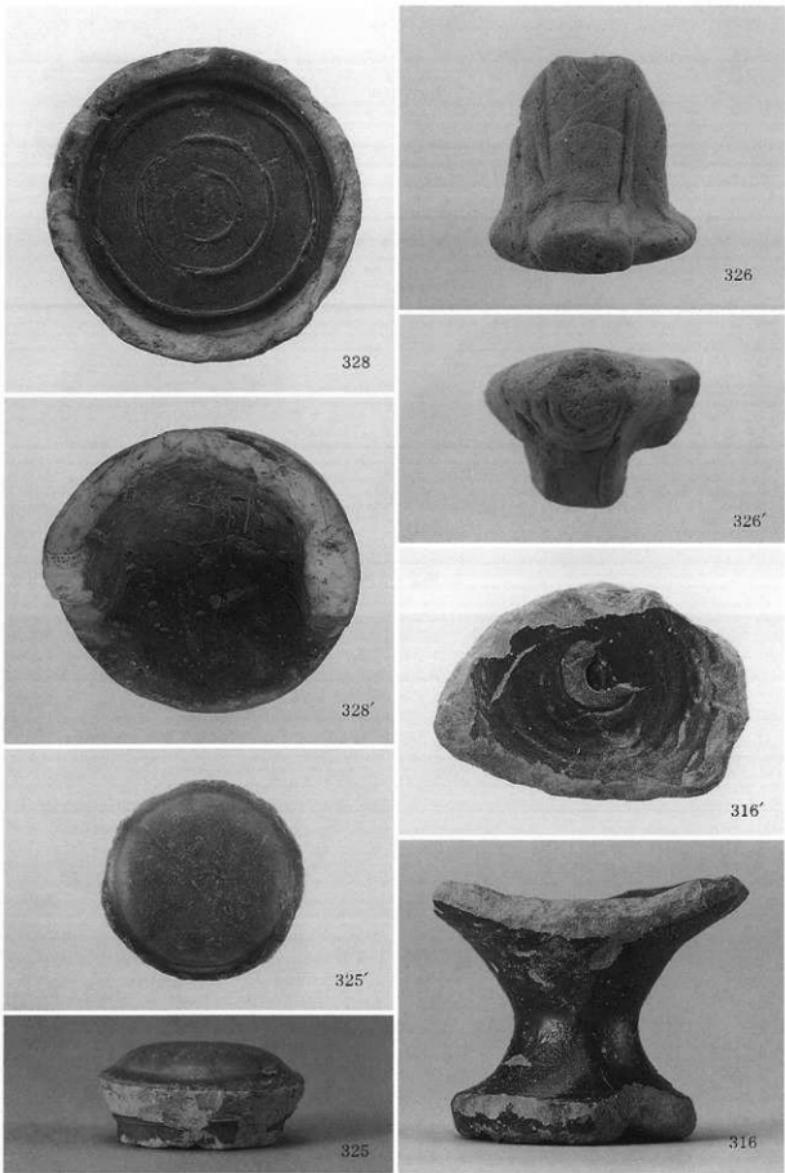


1. 第2・3層(289・292・293・295・374)出土石器・陶器・瓦器

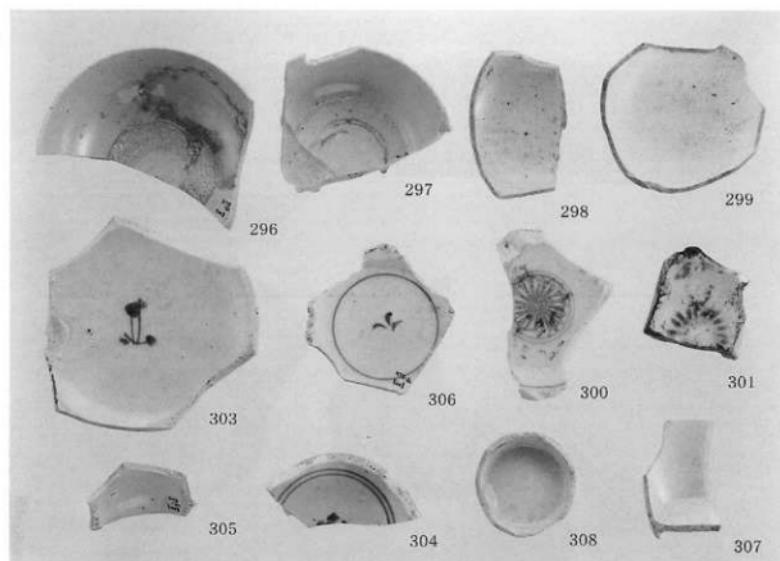


2. 第3層(281・282)出土須恵器、溝1(302)出土磁器

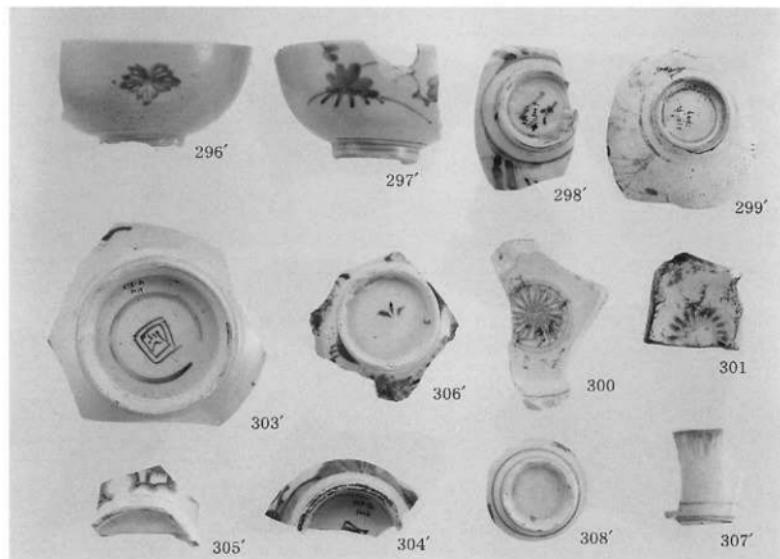
圖版  
74  
5工区  
遺物



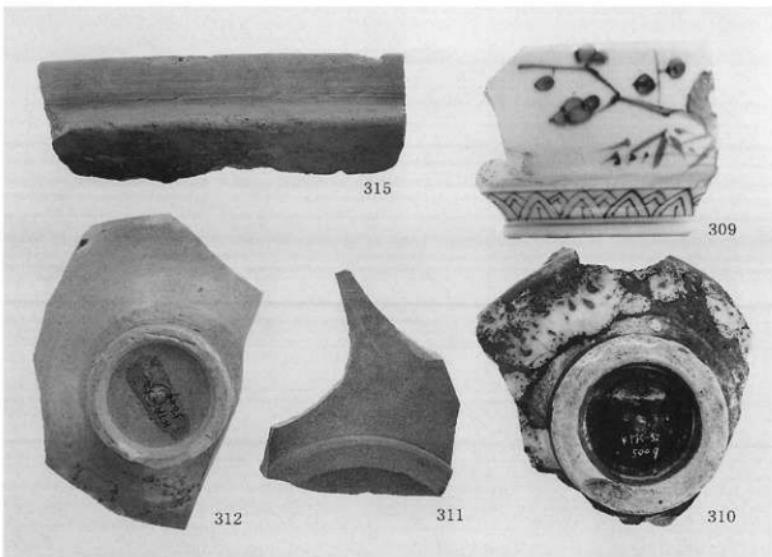
清6(328)出土軒丸瓦、溝1(316・325・326)出土磁器・土人形・土師質土器



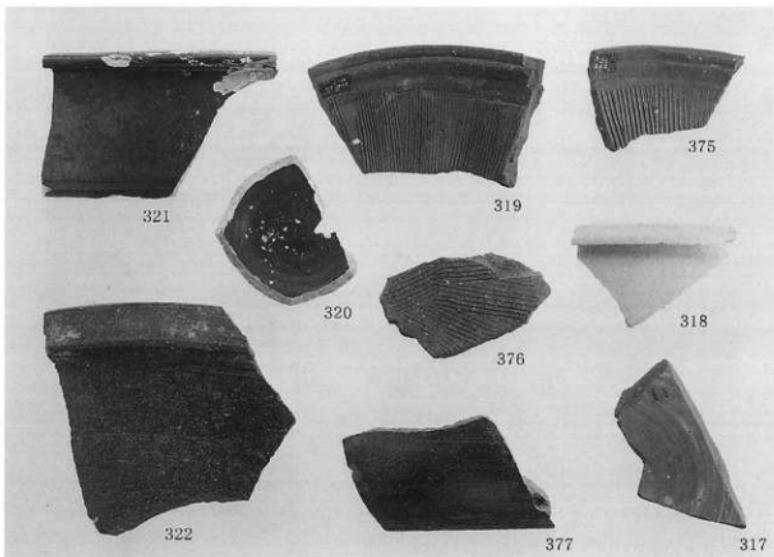
1. 漢 I (296~307), 第0・1層(308)出土磁器内面



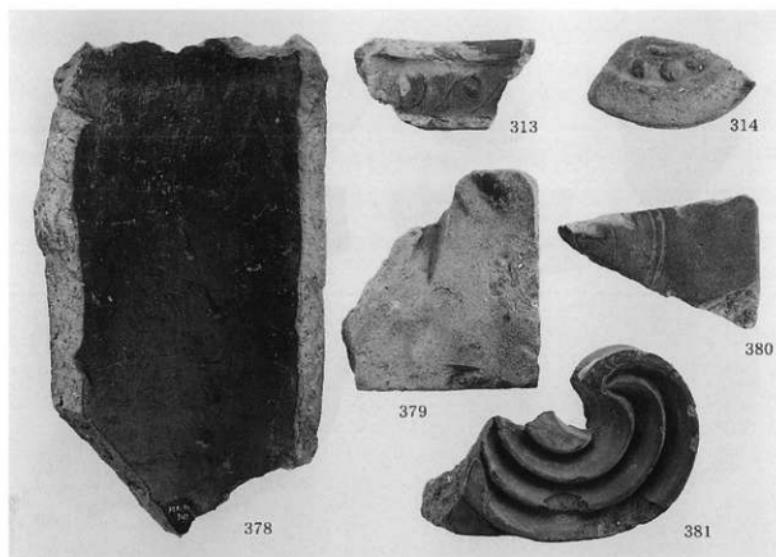
2. 同上外面 (300・301は内面)



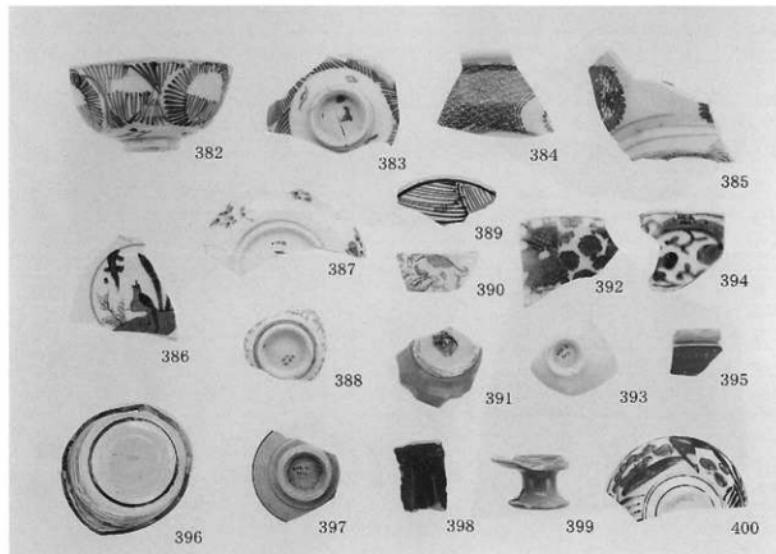
1. 溝1(309~312・315)出土陶磁器・土師質土器



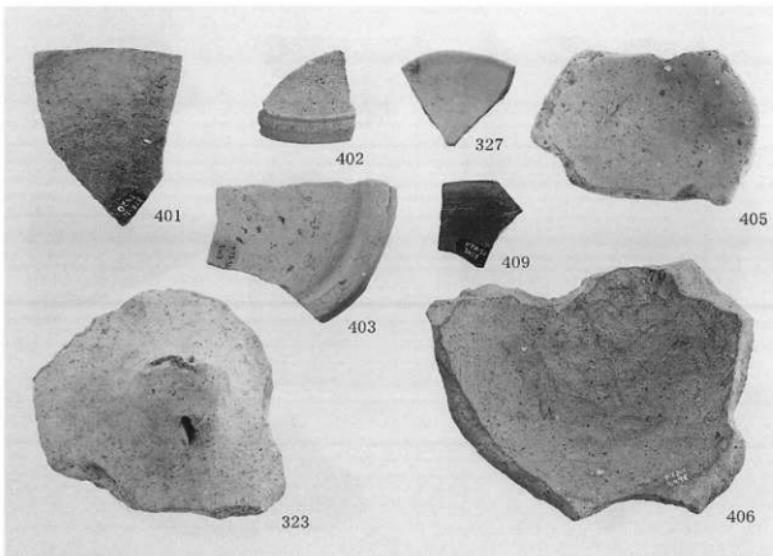
2. 溝1(317~322・375~377)出土陶器



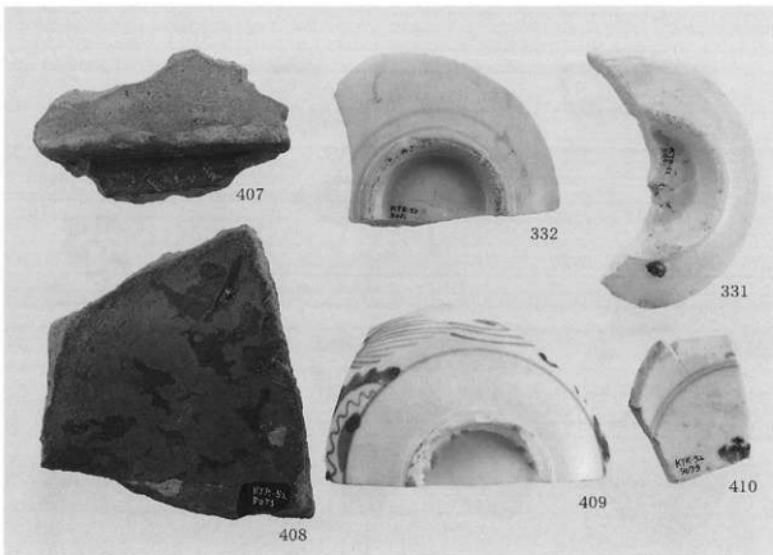
1. 溝1(313・314・378~381)出土近世・近代瓦



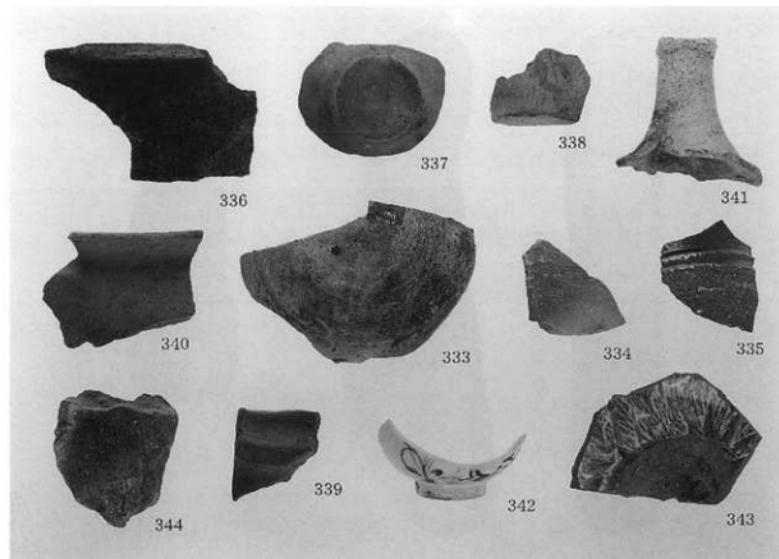
2. 溝1(382~400)出土近代磁器・ガラス



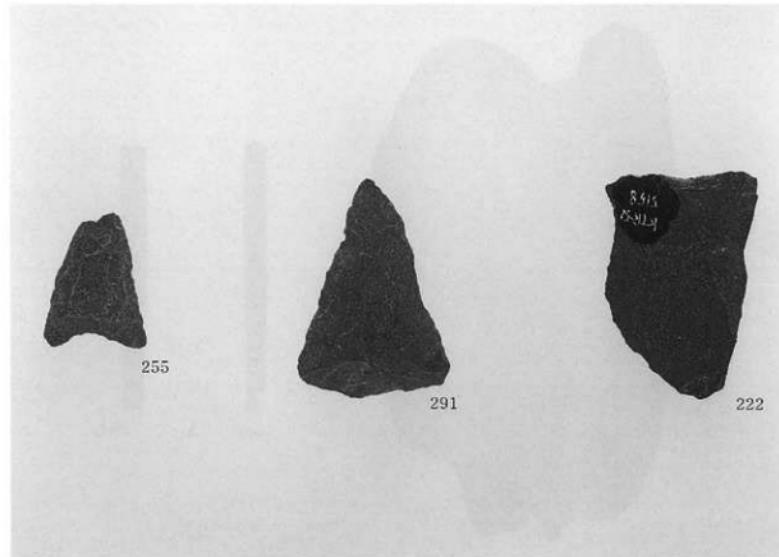
1. 溝1(323・401~403・405)、溝5(327)、溝6(406)出土須恵器・土師器・黒色土器・弥生土器



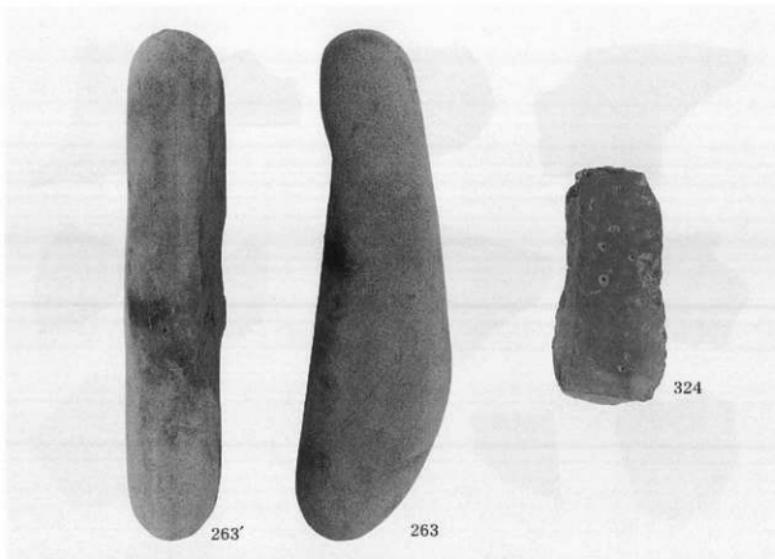
2. 5B-9地区付近(331・332・407~410)出土近世・近代土師質土器・瓦・礎器



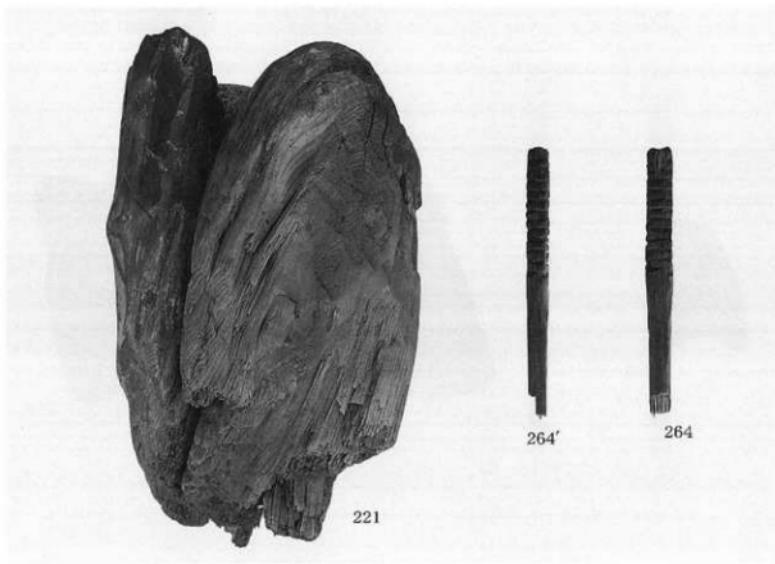
1. 側溝等(333~344)出土須慮器・赤生土器・土師器・陶磁器・瓦



2. 第11・12層(222-255)、第3層(291)出土石器



1. 第8層(263)、溝1(324)出土砥石



2. 桧3(221)、第5・7層(264)出土棒状木製品



256



220



329



267



266



257

溝8(220)、溝6(329)、第11・12層(256・257)、第8層(266・267)出土板状木製品



(表)



(裏)



(表部分—墨書)



330



411



414



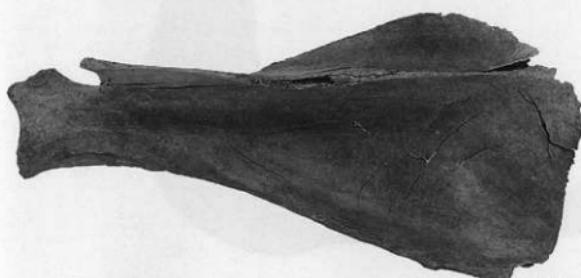
415



412



413



416



419



420

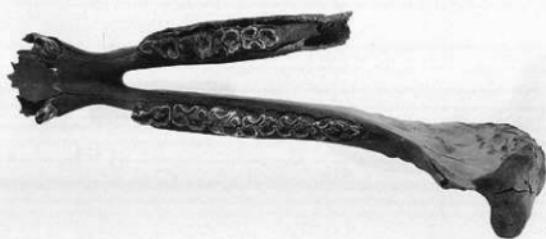


417



418

3A工区-溝5(411)、溝3(412・413)出土イヌ、3B工区-第7・8層(414)出土スッポン、4工区-溝9(415)出土ネズミ、溝4(419)出土ウマ、5工区-溝2(416～418)出土ウシ(S:415=1/1, 411～414・418=1/2, 416・417・419・420=1/3)



3 A工区-溝3(424)、3 B工区-溝16(421·422)、4工区-溝9(423)出土ウマ (S : 421=1/3、422~424=1/2)

图版 85  
3・4工区  
遺物



425



426



426'



427



427'

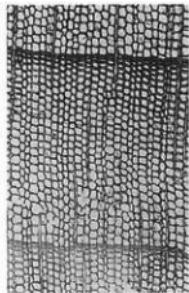


428



429

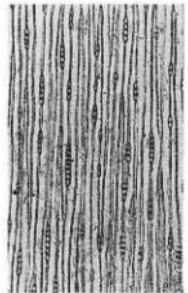
3 A工区-溝5(427)、3 B工区-溝16(429)、4工区-溝13(425)、溝5(426)、溝3(428)出土ウマ(S:1/2)



木口×40

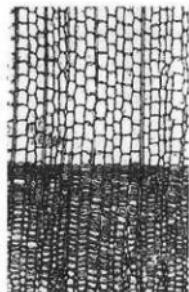


桿目×40

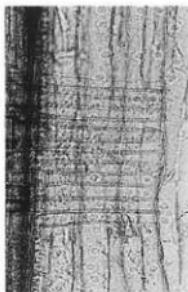


板目×40

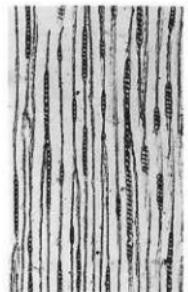
1) イチイ科カヤ属カヤ (遺物No.10)



木口×40

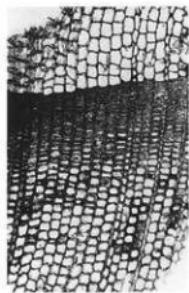


桿目×100

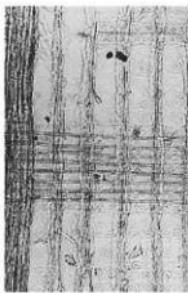


板目×40

2) マツ科モミ属 (遺物No.4)



木口×40

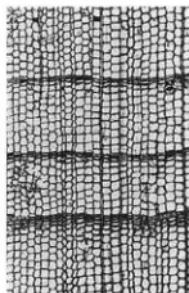


桿目×100

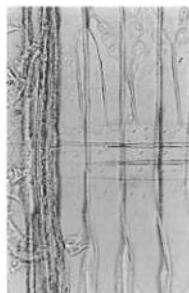


板目×40

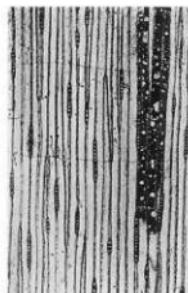
3) スギ科スギ属スギ (遺物No.21)



木口×40



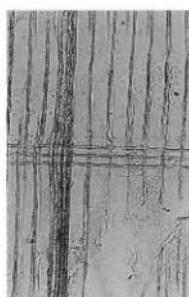
柾目×200



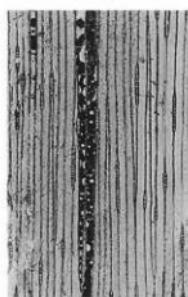
板目×40



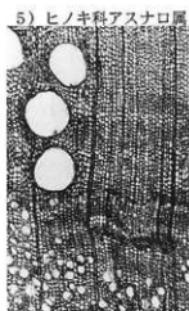
木口×40



柾目×100



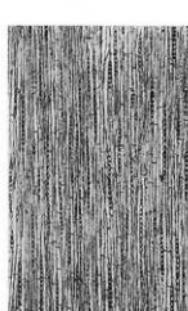
板目×40



木口×40

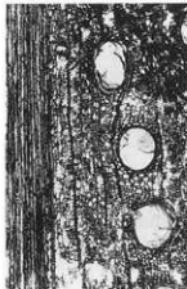


柾目×40



板目×40

6) ブナ科シイ属 (遺物No.18)



木口×40

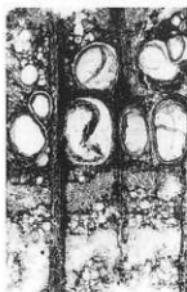


柾目×100



板目×40

7) ブナ科コナラ属アガシ亜属 (遺物No.17)



木口×40

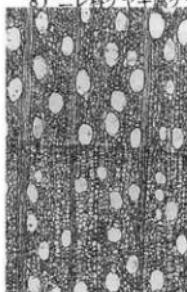


柾目×40



板目×40

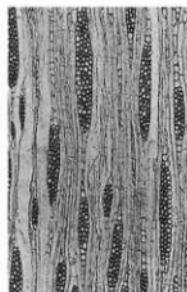
8) ニレ科ケヤキ属ケヤキ (遺物No.15)



木口×40



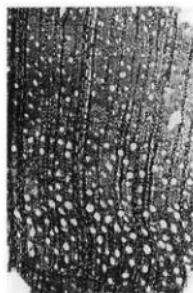
柾目×40



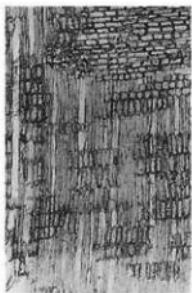
板目×40

9) ツバキ科ナツツバキ属 (遺物No.16)

図版89  
3～5 工区 遺物 樹種・植物遺体（顕微鏡写真）



木口×40



柾目×40



板目×40

10) ツツジ科スノキ属シャシャンボ(遺物No.19)



1 洗浄後(×2.5)



2 植物遺体(×10)



3 植物遺体(×25)



4 燃焼後(×25)

11) 溝8出土土器内面付着植物遺体(遺物No.32)

**報告書抄録**

ふりがな	きとらがわいせきだい52じはっくつちょうさほうこく					
書名	鬼虎川遺跡第52次発掘調査報告					
副書名						
巻次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編著者名	曾原章太・坂田典彦・鶴山まり・若松博恵・松田留美・瀬戸哲也・島田拓					
編集機関	東大阪市教育委員会					
所在地	〒577-0843 東大阪市荒川3丁目4番23号					
発行年月日	2002年3月31日					
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
きとらがわいせき 鬼虎川遺跡	おおさかみ 大阪府 ひがしのおさかし 東大阪市 にしいいきりちょう 西石切町 7丁目288番地 5丁目289番地 等	27227	46	平成12年 5月10日 ～ 平成13年 5月23日	1,150m <sup>2</sup>	道路建設
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
集落跡	弥生時代 中世～近代	溝・ピット 自然流路 井路	弥生土器 土師器 須恵器 瓦器 陶磁器 石製品 木製品 動物遺体			

一般国道170号西石切立体交差事業に伴う  
**鬼虎川遺跡第52次発掘調査報告**

平成14年3月31日

発行所 東大阪市教育委員会  
印刷所 グランド印刷株式会社